

授業コード		授業題目	西洋思想特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	角 忍		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	1. カント哲学、2. 宗教を含めた西洋思想一般、3. 比較文明論					
授業の概要	西洋思想を、その源泉である古代ギリシア哲学とキリスト教にまで遡って解明することを通じて、欧米人の考え方の特徴を比較文明論の観点から明らかにする。					
授業計画	<p>第1回 イントロダクション –世界文明史のなかの西洋思想</p> <p>第2回 西洋思想の源泉としての古代ギリシア哲学</p> <p>第3回 西洋哲学の本質 –「有論」onto-logyとしての「形而上学」metaphysics</p> <p>第4回 西洋思想の基本性格としてのプラトン主義</p> <p>第5回 西洋思想の源泉としてのキリスト教 –有神論的世界観</p> <p>第6回 キリスト教哲学 –「神学」theo-logyの確立</p> <p>第7回 ヨーロッパ中世哲学の展開</p> <p>第8回 中世から近世への転換 ヨーロッパ近代思想の一般的性格</p> <p>第9回 ルネサンスと宗教改革</p> <p>第10回 近代自然科学 –科学的認識の本質とその意味</p> <p>第11回 啓蒙思想</p> <p>第12回 理性主義 rationalismの展開 –デカルトからヘーゲルまで</p> <p>第13回 経験主義 empiricismの展開 –英国経験論とフランス啓蒙思想</p> <p>第14回 欧米の現代思想 –ポスト・モダンの行方</p> <p>第15回 総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	西洋における人間観・世界観の基礎を理解する。					
参考文献等	授業のなかで指示する。					
教科書	使用しない。					
成績評価の基準と方法	レポートにより評価する。					

授業コード		授業題目	西洋思想演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	角 忍		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	1. カント哲学、2. 宗教を含めた西洋思想一般、3. 比較文明論					
授業の概要	古来の靈魂不滅性に最初の哲学的証明を与えたプラトン『パイドン』を精読し、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 『パイドン』のテキスト分析 57A-62C 第3回 『パイドン』のテキスト分析 62C-69E 第4回 『パイドン』のテキスト分析 69E-72D 第5回 『パイドン』のテキスト分析 72D-77A 第6回 『パイドン』のテキスト分析 77A-80C 第7回 『パイドン』のテキスト分析 80C-85B 第8回 『パイドン』のテキスト分析 85B-91C 第9回 『パイドン』のテキスト分析 91C-95A 第10回 『パイドン』のテキスト分析 95A-99D 第11回 『パイドン』のテキスト分析 99D-102A 第12回 『パイドン』のテキスト分析 102A-105B 第13回 『パイドン』のテキスト分析 105B-107B 第14回 プラトン『パイドン』に関する研究発表およびディスカッション 第15回 『パイドン』における魂の不死の証明構造の検討					
各科目の目標(達成水準)	テキストの論理構造の正確な把握。					
参考文献等	授業のなかで指示する。					
教科書	講読テキスト: プラトン『パイドン』					
成績評価の基準と方法	研究発表と最終レポートにより評価する。					

授業コード		授業題目	西洋近代思想論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	角 忍		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	1. カント哲学、2. 宗教を含めた西洋思想一般、3. 比較文明論					
授業の概要	西洋近代思想の展開を人間観と世界観との関係に注目しながらたどることを通じて「近代的な考え方」の本質を明らかにするとともに、その現代的意味(とりわけ我々日本人にとって)を考える。					
授業計画	<p>第1回 イン트로ダクション</p> <p>第2回 西洋思想一般の基本性格</p> <p>第3回 中世から近世への転換</p> <p>第9回 ルネサンス</p> <p>第4回 宗教改革</p> <p>第5回 近代自然科学</p> <p>第6回 啓蒙主義一般</p> <p>第7回 イギリス経験主義 ベーコン、ロック、バークリ、ヒューム</p> <p>第8回 フランス啓蒙思想 (1) ヴォルテール、ペール、モンテスキュー</p> <p>第9回 フランス啓蒙思想 (2) 百科全書派等</p> <p>第10回 ルソーによる啓蒙主義の克服</p> <p>第11回 カントの「批判」哲学</p> <p>第12回 ドイツ観念論idealismの展開</p> <p>第13回 近代から現代への移行</p> <p>第14回 西洋近代思想の問題性</p> <p>第15回 総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	西洋近代思想の特質を古代・中世の思想との比較において理解するとともに、その問題点を把握する。					
参考文献等	授業のなかで指示する。					
教科書	使用しない。					
成績評価の基準と方法	レポートによる。					

授業コード		授業題目	西洋近代思想論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	角 忍		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	1. カント哲学、2. 宗教を含めた西洋思想一般、3. 比較文明論					
授業の概要	カント『純粋理性の批判』第二版における「純粋知性概念の超越論的演繹」の箇所を精読し、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 15節 B 129-131</p> <p>第3回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 16節 B 131-136</p> <p>第4回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 17節 B 136-139</p> <p>第5回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 18節 B 139-140</p> <p>第6回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 19節 B 140-142</p> <p>第7回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 20-21節 B 143-146</p> <p>第8回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 22節 B 146-148</p> <p>第9回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 23節 B 148-149</p> <p>第10回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 24節 B 150-156</p> <p>第11回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 25節 B 157-159</p> <p>第12回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 26節 B 159-165</p> <p>第13回 「純粋知性概念の超越論的演繹」のテキスト分析 27節 B 165-169</p> <p>第14回 カントの超越論的演繹に関する研究発表およびディスカッション</p> <p>第15回 総括：超越論的演繹の証明構造の検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	テキストの論理構造の正確な把握。					
参考文献等	授業のなかで指示する。					
教科書	講読テキスト：カント『純粋理性の批判』					
成績評価の基準と方法	研究発表と最終レポートにより評価する。					

授業コード		授業題目	人間存在論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	武藤 整司		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	積極的な態度で参加すること。					
教員研究テーマ	人間性をめぐる問題、とくにフランス・モラリストの視点を重視したテーマを扱う。時代や洋の東西を問わず、幅広く人間存在を問題にする。					
授業の概要	定評あるテキストを読み解いていく。					
授業計画	<p>人間存在を多角的な観点から検討する。さまざまなテキストを用いる場合がある。主として、人間存在を巡って、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。文学と哲学の中間領域を主な考察対象にするので、受講生には幅広い知識を身に付けようとする心構えが必要である。今年度は、ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』の英語版を読み解いていく。</p> <p>第1回 講義のイントロダクション 第2回 ハンナ・アーレントについて 第3回 『全体主義の起原』(1) 著書の背景 第4回 『全体主義の起原』(2) 反ユダヤ主義と常識 その1 第5回 『全体主義の起原』(3) 反ユダヤ主義と常識 その2 第6回 『全体主義の起原』(4) ユダヤ人と国民国家 解放の曖昧さとユダヤ人の御用銀行家 第7回 『全体主義の起原』(5) ユダヤ人と国民国家 プロイセンの反ユダヤ主義 第8回 『全体主義の起原』(6) ユダヤ人と国民国家 ドイツにおける最初の反ユダヤ主義政党 第9回 『全体主義の起原』(7) ユダヤ人と国民国家 左翼の反ユダヤ主義 第10回 『全体主義の起原』(8) ユダヤ人と国民国家 黄金の安定期 第11回 『全体主義の起原』(9) ユダヤ人と社会 例外ユダヤ人 第12回 『全体主義の起原』(10) ユダヤ人と社会 ベンジャミン・ディズレイリの政治的生涯 第13回 『全体主義の起原』(11) ユダヤ人と社会 フォブール・サン＝ジェルマン 第14回 『全体主義の起原』(12) ユダヤ人と社会 そのまとめ 第15回 講義のまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	テーマの深い理解。					
参考文献等	適宜、講義中に指示。					
教科書	必要があれば、その都度指示する。					
成績評価の基準と方法	平常点で評価することもあるが、原則としてレポートを課す。					

授業コード		授業題目	人間存在論演習 I	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	武藤 整司		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	積極的な態度で参加すること。				
教員研究テーマ	人間性をめぐる問題、とくにフランス・モリスの視点を重視。ただし、時代や洋の東西を問わず、幅広く「人間存在論」を捉える。				
授業の概要	定評あるテキストを読み解いていく。				
授業計画	<p>原則として、テキストを精読してゆく。テキストは、「バイオエシックスの展望」(千葉大学教養学部)、および、『行動の構造』(メルロ=ポンティ)である。原文と現代語訳(ない場合は原文のみ)を併せ読むことによって、著者の意図を探るとともに、テキストが発表された当時の状況を考察する。また、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。なお、この演習は I であるが、必ずしも II と連関するわけではない。</p> <p>第1回 演習のイントロダクション 第2回 「バイオエシックスの展望」(1) 生命の尊厳と生命の質は両立可能な原理か？ 第3回 「バイオエシックスの展望」(2) 命を奪うこと、安楽死 第4回 「バイオエシックスの展望」(3) 終末医療と終末医療費 第5回 「バイオエシックスの展望」(4) 延命技術と高齢者 第6回 「バイオエシックスの展望」(5) 出生前診断と選択的人工妊娠 第7回 「バイオエシックスの展望」(6) バイオエシックスの日本の変容 第8回 「バイオエシックスの展望」(7) バイオエシックスの展望 第9回 『行動の構造』(1) 序論 第10回 『行動の構造』(2) 反射行動 生理学における客観性の定義と反射の古典的概念 第11回 『行動の構造』(3) 反射行動 実在的分析と因果的説明の方法 第12回 『行動の構造』(4) 反射行動 反射の古典的考え方と補助仮説 第13回 『行動の構造』(5) 反射行動 いわゆる「刺戟」というもの 第14回 『行動の構造』(6) 反射行動 興奮の場所 第15回 『行動の構造』(7) 反射行動 反射回路</p>				
各科目の目標(達成水準)	テキストの深い理解。				
参考文献等	適宜、演習中に指示。				
教科書	参加学生と相談して決める。				
成績評価の基準と方法	平常点で評価。場合によってはレポートを課す。				

授業コード		授業題目	人間存在論特論 II		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	武藤 整司			担当教員所属		
履修における注意点	積極的な態度で参加すること。					
教員研究テーマ	人間性をめぐる問題、とくにフランス・モラリストの視点を重視。ただし、時代や洋の東西を問わず、幅広く「人間存在論」を捉える。					
授業の概要	定評あるテキストを読み解いていく。					
授業計画	<p>人間存在を多角的な観点から検討する。さまざまなテキストを用いる場合がある。主として、人間存在を巡って、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。文学と哲学の中間領域を主な考察対象にするので、受講生には幅広い知識を身に着けようとする心構えが必要である。今年度は、ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』の英語版を読み解いていく。</p> <p>第1回 講義のイントロダクション 第2回 『全体主義の起原』(13) ドレフュス事件 ユダヤ人と第三共和国 第3回 『全体主義の起原』(14) ドレフュス事件 軍・聖職者 対 共和国 第4回 『全体主義の起原』(15) ドレフュス事件 民衆とモップ 第5回 『全体主義の起原』(16) ドレフュス事件 大いなる和解 第6回 『全体主義の起原』(17) ブルジョワジーの政治的解放 膨張と国民国家 第7回 『全体主義の起原』(18) ブルジョワジーの政治的解放 ブルジョワジーの政治的世界観 第8回 『全体主義の起原』(19) ブルジョワジーの政治的解放 資本とモップの同盟 第9回 『全体主義の起原』(20) 帝国主義時代以前における人種思想の発展 第10回 『全体主義の起原』(21) 貴族の「人種」対 市民の「ネイション」 第11回 『全体主義の起原』(22) 国民解放の代替物としての種族的一体感 第12回 『全体主義の起原』(23) ゴビノー 第13回 『全体主義の起原』(24) 「イギリス人の権利」と人権との抗争 第14回 『全体主義の起原』(25) 人種と官僚制 第15回 講義のまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	テキストの深い理解。					
参考文献等	適宜、講義中に指示。					
教科書	参加学生と相談して決める。					
成績評価の基準と方法	平常点で評価。場合によってはレポートを課す。					

授業コード		授業題目	人間存在論演習 II		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	武藤 整司			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	積極的な態度で参加すること					
教員研究テーマ	人間性をめぐる問題、とくにフランス・モリスの視点を重視。ただし、時代や洋の東西を問わず、幅広く「人間存在論」を捉える。					
授業の概要	定評あるテキストを読み解いていく。					
授業計画	<p>原則として、テキストを精読してゆく。テキストは、『行動の構造』(メルロ=ポンティ)である。原文と現代語訳(ない場合は原文のみ)を併せ読むことによって、著者の意図を探るとともに、テキストが発表された当時の状況を考察する。また、政治・経済・宗教・学問・教育・産業・文化・慣習などの側面を押さえつつ、多角的な考察の方法を身に着ける。人間存在の多様性に対応するためである。なお、この演習はIIであるが、必ずしもIと連関するわけではない。</p> <p>第1回 演習のイントロダクション 第2回 『行動の構造』(8) 反射の化学的・体液的・植物的条件 第3回 『行動の構造』(9) 大脳と小脳の条件 第4回 『行動の構造』(10) 制止と統御、統制と統合の概念 第5回 『行動の構造』(11) 神経系の階層的な考え方 第6回 『行動の構造』(12) 同時的諸反応への反射の依存 第7回 『行動の構造』(13) 先行反応への依存 第8回 『行動の構造』(14) 放散、反射の逆転、ウェーバーの法則および閾の概念 第9回 『行動の構造』(15) 反応 要約 第10回 『行動の構造』(16) 反応 秩序の問題 第11回 『行動の構造』(17) 反応 解剖学的秩序と生理学的秩序 第12回 『行動の構造』(18) ゲンタルト学説における反射の解釈 第13回 『行動の構造』(19) 凝視反射。興奮の相互関係およびその反応との関係 第14回 『行動の構造』(20) 帰結 第15回 『行動の構造』(21) この帰結の検証。特に反盲症における機能の再組織と代償</p>					
各科目の目標(達成水準)	テキストの深い理解。					
参考文献等	適宜、演習中に指示。					
教科書	参加学生と相談して決める。					
成績評価の基準と方法	平常点で評価。場合によってはレポートを課す。					

授業コード		授業題目	宗教思想特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	安藤恵崇		担当教員所属			
履修における注意点	宗教思想の講義を理解するためには世界の諸宗教の基礎的な知識が必要になる。					
教員研究テーマ	宗教哲学(主に近代のベルクソンなど) 宗教現象学・神話学などを介した宗教の統合的理解					
授業の概要	宗教思想の諸類型について総合的に論じる。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 諸宗教の類型の構図 3. 宇宙論に重点がおかれる宗教とおかれぬ宗教 4. 一元論と二元論 5. イラン的二元論ゾロアスター教 5. 東地中海的二元論ーグノーシス主義 6. シリア型グノーシスとイラン型グノーシス 7. ユダヤ教の成立と終末論ーバビロン捕囚前後からの変容 8. ユダヤ教聖典の成立仮説 9. ユダヤ教の諸展開 10. キリスト教における終末論の継承 11. キリスト教の新たな救済観 12. 西アジアー神教の展開としてのイスラム教 13. インド起源の諸宗教ーヴェーダとウパニシャッド 14. 仏教の成立とその思想的特徴 15. 大乘仏教における仏教思想の新たな展開 					
各科目の目標(達成水準)	諸宗教思想の全く異なる方向性を理解しながらそれをある構図に統合する可能性を理解する。					
参考文献等	エリアーデ『世界宗教史』1-4巻(筑摩書房) ハンス・ヨナス『グノーシスの宗教』					
教科書	用いない					
成績評価の基準と方法	期末のレポートによって100パーセント評価する					

授業コード		授業題目	宗教思想演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	安藤恵崇		担当教員所属			
履修における注意点	世界の諸宗教の基礎的知識があらかじめ必要である					
教員研究テーマ	宗教哲学(主に近代のベルクソンなど) 宗教現象学・神話学などを介した宗教の統合的理解					
授業の概要	エリアーデ『聖と俗』を読み報告してもらう。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 序言から『聖なるものは自ら現れる』を報告してもらう 3. 「二通りの《世界の中にあること》」を報告してもらう 4. 「聖なるものと歴史」を報告してもらう 5. 第1章「空間の均質性とヒエロファニー」を報告してもらう 6. 「テオファニーと徴表」を報告してもらう 7. 「カオスとコスモス」を報告してもらう 8. 「場所の浄化は世界創造の再現である」を報告してもらう 9. 《世界の中心》を報告してもらう 10. 「《われらの世界》は常に中心である」を報告してもらう 11. 「コスモスとしての都市」を報告してもらう 12. 「宇宙開闢と建築供儀」を報告してもらう 13. 「宇宙、バジリカ、大聖堂」の部分報告してもらう 14. 「まとめ」の部分報告してもらう 15. 演習全体を通してのまとめ 					
各科目の目標(達成水準)	宗教思想文献を原語で深く読み込むことを練習することを通じて研究をすすめる力を高める。					
参考文献等	エリアーデの著作のすべてが参考になる					
教科書	Mircea Eliade, le sacré et le profane. Gallimard					
成績評価の基準と方法	各回の報告の質の評価において100パーセント評価する。					

授業コード		授業題目	宗教哲学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	安藤 恵崇		担当教員所属	人間学		
履修における注意点	宗教思想の講義を理解するためには世界の諸宗教の基礎的な知識が必要になる。					
教員研究テーマ	宗教哲学(主に近代のベルクソンなど) 宗教現象学・神話学などを介した宗教の統合的理解					
授業の概要	ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』を精読する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクションーベルクソンはいかにして宗教に到達したか 2. ベルクソン哲学の通時的概観 3. 「持続」と自由の問題ー『時間と自由』第3章の問題 4. 自由の問題はいかにして宗教に接続するか 5. 『物質と記憶』魂の不滅の蓋然性への試み 6. 『物質と記憶』がはらんでいる困難な問題ーイマージュの説 7. 『物質と記憶』における心身問題 8. 『創造的進化』はいかにして宗教的な者に到達するか 9. 『創造的進化』における持続とエランヴィタル 10. 1911年援護からの転回 11. 二項対立からの脱却というテーマ 12. 持続と同時性における隠れたる神 13『思想と動くもの』緒論における遊興英 14. 「変化の知覚」における二稿対立の問題 15. まとめ. 					
各科目の目標(達成水準)	ベルクソンの宗教哲学を理解するにあたってその前半といえる問題を理解し自らの研究の参考とする。					
参考文献等	『ベルクソン全集』(白水社)					
教科書	用いない					
成績評価の基準と方法	期末のレポートによって100パーセント評価する					

授業コード		授業題目	宗教哲学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	安藤 恵崇			担当教員所属	人間学	
履修における注意点	世界の諸宗教の基礎的知識があらかじめ必要である					
教員研究テーマ	宗教哲学(主に近代のベルクソンなど) 宗教現象学・神話学などを介した宗教の統合的理解					
授業の概要	エリアーデ『聖と俗』を読み報告してもらう。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 『二源泉』の宗教における道徳的責務について報告してもらう 3. 『二源泉』の宗教における二つの分類を報告してもらう 4. 「社会における個人」の部分について報告してもらう 5. 「自発的服従」の部分について報告してもらう 6. 「抵抗への抵抗」の部分について報告してもらう 7. 「責務と命令」の部分について報告してもらう 8. 「定言的命令」について報告してもらう 9. 「閉じられた社会」について報告してもらう 10. 「英雄の呼び声」について報告してもらう 11. 「情動の推進的な力」について報告してもらう 12. 「情動の創造的な力」のうち報告してもらう 13. 「情動の開放的な力」について報告してもらう 14. 「魂の解放」について報告してもらう 15. まとめ. 					
各科目の目標(達成水準)	宗教思想文献を原語で深く読み込むことを練習することを通じて研究をすすめる力を高める。					
参考文献等	ベルクソンの著作のすべてが参考になる					
教科書	Henri Bergson, Les deux sources de la morale de la religion, Presses de universitaire de France					
成績評価の基準と方法	各回の報告の質の評価において100パーセント評価する。					

授業コード		授業題目	西洋思想文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	高橋 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点					
教員研究テーマ	西洋思想史					
授業の概要	『ヨハネ福音書』1・1-11や『創世記』1・1-10の読解を通して、principiumやverbumやvita等について考える。					
授業計画	<p>紀元1世紀の重要文献である『新約聖書』の中の『ヨハネ福音書』1・1-11を、ラテン語文法の基礎知識の整理も兼ねて、まず400年頃のヒエローニムスによる羅訳、つまり後1546年ローマ・カトリック教会が公会議で正典として公認した『ウルガータ聖書』で読み、ラテン語訳で理解可能な範囲において、principiumやverbumやvita等を掴む。次に同じ『ヨハネ福音書』1・1-11の原典を、古代ギリシア語文法の基礎知識の整理も兼ねて、特にラテン語で汲み尽くせない豊かな言葉、ΑΡΧΗやΛΟΓΟΣやΖΩΗ等を重視し、また羅訳ではfactum estと同じ完了過去で片付けられているが、原典ギリシア語では第二アオリスト過去 ΕΓΕΝΕΤΟと完了過去 ΓΕΓΟΝΕΝで別に表現されている動詞の相にも着目して、注意深く読む。更にΑΡΧΗとΛΟΓΟΣとの関連で重要な『創世記』1・1-10をも同様に、ラテン語文法の基礎知識の整理も兼ねて『ウルガータ聖書』で読み、かつ紀元前3世紀以降翻訳された『70人訳ギリシア語聖書』で古代ギリシア語文法の基礎知識の整理も兼ねて注意深く読む。更にΑΡΧΗやΛΟΓΟΣやΖΩΗ等に関連する古代ギリシア語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)に触れてゆく。例えばアリストテレスの『形而上学』983B-988A等々。</p> <p>(1)『ヨハネ福音書』1・1-11と『創世記』1・1-10の和訳(岩波文庫;1954年-1955年刊[プロテスタント]日本聖書協会『聖書』;1987年刊・新[カトリック・プロテスタント]共同訳『聖書』)読解。 (2)『ヨハネ福音書』1・1-3ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (3)『ヨハネ福音書』1・4-7ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (4)『ヨハネ福音書』1・8-11ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (5)『ヨハネ福音書』1・1-3原典ギリシア語文読解。 (6)『ヨハネ福音書』1・4-7原典ギリシア語文読解。 (7)『ヨハネ福音書』1・8-11原典ギリシア語文読解。 (8)『創世記』1・1-2ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (9)『創世記』1・3-5ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (10)『創世記』1・6-10ラテン語文(400年頃のヒエローニムスによる羅訳『ウルガータ聖書』)読解。 (11)『創世記』1・1-2(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。 (12)『創世記』1・3-5(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。 (13)『創世記』1・6-10(『70人訳ギリシア語聖書』)読解。 (14)アリストテレスの『形而上学』983B-988A和訳(岩波文庫・上・32頁-48頁)読解。 (15)アリストテレスの『形而上学』983B-988A原典ギリシア文(1960年復刻・1831年刊・Bekker版)検討。</p>					
各科目の目標(達成水準)	ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を学ぶ					
参考文献等	授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の文献					
教科書	授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の和訳文献					
成績評価の基準と方法	根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。					

授業コード		授業題目	西洋思想文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	高橋 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点					
教員研究テーマ	西洋思想史					
授業の概要	ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ギリシア語・ラテン語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)に触れてゆく。					
授業計画	<p>ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ギリシア語・ラテン語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)に触れてゆく。例えば、ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』9・7-10)、プラトーン著『ティーマイオス』27C以下の創世神話(特に48AのΑΝΑΓΚΗとΝΟΥΣ)、ストア派ゼーノンのΛΟΓΟΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』7・52以下)、ヘブライ語聖書に収録されなかった『70人訳ギリシア語聖書』所収『知恵(の書)』9・1のΛΟΓΟΣ、これに影響され、かつプラトーン哲学を聖書解釈に活用したユダヤ教徒ピロンの『創世記註解』24の「神のΛΟΓΟΣ」等々。以上以外にもプラトーン学派プルータルコス著『イーシスとオシーリス』372E-373CのΛΟΓΟΣやΥΛΗ、『ヘルメース文書』1の「神のΛΟΓΟΣ」やΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ、プローティノスの『エネアデス』3・5・7-9のΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗ、アウグスティヌス著『告白』7・9のΛΟΓΟΣ(verbum)や『告白』11.5のΥΛΗ(materia)等々にも話題を広げる。</p> <p>(1) ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ギリシア語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)紹介。</p> <p>(2) ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ等に関連する古代ラテン語文献(ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃まで)紹介。</p> <p>(3) ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その1(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』9・7)読解。</p> <p>(4) ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その2(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』9・8)読解。</p> <p>(5) ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その3(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』9・9)読解。</p> <p>(6) ヘーラクレイトスのΛΟΓΟΣ・その4(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』9・10)読解。</p> <p>(7) プラトーン著『ティーマイオス』27C以下の創世神話を読解(特に48AのΑΝΑΓΚΗとΝΟΥΣを中心に)。</p> <p>(8) ストア派ゼーノンのΛΟΓΟΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣ(出典:『ディオゲネス・ラーエルティオス』7・52ff.)読解。</p> <p>(9) ヘブライ語聖書に収録されなかった『70人訳ギリシア語聖書』所収『知恵(の書)』9・1読解(ΛΟΓΟΣを中心に)。</p> <p>(10) 『ヘルメース文書』1読解(「神のΛΟΓΟΣ」やΝΟΥΣやΥΛΗやΦΥΣΙΣを中心に)。</p> <p>(11) プローティノス著『エネアデス』3・5・7読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。</p> <p>(12) プローティノス著『エネアデス』3・5・8読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。</p> <p>(13) プローティノス著『エネアデス』3・5・9読解(ΛΟΓΟΣやΝΟΥΣやΥΛΗを中心に)。</p> <p>(14) アウグスティヌス著『告白』7・9読解(ΛΟΓΟΣ:verbumを中心に)。</p> <p>(15) アウグスティヌス著『告白』11.5読解(ΥΛΗ:materiaを中心に)。</p>					
各科目の目標(達成水準)	ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を学ぶ					
参考文献等	授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の文献					
教科書	授業計画の文面に示された原典ギリシア語・ラテン語の和訳文献					
成績評価の基準と方法	根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。					

授業コード		授業題目	西洋思想史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	高橋 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点					
教員研究テーマ	西洋思想史					
授業の概要	思想史上重要なヌース(νοῦς:intellectus)についてアレクサンドロス著『ヌース論』(紀元200年頃)を通して考える。					
授業計画	<p>思想史上重要なヌース(νοῦς:intellectus)についてアレクサンドロス著『ヌース論』(紀元200年頃)を通して考える。和訳が無いので当『ヌース論』を扱った下記論文3編を3頁ずつ、主にその和文の部分を読んでゆく。</p> <p>Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》(2012年12月31日刊・高知大学学術研究報告・第61巻・人文科学篇・横組87頁～101頁)</p> <p>《Intellectus Adeptus》(2012年12月31日刊・高知大学学術研究報告・第61巻・人文科学篇・横組135頁～149頁)</p> <p>《Intellectus Materialis》(2012年12月31日刊・高知大学学術研究報告・第61巻・人文科学篇・横組167頁～181頁)</p> <p>(1)Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》 87頁～89頁 (2)Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》 90頁～92頁 (3)Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》 93頁～95頁 (4)Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》 96頁～98頁 (5)Alexandri 《Intellectus Tribus Modis》 99頁～101頁 (6)《Intellectus Adeptus》135頁～137頁 (7)《Intellectus Adeptus》138頁～140頁 (8)《Intellectus Adeptus》141頁～143頁 (9)《Intellectus Adeptus》144頁～146頁 (10)《Intellectus Adeptus》147頁～149頁 (11)《Intellectus Materialis》167頁～169頁 (12)《Intellectus Materialis》170頁～172頁 (13)《Intellectus Materialis》173頁～175頁 (14)《Intellectus Materialis》176頁～178頁 (15)《Intellectus Materialis》179頁～181頁。</p>					
各科目の目標(達成水準)	ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を学ぶ 参考文献等					
参考文献等	授業計画の文面に示された文献(「高知大学学術情報リポジトリ」から電子媒体で入手) 教科書					
教科書	授業計画の文面に示された文献(「高知大学学術情報リポジトリ」から電子媒体で入手) 教科書					
成績評価の基準と方法	根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。					

授業コード		授業題目	西洋思想史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	高橋 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	健康第一を旨に体調を整え授業を休まないよう努力する点					
教員研究テーマ	西洋思想史					
授業の概要	ユーリアーヌス著『ヘーリオス頌』の重要な文脈に見当をつけ、この要所を押さえる。					
授業計画	<p>いきなり原典ギリシア語は登攀困難で学生なら誰でも尻込みするので、まず定評ある英訳(1913年刊・希英対訳Loeb古典叢書『ユーリアーヌス作品集: Works』第1巻・353頁以下奇数頁435頁迄)を礎にして内容を整理する所から始める。この作業ですら既に、専ら和訳文献のみ読んで手際よく論文を書く今日の慣行に馴染んだ頭脳には相当手間がかかり、格好の基礎訓練となる。この土台を踏まえ、『ヘーリオス頌』の重要な文脈に見当をつけ、この要所を一步一步ギリシア語で押さえながら、原典(1964年刊・希仏対訳Budé古典叢書『ユーリアーヌス全集: Oeuvres complètes』第2巻・第2部・100頁から138頁の右段)の理解を深めてゆく。例えば、ΝΟΕΡΟΝ(ノエロン)とかΜΕΣΟΝ(メソン)などの鍵語を留意する。</p> <p>(1)新プラトーン学派イアムブリコスの影響下にあった4世紀中葉の(あくまで体制キリスト教側から見た)背教者ユーリアーヌス・通観その1(和訳ギボン著ローマ史21章)。 (2)ユーリアーヌス・通観その2(和訳ギボン著ローマ史22章)。 (3)ユーリアーヌス・通観その3(和訳ギボン著ローマ史23章)。 (4)ユーリアーヌス・通観その4(和訳ギボン著ローマ史24章)。 (5)ユーリアーヌスの主著『ヘーリオス頌』(ΕΙΣ ΤΟΝ ΒΑΣΙΛΕΑ ΗΛΙΟΝ)希英対訳(1913年刊・希英対訳Loeb古典叢書『ユーリアーヌス作品集: Works』第1巻・352頁-359頁・読解)。 (6)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・360頁-367頁・読解。 (7)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・368頁-375頁・読解。 (8)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・376頁-383頁・読解。 (9)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・384頁-391頁・読解。 (10)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・392頁-399頁・読解。 (11)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・400頁-407頁・読解。 (12)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・408頁-415頁・読解。 (13)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・416頁-425頁・読解。 (14)『ヘーリオス頌』希英対訳『ユーリアーヌス作品集』第1巻・426頁-435頁・読解。 (15)ホメロス著『イーリアス』第23歌・第574句「メソン」・アリステテレス著『ニーコマコス倫理学』(1106B「メソテース」・1132A「メソン」)・古代ギリシア語70人訳聖書『申命記』5・5「メソン」・新約聖書ギリシア語原典の「メシテース」・読解</p>					
各科目の目標(達成水準)	ヘレニズム期から西ローマ帝国滅亡476年頃までの西洋思想の基本概念を踏まえて、ユーリアーヌス著『ヘーリオス頌』の理解を深める。					
参考文献等	授業計画の文面に示された原典ギリシア語文献と、その英訳。					
教科書	授業計画の文面に示された原典ギリシア語文献と、その英訳。					
成績評価の基準と方法	根気良く授業に出席し、毎回学習する内容を自分できちんと整理してゆく能力を評価。					

授業コード		授業題目	言語意味論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	加藤 勉		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	言語の意味論的研究に興味を持っていること。					
教員研究テーマ	英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。					
授業の概要	言語的意味の研究に必要な、基本的考え方の紹介と説明を行なう。					
授業計画	<p>言語における意味の問題を、英語を中心に扱いながら講義する。語彙的な意味論から文の意味論へと話を進め、語と指示対象の関係、文レベルの意味の決定と定式化の問題、文と文の間の意味的關係などについて講義を行う。また、言語の持つ文字通りの意味ばかりではなく、メタファーを中心とする様々な比喩的意味についても講義をする。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について 第2回 「語の意味関係」について 第3回 「意味の成分分析」について 第4回 「文の意味」について 第5回 「文の意味関係」について 第6回 「命題論理」について 第7回 「述語論理」について 第8回 「内包と外延」について 第9回 「可能世界意味論」について 第10回 「認知意味論」について 第11回 「古典的範疇」について 第12回 「範疇化とプロトタイプ効果」について 第13回 「メタファー論」について 第14回 「語用論」について 第15回 「発話行為」について</p>					
各科目の目標(達成水準)	言語の意味を研究するために必要とされる基礎的知識を身につける。					
参考文献等	授業ごとに適宜紹介する。					
教科書	ハンドアウトを配布する。					
成績評価の基準と方法	期末レポートに基づいて評価する。					

授業コード		授業題目	言語意味論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	加藤 勉		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	言語の意味論的研究を行う予定であること。					
教員研究テーマ	英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。					
授業の概要	言語的意味の研究に必要な基本的考え方についての、受講生とのディスカッションを中心に授業を行なう。					
授業計画	<p>Alan Cruise (2004). <i>Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics</i> (2nd ed.) の第1章 Introduction から第4章 Compositionality を読み、授業中に発表とディスカッションを行う。発表とディスカッションを通して、言語の意味論的研究においてもっとも基本となる考え方を整理し、言語的意味にかかわる事象を考察に必要な考え方を身につける。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について 第2回 「言語の性質と意味研究」について 第3回 「論理的意味」について 第4回 「量化」について 第5回 「意味のタイプ」について 第6回 「記述の意味」について 第7回 「意味の構成性」について 第8回 「意味の構成性の限界」について 第9回 「語の意味の性質」について 第10回 「語彙の意味論の主要問題」について 第11回 「語の意味の多様性」について 第12回 「語の意味と概念」について 第13回 「意味関係の特質」について 第14回 「意味的包含と同一性」について 第15回 「意味的除外と対立」について</p>					
各科目の目標(達成水準)	論文作成に必要な基礎的知識を身につける。					
参考文献等	授業ごとに適宜紹介する。					
教科書	ハンドアウトを配布する。					
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、期末レポートを総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	言語意味論特論Ⅱ	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	加藤 勉		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	言語の意味論的研究を行う予定であること。				
教員研究テーマ	英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。				
授業の概要	言語的意味に対する認知言語学的アプローチにおける基本的考え方の紹介と説明を行なう。				
授業計画	<p>英語を中心に扱いながら、言語の意味に対する認知言語学アプローチにおける基本的考え方の紹介と説明を行なう。認知言語学的アプローチの特徴と基本的言語観、それに基づく具体的意味事象の分析等について、講義を行なう。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について 第2回 認知言語学と認知文法 第3回 認知文法と生成文法 第4回 認知文法の特徴 第5回 シンボルと言語 第6回 音と意味とシンボル 第7回 スキーマと事例 第8回 意味の弾性 第9回 言語単位の結合 第10回 形態論 第11回 スキーマの競合 第12回 名詞と名詞句 第13回 テンスとアスペクト 第14回 節の仕組み 第15回 節の種類</p>				
各科目の目標(達成水準)	言語の意味を研究するために必要とされる基礎的知識を身につける。				
参考文献等	授業ごとに適宜紹介する。				
教科書	ハンドアウトを配布する。				
成績評価の基準と方法	期末レポートに基づいて評価する。				

授業コード		授業題目	言語意味論演習Ⅱ	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	加藤 勉		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	言語の意味論的研究に興味を持っていること。				
教員研究テーマ	英語の複数名詞句および総称性の意味論的研究。				
授業の概要	言語的意味の研究に必要な基本的考え方についての、受講生とのディスカッションを中心に授業を行なう。				
授業計画	<p>John R. Taylor (2002). <i>Cognitive Grammar</i> の Part 1 Background から Part 5 More on Meaning のうちからトピックをとりあげ、受講生の発表とディスカッションを行う。発表とディスカッションを通して、言語の認知意味論的研究においてもっとも基本となる考え方を理解し、研究に活かすことを目指す授業とする。</p> <p>第1回 「授業の計画と概要」について 第2回 Cognitive Grammar and Cognitive Linguistics 第3回 The symbolic thesis 第4回 Semantic structure in Cognitive Grammar 第5回 Schema and instance 第6回 Schema and instance in symbolic units 第7回 Meaning: Profile, base, and domain 第8回 Morphology 第9回 Analysability and productivity 第10回 Nouns and nominals 第11回 Count nouns and mass nouns 第12回 Tense and aspect 第13回 Clause structure 第14回 Domains 第15回 Networks and complex categories</p>				
各科目の目標(達成水準)	論文作成に必要な考え方と方法論を身につける。				
参考文献等	授業ごとに適宜紹介する。				
教科書	ハンドアウトを配布する。				
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、期末レポートを総合的に評価する。				

授業コード		授業題目	言語文法論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	西尾 美穂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	通時的統語論					
授業の概要	英語史研究の概要を学ぶ。					
授業計画	<p><i>The Handbook of the History of English</i> をテキストとして、英語史研究の概要を学ぶ。</p> <p>第1回 Approaches and issues—Change for the Better?</p> <p>第2回 Cuing a New Grammar</p> <p>第3回 Variation and the Interpretation of Change in Periphrastic <i>Do</i></p> <p>第4回 Evolutionary Models and Functional—Typological Theories of Language Change</p> <p>第5回 Inflectional Morphology and Syntax—Case Syncretism and Word Order Change</p> <p>第6回 Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English</p> <p>第7回 The Loss of OV Order in the History of English</p> <p>第8回 Category Change and Dradience in the Determiner System</p> <p>第9回 Pathways in the Development of Pragmatic Markers in English</p> <p>第10回 The Semantic Development of Scalar Focus Modifiers</p> <p>第11回 Information Structure and Word Order Change</p> <p>第12回 Eighteenth-century Prescriptivism and the Norm of Correctness</p> <p>第13回 Historical Sociolinguistics and Language Change</p> <p>第14回 Global English</p> <p>第15回 Summary</p>					
各科目の目標(達成水準)	英語史研究の概要を理解する。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	<i>The Handbook of the History of English</i> , van Kemenade and Los, Blackwell					
成績評価の基準と方法	受講態度50% 期末試験50%					

授業コード		授業題目	言語文法論演習I	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	西尾 美穂		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし				
教員研究テーマ	通時的統語論				
授業の概要	文法化研究の概要を学ぶ。				
授業計画	<p><i>The Oxford Handbook of Grammaticalization</i> のPart 1 Grammativalization and Linguistic Theory を読む。</p> <p>第1回 Grammaticalization and mechanisms of change 第2回 Grammaticalization and generative grammar 第3回 Grammaticalization and functional linguistics 第4回 Usage-based theory and grammaticalization 第5回 Grammaticalization and cognitive grammar 第6回 Construction grammar and grammaticalization 第7回 Grammaticalization and linguistic typology 第8回 Grammaticalization and sociolinguistics 第9回 Grammaticalization and language acquisition 第10回 Grammaticalization and language evolution 第11回 Grammaticalization and linguistic complexity 第12回 Grammaticalization and directionality 第13回 Grammaticalization and explanation 第14回 Grammaticalization: a general critique 第15回 Summary</p>				
各科目の目標(達成水準)	文法化研究の概要を理解する。				
参考文献等	適宜指示する。				
教科書	<i>The Oxford Handbook of Grammaticalizaion</i> , Narrog & heine, OUP				
成績評価の基準と方法	受講態度50%、期末レポート50%				

授業コード		授業題目	言語文法論特論II	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	西尾 美穂		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	通時的統語論				
授業の概要	構文文法の概要を学ぶ。				
授業計画	<p><i>The Oxford Handbook of Construction Grammar</i> をテキストとして、構文文法の概要を学ぶ。</p> <p>第1回 Construction Grammar: Introduction 第2回 Principles and Methods 第3回 The Limits of (Construction) Grammar 第4回 Usage-based Theory and Exemplar Representations of Constructions 第5回 Constructions in the Parallel Architecture 第6回 Data in Constructoon Grammar 第7回 Morphology in Construction Grammar 第8回 Words and Idioms 第9回 Collostructional Analysis 第10回 Abstract Phrasal and Clausal Constructions 第11回 Information Structure 第12回 Principles of Constructional Change Construction-Based Historical-Comparative Reconstruction 第13回 Dialects, Discourse and Construction Grammar 第14回 Constructions in Cognitive Sociolinguistics 第15回 Summary</p>				
各科目の目標(達成水準)	構文文法の概要を理解する。				
参考文献等	適宜指示する。				
教科書	<i>The Oxford Handbook of Construction Grammar</i> , Hoffman & Trousdale, OUP.				
成績評価の基準と方法	授業態度50%、期末試験50%。				

授業コード		授業題目	言語文法論演習II		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	西尾 美穂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	通時的統語論					
授業の概要	文法化研究の概要を学ぶ。					
授業計画	<p><i>The Oxford Handbook of Grammaticalization</i> のPart IV Grammaticalization of Form Classes and Categories を読む。</p> <p>第1回 The grammaticalization of agreement 第2回 Adverbial grammaticalization 第3回 The grammaticalization of adpositions and case marking 第4回 The grammaticalization of definite articles 第5回 The grammaticalization of passives 第6回 Auxiliaries and grammaticalization 第7回 The grammaticalization of complex predicates 第8回 Negative cycles and grammaticalization 第9回 The grammaticalization of tense and aspect 第10回 The grammaticalization of modality 第11回 The grammaticalization of evidentiality 第12回 The grammaticalization of discourse markers 第13回 The grammaticalization of reference systems 第14回 The grammaticalization of subordination 第15回 The grammaticalization of quotatives</p>					
各科目の目標(達成水準)	文法化研究の概要を理解する。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	<i>The Oxford Handbook of Grammaticalization</i> , Narrog & heine, OUP.					
成績評価の基準と方法	受講態度50%、期末レポート50%。					

授業コード		授業題目	認知心理学特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	池田 和夫		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人間の認知過程に関する心理学的研究					
授業の概要	人間の認知心理学に関する知見を低次認知過程を中心に講義する。					
授業計画	<p>この授業は、次のような事項に関する講義を行い(各項につき2時限)、人間の知覚・認知過程に関する主要な理論を概観する。</p> <p>第1回 心理学における知覚・認知心理学 第2回 知覚・認知心理学の歴史的な位置づけ 第3回 実験心理学的アプローチ 第4回 感覚・知覚・認知 第5回 感覚の諸相 第6回 精神物理学 第7回 視覚システムの生理学的基盤 第8回 視覚的知覚認知過程: 錯視 第9回 視覚的知覚認知過程: 色覚 第10回 視覚的知覚認知過程: 立体視・空間視 第11回 視覚的知覚認知過程: 形態の知覚 第12回 聴覚システムの生理学的基盤 第13回 聴覚的知覚認知過程: 可聴範囲・音の大きさ 第14回 聴覚的知覚認知過程: 音高 第15回 聴覚的知覚認知過程: 音色</p>					
各科目の目標(達成水準)	認知心理学に関する一般的事項を理解する。					
参考文献等	授業において、随時紹介する。					
教科書	授業において指定する。あわせて資料としてプリントを適宜配布する。					
成績評価の基準と方法	出席およびレポートの結果に基づき総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	認知心理学演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	池田 和夫		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人間の認知過程に関する心理学的研究					
授業の概要	人間の知覚認知過程に関する最新の研究論文を発表し、それについて議論する。					
授業計画	<p>知覚認知心理学に関する最新の研究成果を検討する。これを通じて、人間の認知様式の特徴やそれに影響を及ぼす諸要因について考察し、研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1) 視覚閾に関する研究の検討 第2回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 精神物理学に関する研究の検討 第3回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3) 錯視に関する研究の検討 第4回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(4) 色覚に関する研究の検討 第5回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(5) 立体視に関する研究の検討 第6回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(6) 運動視に関する研究の検討 第7回 視覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(7) 形態の知覚に関する研究の検討 第8回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1) 聴覚閾に関する研究の検討 第9回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 音の大きさの知覚に関する研究の検討 第10回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3) マスキングに関する研究の検討 第11回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(4) 純音の音高知覚に関する研究の検討 第12回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(5) 複合音の音高知覚に関する研究の検討 第13回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(6) 音色の知覚に関する研究の検討 第14回 聴覚的知覚認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(7) 音高と音色の相互作用に関する研究の検討 第15回 知覚認知研究の動向に関するディスカッション</p>					
各科目の目標(達成水準)	最新の知覚認知心理学研究の動向を把握し、諸問題を考察する。					
参考文献等	授業において、随時紹介する。					
教科書	研究論文を用いる。					
成績評価の基準と方法	出席、研究発表・ディスカッションおよびレポートの結果に基づき総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	認知心理学特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	池田 和夫		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人間の認知過程に関する心理学的研究					
授業の概要	人間の認知に関する知見を高次認知過程を中心に講義する。					
授業計画	<p>この授業は、次のような事項に関する講義を行い、人間の認知過程に関する主要な仮説・理論を概観する。</p> <p>第1回 認知心理学とは 第2回 認知心理学の歴史的位置づけ 第3回 認知心理学のアプローチ 第4回 認知心理学の方法論 第5回 視覚的知覚認知過程:色覚・空間立体視 第6回 視覚的知覚認知過程:運動視・物体の知覚 第7回 高次認知過程:スキーマ 第8回 高次認知過程:注意 第9回 高次認知過程:感覚記憶 第10回 高次認知過程:短期記憶 第11回 高次認知過程:長期記憶 第12回 高次認知過程:記憶の変容と忘却 第13回 高次認知過程:知識 第14回 社会的認知過程:対人認知 第15回 社会的認知過程:社会的推論</p>					
各科目の目標(達成水準)	認知心理学に関する一般的な事項を理解する。					
参考文献等	授業において、随時紹介する。					
教科書	授業において指定する。あわせて資料としてプリントを適宜配布する。					
成績評価の基準と方法	出席およびレポートの結果に基づき総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	認知心理学演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	池田 和夫		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	認知心理学演習Ⅰを履修していることが望ましい。					
教員研究テーマ	人間の認知過程に関する心理学的研究					
授業の概要	人間の認知過程に関する最新の研究論文を発表し、それについて議論する。					
授業計画	<p>認知心理学演習Ⅰの成果を受けて、認知心理学に関するテーマをさらに深く探求する。この演習では、次のような認知心理学的問題について論考する。</p> <p>第1回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1) 色覚に関する研究の検討 第2回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 立体視に関する研究の検討 第3回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3) 運動視に関する研究の検討 第4回 視覚的認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(4) 物体の認知に関する研究の検討 第5回 高次認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(1) スキーマに関する研究の検討 第6回 高次認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 認知処理様式に関する研究の検討 第7回 高次認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(3) 視覚的注意に関する研究の検討 第8回 高次認知過程に関する研究成果の発表とディスカッション(4) 聴覚的注意に関する研究の検討 第9回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(1) 感覚記憶に関する研究の検討 第10回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 短期記憶に関する研究の検討 第11回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(3) 意味記憶に関する研究の検討 第12回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(4) エピソード記憶に関する研究の検討 第13回 記憶に関する研究成果の発表とディスカッション(5) 潜在記憶に関する研究の検討 第14回 社会的認知に関する研究成果の発表とディスカッション(1) 対人認知に関する研究の検討 第15回 社会的認知に関する研究成果の発表とディスカッション(2) 社会的推論に関する研究の検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	最新の認知心理学研究の動向を把握し、諸問題を考察する。					
参考文献等	授業において、随時紹介する。					
教科書	研究論文を用いる。					
成績評価の基準と方法	出席、研究発表・ディスカッションおよびレポートの結果に基づき総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	社会心理学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	増田 匡裕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英文読解が苦でないこと。課題の一部には英作文もある。					
教員研究テーマ	親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学					
授業の概要	対人関係の社会心理学を総合的に概観し、対人相互作用対人認知を分析するための重要な理論とその応用を論じる。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1. Self. 2. Self. 3. Identity. 4. Identity. 5. Small Group Interactions. 6. Small Group Interactions. 7: Social Norm. 8: Mid-term Exam(Multiple Choice and Essay). 9: Attitude and Attitude Change. 10: Attitude and Attitude Change. 11: Social Exchange. 12: Social Exchange. 13 Close Relationships. 14: Close Relationships. 15: Close Relationships. 16: Final Exam(Multiple Choice and Essay). 					
各科目の目標(達成水準)	現代の社会心理学の基礎的な知識、特に過去20年の間に発達した基礎的な理論を英語で概観すること。					
参考文献等	授業中に適宜指示する。					
教科書	Textbook: Kruglanski, A.W. & Higgins E.T (Eds.) (2003) Social Psychology: A General Reader (Key Readings in Social Psychology). Psychology Press.					
成績評価の基準と方法	試験4回(英文マルチプルチョイスと和文論述各2回)の合計点					

授業コード		授業題目	社会心理学演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	増田 匡裕		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	人文学部人間文化学科人間基礎論コース3年配当科目「社会心理学演習I・II・III・IV」への出席と、ディスカッションリーダーとしての参加。				
教員研究テーマ	親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学				
授業の概要	対人関係のダークサイド研究を軸に対人コミュニケーションや社会的ネットワーク及び社会意識を研究するための理論を存在論・認識論・方法論の3つの側面から論考する。				
授業計画	<p>1: Journal Readings: JSPR. 2: Journal Readings: JSPR. 3: Journal Readings: JSPR. 4 Journal Readings: JSPR. 5: Journal Readings: PR. 6: Journal Readings: PR. 7: Journal Readings: PR. 8: Journal Readings: PR. 9 Journal Readings: NCA&ICA journals. 10: Journal Readings: NCA&ICA journals. 11: Journal Readings: NCA&ICA journals. 12: Journal Readings: NCA&ICA journals. 13: Research Proposal Draft Presentation. 14: Article Report. 15: Research Proposal Presentation.</p>				
各科目の目標(達成水準)	対人関係研究の重要トピックを学際的な視点から理解すること				
参考文献等	適宜指示する				
教科書	Hendrick, C. & Hendrick, S.S. (2000). <u>Close relationships: A sourcebook</u> . Thousand Oaks, CA: Sage.				
成績評価の基準と方法	発表40%とリサーチプロポーザル60%				

授業コード		授業題目	人間関係論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	増田 匡裕		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	英文読解が苦でないこと。課題の一部には英作文もある。				
教員研究テーマ	親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学				
授業の概要	対人関係の社会的結合体の内部のダイナミクスとそれを包含する社会的文脈との相互作用及び意味生成過程をデータに基づいて分析する。				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1. Self. 2. Self. 3. Identity. 4. Identity. 6. Small Group Interactions. 7. Small Group Interactions. 8: Social Norm. 9: Intergroup Relationships. 10: Attitude and Attitude Change. 11: Attitude and Attitude Change. 12: Social Exchange. 13: Social Exchange. 14: Close Relationships. 15: Close Relationships. 				
各科目の目標(達成水準)	社会心理学を実社会に応用する視点を持つ。				
参考文献等	To be announced.				
教科書	Baumeister & Finkel (2010) Advanced Social Psychology: The State of the Science. Oxford University Press.				
成績評価の基準と方法	毎回のディスカッションサマリー(64%)とスクラップブック課題(34%)				

授業コード		授業題目	人間関係論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	増田 匡裕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語の読み書きに抵抗がないこと					
教員研究テーマ	親しい対人関係の発達過程におけるコミュニケーション／喪失の社会心理学					
授業の概要	対人関係のダークサイド研究を軸に対人コミュニケーションや社会的ネットワーク及び社会意識を研究するための理論を存在論・認識論・方法論の3つの側面から論考する。特に、実社会の問題への応用を重視する。					
授業計画	<p>1: Journal Readings: JSPR. 2: Journal Readings: JSPR. 3: Journal Readings: JSPR. 4: Journal Readings: JSPR. 5: Journal Readings: PR. 6: Journal Readings: PR. 7: Journal Readings: PR. 8: Journal Readings: PR. 9. : Journal Readings: Family journals. 10: Journal Readings: Family journals. 11: Journal Readings: Family journals. 12: Journal Readings: Family journals. 13: Research Proposal Draft Presentation. 14: Article Report. 15: Research Proposal Presentation.</p>					
各科目の目標(達成水準)	対人関係研究の重要トピックの中から修士論文研究課題を決め、リサーチプロポーザルを書き上げること					
参考文献等	適宜指示する					
教科書	専門誌(英文) Journal of Social & Personal Relationshipsなど この科目ではJournal of Marriage and the FamilyやJournal of Family Psychologyなどの家族関連の専門誌や、医療福祉の専門誌も読む。					
成績評価の基準と方法	発表25%とリサーチプロポーザル75%					

授業コード		授業題目	感情心理学特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	日比野 桂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	心理学に関する基礎的な知識を有していることが前提となります。					
教員研究テーマ	感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究					
授業の概要	感情に関する基礎的な知見を説明と概観					
授業計画	<p>まず、感情に関する基礎的な知見を説明します。その際、感情や行動以外にも、社会事象との関連も含めて論じます。その中で、様々な研究手法や分析手法に関しても考察していきます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 感情に関する4つの視点 I (進化) 3. 感情に関する4つの視点 II (生理) 4. 感情に関する4つの視点 III (認知) 5. 感情に関する4つの視点 IV (社会的構成) 6. 感情の分類 7. 感情と表情 8. 感情の測定方法 9. 感情の表出と制御 10. 感情と記憶 11. 感情と日常生活 12. 感情と労働 13. 感情と犯罪 14. 感情と社会 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	感情心理学に関する基礎的な知識と研究実施方法の習得。					
参考文献等	授業内で必要に応じて紹介予定					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	出席状況, 参加態度, レポートなどに基づき, 総合的に評価します。					

授業コード		授業題目	感情心理学演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	日比野 桂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	感情心理学特論を履修した学生を対象とする。					
教員研究テーマ	感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究					
授業の概要	感情心理学に関する様々な研究論文の発表とディスカッション。					
授業計画	<p>感情心理学に関するさまざまな研究論文を発表・ディスカッションする中で、研究結果をまとめ、理解を深めます。従来の研究により検討された要因以外にも、感情に影響する要因やその機序について考察します。それらをふまえた上で、研究計画を立案します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 題材とする感情, 発表論文の選択 3. 論文の発表とディスカッション I 怒り 4. 論文の発表とディスカッション II 不安 5. 論文の発表とディスカッション III 嫉妬 6. 論文の発表とディスカッション IV 羞恥心 7. 論文の発表とディスカッション V 抑うつ 8. 論文の発表とディスカッション VI 罪悪感 9. 論文の発表とディスカッション VII 後悔 10. 論文の発表とディスカッション VIII 感動 11. 論文の発表とディスカッション IX 嬉しい・楽しい 12. 要因図の作成 13. 仮説の設定 14. 研究計画の立案 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	感情心理学に関する具体的な研究計画の立案					
参考文献等	授業内で必要に応じて紹介予定					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	出席状況, 参加態度, レポートなどに基づき, 総合的に評価します。					

授業コード		授業題目	感情心理学特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	日比野 桂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	感情心理学特論Ⅰを履修していることを前提する。					
教員研究テーマ	感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究					
授業の概要	特定の感情に注目し、感情の喚起や生起する行動について概観する					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 感情の対象について 3. 感情の原因・促進要因 4. 感情と原因把握 5. 感情と認知 6. 感情と攻撃 7. 感情と行動・対処 8. 感情の処理 9. 感情の時系列的変化 10. 感情と社会の認知 11. 感情喚起とその後の人間関係 12. 感情と自己 13. 感情と生理学 14. 感情と記憶 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	多面的な感情の理解					
参考文献等	授業内で必要に応じて紹介予定					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	出席状況, 参加態度, レポートなどに基づき, 総合的に評価します。					

授業コード		授業題目	感情心理学演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	日比野 桂		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	感情心理学特論および感情心理学演習Ⅰを履修した学生を対象とする。					
教員研究テーマ	感情経験および感情喚起に伴う行動に関する心理学的研究					
授業の概要	研究計画の立案と研究実施・データ処理					
授業計画	<p>感情心理学に関する先行研究の知見をまとめ、研究計画を立案します。立案した計画に基づいた研究を実施し、そのデータを分析します。さらに、研究の意義を考えながら、分析によりデータをまとめ、結果を考察します。これらを通して、感情心理学における研究の位置づけについて検討します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 題材とする感情の選択 3. 論文の発表とディスカッションⅠ 4. 論文の発表とディスカッションⅡ 5. 論文の発表とディスカッションⅢ 6. 先行研究の知見のまとめ 7. 研究計画の立案 8. 研究実施準備Ⅰ 9. 研究実施準備Ⅱ 10. 分析方法の検討 11. 分析の実施 12. 研究結果のまとめ 13. 結果より得られる知見の考察Ⅰ 14. 結果より得られる知見の考察Ⅱ 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	感情心理学に関する研究実施および分析					
参考文献等	授業内で必要に応じて紹介予定					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	出席状況、参加態度、レポートなどに基づき、総合的に評価します。					

授業コード		授業題目	考古学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	清家 章		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究					
授業の概要	学生の研究テーマに沿った専門論文を講読し、なおかつ資料の観察法を学ぶ。今年度は、土器論文・中世山城関係論文を読む。資料観察は発掘調査報告書を読み、その資料提示法を学習する。拓本等の実践的練習も行う。論文購読7回・資料観察6回と予備2回を予定。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 考古学遺跡調査報告書読解～『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会の遺構報告の読解 2. 考古学遺跡調査報告書読解 ～『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会の遺物報告の読解 3. 考古学出土遺物整理法(1) ～出土資料の実測を教授する。実習 4. 考古学出土遺物整理法(2) ～出土資料の写真撮影について教授する。実習 5. 中世山城関連論文講読(1)～千田嘉博論文を読む。講読 6. 中世山城関連論文講読(2) ～千田嘉博論文を読む。講読 7. 中世土器研究論文講読(1)松田直則ほか1995「四国」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。講読 8. 中世土器研究論文講読(2)尾上実ほか1995「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。講読 9. 発掘調査現場指導(1)～発掘調査現場を訪ね、発掘調査法を学ぶ。実習 10. 発掘調査現場指導(2)～発掘調査現場を訪ね、発掘調査法を学ぶ。実習 11. 出土遺物観察法(1) ～『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブを読み、実際の須恵器を見ながら観察法を学ぶ。実習 12. 出土遺物観察法(2) ～『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブを読み、実際の須恵器を見ながら観察法を学ぶ。実習 13. 出土遺物観察法(3) ～『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブを読み、実際の須恵器を見ながら観察法を学ぶ。実習。 14. 資料見学～資料館に行き、資料を見ながら観察法を学ぶ。実習 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	修士論文作成に必要な専攻時代の概要を知る。あるいは、考古学専門書と発掘調査報告書を読んで理解する知識を習得する。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	平常点(出席と発表内容)。					

授業コード		授業題目	考古学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	清家 章		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究					
授業の概要	修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を討議する。今年度は福永伸哉著2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会を講読する予定であるが、受講生によってはこれを変更する場合もある。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに オリエンテーション 2. 論文講読 第1章「三角縁神獣鏡の系譜と性格」。講読 3. 論文講読 第2章2節「魏の紀年鏡とその周辺」。講読 4. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 5. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 6. 論文講読 第2章3節「規矩鏡における特異な一群」。講読 7. 論文講読 第2章4節「青龍三年鏡と顔氏の鏡造り」。講読 8. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 9. 論文講読 第2章5節「三角縁神獣鏡の系譜と製作地」。講読 10. 論文講読 第3章「舶載三角縁神獣鏡の編年と製作年代」。講読 12. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 13. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 14. 論文講読 第4章「三角縁神獣鏡製作技法の検討」。講読 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	修士論文の基礎的構想を完成する。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会					
成績評価の基準と方法	平常点(出席と発表内容)。					

授業コード		授業題目	比較考古学特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	清家 章		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究				
授業の概要	海外の考古学研究と日本の考古学研究を学ぶ				
授業計画	<p>基本的に外書購読を行う。Philip Rahtz Invitation to Archaeologyを読む。1. はじめに</p> <p>2. 第1章 What is Archaeology? 外書講読</p> <p>3. 第2章 Motivation, Finance, and Politics 外書講読</p> <p>4. 第3章 British Archaeology 外書講読</p> <p>5. 第4章 Who are the Archaeologists? 外書講読</p> <p>6. 第5章 What do Archaeologists Do? 外書講読</p> <p>7. 第6章 Ethnoarchaeology or How to Avoid Boring Holidays 外書講読</p> <p>8. 第7章 Fringe Archaeology 外書講読</p> <p>9. 第8章 Two Case-studies in British Archaeology 外書講読</p> <p>10. 第9章 Archaeology and the Public 外書講読</p> <p>12. 研究発表 研究発表は受講生が自身に関連する海外考古学研究について発表する。発表</p> <p>13. 研究発表 研究発表は受講生が自身に関連する海外考古学研究について発表する。発表</p> <p>14. 研究発表 研究発表は受講生が自身に関連する海外考古学研究について発表する。発表</p> <p>15. まとめ</p>				
各科目の目標(達成水準)	ヨーロッパの考古学を理解する				
参考文献等	適宜指示する。				
教科書	Philip Rahtz Invitation to Archaeology				
成績評価の基準と方法	平常点(出席と発表内容)。				

授業コード		授業題目	比較考古学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	清家 章		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	弥生時代～古墳時代を中心とした日本考古学の研究					
授業の概要	考古学演習Ⅰでの成果をふまえ、修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。修士論文の完成に向けて、資料調査・資料分析方法を深化させる。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を討議する。今年度は福永伸哉著2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会を講読する予定であるが、受講生によってはこれを変更する場合もある。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに オリエンテーション 2. 論文講読 第Ⅱ部第1章「画文帯神獣鏡と邪馬台国政権」。講読 3. 論文講読 同第2章3節「画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡のはざまで」。講読 4. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 5. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 6. 論文講読 同第2章4節安満宮山古墳の被葬者像と3世紀の地域関係」講読 7. 論文講読 同第2章5節「雪野山古墳と近江の前期古墳」講読 8. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 9. 論文講読 同第2章6節「三角縁神獣鏡と葛城の前期古墳」講読 10. 論文講読 同第2章7節「鏡の多量副葬と被葬者像」講読 12. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 13. 研究発表 研究発表は受講生が自身の修論について発表を行い、指導する。発表 14. 論文講読 同第3章「古墳時代前期における神獣鏡製作の管理」。講読 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	修士論文の基礎的構想を完成する。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会					
成績評価の基準と方法	平常点(出席と発表内容)。					

授業コード		授業題目	中世日本社会史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	津野 倫明		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	講義内容および関連文献(論文・著書など)の予習・復習					
教員研究テーマ	日本中～近世初期の政治史					
授業の概要	中世後期の政治慣習をふまえて、豊臣期から徳川初期にかけての公儀と諸大名との政治的関係について論じる。					
授業計画	<p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2回 商社会・村落社会の「取次」と「中人制」</p> <p>第3回 武家社会の「取次」(1)室町幕府や織田政権の「取次」研究</p> <p>第4回 武家社会の「取次」(2)豊臣～徳川移行期の「取次」研究</p> <p>第5回 公儀—毛利間の「取次」(1) 1公儀—毛利間の「取次」黒田孝高</p> <p>第6回 公儀—毛利間の「取次」(1) 2公儀—毛利間の「取次」石田三成</p> <p>第7回 公儀—大名間の「取次」役の変遷(1) 第5回と第6回の整理</p> <p>第8回 豊臣秀吉死後の政治動向</p> <p>第9回 関ヶ原合戦と毛利氏</p> <p>第10回 公儀—毛利間の「取次」(2) 1公儀—毛利間の「取次」黒田長政</p> <p>第11回 公儀—毛利間の「取次」(2) 2公儀—毛利間の「取次」井伊直政・本多正信・本多正純</p> <p>第12回 公儀—毛利間の「取次」(2) 3徳川政権成立の過程</p> <p>第13回 補説(1) 公儀—毛利間の「取次」蜂須賀正勝</p> <p>第14回 補説(2) 公儀—毛利間の「取次」蜂須賀家政</p> <p>第15回 まとめ</p> <p>第16回 試験</p>					
各科目の目標(達成水準)	研究史を批判的に継承しつつ、史料を解釈する能力を習得する。					
参考文献等	特に指定しない。					
教科書	特に指定しない。					
成績評価の基準と方法	史料に関する授業ごとの口頭試問と期末の筆記試験。					

授業コード		授業題目	中世日本社会史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	津野 倫明		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	史料および関連文献(論文・著書など)に関する予習・復習					
教員研究テーマ	日本中～近世初期の政治史					
授業の概要	講読する史料にもとづいた口頭発表(史料解釈・関連事項)と議論をおこなう。なお、講読する史料は日本中世から近世初期の政治史に関する記録(公家・武家・僧侶などの日記)あるいは文書とし、これらの解釈・操作の方法を学び、能力として習得することを目指す。					
授業計画	<p>第1回 ガイダンス(講読する史料と分担の決定)</p> <p>第2回 史料講読と口頭発表1 記録の場合、某年某月1日条など</p> <p>第3回 史料講読と口頭発表2 記録の場合、某年某月2日条など</p> <p>第4回 史料講読と口頭発表3 記録の場合、某年某月3日条など</p> <p>第5回 史料講読と口頭発表4 記録の場合、某年某月4日条など</p> <p>第6回 史料講読と口頭発表5 記録の場合、某年某月5日条など</p> <p>第7回 史料講読と口頭発表6 記録の場合、某年某月6日条など</p> <p>第8回 第7回までの口頭発表に関する総合的な議論</p> <p>第9回 史料講読と口頭発表7 記録の場合、某年某月7日条など</p> <p>第10回 史料講読と口頭発表8 記録の場合、某年某月8日条など</p> <p>第11回 史料講読と口頭発表9 記録の場合、某年某月9日条など</p> <p>第12回 史料講読と口頭発表10 記録の場合、某年某月10日条など</p> <p>第13回 史料講読と口頭発表11 記録の場合、某年某月11日条など</p> <p>第14回 史料講読と口頭発表12 記録の場合、某年某月12日条など</p> <p>第15回 第1回から第14回までの口頭発表に関する総括的な議論</p>					
各科目の目標(達成水準)	研究史もふまえて、史料を解釈・操作する能力を習得する。					
参考文献等	特に指定しない。					
教科書	ガイダンス時に指定。					
成績評価の基準と方法	史料とこれに関連する諸文献にもとづいた口頭発表。議論への参加。					

授業コード		授業題目	中世日本地域史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	津野 倫明		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	講義内容および関連文献(論文・著書など)の予習・復習					
教員研究テーマ	日本中～近世初期の政治史					
授業の概要	豊臣政権期の政治史とくに朝鮮出兵とその国内政治への影響について論じる。					
授業計画	第 1 回 ガイダンス 第 2 回 朝鮮出兵の概要 第 3 回 秀吉の構想と当初の部隊編成 第 4 回 全州会議と忠清道侵攻 第 5 回 井邑会議と全羅道侵攻 第 6 回 倭城の普請・在番 第 7 回 蔚山の戦い 第 8 回 戦線縮小論 第 9 回 諸将の帰還 第10回 大名にとっての慶長の役の意義1 第11回 大名にとっての慶長の役の意義2 第12回 大名にとっての慶長の役の意義3 第13回 朝鮮出兵と秀吉死後の政局1 第14回 朝鮮出兵と秀吉死後の政局2 第15回 まとめ 第16回 試験					
各科目の目標(達成水準)	研究史を批判的に継承しつつ、史料を解釈する能力を習得する。					
参考文献等	特に指定しない。					
教科書	特に指定しない。					
成績評価の基準と方法	史料に関する授業ごとの口頭試問と期末の筆記試験。					

授業コード		授業題目	中世日本地域史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	津野 倫明		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	史料および関連文献(論文・著書など)に関する予習・復習					
教員研究テーマ	日本中～近世初期の政治史					
授業の概要	と議論をおこなう。なお、講読する史料は日本中世から近世初期の政治史に関する記録(公家・武家・僧侶などの日記)あるいは文書とし、これらの解釈・操作の方法を学び、能力として習得することを目指す。					
授業計画	<p>第1回 ガイダンス(講読する史料と分担の決定)</p> <p>第2回 史料講読と口頭発表1 文書の場合、1号など</p> <p>第3回 史料講読と口頭発表2 文書の場合、3号など</p> <p>第4回 史料講読と口頭発表3 文書の場合、5号など</p> <p>第5回 史料講読と口頭発表4 文書の場合、7号など</p> <p>第6回 史料講読と口頭発表5 文書の場合、9号など</p> <p>第7回 史料講読と口頭発表6 文書の場合、11号など</p> <p>第8回 第7回までの口頭発表に関する総合的な議論</p> <p>第9回 史料講読と口頭発表7 文書の場合、13号など</p> <p>第10回 史料講読と口頭発表8 文書の場合、15号など</p> <p>第11回 史料講読と口頭発表9 文書の場合、17号など</p> <p>第12回 史料講読と口頭発表10 文書の場合、19号など</p> <p>第13回 史料講読と口頭発表11 文書の場合、21号など</p> <p>第14回 史料講読と口頭発表12 文書の場合、23号など</p> <p>第15回 第1回から第14回までの口頭発表に関する総括的な議論</p>					
各科目の目標(達成水準)	研究史もふまえて、史料を解釈・操作する能力を習得する。					
参考文献等	特に指定しない。					
教科書	ガイダンス時に指定。					
成績評価の基準と方法	史料とこれに関連する諸文献にもとづいた口頭発表。議論への参加。					

授業コード		授業題目	発達心理学特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	塩坪 いく子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	予習・復習を十分にすること					
教員研究テーマ	乳幼児期の空間認知と言語発達					
授業の概要	認知発達の中でも主として言語発達を中心に、どのようにして認識が獲得されていくか、その特徴はどのようなものかを考察する。					
授業計画	<p>認知発達の中でも主として言語発達を中心に、どのようにして認識が獲得されていくか、その特徴はどのようなものかを考察する。</p> <p>第1回： 関連する認知能力の種類と内容： 概説 第2回： 関連する認知能力①： 抽象能力 第3回： 関連する認知能力②： 表象とシンボル 第4回： 関連する認知能力③： 記憶 第5回： 関連する認知能力④： 模倣 第6回： 関連する認知能力⑤： コミュニケーション 第7回： 関連する認知能力⑥： 認知能力と言語発達との関連研究の紹介とディスカッション 第8回： 言語発達に関する最新研究の紹介とディスカッション 第9回： 言語音の獲得(1)： 聴覚 第10回： 言語音の獲得(2)： 発声 第11回： コミュニケーション行動の基礎(1)： 社会的相互関係の発達 第12回： 社会的相互関係の発達に関する研究紹介とディスカッション 第13回： コミュニケーション行動の基礎(2)： 社会的認知能力の発達 第14回： 社会的認知能力とコミュニケーション行動に関する研究紹介とディスカッション 第15回： 言語発達研究に関する全体的ディスカッション</p>					
各科目の目標(達成水準)	この分野の基本的な研究の内容と技法を理解すること。					
参考文献等	随時紹介					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	発達心理学演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	塩坪 いく子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	関連する文献を十分読むこと					
教員研究テーマ	乳幼児期における空間認知の発達研究					
授業の概要	乳児期の空間認知の発達に関する研究及び言語発達に関する研究の検討と議論を行う。					
授業計画	<p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する研究の中で、受講学生の研究分野と関連する文献の探索と発表を中心に、問題の検討と議論を行い、かつ実験的研究のための実験計画の作成および実施を目指す。</p> <p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する研究の中で、受講学生の研究分野と関連する先行研究を踏まえ、自身の研究計画を立案し実行できるよう、先行研究を検討し自身の研究テーマを確立する。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 学生の学問的関心および研究トピックの検討 第3回 関連する研究分野の研究紹介とディスカッション：研究トピックの紹介 第4回 研究トピックの発表とディスカッション：トピックについての検討 第5回：研究トピックの発表とディスカッション：先行研究に関する検討 第6回：研究計画の発表とディスカッション：研究の紹介 第7回：研究計画の発表とディスカッション：方法論の検討 第8回：先行研究のまとめとディスカッション 第9回：関連研究の紹介とディスカッション：基礎 第10回：研究の中間報告とディスカッション：内容発表 第11回：研究の中間報告とディスカッション：問題点の検討 第12回：関連研究の紹介とディスカッション 第13回：研究の中間報告ディスカッション：再検討 第14回：関連研究の紹介とディスカッション：追加紹介 第15回：研究報告とディスカッション：再々検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	必要な文献を読破し、研究内容を正確に把握した上で、新たな問題の提起を可能とすること。					
参考文献等	随時紹介					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	発達心理学特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	塩坪 いく子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	乳幼児期の空間認知と言語発達					
授業の概要	<p>認知発達の中でも主として乳幼児期の空間認知を中心に、どのようにして認識が獲得されていくか、その特徴はどのようなものかを考察する。</p>					
	<p>乳幼児期の空間認知に関する基本的な先行研究を紹介した上で、この分野の最先端の研究について、問題点を検討し今後の展開を考える。</p> <p>第1回 認知発達研究の歴史 第2回 関連する認知能力(1): 乳児期 第3回 空間認知に関する発達の研究の歴史 第4回 空間認知に関する発達の研究と認知科学 第5回 自己の身体と外部世界の認識: 乳児期 第6回 乳児期の空間認知発達研究の紹介(1): 論文紹介 第7回 乳児期の空間認知発達研究の紹介(2): 論文紹介とディスカッション 第8回 乳児期の空間認知発達研究の紹介(3): 研究に関する全体的ディスカッション 第9回 自己の身体と外部世界の認識: 幼児期 第10回 幼児期の空間認知発達研究の紹介(1): 論文紹介 第11回 幼児期の空間認知発達研究の紹介(2): 論文紹介とディスカッション 第12回 幼児期の空間認知発達研究の紹介(3): 研究に関する全体的ディスカッション 第13回 空間認知の異常と発達の研究 第14回 比較心理学的研究の紹介とディスカッション 第15回 空間認知の発達研究に関する全体的検討と議論</p>					
各科目の目標(達成水準)	この分野の基本的な研究の内容と技法を理解すること。					
参考文献等	随時紹介					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	発達心理学演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	塩坪 いく子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	関連する文献を十分読むこと					
教員研究テーマ	乳幼児期の空間認知と言語発達					
授業の概要	乳児期の空間認知の発達に関する研究及び言語発達に関する研究の検討と議論を行う。					
授業計画	<p>乳幼児期の空間認知および言語発達に関する研究の中で、受講学生の研究分野と関連する先行研究を踏まえ、自身の研究計画を立案し実行する。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 学生の学問的関心および指導方法の確認 第3回 関連する研究分野の研究紹介とディスカッション 第4回 研究トピックの発表とディスカッション：トピックについての検討 第5回： 研究トピックの発表とディスカッション： 先行研究に関する検討 第6回： 研究計画の発表とディスカッション： 研究の紹介 第7回： 研究計画の発表とディスカッション： 方法論の検討 第8回： 先行研究のまとめとディスカッション 第9回： 関連研究の紹介とディスカッション： 基礎 第10回： 研究の中間報告とディスカッション： 内容発表 第11回： 研究の中間報告とディスカッション： 問題点の検討 第12回： 関連研究の紹介とディスカッション 第13回： 研究の中間報告とディスカッション： 再検討 第14回： 関連研究の紹介とディスカッション： 追加紹介 第15回： 研究報告とディスカッション： 再々検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	実験的研究の計画を立案し実行すること					
参考文献等	随時紹介					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	近世日本地域史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	荻 慎一郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特に予備知識等は問わないが、研究内容の個別性と一般化を理解する力を求める。					
教員研究テーマ	近世社会史の研究。鉱山社会史の研究。「浦」社会史の研究					
授業の概要	近世の政治・経済・外交を地域史の視点から講じる。また「浦」社会の研究を通じて近世社会の特質を究明する。					
授業計画	<p>第1回～ガイダンス 第2回～近世地域史研究の意義 第3回～近世地域史研究の方法 第4回～近世地域史研究の対象としての土佐 第5回～土佐藩の成立と行政区分 第6回～「鎖国」体制と土佐藩 第7回～土佐藩政の推移と民衆の抵抗 第8回～土佐の産業、生産活動と民衆生活 第9回～近世土佐の文化と教育(1) 第10回～近世土佐の文化と教育(2) 第11回～「浦」とは何か 第12回～「浦」の生業と身分 第13回～「堀湊」と南海大地震 第14回～黒潮圏と産業 第15回～講義のまとめと課題</p>					
各科目の目標(達成水準)	近世地域史研究の成果を講義内容から学び理解する。					
参考文献等	講義のなかで適宜紹介する。					
教科書	特になし。					
成績評価の基準と方法	試験またはレポートを課し評価する。					

授業コード		授業題目	近世日本地域史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	荻 慎一郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	近世史料の読解力(場合によっては古文書史料の解読)、史料から問題を設定する力を求める。					
教員研究テーマ	近世社会史の研究。鉱山社会史の研究。「浦」社会史の研究					
授業の概要	藩政史料や農村史料、浦史料や寺子屋等の庶民文化関係史料等、近世の諸史料を素材として、史料の読解・分析、研究視点等を学ぶ。近世日本地域史研究の諸論点を、史料に基づき探求し究明する。					
授業計画	<p>第1回～ガイダンス</p> <p>第2回～近世土佐の地域と社会</p> <p>第3回～『真覚寺日記』にみる浦社会と生業</p> <p>第4回～『真覚寺日記』にみる祭礼と地域社会</p> <p>第5回～『真覚寺日記』にみる庶民の旅</p> <p>第6回～『真覚寺日記』にみる金毘羅船</p> <p>第7回～『真覚寺日記』『高知藩教育沿革取調』等にみる寺子屋教育</p> <p>第8回～『真覚寺日記』にみる地域知識人の教養と社会・時代認識</p> <p>第9回～『真覚寺日記』にみる安政大地震と地域社会</p> <p>第10回～『島村右馬丞日記』にみる安政大地震と地域社会</p> <p>第11回～安芸郡川北村の指出帳にみる幕末土佐の農村社会</p> <p>第12回～安芸郡川北村の指出帳にみる幕末土佐の農業</p> <p>第13回～安芸郡川北村の指出帳にみる近世農村の年中行事</p> <p>第14回～安芸郡川北村の指出帳にみる人生儀礼</p> <p>第15回～まとめと課題</p>					
各科目の目標(達成水準)	史料の分析と問題設定、これに基づき調査研究と成果を発表できる力を育成する。					
参考文献等	進度に応じて適宜、紹介する。					
教科書	特になし。					
成績評価の基準と方法	試験またはレポートを課し評価する。					

授業コード		授業題目	近世日本社会史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	荻 慎一郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特に予備知識等は問わないが、研究内容の個別性と一般化を理解する力を求める。					
教員研究テーマ	近世社会史の研究。鉱山社会史の研究。「浦」社会史の研究					
授業の概要	近世社会史研究を鉱山社会を事例に講じる。鉱山支配、鉱山の経営構造、鉱山法、社会集団、鉱業技術等、鉱山社会史の諸問題について講じながら、近世社会の特質を究明する。					
授業計画	<p>第1回～ガイダンス</p> <p>第2回～近世社会史研究と鉱山社会史の意義</p> <p>第3回～近世鉱業の概要</p> <p>第4回～近世鉱業の生産過程</p> <p>第5回～近世鉱山の支配</p> <p>第6回～近世鉱山の経営とその構造</p> <p>第7回～鉱山の住民構成</p> <p>第8回～金名子「経営」と金掘り</p> <p>第9回～金掘りの社会集団</p> <p>第10回～近世鉱山法</p> <p>第11回～鉱山住民の生活と一揆</p> <p>第12回～鉱業技術とその伝播</p> <p>第13回～鉱山と周辺地域社会</p> <p>第14回～鉱山と近世社会</p> <p>第15回～講義のまとめと課題</p>					
各科目の目標(達成水準)	近世社会史研究の成果を講義内容から学び理解する。					
参考文献等	講義のなかで適宜紹介する。					
教科書	荻慎一郎『日本史リブレット 近世鉱山をささえた人びと』(山川出版社)					
成績評価の基準と方法	試験またはレポートを課し評価する。					

授業コード		授業題目	近世日本社会史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	荻 慎一郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	近世史料の読解力(場合によっては古文書史料の解読)、史料から問題を設定する力を求める。					
教員研究テーマ	近世社会史の研究。鉱山社会史の研究。「浦」社会史の研究					
授業の概要	近世の諸史料を素材として、史料の読解・分析、研究視点等を学ぶ。主として鉱山関係史料を取り扱う。近世日本社会史研究の諸論点を、史料に基づき探求し究明する。					
授業計画	<p>第1回～ガイダンス 第2回～『梅津政景日記』と近世初期の秋田藩領鉱山 第3回～『荒谷家文書』と近世中期の秋田藩領鉱山 第4回～『小貫家文書』と近世後期の秋田藩領鉱山 第5回～『門屋養安日記』と幕末秋田藩領鉱山 第6回～『鹿兒島県史料』と近世初期の薩摩藩領鉱山 第7回～『金山萬留』と近世中期の薩摩藩領鉱山 第8回～『宗家文書』と近世初期の対馬藩領鉱山 第9回～『宗家文書』と近世中期の対馬藩領鉱山 第10回～生野銀山史料にみる明治初年奥銀谷町の住民構成 第11回～『門屋養安日記』にみる鉱山の年中行事 第12回～『門屋養安日記』にみる鉱山の人生儀礼 第13回～『門屋養安日記』にみる地域社会と医療 第14回～『門屋養安日記』にみる鉱夫の社会集団 第15回～まとめと課題</p>					
各科目の目標(達成水準)	史料の分析と問題設定、これに基づき調査研究と成果を発表できる力を育成する。					
参考文献等	進度に応じて適宜、紹介する。					
教科書	特になし。					
成績評価の基準と方法	試験またはレポートを課し評価する。					

授業コード		授業題目	近代日本政治史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	小幡 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代史(政治・法制史、「戦争と地域」などを中心とする日本近代史研究)					
授業の概要	日本近代史上の諸問題を資料に基づいて考察する。大正デモクラシー期から敗戦に至る時期を主な検討の対象として、政治過程の変容・法制の変遷などを考察する。とくに、明治憲法を含めた法と社会の動向との関係を考察の中心に据え、そこからそれぞれの時代相を明らかにしてい					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 授業の進め方について 2 「米騒動」について 3 「普選運動」について 4 「護憲三派内閣」について 5 「関東大震災」について 6 「震災後の国内状況」について 7 「満州事変」について 8 「ファシズムの思想と運動」について 9 「天皇機関説事件」について 10 「日中全面戦争」について 11 「国民精神総動員運動」について 12 「大政翼賛会」について 13 「太平洋戦争」について(開戦をめぐって) 14 「太平洋戦争」について(「終戦」をめぐって) 15 まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日本近代史における政治史の諸問題等の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準をある程度理解すること。また、学術書を正確に読む力を身に付けること。					
参考文献等	授業時間中に適宜紹介する。					
教科書	とくに指定しない。授業プリントを配付する。					
成績評価の基準と方法	学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。					

授業コード		授業題目	近代日本政治史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	小幡 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代史(政治・法制史、「戦争と地域」などを中心とする日本近代史研究)					
授業の概要	満州事変から日中戦争にかけての政治過程について、基礎的な史実を確認するとともに、当該期を扱う研究の現時点における水準を理解する。具体的には、下記の二つのテキストを精読していくこととなる。テキストの内容を正確に理解し、両者の比較から、その視角や問題意識を学					
授業計画	<p>参加者は、毎回テキストの担当部分に関するレジメを作成しなければならない。レジメには、内容の要約、扱われている史実に関する確認、これまでの研究の達成点・問題点などである。授業時間においては、担当教員を含め、参加者全員で討議を行なう。</p> <p>1 ガイダンス 授業の進め方について</p> <p>2 伊香俊哉『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』(吉川弘文館、2007年) ※以下、「伊香本」とする I章 満州事変</p> <p>3 伊香本 II章 華北分離工作から日中戦争へ</p> <p>4 伊香本 III章 戦争違法化体制と日本の中国侵略</p> <p>5 伊香本 IV章 戦争犯罪と支配の諸相</p> <p>6 伊香本 V章 戦場の兵士と戦死</p> <p>7 伊香本 VI章 「泥沼化」から「南進」へ</p> <p>8 伊香本全体について再検討</p> <p>9 加藤陽子『シリーズ日本近現代史5 満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007年) ※以下、加藤本とする 1章 満州事変の四つの特質</p> <p>10 加藤本 2章 特殊権益をめぐる攻防</p> <p>11 加藤本 3章 突破された三つの前提</p> <p>12 加藤本 4章 国際連盟脱退まで</p> <p>13 加藤本 5章 日中戦争へ</p> <p>14 加藤本全体について再検討</p> <p>15 まとめ 満州事変・日中戦争研究の現状と課題について</p>					
各科目の目標(達成水準)	満州事変・日中戦争期における政治史の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準をある程度理解すること。また、学術書を正確に読む力を身に付けること。					
参考文献等	授業時間中に適宜紹介する。					
教科書	伊香俊哉『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』(吉川弘文館、2007年) 加藤陽子『シリーズ日本近現代史5 満州事変から日中戦争へ』(岩波新書、2007年)					
成績評価の基準と方法	学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。テキストの主旨を正確に捉え、それに対する自身の見解が論理的に述べられているかどうか採点の重点である。					

授業コード		授業題目	近代日本地域史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	小幡 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代史(政治・法制史、「戦争と地域」などを中心とする日本近代史研究)					
授業の概要	近年の日本近代史においては、軍・戦争と地域の関係のあり方を問う研究が進展している。しかし、本学の存する高知県に関してはほとんど研究がないのが現状である。本講義では、各地で進展している諸研究に学びつつ、戦争が高知という地域社会に与えた影響やその特質について考える。その際、地域における戦没者慰霊の問題に焦点を当てる。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス ～講義の進め方について 2 近代日本における徴兵制の概略 3 近代日本における「軍」 4 日清戦争と高知 5 甲午農民戦争と四国 6 “郷土部隊”歩兵第四四連隊の設置 7 日露戦争と高知(1) -四四連隊の動向- 8 日露戦争と高知(2) -戦没者慰霊- 9 シベリア出兵・山東出兵・満州事変と高知 10 日中戦争と高知(1) -郷土部隊の動向と地域の状況- 11 日中戦争と高知(2) -戦没者慰霊- 12 アジア・太平洋戦争と高知(1) -郷土部隊の動向- 13 アジア・太平洋戦争と高知(2) -被害と戦没者慰霊(忠霊塔の設置)- 14 アジア・太平洋戦争と高知(3) -終戦と戦後- 15 まとめ ～「軍と地域」の史的研究の可能性について 					
各科目の目標(達成水準)	講義の概略を理解し、「軍と地域」の史的研究の可能性について十分に考えることができること。					
参考文献等	授業時間中に適宜紹介する。					
教科書	とくに指定しない。授業プリントを配付する。					
成績評価の基準と方法	レポート(講義内容を踏まえた上で各自が問題を設定する)を課す予定である。それを見て、「達成目標」に達成できているかどうかを判断する。					

授業コード		授業題目	近代日本地域史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	小幡 尚			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代史(政治・法制史、「戦争と地域」などを中心とする日本近代史研究)					
授業の概要	<p>アジア・太平洋戦争期の政治史を扱った下記テキストの精読を主たる内容とする。テキスト所収の論文を1編ずつ丁寧に読んでいく。</p> <p>参加者は、毎回扱う論文に関するレジメを作成しなければならない。レジメには、論文の要約、論文で扱われている史実に関する確認、これまでの研究の達成点・問題点などである。授業時間においては、担当教員を含め、参加者全員で討議を行なう。</p>					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 授業の進め方について テキスト(吉田裕 [ほか]『岩波講座アジア・太平洋戦争 2 戦争の政治学』(岩波書店、2005年))について 2 加藤陽子論文(テキスト所収、以下同じなので略す)の検討 3 古川隆久論文の検討 4 安田浩論文の検討 5 瀨藤厚論文の検討 6 加瀬和俊論文の検討 7 荻野富士夫論文の検討 8 北原恵論文の検討 9 大串潤児論文の検討 10 赤沢史朗論文の検討 11 野上元論文の検討 12 原田敬一論文の検討 13 波田永実論文の検討 14 蘇貞姫サラ論文の検討 15 まとめ 今後のアジア・太平洋戦争研究のあり方をめぐって 					
各科目の目標(達成水準)	アジア・太平洋戦争期の政治史の概略を理解し、当該研究分野の現在の研究水準をある程度理解すること。また、学術論文を正確に読む力を身に付けること。					
参考文献等	授業時間中に適宜紹介する。					
教科書	吉田裕 [ほか]『岩波講座アジア・太平洋戦争2 戦争の政治学』(岩波書店、2005年)					
成績評価の基準と方法	学期末のレポートを成績評価の主たる材料とする。テキスト所収論文の主旨を正確に捉え、それに対する自身の見解が論理的に述べられているかどうか採点の重点である。					

授業コード		授業題目	東アジア古代歴史文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	大楠 敦弘			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料					
授業の概要	中国古代における生産と流通					
授業計画	<p>武器や農具などの出土遺物に見られる製作者について示す銘文を手がかりとして、中国古代、とくに秦漢時代において、いかにしてモノが作られ、そして流通していったのかという「生産と流通」の問題を、それが地域間のいかなる関係や構造のもとに展開したのかという「地域性」の観点から考えてゆく。</p> <p>第1回 イン트로ダクション 第2回 中国古代考古資料概説 第3回 中国古代の生産技術 第4回 秦漢時代の軍事 第5回 秦漢時代の農業 第6回 秦漢時代の「地域」 第7回 秦漢時代における武器 第8回 秦漢時代における農具 第9回 秦漢時代における生産組織 第10回 武器の銘文 第11回 農具の銘文 第12回 銘文と生産組織 第13回 銘文と「地域」 第14回 銘文と流通 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国古代史研究の方法論を理解し、個別の問題をその全体像において理解する。					
参考文献等	とくになし					
教科書	とくになし					
成績評価の基準と方法	出席とレポート					

授業コード		授業題目	東アジア古代歴史文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	大楠 敦弘		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料					
授業の概要	『戦国縦横家書』講読					
授業計画	<p>馬王堆出土『戦国縦横家書』を『戦国策』や『史記』などの文献資料と比較・対照しながら読解してゆくことで、中国・戦国時代中期における外交関係の具体相を復原すると同時に、この時代の歴史資料のあり方について考える。研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 イン트로ダクション 第2回 戦国時代史概説 第3回 戦国時代の資料 第4回 『戦国縦横家書』1～3章 第5回 『戦国縦横家書』4章 第6回 『戦国縦横家書』5章 第7回 『戦国縦横家書』6, 7章 第8回 『戦国縦横家書』8, 9章 第9回 『戦国縦横家書』10章 第10回 『戦国縦横家書』11, 12章 第11回 『戦国縦横家書』13章 第12回 『戦国縦横家書』14章 第13回 研究発表とディスカッション・1 第14回 研究発表とディスカッション・2 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国古代史における文献資料、出土文字資料の基本的な史料操作を修得する。					
参考文献等	とくになし					
教科書	とくになし					
成績評価の基準と方法	出席とレポート					

授業コード		授業題目	東アジア古代歴史社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	大楠 敦弘			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料					
授業の概要	中国古代における統一国家体制の形成					
授業計画	<p>戦国から秦簡時代にかけての統一国家形成の過程を「地域」の視点を中心に見てゆく。</p> <p>第1回 イン트로ダクション 第2回 戦国時代の「国際」秩序 第3回 睡虎地秦簡に見る地域と国家 第4回 秦の「統一」 第5回 関所と境界 第6回 楚漢抗争期の「統一」構想 第7回 漢初の郡国制 第8回 統一国家体制形成へ 第9回 武帝期の諸改革 第10回 前漢後期の統一国家体制 第11回 畿内制度の形成 第12回 新代国家の統一支配 第13回 後漢国家の統一体制 第14回 統一国家体制の崩壊 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国古代社会史研究の方法論を理解し、個別の問題をその全体像において理解する。					
参考文献等	とくになし					
教科書	とくになし					
成績評価の基準と方法	出席とレポート					

授業コード	12492	授業題目	東アジア古代歴史社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	大楠 敦弘		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国古代史、統一国家と地域、出土文字資料					
授業の概要	江陵張家山出土漢簡「二年律令」講読					
授業計画	<p>江陵張家山出土漢簡「二年律令」に見られる津関令の検討・分析を通じて、前漢初期の統一国家体制における郡国制支配の実態、および国家的な交通制度や情報伝達体制などについて考える。研究発表とディスカッションを行う。</p> <p>第1回 イン트로ダクション 第2回 前漢時代史概説 第3回 江陵張家山出土漢簡「二年律令」について 第4回 津関令講読・1 第5回 津関令講読・2 第6回 津関令講読・3 第7回 津関令講読・4 第8回 津関令講読・5 第9回 津関令講読・6 第10回 津関令講読・7 第11回 郡国制支配の実態 第12回 交通制度と情報伝達体制 第13回 研究発表とディスカッション・1 第14回 研究発表とディスカッション・2 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国古代史における出土文字資料による研究方法を修得する。					
参考文献等	とくになし					
教科書	とくになし					
成績評価の基準と方法	出席とレポート					

授業コード		授業題目	東アジア近世歴史文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	吉尾 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	講義の中で紹介する文献を読むなどして、予習、復習に心がける					
教員研究テーマ	ここ半世紀の日本の明清史研究の方法と課題					
授業の概要	明清時代史研究に関して、日本およびそれに関連する中国、台湾の代表的な分野に即して解説する。					
授業計画	<p>以下の流れで授業を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明 2. 戦後日本(～60年代)の明清期社会経済史研究の方法と課題(土地制度を中心に) 3. 同前(賦役制度を中心に) 4. 同前(商品経済を中心に) 5. 小まとめ 6. 同前(～70年代)の研究の方法と課題(いわゆる郷紳論について) 7. 同前(民衆運動を中心に) 8. 小まとめ 9. 80年代から90年代の日本の明清期社会経済史研究の方法と課題(社会秩序をめぐって) 10. 同前(社会変動をめぐって) 11. 同前(宗族をめぐって) 12. 小まとめ 13. 台湾の研究動向(社会経済史を中心に)について 14. 台湾の研究動向(文化史を中心に)について 15. 今日の日本の明清期社会経済史の課題 					
各科目の目標(達成水準)	現在までの日本の明清史研究の動向の基本線を理解できる					
参考文献等	授業の中で適宜紹介する					
教科書	使用せず					
成績評価の基準と方法	100点を満点として、レポート90点、出欠状況10点。					

授業コード		授業題目	東アジア近世歴史文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	吉尾 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	次回の授業で講読する史料・論文を必ず事前に読解しておく					
教員研究テーマ	中国・明代初期の地域社会に関する諸問題					
授業の概要	当該時代に関する代表的史料・論文を解説していく。					
授業計画	<p>当該時代の地域社会のあり方を示す史料を読解し、関連する先行研究を確認する。とくに『御製大詔』の中で、地域社会(州・県等)の課題(賦役負担・土地所有・治安維持等に関する)について記述した項目を読解し、その課題が国家、地方官、地域社会の住民(士大夫～農民等)の関わりの中で解決されようとしたのかを考察する。また、このことに関連する先行研究も確認する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明 2. 史料の解題 3. 『御製大詔』「君臣同遊」(官僚問題1) 4. 『御製大詔』「薦挙首領官」(官僚問題2) 5. 『御製大詔』「諭官之任」(官僚問題3) 6. 官僚問題に関する討議 7. 『御製大詔』「山西運糧」(地方問題1) 8. 『御製大詔』「五府州免糧」(地方問題2) 9. 『御製大詔』「武進県夏税」(地方問題3) 10. 地方問題に関する討議 11. 『御製大詔』「婚姻」(地域住民の動き1) 12. 『御製大詔』「民陳有司賢否」(地域住民の動き2) 13. 『御製大詔』「社学」(地域住民の動き3) 14. 地域住民の活動に関する討議 15. 明初の国家と社会の関係について内容をまとめる 					
各科目の目標(達成水準)	中国近世の地方史料を読解する技法を修得するとともに、当該時代の地域社会の課題について具体的に理解できる。					
参考文献等	授業の中で適宜紹介する					
教科書	使用せず					
成績評価の基準と方法	平常点					

授業コード		授業題目	東アジア近世歴史社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	吉尾 寛			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	19世紀から20世紀前半にかけての台湾の歴史(黒潮をキーワードとして)					
授業の概要	清朝時期から日本統治時代にいたる台湾の歴史を、黒潮等の海域環境や漁業に留意して解説する。					
授業計画	<p>清朝時代に発行された台湾の地方志の内容、いわゆる「日治時期」の日本文献などに依拠しながら、黒潮を軸とする海洋環境や漁業の展開に即して、台湾の歴史の流れを説明する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明 2. 清朝治下の台湾をめぐる黒潮の呼称1(乾隆刊本『台湾府志』の記載を中心に) 3. 清朝治下の台湾をめぐる黒潮の呼称2(嘉慶刊本『台湾府志』の記載を中心に) 4. 清朝治下の台湾をめぐる黒潮の呼称3(康熙刊本『裨海紀遊』の記載を中心に) 5. 清朝治下の台湾をめぐる黒潮の呼称4(『冊封使』の記載を中心に) 6. 清朝治下の台湾をめぐる黒潮の呼称5(同時期大陸の士大夫の記載内容) 7. 前近代の台湾をめぐる黒潮の呼称とそれが表す海域(変遷) 8. 日清戦争前後の台湾東北部(基隆等)の漁業とその変化 9. 日治時期における台湾東部(台東等)の漁業とその変化 10. 日治時期における台湾東部(宜蘭等)の漁業とその変化 11. 日治時期の台湾東北部(基隆等)の水産加工業(鰹節)とその変化 12. 日治時期の台湾東・南部(台東・火烧島)の水産加工業(鰹節)とその変化 13. 日本漁民の台湾への移住(主に移住元の状況) 14. 日本漁民の台湾への移住(主に移住先の状況) 15. まとめ:海洋環境、漁業の観点からする台湾の歴史の特徴 					
各科目の目標(達成水準)	台湾の歴史について概要を理解している					
参考文献等	授業の中で適宜紹介する					
教科書	使用せず					
成績評価の基準と方法	100点を満点として、レポート90点、出欠状況10点。					

授業コード		授業題目	東アジア近世歴史社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	吉尾 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	次回の授業で講読する史料・論文を必ず事前に読解しておく					
教員研究テーマ	中国・清代の地域社会と同時代の日本人の中国観					
授業の概要	清朝を中心に地域社会の問題を表示する史料を講読するとともに、かかる史実について体系的に考察した先学の見解を確認する。					
授業計画	<p>標記のテーマについて当該時代の行政文書(档案)を読解しながら進める。州・県等の公的課題(賦役負担・土地所有・治安維持等)に対する清朝の地方・中央官庁の対応のあり方を実証的に検討するとともに、主に19世紀後半以降、同時代の日本人(内藤湖南)がかかる対応をいかに評価し、またその評価が彼の中国観にどのような影響をあたえたのかについて考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の説明 2. 档案史料の解題 3. 『宮中档』(康熙時期)の上記テーマに関する部分の講読 4. 『宮中档』(雍正時期)の上記テーマに関する部分の講読 5. 『宮中档』(乾隆時期)の上記テーマに関する部分の講読 6. 従前の読解部分についての討議(官僚と地域社会・住民との関係について) 7. 内藤湖南の関係著作の解題 8. 内藤湖南『支那近世史』の該当部分の講読 9. 同『清朝衰亡論』の該当部分の講読 10. 同『清朝史通論』の該当部分の講読 11. 同『支那論』の該当部分の講読 12. 従前4書を通してみえる湖南の中国観の特徴 12. 内藤湖南論について(増淵龍夫) 13. 内藤湖南論について(谷川道雄) 14. 清代の地域社会の特徴についての討議 15. 清代の地域社会のありかたをふまえた日本人の中国観の特徴についての討議 					
各科目の目標(達成水準)	中国近世の行政文書を読解する技法を修得するとともに、同時代の日本人の中国観のもつ特徴・課題を具体的に理解できる。					
参考文献等	授業の中で適宜紹介する					
教科書	使用せず					
成績評価の基準と方法	平常点					

授業コード		授業題目	西洋近現代歴史文化論特論		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	川本 真浩		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	イギリス、イギリス帝国、コモンウェルス(英連邦)の近現代史に関する研究により、帝国ないし世界における政治・経済・文化の諸相について分析・考察する。					
授業の概要	イギリス、ヨーロッパ、帝国、世界における政治・経済・文化の諸相について講義する。とくにそれぞれの領域単位を超えたグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような歴史学研究にとりくむために必要な知識ないし理解力を養うことを目指す。					
授業計画	<p>主として17世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリスおよびイギリス帝国に焦点を合わせつつ、ヨーロッパ史や世界史とのかかわりも意識しながら、次のような内容で講義する。</p> <p>第1回 序論 第2回 世界史のなかの「名誉革命」体制 第3回 第2次英仏百年戦争のはじまり 第4回 第2次英仏百年戦争とイギリスの植民地拡大 第5回 アメリカ合衆国の独立 第6回 フランス革命とイギリス 第7回 ウィーン体制とイギリスの外交 第8回 イギリスにおける「改革」の時代 第9回 1848年革命 第10回 万国博覧会の始まりと世界 第11回 大不況(1873年～)の時代 第12回 アフリカ分割 第13回 南アフリカ戦争と帝国・ヨーロッパ 第14回 第1次世界大戦とイギリス帝国 第15回 総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	講義で扱う時期のイギリス近現代史に関する専門的な知見を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。					
参考文献等	授業時間内に理解・消化できなかった事項について、関連文献を用いるなどして自学自習に努める。					
教科書	教科書は使用しない。講義内容に関わる資料は授業中に配布する。参考図書も授業中に適宜紹介する。					
成績評価の基準と方法	(1)受講態度(出欠を含む)、(2)小テストまたはレポート、(3)期末試験により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:3:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。					

授業コード		授業題目	西洋近現代歴史文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	川本 真浩			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	イギリス、イギリス帝国、コモンウェルス(英連邦)の近現代史に関する研究により、帝国ないし世界における政治・経済・文化の諸相について分析・考察する。					
授業の概要	近現代イギリス都市史研究にかかる英語文献に基づき、イギリス都市史を本国社会のみならず、ヨーロッパ史、イギリス帝国史、世界史に及ぶ観点から考察すべく、研究発表とディスカッションをおこなう。					
授業計画	<p>次の文献を講読し、その内容について、論評・討論をおこなう。 Martin Daunton(ed.), The Cambridge Urban History of Britain, volume III 1840-1950, Cambridge, 2000.</p> <p>授業初回に各受講者の担当部分(章)を割り当てる。該当部分について、まず担当者が内容紹介及び論評を行う。担当者以外の受講者も事前に内容を把握した上で授業に参加し、担当者による内容紹介・論評を基に全員で議論を重ねていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) オリエンテーションと序論 (2) 都市ネットワーク (3) 港湾都市 (4) 人口移動 (5) 公害問題 (6) 交通機関と都市環境 (7) 中央政府と都市 (8) 都市行政機能の変化 (9) 社会サービス (10) 都市構造と都市文化 (11) 都市の居住形態 (12) 産業化と都市経済 (13) 都市の労働市場 (14) 都市の出生率・死亡率 (15) 都市と消費社会 					
各科目の目標(達成水準)	近現代イギリス都市史研究に関する専門的知識を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。					
参考文献等	担当教員が適宜助言を行うが、基本的には受講者自身が自学自習によって適確な参考文献をみつけたてくれることが求められる。					
教科書	Martin Daunton(ed.), The Cambridge Urban History of Britain, volume III 1840-1950, Cambridge, 2000.					
成績評価の基準と方法	(1) 受講態度(出欠を含む)、(2) 担当部分の発表内容、(3) 討論の内容により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:5:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。					

授業コード		授業題目	西洋近現代歴史社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	川本 真浩			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	イギリス、イギリス帝国、コモンウェルス(英連邦)の近現代史に関する研究により、帝国ないし世界における政治・経済・文化の諸相について分析・考察する。					
授業の概要	イギリス帝国の形成からコモンウェルス(英連邦)への変貌をへて現在に至るまでの過程に着目し、その歴史的変容について講義する。とくにグローバル・ヒストリーの観点をとりこみながら、各地域及び世界の諸問題について考察する。					
授業計画	<p>次のようなイギリス帝国およびコモンウェルス(英連邦)の歴史的局面に焦点を合わせて、ヨーロッパ史や世界史とのかかわりも意識しながら講義する。</p> <p>第1回 序論 第2回 第1次イギリス帝国の形成 第3回 第2次イギリス帝国への移行 第4回 第2次イギリス帝国の形成 第5回 19世紀前半のイギリス帝国 第6回 イギリス帝国の絶頂期 第7回 第1次世界大戦前後のイギリス帝国 第8回 旧コモンウェルス(英連邦)の成立 第9回 第2次世界大戦とイギリス帝国 第10回 インドの独立と帝国＝コモンウェルス体制 第11回 第2次世界大戦直後のイギリス帝国 第12回 帝国の終焉？ 第13回 新コモンウェルスの形成 第14回 南アフリカ問題とコモンウェルス 第15回 総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	講義で扱う時期のイギリス近現代史に関する専門的な知見を習得し、それを基にグローバルな視点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。					
参考文献等	授業時間内に理解・消化できなかった事項について、関連文献を用いるなどして自学自習に努める。					
教科書	教科書は使用しない。参考図書は、M.Kitchen, The British Empire and Commonwealth: a Short History, New York, 1996. そのほか講義内容に関わる資料は授業中に配布する。					
成績評価の基準と方法	(1)受講態度(出欠を含む)、(2)小テストまたはレポート、(3)期末試験により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:3:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。					

授業コード		授業題目	西洋近現代歴史社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	川本 真浩			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし。					
教員研究テーマ	イギリス、イギリス帝国、コモンウェルス(英連邦)の近現代史に関する研究により、帝国ないし世界における政治・経済・文化の諸相について分析・考察する。					
授業の概要	イギリス帝国及びコモンウェルス(英連邦)の歴史に関する研究文献(英語)に拠りながら、イギリス帝国及びコモンウェルスを対象とした歴史研究のために必要な知識と技能を発展させるべく、研究発表とディスカッションをおこなう。					
授業計画	<p>次の文献を講読し、その内容について、論評・討論をおこなう。 <i>Andrew Porter(ed.), The Oxford History of British Empire, volume III The Nineteenth Century, Oxford, 1999.</i></p> <p>授業初回に各受講者の担当部分(章)を割り当てる。該当部分について、まず担当者が内容紹介及び論評を行う。担当者以外の受講者も事前に内容を把握した上で授業に参加し、担当者による内容紹介・論評を基に全員で議論を重ねていく。取り扱う項目(章)は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 経済と帝国: 本国の文脈から (2) 経済と帝国: 周縁と帝国経済 (3) 帝国移民 (4) アフリカ、アジア、南太平洋からの人口移動 (5) 本国の政策及び貿易と非公式帝国 (6) イギリスとラテンアメリカ (7) イギリスと中国 (8) 帝国統治体制 (9) 信託統治、反奴隷、人道主義 (10) 宗教と帝国 (11) 帝国拡大と科学技術 (12) 本国文化に対する帝国のインパクト (13) 探検活動と帝国 (14) 帝国防衛問題 (15) 帝国の政治経済学 					
各科目の目標(達成水準)	近代イギリス帝国史研究に関する専門的知識を習得し、それを基にグローバルな観点と現代的な問題意識に密接に関わるような研究を遂行するための理解力、思考力、論理構成力、表現力を身につける。					
参考文献等	担当教員が適宜助言を行うが、基本的には受講者自身が自学自習によって適確な参考文献をみつけてだてることが求められる。					
教科書	Andrew Porter(ed.), <i>The Oxford History of British Empire, volume III The Nineteenth Century</i> , Oxford, 1999.					
成績評価の基準と方法	(1) 受講態度(出欠を含む)、(2) 担当部分の発表内容、(3) 討論の内容により、総合的に評価する。各項目の点数配分は2:5:4の比率を想定しているが、いずれの項目でもおおむね及第点に達することを要する。					

授業コード		授業題目	環境論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	杉谷 隆		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	自然地理学の専攻者が望ましい					
教員研究テーマ	自然地理学					
授業の概要	日本の環境問題と日本人の環境観					
授業計画	<p>教科書のうち杉谷担当章「環境問題と日本人の環境観」の記載順に講じる。すなわち、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 環境問題への視野(物質・社会的問題) 2. 環境問題への視野(精神的問題) 3. 環境に関する議論(自然観論) 4. 環境に関する議論(自然破壊の原因論) 5. 環境問題略史(戦前期の思想的側面) 6. 環境問題略史(戦前期の事件) 7. 環境問題略史(戦後期の事件) 8. 環境問題略史(自然史研究の発展) 9. 環境問題略史(開発反対運動などの社会運動) 10. 環境問題略史(高度経済成長期の諸相) 11. 環境問題略史(野生生物保護) 12. 環境問題略史(バブル期) 13. 環境問題略史(バブル期以降) 14. 新聞記事にみる国民の関心の変化 15. 筆記試験である。 					
各科目の目標(達成水準)	環境問題に対して広い視野で考えることができるようになり、日本がたどってきた道筋について通史的・基礎的な理解を得る。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	『国土空間と地域社会』朝倉書店					
成績評価の基準と方法	出席と筆記試験による					

授業コード		授業題目	環境論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	杉谷 隆		担当教員所属	人文社会科学専攻		
	環境論特論を受講していること					
教員研究テーマ	自然地理学					
授業の概要	環境論の視点と手法・基礎					
授業計画	<p>受講生に自然地理学・環境地理学の範囲内からいくつかのテーマを示すので、各人そのなかから1つを選んで文献調査(学術的なものに限る)を行い、また新聞記事など時事的な資料を収集すること。結果は順番に発表してもらい、受講生全員で討論を交わす。文献調査と時事資料を別に扱うので、各人の発表担当は2巡する。各回の予定は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 資料解題①自然地理学 3. 資料解題②環境地理学 4. 文献調査の方法と発表手順の説明 5. 発表者①自然地理学(地形が主) 6. 発表者②自然地理学(気候が主) 7. 発表者③自然地理学(植生が主) 8. 発表者④自然地理学(その他) 9. 中間総括と後半の指針 10. 発表者①環境地理学(地形が主) 11. 発表者②環境地理学(気候が主) 12. 発表者③環境地理学(植生が主) 13. 発表者④環境地理学(その他) 14. 全体的質疑応答 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	ある漠然とした問題意識に発して、既存の研究成果を調べ、また現在の社会の状況もにらみながら、具体的な研究テーマにしぼりこんでいく研究手法を身につける。					
参考文献等	バックナンバーにあたるべき学術雑誌名などは演習中に指示する。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	出席回数、発表内容、討論への参加度を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	環境論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	杉谷 隆		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	自然地理学の専攻者が望ましい					
教員研究テーマ	自然地理学					
授業の概要	現代の環境問題と日本人の環境観					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境問題への視野(物質面) 2. 環境問題への視野(倫理面) 3. 生命 4. 生命に関する研究例 5. 生産 6. 生産に関する研究例 7. 安全・生活 8. 安全・生活に関する研究例 9. 消費 10. 消費に関する研究例 11. 景観 12. 景観に関する研究例 13. 社会運動 14. 社会運動に関する研究例 15. 筆記試験 					
各科目の目標(達成水準)	いろいろな研究に触れ、総合的に考えることができるようにする。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	出席と筆記試験による。					

授業コード		授業題目	環境論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	杉谷 隆		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	環境論特論Ⅰ・Ⅱ, 環境論演習Ⅰを受講していること					
教員研究テーマ	自然地理学					
授業の概要	環境論の視点と手法・実践					
授業計画	<p>自然環境論演習Ⅰで受講生個々が扱ったテーマについて, さらに課題を絞り込むような文献調査(学術的なものに限る)を行い, また新聞記事など時事的な資料, 公的機関の統計資料などを収集する。結果は順番に発表してもらい, 受講生全員で討論を交わす。各回の予定は,</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 新聞記事などの調査方法説明 3. 統計書の調査方法説明 4. 学術雑誌の調査方法説明と発表手順の説明 5. 発表者①自然地理学(地形が主) 6. 発表者②自然地理学(気候が主) 7. 発表者③自然地理学(植生が主) 8. 発表者④自然地理学(その他) 9. 中間総括と後半の指針 10. 自然地理学(地形が主) 11. 発表者②自然地理学(気候が主) 12. 発表者③自然地理学(植生が主) 13. 発表者④自然地理学(その他) 14. 全体的質疑応答 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	いろいろな文献を読みこなし, 総合的に考えることができるようにする。					
参考文献等	バックナンバーにあたるべき学術雑誌名などは演習中に指示する。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	出席回数, 発表内容, 討論への参加度を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	地域言語論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上野 智子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	方言研究・地名研究					
授業の概要	高知県の地域言語である高知県方言は、大きく東西の二方言(土佐弁・幡多弁)に分かれる。音韻・文法・語彙の視点から二方言の共通点と相違点とを整理し、現在起こっているそれぞれの変化に着目しながら地域言語の動向を探る。					
授業計画	<p>第1回 高知県方言について</p> <p>第2回 高知県方言の東西差についての従来研究(1)―音韻―</p> <p>第3回 高知県方言の東西差についての従来研究(2)―文法―</p> <p>第4回 高知県方言の東西差についての従来研究(3)―語彙―</p> <p>第5回 従来研究に欠落している視点(1)―巨視的見地―</p> <p>第6回 従来研究に欠落している視点(2)―微視的見地―</p> <p>第7回 研究者側の問題(ネイティブかノンネイティブか)となる視点(1)―ネイティブの場合―</p> <p>第8回 研究者側の問題(ネイティブかノンネイティブか)となる視点(2)―ノンネイティブの場合―</p> <p>第9回 1～8回を踏まえての議論</p> <p>第10回 音韻面から見た今後の研究の可能性</p> <p>第11回 文法面から見た今後の研究の可能性</p> <p>第12回 語彙面から見た今後の研究の可能性</p> <p>第13回 言語生活面から見た今後の研究の可能性</p> <p>第14回 言語史面から見た今後の研究の可能性</p> <p>第15回 全体をふりかえっての議論と意見交換</p>					
各科目の目標(達成水準)	高知県方言についての簡単な解説ができるくらいまでに到達すること。					
参考文献等	高知県方言関係の文献を総合的に網羅すること。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	地域言語論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上野 智子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	方言研究・地名研究					
授業の概要	高知県方言の東ことば(土佐弁)・西ことば(幡多弁)を代表すると思われる地点を数地点(最低各1地点)選び、臨地調査を実施して、二方言の特色を音韻・文法・語彙の視点から整理し、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第1回 方言研究の概観</p> <p>第2回 どんな現象を対象とするかについての準備(1)―音韻―</p> <p>第3回 どんな現象を対象とするかについての準備(2)―文法―</p> <p>第4回 どんな現象を対象とするかについての準備(3)―語彙―</p> <p>第5回 どこで実施するかについての検討(1)―東ことば―</p> <p>第6回 どこで実施するかについての検討(2)―西ことば―</p> <p>第7回 どんな方法で行うかについての検討(1)―質問法―</p> <p>第8回 どんな方法で行うかについての検討(2)―自然傍受法―</p> <p>第9回 どんな方法で行うかについての検討(3)―談話分析―</p> <p>第10回 期待される成果の予測</p> <p>第11回 質問調査票の作成(1)―音韻―</p> <p>第12回 質問調査票の作成(2)―文法―</p> <p>第13回 質問調査票の作成(3)―語彙―</p> <p>第14回 調査全般の心得</p> <p>第15回 調査計画</p>					
各科目の目標(達成水準)	方言調査の実践能力を身につけ、問題点を掘り起こす能力を養う。					
参考文献等	高知県方言の概説をはじめ、方言文献を広く渉猟すること。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	地域言語論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上野 智子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	方言研究・地名研究					
授業の概要	四国方言の理解と研究の醍醐味を味わう。					
授業計画	<p>第1回 四国方言研究の意義</p> <p>第2回 徳島県方言の副助詞ヤ</p> <p>第3回 高知県方言の副助詞ラ(一)</p> <p>第4回 高知県方言の副助詞バー</p> <p>第5回 限定のとりたての地理的変異</p> <p>第6回 四国方言の「不定詞+で(に)もあれ～ない」</p> <p>第7回 「形容詞・形容動詞語幹+や」による詠嘆法</p> <p>第8回 高知県方言の失意・失態表現法</p> <p>第9回 四国方言の失意・失態表現法</p> <p>第10回 日本語方言の失意・失態表現法</p> <p>第11回 高知県安芸市方言と愛媛県宇和島市方言の性向語彙に現れる接辞の特色</p> <p>第12回 高知県方言の準体助詞ガ</p> <p>第13回 徳島県方言の断定の助動詞ダ・ジャ・ヤ</p> <p>第14回 徳島県方言の文末詞デ(一)</p> <p>第15回 高知県方言の『～ノハシ』</p>					
各科目の目標(達成水準)	音声言語としての方言の奥深さ、地域言語としての方言の味わい深さを四国方言を通して再認識する。					
参考文献等	随時指示					
教科書	上野智子『四国方言—とりたて・言いよども・言いはなち・言いすてて・言いおさめる』					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	地域言語論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上野 智子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	方言研究・地名研究					
授業の概要	臨地調査を実施した、二方言の特色を音韻・文法・語彙の視点から整理し、研究発表とディスカッションを行う。成果によっては、音韻・アクセント項目、文法項目、語彙項目のいずれかを重点的にとりあげてもよい。					
授業計画	<p>第1回 調査結果の整理(1)</p> <p>第2回 調査結果の整理(2)</p> <p>第3回 調査結果の整理(3)</p> <p>第4回 中間発表・報告(1)</p> <p>第5回 調査結果の整理(4)</p> <p>第6回 調査結果の整理(5)</p> <p>第7回 調査結果の整理(6)</p> <p>第8回 中間発表・報告(2)</p> <p>第9回 調査結果の整理から確実に言えることと言えないことの議論</p> <p>第10回 調査結果の整理から確実に言えることと言えないことのまとめ</p> <p>第11回 今回の調査から明らかにできなかったことの整理(1)</p> <p>第12回 今回の調査から明らかにできなかったことの整理(2)</p> <p>第13回 調査計画の再検討</p> <p>第14回 今回の調査結果から明らかにした事柄の整理と総括</p> <p>第15回 全体をふりかえっての議論と意見交換</p>					
各科目の目標(達成水準)	方言調査の実践能力を身につけ、問題点を掘り起こす能力を養う。					
参考文献等	高知県方言の概説をはじめ、方言文献を広く渉猟すること。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	地域システム論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	後藤 拓也		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。					
教員研究テーマ	日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究					
授業の概要	日本の農山漁村地域システムを地理学的視点から学ぶ					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(1)―アグリビジネス論― 3. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(2)―フードシステム論― 4. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(3)―ブランド化戦略― 5. 日本の農山漁村地域システム(1)―グローバル化と農山漁村地域― 6. 日本の農山漁村地域システム(2)―企業の農業参入― 7. 日本の農山漁村地域システム(3)―グリーンツーリズムの展開― 8. 日本の農山漁村地域システム(4)―農産物直売所と地産地消― 9. 日本の農山漁村地域システム(5)―地域ブランドの普及― 10. 高知県の農山漁村地域システム(1)―グローバル化と農山漁村地域― 11. 高知県の農山漁村地域システム(2)―企業の農業参入― 12. 高知県の農山漁村地域システム(3)―グリーンツーリズムの展開― 13. 高知県の農山漁村地域システム(4)―農産物直売所と地産地消― 14. 高知県の農山漁村地域システム(5)―地域ブランドの普及― 15. まとめ 16. 定期試験 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代の農山漁村地域システムを理解するための最新の概念を理解する。 2. 高知県を含む日本の農山漁村地域がどのような変化を遂げているのかを理解する。 					
参考文献等	参考文献等は授業中に適宜紹介する。					
教科書	特定の教科書は用いない。					
成績評価の基準と方法	平常点(受講態度)および定期試験の得点によって評価を行う。なお、平常点と定期試験の点数配分は40:60とする。					

授業コード		授業題目	地域システム論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	後藤 拓也		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。					
教員研究テーマ	日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究					
授業の概要	日本の農山漁村地域システムを地理学的視点から調べる					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(1)―農業地理学― 3. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(2)―農業経済学― 4. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(3)―農村社会学― 5. 日本の農山漁村地域に関する文献紹介(4)―その他分野― 6. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマの選定 7. 日本の農山漁村地域に関する研究テーマの発表 8. 日本の農山漁村地域に関する調査フィールドの選定 9. 日本の農山漁村地域に関する調査フィールドの発表 10. 資料収集のためのガイダンス 11. 資料収集 12. 地域調査のためのガイダンス 13. 地域調査 14. 地域調査の結果発表 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の農山漁村地域に関する地域調査能力(フィールドワーク能力)を習得する。 2. 地域調査結果を簡潔かつ的確に報告できるプレゼンテーション能力を習得する。 					
参考文献等	参考文献等は授業中に適宜紹介する。					
教科書	特定の教科書は用いない。					
成績評価の基準と方法	各回における発表内容およびディスカッションへの貢献度によって評価を行う。					

授業コード		授業題目	地域システム論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	後藤 拓也			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	日本を含む世界の農山漁村地域について興味関心を持っていること。					
教員研究テーマ	日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究					
授業の概要	世界の農山漁村地域システムを地理学的視点から学ぶ					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(1)―アグリビジネス論― 3. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(2)―フードシステム論― 4. 現代の農山漁村地域システムを理解するための概念(3)―ブランド化戦略― 5. 世界の農山漁村地域システム(1)―グローバル化と農山漁村地域― 6. 世界の農山漁村地域システム(2)―企業の農業参入― 7. 世界の農山漁村地域システム(3)―グリーンツーリズムの展開― 8. 世界の農山漁村地域システム(4)―農産物直売所と地産地消― 9. 世界の農山漁村地域システム(5)―地域ブランドの普及― 10. 日本の農山漁村地域システム(1)―グローバル化と農山漁村地域― 11. 日本の農山漁村地域システム(2)―企業の農業参入― 12. 日本の農山漁村地域システム(3)―グリーンツーリズムの展開― 13. 日本の農山漁村地域システム(4)―農産物直売所と地産地消― 14. 日本の農山漁村地域システム(5)―地域ブランドの普及― 15. まとめ 16. 定期試験 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代の農山漁村地域システムを理解するための最新の概念を理解する。 2. 日本を含む世界の農山漁村地域がどのような変化を遂げているのかを理解する。 					
参考文献等	参考文献等は授業中に適宜紹介する。					
教科書	特定の教科書は用いない。					
成績評価の基準と方法	平常点(受講態度)および定期試験の得点によって評価を行う。なお、平常点と定期試験の点数配分は40:60とする。					

授業コード		授業題目	地域システム論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	後藤 拓也			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	高知県を含む日本の農山漁村地域について興味関心を持っていること。					
教員研究テーマ	日本の農山漁村地域システムに関する地理学的研究					
授業の概要	高知県の農山漁村地域システムを地理学的視点から調べる					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(1)―農業地理学― 3. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(2)―農業経済学― 4. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(3)―農村社会学― 5. 高知県の農山漁村地域に関する文献紹介(4)―その他分野― 6. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマの選定 7. 高知県の農山漁村地域に関する研究テーマの発表 8. 高知県の農山漁村地域に関する調査フィールドの選定 9. 高知県の農山漁村地域に関する調査フィールドの発表 10. 資料収集のガイダンス 11. 資料収集 12. 地域調査のガイダンス 13. 地域調査 14. 地域調査の結果発表 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高知県の農山漁村地域に関する地域調査能力(フィールドワーク能力)を習得する。 2. 地域調査結果を簡潔かつ的確に報告できるプレゼンテーション能力を習得する。 					
参考文献等	参考文献等は授業中に適宜紹介する。					
教科書	特定の教科書は用いない。					
成績評価の基準と方法	各回における発表内容およびディスカッションへの貢献度によって評価を行う。					

授業コード		授業題目	日本古典文学論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	福島 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	演習的に授業を進めるので、テキスト読解についての下調べは必須。					
教員研究テーマ	日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究					
授業の概要	日本古典文学作品を対象に、文献学的方法を用いてその表現解析を試みた研究文献を講読し、日本古典文学を研究する上での諸問題について考察する。					
授業計画	<p>本年は、池上 洵『今昔物語集の世界—中世のあけぼの』を取り上げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(1)本文批評 3. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(2)注釈的研究 4. 日本古典文学作品の文献学的研究方法と文芸批評的研究方法 5. 講義の主対象として取り上げる作品『今昔物語集』の文献学的解題 6. 講義の主対象として取り上げる作品『今昔物語集』の研究史解説 7. 作品ならびにその研究文献の講読(1)事実から説話へ—その1. 興福寺再建の靈験 8. 作品ならびにその研究文献の講読(2)事実から説話へ—その2. 花山院女王殺人事件 9. 作品ならびにその研究文献の講読(3)説話のうらおもて 10. 作品ならびにその研究文献の講読(4)説話の視界 11. 作品ならびにその研究文献の講読(5)天竺から来た説話 12. 作品ならびにその研究文献の講読(6)震旦説話の変容 13. 作品ならびにその研究文献の講読(7)説話の翻訳 14. 作品ならびにその研究文献の講読(8)『今昔物語集』の展望 15. まとめ—問題の所在の確認 					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高めるとともに、研究文献の批判的読解能力を涵養する。					
参考文献等	開講後指示する。					
教科書	池上 洵『今昔物語集の世界—中世のあけぼの』					
成績評価の基準と方法	平常のテキスト読解における受講生の学習態度およびその成果により評価					

授業コード		授業題目	日本古典文学論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	福島 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	テキスト読解についての下調べは必須。					
教員研究テーマ	日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究					
授業の概要	日本古典文学の諸テキストを対象として、文学研究の課題と方法について検討する。なかでも文献学的方法を用いた表現解析にかかわる諸問題を取扱い、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>1. オリエンテーション</p> <p>2. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(1)巻31第26話―その1. 本文読解</p> <p>3. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(2)巻31第26話―その2. 問題検討</p> <p>4. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(3)巻26第17話―その1. 本文読解</p> <p>5. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(4)巻26第17話―その2. 問題検討</p> <p>6. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(5)巻22第7話―その1. 本文読解</p> <p>7. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(6)巻22第7話―その2. 問題検討</p> <p>8. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(7)巻19第29話―その1. 本文読解</p> <p>9. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(8)巻19第29話―その2. 問題検討</p> <p>10. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(9)巻5第18話―その1. 本文読解</p> <p>11. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(10)巻5第18話―その2. 問題検討</p> <p>12. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(11)巻5第24話―その1. 本文読解</p> <p>13. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(12)巻5第24話―その2. 問題検討</p> <p>14. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(13)巻20第12話―その1. 本文読解</p> <p>15. 『今昔物語集』の文献学的・注釈的読解演習(14)巻20第12話―その2. 問題検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高め、受講生自らが問題を探求し解決する能力を涵養する。					
参考文献等	池上 洵一『今昔物語集の研究』(池上洵一著作集)和泉書院、その他は開講後指示する。					
教科書	開講後指示する。					
成績評価の基準と方法	平常の演習における受講生の態度およびその成果により評価					

授業コード		授業題目	中世日本言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	福島 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	演習的に授業を進めるので、テキスト読解についての下調べは必須。					
教員研究テーマ	日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究					
授業の概要	中世の日本文学作品を対象に、文献学的方法を用いてその表現解析を試みた研究文献を講読し、日本古典文学を研究する上での諸問題について考察する。					
授業計画	<p>本年は、小松 英雄『徒然草抜書』を取り上げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(1)本文批評 3. 日本古典文学作品の文献学的研究方法(2)注釈的研究 4. 日本古典文学作品の文献学的研究方法と文芸批評的研究方法 5. 講義の主対象として取り上げる作品『徒然草』の文献学的解題 6. 講義の主対象として取り上げる作品『徒然草』の研究史解説 7. 作品ならびにその研究文献の講読(1)『徒然草抜書』前言 8. 作品ならびにその研究文献の講読(2)文献学的解釈の基礎 9. 作品ならびにその研究文献の講読(3)つれづれなるままに 10. 作品ならびにその研究文献の講読(4)うしのつ文字 11. 作品ならびにその研究文献の講読(5)土偏に候ふ 12. 作品ならびにその研究文献の講読(6)蟪といふ貝 13. 作品ならびにその研究文献の講読(7)いみじき秀句 14. 作品ならびにその研究文献の講読(8)『徒然草抜書』結語 15. まとめ一問題の所在の確認 					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高めるとともに、研究文献の批判的読解能力を涵養する。					
参考文献等	開講後指示する。					
教科書	小松英雄『徒然草抜書』					
成績評価の基準と方法	平常のテキスト読解における受講生の学習態度およびその成果により評価					

授業コード		授業題目	中世日本語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	福島 尚		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	テキスト読解についての下調べは必須。					
教員研究テーマ	日本古典文学(説話関連領域を中核とする)についての文献学的研究					
授業の概要	中世日本文学の諸テキストを対象として、文学研究の課題と方法について検討する。なかでも文献学的方法を用いた表現解析にかかわる諸問題を取扱い、研究発表とディスカッションを行う。					
	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(1)兼好の生活と思索―その1. 関係章段本文読解 3. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(2)兼好の生活と思索―その2. 問題検討 4. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(3)限りある生をいかに過ごすか―その1. 関係章段本文読解 5. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(4)限りある生をいかに過ごすか―その2. 問題検討 6. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(5)交際論―その1. 関係章段本文読解 7. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(6)交際論―その2. 問題検討 8. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(7)専門家の尊重―その1. 関係章段本文読解 9. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(8)専門家の尊重―その2. 問題検討 10. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(9)美意識の論―その1. 関係章段本文読解 11. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(10)美意識の論―その2. 問題検討 12. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(11)奇談・珍談・逸話集―その1. 関係章段本文読解 13. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(12)奇談・珍談・逸話集―その2. 問題検討 14. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(13)有職の論―その1. 関係章段本文読解 15. 『徒然草』の文献学的・注釈的読解演習(14)有職の論―その2. 問題検討 					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学の文献学的・注釈的読解能力を高め、受講生自らが問題を探求し解決する能力を涵養する。					
参考文献等	桑原博史『徒然草の鑑賞と批評』明治書院、その他は開講後指示する。					
教科書	開講後指示する。					
成績評価の基準と方法	平常の演習における受講生の態度およびその成果により評価					

授業コード		授業題目	日本文献資料論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	鈴木 隆司		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究					
授業の概要	日本古典文学の中からいくつかの作品を取り上げ、それぞれの作品に即して本文批判、成立問題、出典研究などの文献学上の諸問題を考える。					
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 古今和歌集の文献学上の問題(仮名序と真名序)</p> <p>第3回 古今和歌集の文献学上の問題(古今和歌集の現存諸本)</p> <p>第4回 古今和歌集の文献学上の問題(古今和歌集の成立)</p> <p>第5回 古今和歌集の文献学上の問題(古今集の諸問題についてのまとめ)</p> <p>第6回 伊勢物語の文献学上の問題(伊勢物語の現存諸本)</p> <p>第7回 伊勢物語の文献学上の問題(伊勢物語の散佚諸本)</p> <p>第8回 伊勢物語の文献学上の問題(伊勢物語の成立)</p> <p>第9回 伊勢物語の文献学上の問題(伊勢物語の諸問題についてのまとめ)</p> <p>第10回 源氏物語の文献学上の問題(源氏物語の現存諸本)</p> <p>第11回 源氏物語の文献学上の問題(いわゆる「青表紙本」の問題点)</p> <p>第12回 源氏物語の文献学上の問題(いわゆる「別本」の問題点)</p> <p>第13回 源氏物語の文献学上の問題(源氏物語の成立)</p> <p>第14回 源氏物語の文献学上の問題(源氏物語の諸問題のまとめ)</p> <p>第15回 全体のまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	講義で扱った作品についての文献学上の問題について、理解を深める。					
参考文献等						
教科書	使用しない。必要な資料はプリントで配布する。					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度(30%)、学期末レポート(70%)					

授業コード		授業題目	日本文献資料論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	鈴木 隆司		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究					
授業の概要	日本文献資料論特論の講義内容を踏まえ、平安朝文学の諸作品やその享受資料に即して、輪番で研究発表を行う。対象とする作品について発表者が準備した発表資料に基づいて、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 研究発表とディスカッション(伊勢物語初段の古注釈検討)</p> <p>第3回 研究発表とディスカッション(伊勢物語初段の現代注釈検討)</p> <p>第4回 研究発表とディスカッション(伊勢物語初段についてのディスカッション)</p> <p>第5回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第9段の古注釈検討)</p> <p>第6回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第9段の現代注釈検討)</p> <p>第7回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第9段についてのディスカッション)</p> <p>第8回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第69段の古注釈検討)</p> <p>第9回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第69段の現代注釈検討)</p> <p>第10回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第69段についてのディスカッション)</p> <p>第11回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第82段の古注釈検討)</p> <p>第12回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第82段の現代注釈検討)</p> <p>第13回 研究発表とディスカッション(伊勢物語第82段についてのディスカッション)</p> <p>第14回 研究発表とディスカッション(伊勢物語全体についてのディスカッション)</p> <p>第15回 総評</p>					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学を研究する上での文献の扱い方に習熟すること。					
参考文献等						
教科書	使用しない。必要な資料はプリントで配布する。					
成績評価の基準と方法	発表、出席状況、受講態度(60%)、学期末レポート(40%)					

授業コード		授業題目	古代日本語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	鈴木 隆司			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究					
授業の概要	平安時代の文学作品における特に重要なテーマとして、「恋愛と結婚」と取りあげ、このテーマに関する先行研究と、各作品における「恋愛と結婚」についての概説を行う。					
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 婚姻研究史の概説1(高群学説とその周辺)</p> <p>第3回 婚姻研究史の概説2(梅村学説とその周辺)</p> <p>第4回 婚姻研究史の概説3(工藤学説とその周辺)</p> <p>第5回 古今和歌集の恋愛と結婚</p> <p>第6回 伊勢物語の恋愛と結婚</p> <p>第7回 大和物語の恋愛と結婚</p> <p>第8回 竹取物語の恋愛と結婚</p> <p>第9回 落窪物語の恋愛と結婚</p> <p>第10回 平安私家集の恋愛と結婚</p> <p>第11回 蜻蛉日記の恋愛と結婚1(兼家と道綱母)</p> <p>第12回 蜻蛉日記の恋愛と結婚2(時姫・近江、その他の女たち)</p> <p>第13回 源氏物語の恋愛と結婚1(光源氏と葵の上、いわゆる「正妻」について)</p> <p>第14回 源氏物語の恋愛と結婚2(「正妻」ではない女たち)</p> <p>第15回 全体のまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	講義で扱った内容についての文学史上、文化史上の理解を深める。					
参考文献等						
教科書	使用しない。必要な資料はプリントで配布する。					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度(30%)、学期末レポート(70%)					

授業コード		授業題目	古代日本語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	鈴木 隆司			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	中古文学を中心とした日本古典文学についての文献学的研究					
授業の概要	古代日本語文化論特論の内容を踏まえ、平安朝文学の諸作品やその享受資料に即して、輪番で研究発表を行う。対象とする作品について発表者が準備した発表資料に基づいて、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 研究発表とディスカッション(源氏物語桐壺巻の古注釈検討)</p> <p>第3回 研究発表とディスカッション(源氏物語桐壺巻の現代注釈検討)</p> <p>第4回 研究発表とディスカッション(源氏物語桐壺巻についてのディスカッション)</p> <p>第5回 研究発表とディスカッション(源氏物語若紫巻の古注釈検討)</p> <p>第6回 研究発表とディスカッション(源氏物語若紫巻の現代注釈検討)</p> <p>第7回 研究発表とディスカッション(源氏物語若紫巻についてのディスカッション)</p> <p>第8回 研究発表とディスカッション(源氏物語須磨巻の古注釈検討)</p> <p>第9回 研究発表とディスカッション(源氏物語須磨巻の現代注釈検討)</p> <p>第10回 研究発表とディスカッション(源氏物語須磨巻についてのディスカッション)</p> <p>第11回 研究発表とディスカッション(源氏物語少女巻の古注釈検討)</p> <p>第12回 研究発表とディスカッション(源氏物語少女巻の現代注釈検討)</p> <p>第13回 研究発表とディスカッション(源氏物語少女巻についてのディスカッション)</p> <p>第14回 研究発表とディスカッション(源氏物語全体についてのディスカッション)</p> <p>第15回 総評</p>					
各科目の目標(達成水準)	日本古典文学を研究する上での文献の扱い方に習熟すること。					
参考文献等						
教科書	使用しない。必要な資料はプリントで配布する。					
成績評価の基準と方法	発表、出席状況、受講態度(60%)、学期末レポート(40%)					

授業コード		授業題目	日本語論特論Ⅰ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1 曜日・時限	
担当教員名	山本 秀人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)					
授業の概要	平安時代から鎌倉時代を中心とする日本語を対象に、その言語事象、特徴について述べる。その際、当時の具体的日本語資料における使用文字種と用語を主要な観点とし、文章の日本語学的分類に関連づけて述べる。					
授業計画	<p>前半(第6回まで)においては概観・一般論を述べ、後半(第7回以降)では特定の日本語資料によって、深く掘り下げる。</p> <p>第1回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(使用文字種による) (1)漢文(=漢字文)</p> <p>第2回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(使用文字種による) (2)平仮名文</p> <p>第3回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(使用文字種による) (3)漢字片仮名交り文</p> <p>第4回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(用語(=使用語)・文体による) (1)漢文訓読文(含:漢文・訓点資料との関係)</p> <p>第5回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(用語(=使用語)・文体による) (2)和文(含:平仮名文との関係)</p> <p>第6回 平安時代～鎌倉時代における日本語資料の種類・分類(用語(=使用語)・文体による) (3)和漢混淆文(含:漢字片仮名交り文との関係)</p> <p>第7回 平仮名文「土左日記」の用語と文体 (1)用語</p> <p>第8回 平仮名文「土左日記」の用語と文体 (2)文体</p> <p>第9回 平仮名文「源氏物語」の用語と文体 (1)用語</p> <p>第10回 平仮名文「源氏物語」の用語と文体 (2)文体</p> <p>第11回 漢文訓読文(訓点資料「大慈恩寺三蔵法師伝」平安後期・院政期点、「白氏文集」院政期点等)の用語と文体(1)用語</p> <p>第12回 漢文訓読文(訓点資料「大慈恩寺三蔵法師伝」平安後期・院政期点、「白氏文集」院政期点等)の用語と文体(2)文体</p> <p>第13回 漢字片仮名交り文「今昔物語集」の用語と文体 (1)用語</p> <p>第14回 漢字片仮名交り文「今昔物語集」の用語と文体 (2)文体</p> <p>第15回 漢字片仮名交り文「今昔物語集」の用語と文体 (3)漢文訓読文との関係、和文との関係</p>					
各科目の目標(達成水準)	文献資料の日本語学的見方、扱い方を修得し、それによって、文献資料による実証的な日本語学の観点と研究方法を身に付ける。					
参考文献等	築島裕『平安時代語新論』(1969年、東京大学出版会) 小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(1971年、広島大学文学部紀要特輯号3) 峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(1986年、東京大学出版会)					
教科書	原則として配布プリントによる。					
成績評価の基準と方法	レポートによるが、状況に応じて筆記試験を課すこともある。					

授業コード		授業題目	日本語論特論II		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	山本 秀人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)					
授業の概要	平安時代から鎌倉時代の訓点資料と辞書を中心に、そこに見られる種々の言語事象、特徴、或いはその日本語資料としての価値について述べる。その際、当時の学問(仏教者におけるものを含む)などの言語文化的観点をも重視する。					
授業計画	<p>初めの4回は訓点資料の仮名とヲコト点、特にヲコト点についての基礎知識を身に付け、その後は訓点資料と概して関係の深い辞書・仏書音義(特に「類聚名義抄」は関係が濃厚)の編纂の流れを見る。(「音義」とは特定の文献に対して編まれた辞書的内容の注釈書。)</p> <p>第1回 訓点資料の仮名とヲコト点 (1)ヲコト点とは 第2回 訓点資料の仮名とヲコト点 (2)ヲコト点の種類・系統 第3回 訓点資料の仮名とヲコト点 (3)仮名とヲコト点との関係 第4回 訓点資料の仮名とヲコト点 (3)仮名字体の変化 第5回 平安時代編纂の辞書 (1)「新撰字鏡」「和名類聚抄」 第6回 平安時代編纂の辞書 (2)「類聚名義抄」「色葉字類抄」 第7回 「新撰字鏡」の日本語学的意義 第8回 「和名類聚抄」の日本語学的意義 第9回 仏書音義について (1)「玄応一切経音義」「法華経釈文」など 第10回 「類聚名義抄」の日本語学的意義 (1)原撰本系(図書寮本)と改編本系(観智院本など) 第11回 「類聚名義抄」の日本語学的意義 (2)和訓の出所①—先行辞書・音義との関係 第12回 「類聚名義抄」の日本語学的意義 (3)和訓の出所②—漢籍訓点との関係 第13回 「色葉字類抄」の日本語学的意義 第14回 「類聚名義抄」「色葉字類抄」以後の辞書 第15回 仏書音義について (2)「無窮会本系大般若経音義」「法華経单字」など</p>					
各科目の目標(達成水準)	文献資料の日本語学的見方、扱い方を修得し、それによって、文献資料による実証的な日本語学の観点と研究方法を身に付ける。					
参考文献等	築島裕『平安時代語新論』(1969年、東京大学出版会) 小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(1971年、広島大学文学部紀要特輯号3) 峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(1986年、東京大学出版会)					
教科書	原則として配布プリントによる。					
成績評価の基準と方法	レポートによるが、状況に応じて筆記試験を課すこともある。					

授業コード		授業題目	日本語論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山本 秀人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)					
授業の概要	実証的な日本語学の研究方法を、具体的な日本語資料に基づいた実際の研究活動を通して身に付ける。具体的には、平安時代後半から鎌倉時代までの日本語資料(ここでは漢字片仮名交り文…「打聞集」「今昔物語集」など)を対象として、日本語学の観点と研究方法とを学ぶ。					
授業計画	<p>第1回 本演習の計画策定…漢字片仮名交り文の解読作業をテーマとし、受講生の関心や研究テーマもなるべく考慮して、資料の選定を行う(候補:「打聞集」「今昔物語集」など)。 (以下、選定資料を「今昔物語集」として記す)</p> <p>第2回 「今昔物語集」の概要説明等 (1)テキストの配付、資料の性格等の概要 第3回 「今昔物語集」の概要説明等 (2)資料の性格等の概要(続き)、分担箇所・解読作業・発表の方法等について</p> <p>(以下、受講生A、B 2名と仮定して記す、第4回～第9回は受講生による発表・質疑応答)</p> <p>第4回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け(1人1回につき数行程度、計6箇所に分割して各3回ずつ、読み付けには古辞書「類聚名義抄」等を多用する) (1)受講生Aの1回目 第5回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (2)受講生Bの1回目 第6回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (3)受講生Aの2回目 第7回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (4)受講生Bの2回目 第8回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (5)受講生Aの3回目 第9回 受講生による「今昔物語集」分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (6)受講生Bの3回目 第10回 「今昔物語集」の受講生による分担箇所解読(翻刻・読み付け)についての補足・総括 (第11回～第14回は受講生による発表・質疑応答)</p> <p>第11回 受講生による「今昔物語集」に関わる日本語学的研究(受講生各自、解読作業を通じて関心を持ったことに基づいてテーマを決めて研究し発表する、各2回ずつ) (1)受講生Aの1回目 第12回 受講生による「今昔物語集」に関わる日本語学的研究 (2)受講生Bの1回目 第13回 受講生による「今昔物語集」に関わる日本語学的研究 (3)受講生Aの2回目(1回目発表の修正・発展) 第14回 受講生による「今昔物語集」に関わる日本語学的研究 (4)受講生Bの2回目(1回目発表の修正・発展) 第15回 「今昔物語集」に関わる受講生による研究を踏まえての補足・総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	実際の日本語資料(文献)による実証的な日本語学の研究方法と実力を身に付ける。					
参考文献等	築島裕『平安時代語新論』(1969年、東京大学出版会) 小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(1971年、広島大学文学部紀要特輯号3) 峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(1986年、東京大学出版会)					
教科書	原則として配布プリントによる(テキストを含む)。					
成績評価の基準と方法	授業における課題発表の状況による。必要に応じてレポートも課すこともある。					

授業コード		授業題目	日本語論演習II		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山本 秀人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	平安時代～鎌倉時代を中心とする日本語学(特に、訓点資料を含む漢字使用文献、辞書・音義類の研究)					
授業の概要	実証的な日本語学の研究方法を、具体的な日本語資料に基づいた実際の研究活動を通して身に付ける。具体的には、平安時代後半から鎌倉時代までの日本語資料(ここでは訓点資料…「白氏文集」院政期点、「将門記」院政期点など)を対象として、日本語学の観点と研究方法とを学ぶ。					
授業計画	<p>第1回 本演習の計画策定…訓点資料の解読作業をテーマとし、受講生の関心や研究テーマもなるべく考慮して、資料の選定を行う(候補:「白氏文集」天永4年点、「将門記」承德3年点など)。(以下、選定資料を「白氏文集」天永4年点として記す)</p> <p>第2回 「白氏文集」天永4年点の概要説明等 (1)テキストの配付、資料の性格等の概要</p> <p>第3回 「白氏文集」天永4年点の概要説明等 (2)資料の性格等の概要(続き)、分担箇所・解読作業・発表の方法等について</p> <p>(以下、受講生A、B 2名と仮定して記す、第4回～第9回は受講生による発表・質疑応答)</p> <p>第4回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け(1人1回につき1行程度、計6箇所に分割して各3回ずつ、読み付けには古辞書「類聚名義抄」等を多用する) (1)受講生A 1回目</p> <p>第5回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (2)受講生B 1回目</p> <p>第6回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (3)受講生A 2回目</p> <p>第7回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (4)受講生B 2回目</p> <p>第8回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (5)受講生A 3回目</p> <p>第9回 受講生による「白氏文集」天永4年点の分担箇所の解読＝翻刻・読み付け (6)受講生B 3回目</p> <p>第10回 「白氏文集」天永4年点の受講生による分担箇所解読(翻刻・読み付け)についての補足・総括(第11回～第14回は受講生による発表・質疑応答)</p> <p>第11回 受講生による「白氏文集」天永4年点に関わる日本語学的研究(受講生各自、解読作業を通じて関心を持ったことに基づいてテーマを決めて研究し発表する、各2回ずつ) (1)受講生A 1回目</p> <p>第12回 受講生による「白氏文集」天永4年点に関わる日本語学的研究 (2)受講生B 1回目</p> <p>第13回 受講生による「白氏文集」天永4年点に関わる日本語学的研究 (3)受講生A 2回目(1回目発表の修正・発展)</p> <p>第14回 受講生による「白氏文集」天永4年点に関わる日本語学的研究 (4)受講生B 2回目(1回目発表の修正・発展)</p> <p>第15回 「白氏文集」天永4年点に関わる受講生による研究を踏まえての補足・総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	実際の日本語資料(文献)による実証的な日本語学の研究方法と実力を身に付ける。					
参考文献等	<p>築島裕『平安時代語新論』(1969年、東京大学出版会)</p> <p>小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』(1971年、広島大学文学部紀要特輯号3)</p> <p>峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(1986年、東京大学出版会)</p>					
教科書	原則として配布プリントによる(テキストを含む)。					
成績評価の基準と方法	授業における課題発表の状況による。必要に応じてレポートも課すこともある。					

授業コード		授業題目	近代日本語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限 木曜日・2限
担当教員名	田鎖 数馬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代文学					
授業の概要	論文を書くための準備として、様々な論文に触れて、論文の書き方を習得する。章ごとに論文の内容をまとめて、論文の構成を整理する。その上で、論文の優れている点、疑問に思える点を列挙する。なお、論文が取り上げる作品については、事前に読んでおくこと。					
授業計画	<p>1 ガイダンス</p> <p>2 小森陽『文体としての物語』『文体としての自己意識—『浮雲』の主人公』</p> <p>3 小森陽『文体としての物語』『結末からの物語—『舞姫』における一人称』</p> <p>4 小森陽『文体としての物語』『囚われた言葉／さまよいだす言葉』</p> <p>5 小森陽『文体としての物語』『ころ』を生成する心臓</p> <p>6 石原千秋『反転する漱石』『ころ』のオイディプス 反転する語り</p> <p>7 小森陽『文体としての物語』『聴き手論序説』</p> <p>8 小森陽『文体としての物語』『聴き手論序説』</p> <p>9 三好行雄『作品論の試み』『罪業の世界』</p> <p>10 三好行雄『作品論の試み』『虚無の美学』</p> <p>11 三好行雄『作品論の試み』『徒勞』</p> <p>12 谷川恵『言葉のゆくえ』『残菊』</p> <p>13 谷川恵『言葉のゆくえ』『舞姫』</p> <p>14 谷川恵『言葉のゆくえ』『大つごもり』</p> <p>15 谷川恵『言葉のゆくえ』『浮雲』</p>					
各科目の目標(達成水準)	論文の書き方を習得する。					
参考文献等						
教科書	適宜プリントを配布する。					
成績評価の基準と方法	出席及び学期末レポートから総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	近代日本語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限 木曜日・2限
担当教員名	田鎖 数馬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本近代文学					
授業の概要	日本近代文学について各自が興味を持っている問題についての調査・発表を行ってもらい、発表に際しては、既存の研究とは異なる新しい視点を出すようにする。発表に対して議論を重ねて、問題の理解を深めていく。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2 ガイダンス 3 学生発表(泉鏡花「化鳥」本文読解) 4 学生発表(泉鏡花「化鳥」問題検討) 5 学生発表(泉鏡花「化鳥」レジュメ作成) 6 学生発表(泉鏡花「高野聖」本文読解) 7 学生発表(泉鏡花「高野聖」問題検討) 8 学生発表(泉鏡花「高野聖」レジュメ作成) 9 学生発表(泉鏡花「化銀杏」本文読解) 10 学生発表(泉鏡花「化銀杏」問題検討) 11 学生発表(泉鏡花「化銀杏」レジュメ作成) 12 学生発表(泉鏡花「春昼・春昼後刻」本文読解) 13 学生発表(泉鏡花「春昼・春昼後刻」問題検討) 14 学生発表(泉鏡花「春昼・春昼後刻」レジュメ作成) 15 まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	独創的な論文を書くための準備ができたかどうか。研究することの意義、面白さを知ることができたかどうか。					
参考文献等						
教科書	適宜プリントを配布する。					
成績評価の基準と方法	出席及び発表内容から総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	日本近代文学論特論		単位数	2	
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限	木曜日・3限
担当教員名	田鎖 教馬		担当教員所属	人文社会科学専攻			
履修における注意点							
教員研究テーマ	日本近代文学						
授業の概要	論文を書くための準備として、様々な論文に触れて、論文の書き方を習得する。章ごとに論文の内容をまとめて、論文の構成を整理する。その上で、論文の優れている点、疑問に思える点を列挙する。なお、論文が取り上げる作品については、事前に読んでくること。						
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2 前田愛『都市空間のなかの文学』「遷東の隠れ家」 3 前田愛『都市空間のなかの文学』「塔の思想」 4 前田愛『都市空間のなかの文学』「獄舎のユートピア」 5 前田愛『都市空間のなかの文学』「BERLIN 1888」 6 前田愛『都市空間のなかの文学』「二階の下宿」 7 前田愛『都市空間のなかの文学』「子どもたちの時間」 8 前田愛『都市空間のなかの文学』「仮象の街」 9 前田愛『都市空間のなかの文学』「山の手の奥」 10 前田愛『近代読者の成立』「鷗外の中国趣味」 11 前田愛『近代読者の成立』「明治立身出世主義の系譜」 12 前田愛『近代読者の成立』「音読から黙読へ」 13 前田愛『近代読者の成立』「大正後期の通俗小説の展開」 14 前田愛『近代読者の成立』「昭和初頭の読者意識」 15 まとめ 						
各科目の目標(達成水準)	論文の書き方を習得する。						
参考文献等							
教科書	適宜プリントを配布する。						
成績評価の基準と方法	出席及び発表内容から総合的に判断する。						

授業コード		授業題目	日本近代文学論演習		単位数	2	
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限	木曜日・3限
担当教員名	田鎖 教馬		担当教員所属	人文社会科学専攻			
履修における注意点							
教員研究テーマ	日本近代文学						
授業の概要	日本近代文学について各自が興味を持っている問題についての調査・発表を行ってもらう。発表に際しては、既存の研究とは異なる新しい視点を出すようにする。発表に対して議論を重ねて、問題の理解を深めていく。						
授業計画	<p>日本近代文学について各自が興味を持っている問題についての調査、発表を行ってもらう。発表に際しては、既存の研究とは異なる新しい視点が出せるようにする。テキストを補足するための資料の提出を要求する。発表に対して議論を重ね、問題の理解を深めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス 2 ガイダンス 3 学生発表(泉鏡花「草迷宮」本文読解) 4 学生発表(泉鏡花「草迷宮」問題検討) 5 学生発表(泉鏡花「草迷宮」レジュメ作成) 6 学生発表(泉鏡花「龍潭譚」本文読解) 7 学生発表(泉鏡花「龍潭譚」問題検討) 8 学生発表(泉鏡花「龍潭譚」レジュメ作成) 9 学生発表(泉鏡花「歌行燈」本文読解) 10 学生発表(泉鏡花「歌行燈」問題検討) 11 学生発表(泉鏡花「歌行燈」レジュメ作成) 12 学生発表(泉鏡花「眉かくしの霊」本文読解) 13 学生発表(泉鏡花「眉かくしの霊」問題検討) 14 学生発表(泉鏡花「眉かくしの霊」レジュメ作成) 15 まとめ 						
各科目の目標(達成水準)	独創的な論文を書くことのための準備ができたかどうか。研究の意義、面白さを知ることができたかどうか。						
参考文献等							
教科書	適宜プリントを配布する。						
成績評価の基準と方法	出席及び発表内容から総合的に判断する。						

授業コード		授業題目	中国近代文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	高橋 俊		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国近・現代文化					
授業の概要	中国近現代の文学史をおさえる					
授業計画	<p>中国現当代文学について概観する。具体的には、以下の通り。</p> <p>第1回 現代文学前夜——〈文学〉に託されたもの—— 『天演論』、梁啓超、『新小説』、「小説と群治の関係」、国民国家</p> <p>第2回 文学革命から五四へ 『新青年』、胡適、「文学改良芻議」、陳独秀、周作人、</p> <p>第3回 魯迅の文学(1)——「引き裂かれた社会」の告発—— 「摩羅詩力説」、「呐喊」、「狂人日記」、「孔乙己」、「薬」、「故郷」、「阿Q正伝」</p> <p>第4回 魯迅の文学(2) 『彷徨』、「祝福」、「孤独者」、「野草」</p> <p>第5回 文学者たちの誕生——文学研究会・創造社—— 茅盾、葉聖陶、王統照、郁達夫、郭沫若、成仿吾</p> <p>第6回 左翼文学の展開——左聯の誕生まで—— 創造社、太陽社、丁玲、馮雪峰、茅盾、魯迅、胡風、張天翼、瞿秋白、文芸大衆化</p> <p>第7回 長篇小説の誕生——茅盾「子夜」をめぐって—— リアリズム小説、上海、マスメディア、巴金、老舎</p> <p>第8回 中国における“戦争と文学”——「一・二八事変」と文学—— 上海事変、黄震遐、『大晚报』、報告文学</p> <p>第9回 新感覚派の文学——現代中国のモダニストたち—— 穆時英、劉呐鷗、施蛰存、『現代』、海派</p> <p>第10回 文壇の〈右〉と〈左〉——新月派から自由人・第三種人へ—— 梁実秋、徐志摩、胡秋原、蘇汶、馮雪峰、瞿秋白</p> <p>第11回 魯迅の文学(3)——挫折から論争へ—— マルクス主義、太陽社、創造社、瞿秋白、胡風、『故事新編』</p> <p>第12回 抗戦時期の文学 中華全国文芸界抗敵協会、大後方、民族形式、張天翼、沈從文</p> <p>第13回 人民文学 毛沢東、文芸講話、趙樹理、「小二黒の結婚」、「李有才板話」、「李家莊の変遷」、丁玲、「霞村にいたころ」、「太陽は桑乾河を照らす」</p> <p>第14回 新時期文学 個人主義、改革開放、恋愛、「上海ベイビー」</p> <p>第15回 まとめ——現代中国における〈文学〉の意味—— 王曉明、「人文精神論争」、王暉</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国近・現代文学の流れを理解し、意義づける。					
参考文献等	藤井省三『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005					
教科書	こちらで準備する。					
成績評価の基準と方法	学期末のレポート(1000字程度):90%、出席状況:10%					

授業コード		授業題目	中国近代文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	高橋 俊		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国近・現代文化					
授業の概要	中国女性文学史について学ぶ					
授業計画	<p>中国の現代文学作家の作品を鑑賞する。具体的には、張愛玲「伝奇」を読む。張愛玲は、現代中国を代表する女性作家。半植民地下におかれた上海・香港で、独自の境地から、多くの作品を執筆した。彼女の作品を読むことで、中国現代文学についての理解を深め、ならびに中国語読解のレベルをあげる。具体的には、以下の通り。</p> <p>第1回 ガイダンス、役割分担 第2回 「金鎖記」(1) 第3回 「金鎖記」(2) 第4回 「金鎖記」(3) 第5回 「花調」(1) 第6回 「花調」(2) 第7回 「花調」(3) 第8回 「留情」(1) 第9回 「留情」(2) 第10回 「留情」(3) 第11回 「桂花蒸」(1) 第12回 「桂花蒸」(2) 第13回 「紅薔薇白薔薇」(1) 第14回 「紅薔薇白薔薇」(2) 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	現代中国文学についての理解を深め、作品の読解力を上げ、ならびに中国語のレベルアップを狙う。					
参考文献等	邵迎建『伝奇文学と流言人生』(お茶の水書房、2002)					
教科書	こちらで準備する。					
成績評価の基準と方法	ふだんの授業態度・読解度:50%、学期末のレポート:50%					

授業コード		授業題目	中国現代文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	高橋 俊			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国近・現代文化					
授業の概要	中国近・現代の文化的背景について学ぶ					
授業計画	<p>中国現代文化史について学ぶ。具体的には、以下の通り。</p> <p>第1回 制度としての中国文化 第2回 雑誌の時代1-『新青年』 第3回 田舎から都市へ-都市文化の時代 第4回 マルクス主義の中国への移入とその意味 第5回 雑誌の時代2-『現代』 第6回 都市文化の発展1-上海 第7回 都市文化の発展2-香港 第8回 戦争と文化 第9回 モダンな感覚-中国のモダニズム文化 第10回 雑誌の時代3-『電影』 第11回 外国文化と中国文化の間で 第12回 国民党・共産党 第13回 戦後の文化史 第14回 文化大革命とは 第15回 まとめ——中国文化を語る意味</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国近現代文化の流れを理解する					
参考文献等	特になし					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	ふだんの授業態度・読解度:50%、学期末のレポート:50%					

授業コード		授業題目	中国現代文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	高橋 俊		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	とくになし					
教員研究テーマ	中国近・現代文化					
授業の概要	中国現代文化の流れを理解する					
授業計画	<p>中国現代文学に関する中国語の評論を読む。具体的には、『中国現代文学研究叢刊』のなかから論文をピックアップし、内容をまとめた上で、批判的に検討する。受講者は、この論文では何が主張され、それに何が問題なのかについて、検討し、主張する能力が求められる。</p> <p>第1回 ガイダンス、役割分担 第2回 汪暉「中国的現代性問題」 第3回 陳平原「中国私学伝統」 第4回 孟悦「上海近代印刷文化」 第5回 李欧梵「“批評空間”的開設」 第6回 王德威「被抑圧的現代性」 第7回 劉禾「国民性理論質疑」 第8回 王曉明「一部雑誌与一個“社団”」 第9回 陳思和「民間的浮沈」 第10回 錢理群「“流亡者文学”的心理」 第11回 張旭東「論中国当代批評話語」 第12回 黄子平「病的隱喻与文学生産」 第13回 孟悦「中国文学“現代性”」 第14回 劉禾「民俗学与現代通俗文芸」 第15回 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	現代中国文学の最新の論文を読むことで、当該分野の研究に対する視野を持つ。					
参考文献等	吉田富夫『中国現代文学史』(朋友書店、1996)					
教科書	こちらで準備する。					
成績評価の基準と方法	ふだんの授業態度・読解度:50%、学期末のレポート:50%					

授業コード		授業題目	英語圏文学論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	宗 洋		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし。				
教員研究テーマ	ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化				
授業の概要	文化史の中で見る英文学				
授業計画	<p>イギリス文学特論ではイギリス文学史についての講義を広く文化史に位置づけながら解説していく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 中世 3. 中世2 4. ルネサンス 5. マニエリスム 6. マニエリスム2 7. バロックからロココ 8. 新古典主義 9. 新古典主義2 10. ロマン主義 11. ロマン主義2 12. ヴィクトリア朝 13. ヴィクトリア朝2 14. 世紀末からモダニズム 15. 現代まで 				
各科目の目標(達成水準)	各作品を文化史のなかで考える知識を身につけること。				
参考文献等	特になし				
教科書	特になし。読むべき本は初回にプリントで指示する。				
成績評価の基準と方法	授業中の小テストおよび学期末の8000字のレポート。詳細については初回にプリントを配布する。				

授業コード		授業題目	英語圏文学論演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	宗 洋		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし				
教員研究テーマ	ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化				
授業の概要	<i>Alice's Adventures in Wonderland</i> を精読する				
授業計画	<p><i>Alice's Adventures in Wonderland</i>を精読する。担当者はあらかじめ、指定された箇所の訳を教員にE-mailで提出しておくこと。授業はその翻訳の妥当性等を参加者で議論していく。授業では英文翻訳において必要な辞書類、参考書類等も指示する。また学生には、<i>Decline and Fall</i>に関する批評の発表もおこなってもらい、それも参加学生との間で議論する。学期末には4000字のレポートを提出してもらおう。おおよその進度は次のとおり。イントロダクションおよびDown the Rabbit-hole 1.</p> <p>2 Down the Rabbit-hole 2.</p> <p>3 The Pool of Tears 1.</p> <p>4 The Pool of Tears 2.</p> <p>5 A Caucus-race and a Long Tale 1.</p> <p>6 A Caucus-race and a Long Tale 2.</p> <p>7 The Rabbit Sends in a Little Bill 1.</p> <p>8 The Rabbit Sends in a Little Bill 2.</p> <p>9 An Advice from a Caterpillar 1.</p> <p>10 An Advice from a Caterpillar 2.</p> <p>11 Pig and Pepper 1.</p> <p>12 Pig and Pepper 2.</p> <p>13 A Mad Tea-party 1.</p> <p>14 A Mad Tea-party 2.</p> <p>15 まとめ</p>				
各科目の目標(達成水準)	英語の精読技術の向上、文学作品の批評能力の向上				
参考文献等	ここでは書ききれないので、授業で指示する。				
教科書	Lewis Carroll, <i>Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass</i> (Penguin Books)				
成績評価の基準と方法	授業への貢献度(出席含む)、発表内容、学期末の4000字のレポートの内容を総合して評価する。				

授業コード		授業題目	英語圏表象論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	宗 洋		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし				
教員研究テーマ	ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化				
授業の概要	ヴィクトリア朝からモダニズムにかけてのイギリス文学				
授業計画	<p>第1回 イン트로ダクション</p> <p>第2回 神話の女性／女性の神話——ロイヤル・アカデミーとラファエル前派の絵画</p> <p>第3回 家庭の天使とファム・ファタール</p> <p>第4回 ニューウーマンの世紀転換期——自転車に乗る女</p> <p>第5回 ワイルド、サンドウ、キャプテン・ショウ</p> <p>第6回 帝国主義の中の身体——身体と効率と優生学</p> <p>第7回 子ども像の変遷——ロマンティック・チャイルドからフロイトの子ども像へ</p> <p>第8回 小説と広告文化</p> <p>第9回 二つの怪物——『フランケンシュタイン』原作と映画版の比較</p> <p>第10回 侵略小説の政治学——犯罪人類学</p> <p>第11回 見世物とフリークショー</p> <p>第12回 世紀転換期の爆弾テロ</p> <p>第13回 地下世界探検</p> <p>第14回 都市と退化の言説</p> <p>第15回 大戦と文学</p>				
各科目の目標(達成水準)	文学作品を同時代の文化の中に位置づける視点の獲得。				
参考文献等					
教科書	プリント配布。				
成績評価の基準と方法	授業中の小テストおよび学期末の8000字のレポート。詳細については初回にプリントを配布する。				

授業コード	12756	授業題目	英語圏表象論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	宗 洋		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	ヴィクトリア朝からモダニズムの時期におけるイギリス文学文化					
授業の概要	Through the Looking-glassを精読する					
授業計画	<p>Through the Looking-glassを精読する。担当者はあらかじめ、指定された箇所の訳を教員にE-mailで提出しておくこと。授業はその翻訳の妥当性等を参加者で議論していく。授業では英文翻訳において必要な辞書類、参考書類等も指示する。また学生には、Through the Looking-glassに関する批評の発表もおこなってもらい、それも参加学生との間で議論する。学期末には4000字のレポートを提出してもらう。おおよその進度は次のとおりである。</p> <p>第1回イントロダクション、 第2回135ページ終わりまで 第3回140ページ終わりまで 第4回145ページ終わりまで 第5回150ページ終わりまで 第6回155ページ終わりまで 第7回160ページ終わりまで 第8回165ページ終わりまで 第9回170ページ終わりまで 第10回175ページ終わりまで 第11回180ページ終わりまで 第12回185ページ終わりまで 第13回190ページ終わりまで 第14回195ページ終わりまで 第15回200ページ終わりまで</p>					
各科目の目標(達成水準)	英語の精読技術の向上、文学作品の批評能力の向上					
参考文献等	ここでは書ききれないので、授業で指示する。					
教科書	Lewis Carroll, <i>Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass</i> (Penguin Books)					
成績評価の基準と方法	授業への貢献度(出席含む)、発表内容、学期末の4000字のレポートの内容を総合して評価する。					

授業コード		授業題目	アメリカ文学論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	藤吉 清次郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人種・宗教・ジェンダーから見るアメリカ小説についての研究					
授業の概要	19世紀アメリカ文学の物語に分析を加えながら、アメリカ文学が抱える本質的な問題を考察する。(キーワード:文学、宗教、帝国主義、多文化主義)					
授業計画	<p>宗教・政治・ジェンダー・人種などの観点から、アメリカン・ルネッサンス来の文学作品群に考察を加えていく。具体的には、ホーソン、ソロー、エマソン、メルヴィルなどの代表的な作品を対象とするが、それらの作品の特質を明確にするために当時の大衆小説も紹介する。その過程において、フーコーの理論を援用しながら、自己形成の在り方を検証する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. "Young Goodman Brown" (アレゴリーとは何か) 3. "Young Goodman Brown" (心理小説とは何か) 4. "Young Goodman Brown" の評論 5. "The Birthmark" 6. "Roger Malvin's Burial" 7. The Scarlet Letter (物語の曖昧性の意義) 8. The Scarlet Letter (自然と文明のテーマ) 9. "Nature" 10. Moby-Dick (鯨の白さの意義) 11. Moby-Dick (エイハブの主張) 12. Pierre 13. Billy Budd 14. The Wide, Wide World 15. Uncle Tom's Cabin 					
各科目の目標(達成水準)	様々な観点から文学作品に考察を加える過程において、方法論意識と批評力を養成する。					
参考文献等	The Cambridge History of American Literature Vol. 2					
教科書	テキストにはプリントを使う。第一回目の授業で説明する。					
成績評価の基準と方法	2/3以上の出席と、課題・レポートによって総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	アメリカ文学論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	藤吉 清次郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人種、宗教、ジェンダーから観るアメリカ小説についての研究					
授業の概要	多様なアメリカ文学の作品の解釈を通じて、アメリカ文学の豊さを分析する。(キーワード: 多様性、現代性、物語性)					
授業計画	<p>アメリカ文学を代表する作品(ホーソン、メルヴィル、フォークナー、モリソン、マラマッドなど)を題材にアメリカ文学・文化の特質を学ぶ。この授業では、アメリカ北部作家、南部作家、西部作家はもちろんのこと、ユダヤ系、アフリカ系、アジア系などの作家の作品を講読することによって、アメリカ文学についての全般的な基礎知識の習得を目指す。授業では研究発表とディスカッションを行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. Invisible Man(Ralph Ellison) 3. The Assistantの前半部(Malamud) 4. The Assistantの後半部 5. Beloved の前半部(Morrison) 6. Beloved の後半部 7. The Sot-Weed Factorの前半部(Barth) 8. The Sot- Weed Factor の後半部 9. Giovanni's Room(Baldwin) 10. Catch-22(Heller) 11. City of Glass (Auster) 12. White Noiseの前半部(Dellio) 13. White Noise の後半部 14. アフリカ系作家の評論講読 15. ユダヤ系作家の評論講読 					
各科目の目標(達成水準)	1. 英語の読解力を養成する。2. アメリカ文学作品への理解を深める。3. 批評力を養成する。					
参考文献等	The Cambridge History of American Literatureのシリーズ					
教科書	第一回目の授業で説明するが、テキストにはノートン版のアンソロジーを使う。					
成績評価の基準と方法	授業での貢献度(十分な予習と授業での発言)と課題・レポートによって総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	アメリカ言語文化論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	藤吉 清次郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	人種、宗教、ジェンダーから観るアメリカ小説についての研究					
授業の概要	現代アメリカ文学の物語に分析を加えながら、アメリカ文学が抱える問題を検証する。(キーワード: 不条理、物語的真実、文体、現代性)					
授業計画	<p>アメリカ現代文学の作家(ポール・オースター、ステイーヴ・エリクソン、ピンチョンなど)の作品を中心にアメリカ文学の特質を検証する。その際、アメリカ文学のキャンソンの作家たち(ホーソン、メルヴィル、フォークナー、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、ヘンリー・ミラーなど)の文学的伝統をどのような形で継承しているかを確認したい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ポール・オースターの『幽霊』とホーソンの「ウェイクフィールド」 2. ソローの『ウォルデン』とポール・オースターの『幽霊』 3. メルヴィル『ピエール』とフォークナー『アブサロム、アブサロム』 4. メルヴィルとフォークナーと現代 5. ヘンリー・ミラー『北回帰線』とエリクソン『黒い時計の旅』 6. ピンチョン『V』『重力の虹』における現代性 7. ドン・デリーロ『マオII』とメルヴィル『白鯨』 8. ステイーヴ・ミルハウザー『マーティン・ドレスラー』と現在小説の在り方 9. ジョン・チーヴァーとレイモンド・カーヴァーとリアリズムの在り方 10. ヘミングウェイとカーヴァーと文体的継承 11. トニ・モリソンと「物語」のカ 12. ヘンリー・ジェームズと現代アメリカ文学 13. イーサン・ケイニン『ブルー・リバー』とトウェイン『トム・ソーヤーの冒険』 14. リチャード・パワー『四人のジレンマ』とメルヴィル的世界 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	1. 様々観点から文学作品に考察を加える過程において、アメリカ文学作品への理解を深める。					
参考文献等	The Cambridge History of American Literature のシリーズ					
教科書	第一回の授業で説明するが、テキストにはノートン版のアンソロジーを主に使う。					
成績評価の基準と方法	授業での貢献度(十分な予習と授業での発言)と課題・レポートによって総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	アメリカ言語文化論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	藤吉 清次郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	人種、宗教、ジェンダーから観るアメリカ小説についての研究					
授業の概要	アメリカ文学の代表作を読みながら、その本質的な問題をえぎり出す。(キーワード:西部文学、南部文学、北部文学)					
授業計画	<p>アメリカ文学を代表する作品を緻密に読解することによって、アメリカ文学の本質に迫りたい。テキストばかりでなく、そのテキストを生み出した時代背景(時代的な文脈)にも十分な検証を加える。具体的には、北部(メルヴィル)、西部(トウエイン)、南部(フォークナー、オコナー)、現代作家(エリクソン)などの作品を読むが、その際文学批評力も養成したい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.イントロダクション 2.Adventures of Huckleberry Finn の前半部 3.Adventures of Huckleberry Finnの後半部 4. Tours of the Black Clockの前半部 5. Tours of the Black Clockの後半部 6. Arc d' X の前半部 7. Arc d' X の後半部 8. Light in August の前半部 9. Light in August の後半部 10. Wise Blood の前半部 11. Wise Blood の後半部 12. Moby-Dick の主要部分の抜粋 13"Benito Cereno" 14."Bartleby" 15.まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	1. 英文を正確に読む力を養成する。2. アメリカ文学作品への理解を深める。3. 批評力を養成する。					
参考文献等	The Cambridge History of American Literature のシリーズ					
教科書	第一回目の授業で説明するが、ノートン版のアンソロジーを使う予定である。					
成績評価の基準と方法	授業への貢献度(十分な予習と授業での発言)と課題・レポートによって総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	フランス文芸思潮論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	大西 宗夫			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	フランスの思想と文学。					
授業の概要	フランスの文学と思想の歴史					
授業計画	<p>フランスの思想と文学の歴史をたどり、17世紀のデカルト、18世紀のルソー、19世紀のボードレールやランボー、20世紀のプルーストなどについて学ぶ。</p> <p>1 イントロダクション</p> <p>2 デカルト(『方法序説』その1)</p> <p>3 デカルト(『方法序説』その2)</p> <p>4 デカルト(『方法序説』その3)</p> <p>5 ルソー(『告白』その1)</p> <p>6 ルソー(『告白』その2)</p> <p>7 ルソー(『告白』その3)</p> <p>8 ボードレール(『悪の華』)</p> <p>9 ボードレール(『パリの憂鬱』その1)</p> <p>10 ボードレール(『パリの憂鬱』その2)</p> <p>11 ランボー(韻文詩)</p> <p>12 ランボー(『地獄の一季節』その1)</p> <p>13 ランボー(『地獄の一季節』その2)</p> <p>14 プルースト(『失われた時を求めて』、目覚めそのほか)</p> <p>15 プルースト(就寝劇)</p>					
各科目の目標(達成水準)	フランスの思想と文学の歴史を学ぶ。					
参考文献等	授業中に必要に応じて指示する					
教科書	特になし。					
成績評価の基準と方法	授業中の報告。最終レポート。					

授業コード		授業題目	フランス文芸思潮論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	大西 宗夫			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	フランスの思想と文学					
授業の概要	フランス語のテキストを原文で読む					
授業計画	<p>フランスの思想と文学の重要なテキストを原文で実際に読み進める。フランス語の読解力を向上させるとともに、フランスの思想や文学についての洞察を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 インTRODクシヨン 2 学生発表1 3 学生発表2 4 学生発表3 5 学生発表4 6 学生発表5 7 学生発表6 8 学生発表7 9 学生発表8 10 学生発表9 11 学生発表10 12 学生発表11 13 学生発表12 14 学生発表13 15 まとめ 					
各科目の目標	フランスの思想や文学のテキストが原文で読め、内容を正確に理解できるようにする。					
参考文献等	授業中に必要に応じて指示する。					
教科書	プリント配布					
成績評価の基準と方法	授業中の発表					

授業コード		授業題目	フランス思想論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	大西 宗夫		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	フランスの思想と文学。				
授業の概要	フランスの現代思想とくにジャック・ラカンの精神分析を学ぶ				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1 序論 2 ニーチェ(その1) 3 ニーチェ(その2) 4 ニーチェ(その3) 5 フロイト (その1) 6 フロイト (その2) 7 フロイト (その3) 8 ラカン (パロールについて) 9 ラカン (シニフィアンとシニフィエ) 10 ラカン (原抑圧について) 11 ラカン (エディプスについて) 12 ラカン (去勢について) 13 ラカン (排除について) 14 ラカン (否認について) 15 ラカン (神経症、精神病、性的倒錯について) 				
各科目の目標(達成水準)	フランス現代思想を代表するラカンの精神分析についての理解を得る				
参考文献等	授業中に必要に応じて指示				
教科書	プリント配布				
成績評価の基準と方法	期末レポート				

授業コード		授業題目	フランス思想論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	大西 宗夫			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	フランスの思想と文学。					
授業の概要	フランス思想のテキストを原文で読む					
授業計画	<p>フランスの思想や文学のテキストを原文で読み、より高度な読解力、理解力をめざす。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 インTRODクシヨン 2 学生発表1 3 学生発表2 4 学生発表3 5 学生発表4 6 学生発表5 7 学生発表6 8 学生発表7 9 学生発表8 10 学生発表9 11 学生発表10 12 学生発表11 13 学生発表12 14 学生発表13 15 まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	フランス語の読解力を向上させ、フランスの思想や文学の正確な理解力を養う。					
参考文献等	授業中に必要に応じて指示。					
教科書	プリント配布					
成績評価の基準と方法	授業中の発表。					

授業コード		授業題目	文化・コミュニケーション論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	丸井 一郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌					
授業の概要	異社会・文化間の相互理解研究の基礎となる理論を紹介する。中心は言語学的相互行為理論で特に日常談話の研究である。データを定義し、調査・研究方法を紹介する。日独英の言語圏における事象を材料にして、社会・文化の基盤である相互行為における自明性を解明する方途を示す。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 2. 言語相互行為としての談話: 対象領域の定位 3. 言語相互行為の理論の概略 4. 言語相互行為の類型(タイプ)と範型(パターン) 5. 対面談話の位置づけ 6. 言語行為概念と意義目的関連 7. 言語相互行為における協調 8. 協調の様式 9. 個別類型的相互行為原則 10. 日独英語などに見る対面談話の組織 11. 場面定義・参加様態・参加役割 12. 談話組織の基礎 13. 競合性と論弁性 14. 差異の背景 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	基本概念と概念装置の性質を理解し操作し適用する。事例を収集し分類し分析する。					
参考文献等	丸井一郎(2006) 『言語相互行為の理論のために』、三元社					
教科書						
成績評価の基準と方法	毎回の課題、発表、最終レポートを総合して					

授業コード		授業題目	文化・コミュニケーション論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	丸井 一郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌					
授業の概要	特論での議論を深化させ、言語相互行為理論の成立過程、背景、中心事例を確認する。この領域が社会文化とコミュニケーションの研究にどのような意義を有するか考察する。演習参加者が集めた個別事例を深く分析し、研究発表と討論を行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 2. 関連文献検討1(談話分析関連) 3. 承前 4. 承前 5. 事例分析1 6. 事例分析2 7. 関連文献検討2(社会言語学関連) 8. 承前 9. 承前 10. 事例分析3 11. 事例分析4 12. 関連文献検討3(社会文化理論関連) 13. 事例分析5 14. 事例分析6 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	基本概念と概念装置を操作し適用する。事例を収集し分類し分析することを通じて概念設定、概念装置の適否を検討する。					
参考文献等	丸井一郎(2006) 『言語相互行為の理論のために』、三元社					
教科書						
成績評価の基準と方法	毎回の課題、発表、最終レポートを総合して					

授業コード		授業題目	言語社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	丸井 一郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌					
授業の概要	言語相互行為の理論に基づき、マイクロレベルでは生活形式と生活世界、マクロレベルでは社会的相互依存関係網の形成を主題とする。必要な資料の性質とその処理法を紹介する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 2. 社会的な事象としての言語相互行為 3. 言語相互行為の上位規定レベル(1):生活形式 4. 言語相互行為の上位規定レベル(2):生活世界 5. 言語相互行為の内的構成(1) 6. 言語相互行為の内的構成(2) 7. 言語相互行為における協調の諸相 8. 社会的依存関係網と相互行為 9. 個別社会的相互行為原則の諸相 10. 相互行為理論から見た制度論 11. 日・独・英語社会に見る相互行為事象(1) 12. 同上(2) 13. 同上(3) 14. 相互行為からみた社会理論 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	基本概念と概念装置の性質を理解し操作し適用する。事例を収集し分類し分析する					
参考文献等	丸井一郎(2006) 『言語相互行為の理論のために』、三元社					
教科書						
成績評価の基準と方法	毎回の課題、発表、最終レポートを総合して					

授業コード		授業題目	言語社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	丸井 一郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	言語相互行為研究、異文化間コミュニケーション、対照社会文化誌					
授業の概要	言語相互行為理論関連の問題の中から受講者の研究課題に即して随時テーマを設定する。個別研究動向の検討、事例分析をより深かめつつ、研究発表と討論を行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 2. 関連文献検討1 3. 承前 4. 承前 5. 事例分析1 6. 事例分析2 7. 関連文献検討2 8. 承前 9. 承前 10. 事例分析3 11. 事例分析4 12. 関連文献検討3 13. 事例分析5 14. 事例分析6 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	受講者の研究課題との関連で、文献・資料を収集し検討することを通じて、自己が依拠する概念、および概念装置の適否を批判的に検討する。					
参考文献等	丸井一郎(2006) 『言語相互行為の理論のために』、三元社					
教科書						
成績評価の基準と方法	毎回の課題、発表、最終レポートを総合して					

授業コード		授業題目	異文化間コミュニケーション論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	Darren Lingley		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	Intercultural Communication, ELT					
授業の概要	This is an introductory graduate level course in IC Communication designed to give students an overview of Intercultural Communication themes relating to language learning and education. 受講生に対して、語学の学習と教育に関連する、異文化間コミュニケーションにおけるテーマの概観を与えるための、異文化間コミュニケーションに関する大学院レベルの入門的授業とする。					
授業計画	<p>この授業では「文化」の概念を捉える方法を検討していく。文化と個人の行動との間の関係に気づくことから始め、文化的要因とコミュニケーションスタイルとの間の関係を明確にし、この関係が異文化間接触にどのような影響を及ぼすのか検討しながら、異文化間接触に関わる内容を言語カリキュラムに取り入れる方法を探究していく。(使用言語: 英語)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. Unit A: Culture and its meanings 3. Unit A: Culture and Stereotypes 4. Unit A: Cultural contact 5. Unit B: Cultural categories 6. Unit B: Cultural dimensions 7. Unit B: Approaches to Studying ICC 8. Unit C: Norms and high cost topics 9. Unit C: Cross-cultural Pragmatics 10. Unit C: Politeness and face 11. Unit C: Grice's co-operative principle 12. Unit D: ICC in the EFL classroom I: Listening 13. Unit D: ICC in the EFL classroom II: ICC Texts 14. Unit D: ICC in the EFL classroom III: Simulations 15. Course wrap 					
各科目の目標(達成水準)	This is an introductory graduate level course in IC Communication. Students will be expected to read a variety of materials relating to culture, intercultural communication and English Language Teaching, and to demonstrate understanding of the readings in a seminar context. Students should be able to identify basic ICC topics and discuss them critically in English. この授業は、異文化間コミュニケーションに関する大学院レベルの入門的授業である。受講生は文化、異文化間コミュニケーション、英語教育に関するさまざまな資料を読むことと、ゼミの授業において、読んだ資料の内容が理解できていることを示すよう求められる。また、受講生は、異文化間コミュニケーションにおける基本的な話題を認識し、その話題に関して批判的に英語で議論できることが必要とされる。					
参考文献等	なし					
教科書	Materials and selected readings to be provided. 資料と精選された読み物を配布する。					
成績評価の基準と方法	Strong seminar contribution, student-led seminar in an agreed upon area of study and end-of-semester essay. 積極的なゼミへの参加態度、合意された研究領域における受講生主導によるゼミの内容、および学期末の小論文に基づいて評価する。					

授業コード		授業題目	異文化間コミュニケーション論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	Darren Lingley		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	Intercultural Communication, ELT					
授業の概要	This is an intermediate level graduate level course in IC Communication exploring the praxis between Culture, Intercultural Communication and English language education. 文化、異文化間コミュニケーション、英語教育の間に存在する実践的問題を探求する、異文化間コミュニケーションに関する、大学院レベルの中級の授業とする。					
授業計画	<p>「異文化間コミュニケーション論特論」において習得した方法論をオリジナルな研究へと発展させていく方法を探求する。各院生は関心のある特定の領域における先行研究を批判的に検討することから始め、研究発表と討論を行っていきながら、独自の研究を立案し実行することになる。使用言語：英語)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. Unit A: The research field: Challenging theoretical aims 3. Unit A: The research field: Pragmatic awareness in instructed learning 4. Unit A: The research field: Lingua Franca Communication 5. Unit A: The research field: Politeness strategies in speech and writing 6. Unit B: From research to teaching: Developing pragmatic competence 7. Unit B: From research to teaching: Negotiated interaction 8. Unit B: From research to teaching: Closing the conversation 9. Unit B: From research to teaching: Authenticity and input 10. Unit C: Case studies in ICC I: Introduction 11. Unit C: Case studies in ICC II: Research issues 12. Unit C: Case studies in ICC III: Critical incidents 13. Unit D: ICC in practice I: Managing Otherization 14. Unit D: ICC in practice II: Essentialist vs. non-essentialist representation of culture 15. Course wrap 					
各科目の目標(達成水準)	Assessable outcomes: By the end of this course, students should be able to critically discuss some of the main ways in which culture is defined and conceptualized, explain what is meant by the dimensions along which it is claimed that cultures are likely to vary and explain ways in which pragmatic norms may vary across cultures. 評価可能な成果:この授業の終わりまでに、受講生は、文化が定義され概念化される主な方法のいくつかについて批判的な議論ができるようになることがもめられる。また、文化がそれに沿って変化する傾向があると主張される要因は何を意味しているのかを説明できるようになることと、実践的な基準が文化によってどのように異なるのかを説明できるようになることも求められる。					
参考文献等	なし					
教科書	Materials and selected readings to be provided. 資料と精選された読み物を配布する。					
成績評価の基準と方法	A strong seminar contribution in English is essential to the final grade. Reports and presentations will also be used to assess students. 最終成績の評価には英語によるゼミへの積極的参加が不可欠である。レポートとプレゼンも評価に用いられる。					

授業コード		授業題目	外国語コミュニケーション論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	Darren Lingley		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	Intercultural Communication, ELT					
授業の概要	This course provides an introduction to graduate level studies in English as a foreign language with emphasis on the role of 'context.' 「文脈」の役割に焦点を当てた、外国語としての英語における大学院レベルの研究に対する入門的授業とする。					
授業計画	<p>「文脈」(context)の意味を概観し、文脈と、書き言葉と話し言葉の目的、言語のさまざまな機能、およびテキストの基底にある組織について考察することを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. Unit A: English in context: Context, Text, and Discourse 3. Unit A: English in context: ELF, EIL and World Englishes 4. Unit A: English in context: Issues of acceptability 5. Unit B: Written and spoken language: Exploring differences between written & spoken language 6. Unit B: Written and spoken language: Planned and unplanned discourse 7. Unit B: Written and spoken language: Pedagogical applications 8. Unit C: Functions of language: Speech act theory 9. Unit C: Functions of language: Relationships between speech acts and grammar 10. Unit C: Functions of language: Speech act theory and language study 11. Unit C: Functions of language: Pragmalinguistics 12. Unit D: Cohesion and coherence in English: Lexical cohesion 13. Unit D: Cohesion and coherence in English: Studying and teaching cohesion 14. Unit D: Cohesion and coherence in English: Coherence and patterns in texts 15. Course wrap 					
各科目の目標(達成水準)	<p>This is an introductory graduate level course focusing on spoken and written language. Students will be expected to read a variety of materials relating to context, the functions of written and spoken language, and to consider how these relate to pedagogy. Students will be expected to demonstrate understanding of the readings in a seminar context. Students should be able to identify basic features of spoken and written texts and to identify context as a central feature of understanding language. この授業は、話し言葉と書き言葉に焦点を当てた、大学院レベルの入門的授業である。受講生は、文脈、話し言葉と書き言葉の機能に関するさまざまな資料を読むこと、およびこれらのことがどのように教育学に関わるかを考察することを求められる。また、受講生は、ゼミ形式の授業において、読んだ資料の内容を理解していることを示すことが求められ、話し言葉によるテキストと書き言葉によるテキストの基本的特徴を見極め、文脈が言語理解の基本的特性であることを認識することも要求される。</p>					
参考文献等	なし					
教科書	Materials and selected readings to be provided. 資料と精選された読み物を配布する。					
成績評価の基準と方法	Strong seminar contribution, student-led seminar in an agreed upon area of study and end-of-semester essay. 積極的なゼミへの参加態度、合意された研究領域における受講生主導によるゼミの内容、および学期末の小論文に基づいて評価する。					

授業コード		授業題目	外国語コミュニケーション論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	Darren Lingley		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	Intercultural Communication, ELT					
授業の概要	This is an intermediate-level graduate course exploring the features of spoken language in a variety of interaction formats. さまざまな相互作用の形式における話し言葉の特徴を探求する、中級レベルの大学院の授業とする。					
授業計画	<p>応用言語学で用いられるジャンル分析を導入し、自然な会話、教室内でのやり取り、および話し言葉の本質について探究を進めることを目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Course Introduction 2. Unit A: Genre analysis: Approaches to genre analysis 3. Unit A: Genre analysis: Discourse community 4. Unit A: Genre analysis: Pedagogical applications 5. Unit B: Conversation analysis: Introduction 6. Unit B: Conversation analysis: Turn-taking 7. Unit B: Conversation analysis: Repair 8. Unit C: Classroom interaction language: Introduction 9. Unit C: Classroom interaction language: The Sinclair and Coulthard model 10. Unit C: Classroom interaction language: Insights into classroom practice 11. Unit D: The nature of spoken language: Introduction 12. Unit D: The nature of spoken language: The speech - writing continuum 13. Unit D: The nature of spoken language: Interactional speech 14. Unit D: The nature of spoken language: Transactional speech 15. Course wrap 					
各科目の目標(達成水準)	<p>Assessable outcomes: By the end of this course, students should be able to critically discuss some of the main features of natural conversation, classroom interaction, and spoken language. Prospective teachers should be able to apply course content to their teaching practice. 評価可能な成果: この授業の終わりまでに、受講生は、自然な会話、教室での相互作用、話し言葉に関する主な特徴のうちのいくつかを批判的に論じることができるようになることを求められる。教員志望者は、授業内容を教育実践に応用することができるようになることを求められる。</p>					
参考文献等	なし					
教科書	Materials and selected readings to be provided. 資料と精選された読み物を配布する。					
成績評価の基準と方法	A strong seminar contribution in English is essential to the final grade. Reports and presentations will also be used to assess students. 最終成績の評価には、英語によるゼミへの積極的参加が不可欠である。レポートとプレゼンも評価に用いられる。					

授業コード		授業題目	日本語コミュニケーション論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	奥村 訓代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	言語・異文化・国際交流に興味の有る方					
教員研究テーマ	多文化共生、コミュニケーション					
授業の概要						
授業計画	第1回目 イン트로、第2回～5回目 言語理論の特徴、第6回～10回目 意思伝達と方法、第11回目～13回目 日本語の特徴、第14回・15回目 まとめと展望					
各科目の目標(達成水準)	言葉と文化と表現の関係を理解する					
参考文献等	言葉の認知科学辞典(大修館)、認知言語学キーワード事典(研究社)、文化理論用語集(新曜社)					
教科書	言語学の方法(岩波書店)、					
成績評価の基準と方法	授業態度と口頭試問					

授業コード		授業題目	日本語コミュニケーション論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	奥村 訓代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	別になし					
教員研究テーマ	言語・文化・交流そして人					
授業の概要						
授業計画	<p>第1回目 イントロ 第2回目～5回目 課題に対するレジメ作成 第6回目～10回目 PPIによる口頭発表 第11回目～13回目 課題研究と発表 第14・15回目 発表会とまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	学会発表を目指す					
参考文献等	はじめての英語プレゼンテーション(ジャパンタイムズ)、脱「日本語」への視点(三元社)					
教科書	授業時に指導する					
成績評価の基準と方法	毎回の課題と発表					

授業コード		授業題目	日本語習得論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	奥村 訓代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	言語・文化・交流そして人					
授業の概要	言語(日本語)習得に関する論文を熟読し、議論や検討を行う。					
授業計画	<p>第1回目 イントロ</p> <p>第2回からは、テキスト(論文)を1編ずつ熟読し、自分の研究の糧とする。</p>					
各科目の目標(達成水準)						
参考文献等	関係論文各種					
教科書	学会誌等					
成績評価の基準と方法	出席と発表と研究態度					

授業コード		授業題目	日本語習得論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	奥村 訓代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	言語・異文化・国際交流に興味の有る日本人と留学生の受講を希望します					
教員研究テーマ	言語・文化・交流そして人					
授業の概要	学会発表のための準備として、毎回レジメを切り、発表を行う。					
授業計画	まとめとして、実際に学会発表を行う。					
各科目の目標(達成水準)	各自の研究テーマにより異なる					
参考文献等	各自の研究テーマにより異なる					
教科書	参加態度、研究進捗、発表					
成績評価の基準と方法						

授業コード		授業題目	日本語構造論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	佐野 由紀子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	現代日本語の文法					
授業の概要	日本語文法についての基礎的な知識を学ぶ。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 品詞 3. 品詞 4. 格助詞 5. 格助詞 6. 活用 7. 活用 8. 活用 9. ヴォイス 10. ヴォイス 11. 人称 12. 人称 13. テンス 14. テンス 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日本語教育において必要な文法的知識を身につける。					
参考文献等	適宜紹介する					
教科書	『はじめての人の日本語文法』野田尚史 くろしお出版 2,310円					
成績評価の基準と方法	課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)					

授業コード		授業題目	日本語構造論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	佐野 由紀子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	現代日本語の文法					
授業の概要	日本語文法に関する主要文献を読みながら、様々な角度からその構造について考察する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. アスペクト(1) 3. アスペクト(2) 4. アスペクト(方言) 5. 連体修飾(1) 6. 連体修飾(2) 7. 条件節(1) 8. 条件節(2) 9. モダリティ(1) 10. モダリティ(2) 11.モダリティ(3) 12. 指示語 13. 敬語(1) 14. 敬語(2) 					
各科目の目標(達成水準)	日本語教育において必要な文法的知識を身につけるとともに、自ら分析する力を養う。					
参考文献等	適宜紹介する					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)					

授業コード		授業題目	日本語習得論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	佐野 由紀子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	現代日本語の文法					
授業の概要	日本語文法について具体的な問題設定を行い考察することによって、自ら分析する方法を学ぶ。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 用例検索の仕方について 3. コーパスを用いた研究の紹介(1) 4. コーパスを用いた研究の紹介(2) 5. コーパスを用いた研究の紹介(3) 6. コーパスを用いた研究の紹介(4) 7. コーパスを用いた調査・分析(1) 8. コーパスを用いて調査・分析(2) 9. コーパスを用いた調査・分析(3) 10. コーパスを用いた調査・分析(4) 11. 類義表現(1) 12. 類義表現(2) 13. 類義表現(3) 14. 類義表現(4) 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	先行研究を批判的に読み、自ら分析する力を身に付ける。					
参考文献等						
教科書						
成績評価の基準と方法						

授業コード		授業題目	日本語習得論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	佐野 由紀子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	現代日本語の文法					
授業の概要	修士論文につなげることができるよう、前半は各自が興味のある文献を取り上げ、輪読する。後半は各自が興味のあるテーマについて発表する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 文献講読 3. 文献講読 4. 文献講読 5. 文献講読 6. 文献講読 7. 文献講読 8. 文献講読 9. 研究発表 10. 研究発表 11. 研究発表 12. 研究発表 13. 研究発表 14. 研究発表 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	先行研究を批判的に読み、自ら分析する力を身に付ける。					
参考文献等	適宜紹介する					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	課題・発表(60%)、授業への参加度(40%)					

授業コード		授業題目	応用言語学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	今井 典子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	予習と復習を十分行うこと。					
教員研究テーマ	第二言語習得 (SLA)、タスク (特に、focused task—タスク活動とdictogloss)、英語教育					
授業の概要	言語教育や言語学習に関する応用言語学の理論を理解し、日本の言語 (英語) 教育にどのように応用できるのかを考える。					
授業計画	<p>第1回: 言語学習における考えの推移 (1) 行動主義心理学者や生得説論者の言語習得理論</p> <p>第2回: 言語学習における考えの推移 (2) 中間言語</p> <p>第3回: 言語学習における考えの推移 (3) 誤答分析</p> <p>第4回: 言語習得に関わる諸問題 (1) L2習得の初期段階の特徴、母語習得とL2習得、</p> <p>第5回: 言語習得に関わる諸問題 (2) 転移、化石化</p> <p>第6回: 言語習得に関わる諸問題 (3) 学習スタイル、年齢</p> <p>第7回: 言語習得に関わる諸問題 (4) 動機づけ</p> <p>第8回: 言語習得に関する主な仮説 (1) インターフェイス説、ノンインターフェイス説など</p> <p>第9回: 言語習得に関する主な仮説 (2) 文化変容仮説、適応仮説など</p> <p>第10回: 言語習得に関する主な仮説 (3) 多次元仮説ほか</p> <p>第11回: 言語習得に関する主な仮説 (4) アウトプット仮説、インターアクション仮説など</p> <p>第12回: SLAの諸相 (1) 認知アプローチから見たSLA</p> <p>第13回: SLAの諸相 (2) 社会文化的アプローチから見たSLA</p> <p>第14回: 発表</p> <p>第15回: まとめ</p>					
各科目の目標 (達成水準)	言語教育や言語学習に関する応用言語学の理論を理解する。					
参考文献等	Davies, A. & Elder, C. (2010). <i>The Handbook of Applied Linguistics</i> . Oxford : Blackwell Publishing.. そのほか、適宜紹介します。					
教科書	大喜多喜夫 (2013). 『応用言語学』、昭和堂。他に必要に応じ、参考資料や論文を配布します。					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度 (課題発表)、および、課題レポートにより、総合的に判断します。					

授業コード		授業題目	応用言語学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	今井 典子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	ディスカッションにおいて、自分の意見を持って参加できるよう、事前に準備しておくこと。予習と復習を十分行うこと。					
教員研究テーマ	第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育					
授業の概要	応用言語学に関する論文を取り上げ検討する。ディスカッションを通して考えを深化させ、また、受講生の研究テーマと関連する論考を講読し、内容を議論する。修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。					
授業計画	<p>特論の講義をさらに発展させ、様々な論文を講読しディスカッションを行い考えを深化させる。また、受講生の研究テーマと関連する論考を精読し、内容を検討する。</p> <p>第1回目：イントロダクション Davies, A. & Elder, C. (2010) の中にある11のセクションよりいくつか選択し、第2回目～第12回目まで講読するセクションを検討する。 第2回目から第12回目まで、各セクションを講読しディスカッションを行う。必要に応じ論文を紹介し講読していきます。</p> <p>第2回目：論文の講読とディスカッション(1) 第3回目：論文の講読とディスカッション(2) 第4回目：論文の講読とディスカッション(3) 第5回目：論文の講読とディスカッション(4) 第6回目：論文の講読とディスカッション(5) 第7回目：論文の講読とディスカッション(6) 第8回目：論文の講読とディスカッション(7) 第9回目：論文の講読とディスカッション(8) 第10回目：論文の講読とディスカッション(9) 第11回目：論文の講読とディスカッション(10) 第12回目：論文の講読とディスカッション(9) 第13回目：研究発表とディスカッション(1) 受講生の研究テーマに沿った論文講読 第14回目：研究発表とディスカッション(2) 同上 第15回目：まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	応用言語学に関する論文を講読することを通して、修士論文の研究をより深化させることができるようディスカッションを行う。					
参考文献等	適宜紹介します。					
教科書	Davies, A. & Elder, C. (2010). <i>The Handbook of Applied Linguistics</i> . Oxford : Blackwell Publishing.					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度(討議への参加状況)、課題発表の発表内容、および、課題レポートにより、総合的に判断します。					

授業コード		授業題目	第二言語習得論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	今井 典子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	予習と復習を十分行うこと。					
教員研究テーマ	第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育					
授業の概要	外国語の獲得過程やメカニズムを科学的に解明した上で、認知論的立場から、英語学習・指導理論を構築していきます。					
授業計画	<p>第1回: イントロダクション SLA(第二言語習得)研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(1)</p> <p>第2回: SLA研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(2) 習得理論 モニター・モデル、スキル習得論、処理可能性理論、など</p> <p>第3回: SLA研究(第二言語教育との関係を中心に)を考える(3) 習得理論 気づき仮説、インターアクション仮説、アウトプット仮説、など</p> <p>第4回: 母語習得</p> <p>第5回: バイリンガルの第二言語習得を考える</p> <p>第6回: 脳科学から見たSLA など</p> <p>第7回: 学習者言語(中間言語: interlanguage)</p> <p>第8回: 学習者要因: 年齢(臨界期仮説)、動機づけ(Motivation)、</p> <p>第9回: 学習者要因: 適性、社会的要因(文化変容仮説)</p> <p>第10回: 教室での言語習得(1)インプット、</p> <p>第11回: 教室での言語習得(2)インターアクション、アウトプット</p> <p>第12回: 教室での言語習得(3)フォーカス・オン・フォーム、タスク</p> <p>第13回: 外国語能力の評価、および、テスト</p> <p>第14回: 発表</p> <p>第15回: まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	言語習得に関する理論と実際を考察することによって、言語習得、とくに第二言語の習得について理解を深める。					
参考文献等	Ellis, R. (2008). <i>The Study of Second Language Acquisition</i> . Oxford: Oxford University Press. そのほか、適宜紹介します。					
教科書	必要に応じ、参考資料や論文を配布します。					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度(課題発表)、および、課題レポートにより、総合的に判断します。					

授業コード		授業題目	第二言語習得論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	今井 典子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	ディスカッションにおいて、自分の意見を持って参加できるよう、事前に準備しておくこと。予習と復習を十分行うこと。					
教員研究テーマ	第二言語習得、タスク(特に、focused taskータスク活動とdictogloss)、英語教育					
授業の概要	第二言語習得 (SLA)をめぐる論文を取り上げ検討する。様々な論文を講読し、ディスカッションを通して考えを深化させる。また、受講生の研究テーマと関連する論考を講読し、内容を議論する。修士論文のテーマに沿った研究発表を行い、その内容を指導する。					
授業計画	<p>第1回目：イントロダクション</p> <p>第2回目：論文の講読とディスカッション(1) Ellis (2008)の中より、Part 2 Description: the characteristics of learner language (Learner errors and error analysis)</p> <p>第3回目：論文の講読とディスカッション(2) Ellis (2008)の中より、Part 2 Description: the characteristics of learner language (Developmental patterns in second language acquisition 前半)</p> <p>第4回目：論文の講読とディスカッション(3) (Developmental patterns in second language acquisition 後半)</p> <p>第5回目：論文の講読とディスカッション(4) Ellis (2008)の中より、Part 2 Description: the characteristics of learner language (Variability in learner language 前半)</p> <p>第6回目：論文の講読とディスカッション(5) (Variability in learner language 後半)</p> <p>第7回目：論文の講読とディスカッション(6) Ellis (2008)の中より、Part 2 Description: the characteristics of learner language (Pragmatic aspect of learner language 前半)</p> <p>第8回目：論文の講読とディスカッション(7) (Pragmatic aspect of learner language 後半)</p> <p>第9回目：論文の講読とディスカッション(8) Ellis (2008)の中より、Part 3 Explaining second language acquisition: external factors (Input, interaction, and second language acquisition 1回目)</p> <p>第10回目：論文の講読とディスカッション(9) (Input, interaction, and second language acquisition 2回目)</p> <p>第11回目：論文の講読とディスカッション(10) (Input, interaction, and second language acquisition 3回目)</p> <p>第12回目：研究発表とディスカッション(1) 受講生の研究テーマに沿った論文講読</p> <p>第13回目：研究発表とディスカッション(2) 同上</p> <p>第14回目：研究発表とディスカッション(3) 同上</p> <p>第15回目：まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	言語習得に関する理論と実際を考察することによって、言語習得、とくに第二言語の習得に関して理解を深め、修士論文の研究をより深化させ、完成をめざす。					
参考文献等	VanPatten, B. & Williams, J. (2007). <i>Theories in Second Language Acquisition</i> . Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. そのほか適宜紹介します。					
教科書	Ellis, R. (2008). <i>The Study of Second Language Acquisition</i> . Oxford: Oxford University Press.					
成績評価の基準と方法	出席状況と受講態度(ディスカッションへの参加状況)、研究発表の発表内容、および、課題レポートにより、総合的に判断します。					

授業コード		授業題目	対照言語論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	岡本 克人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	十分なフランス語力が必要					
教員研究テーマ	対照言語学					
授業の概要	フランス語を中心にすえ、日本語と英語をいわば鏡として、比較対照研究をおこなう。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対照言語学とは何か 2. 対照言語学とは何か 3. Charles Bally の紹介 4. Charles Bally の紹介 5. Charles Bally の紹介 6. 仏英語対照研究の紹介 7. 仏英語対照研究の紹介 8. 学生報告 9. 学生報告 10. 日本語の特徴 11. 日本語の特徴 13. 日本語の特徴 14. 学生報告 15. まとめのディスカッション 					
各科目の目標(達成水準)	対照言語学とは何かを知り、自力でいくつかの対照できる問題点を見つけ出せるようになること。					
参考文献等	多数あるので受講時に指示する。					
教科書	とくになし。					
成績評価の基準と方法	授業における発言、質疑応答の評価とレポート。					

授業コード		授業題目	対照言語論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	岡本 克人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	十分なフランス語力が必要					
教員研究テーマ	対照言語学					
授業の概要	対照言語学の具体的研究を、フランス語を中心に、日本語、英語を視野に入れておこなう。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対照言語学とは何か 2. 対照言語学とは何か 3. 名詞中心のフランス語 4. 動詞中心の日本語・英語 5. 学生の発表 6. 学生の発表 7. オノマトペ 8. オノマトペ 9. オノマトペ 10. 学生の発表 11. 学生の発表 12. 「なる」と「する」 13. 「なる」と「する」 14. 学生の発表 15. まとめのディスカッション 					
各科目の目標(達成水準)	対照言語学的な具体的問題を研究発表できるようになること。					
参考文献等	折に触れて指示する。					
教科書	とくになし。					
成績評価の基準と方法	発表とレポート。					

授業コード		授業題目	フランス語学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	岡本 克人			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	十分なフランス語力が必要					
教員研究テーマ	対照言語学					
授業の概要	フランス語を通時的、共時的に把握する。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1. フランス語の歴史1 2. フランス語の歴史2 3. フランス語の分布 4. フランス国内の諸事情 5. 音韻論 6. 音韻論 7. 語彙論 8. 学生発表 9. 統辞論 10. 統辞論 11. 統辞論 12. 文体論 13. 文体論 14. 文法論(英語との比較) 15. 学生発表 					
各科目の目標(達成水準)						
参考文献等	随時提示する					
教科書	コピー配布					
成績評価の基準と方法	発表とレポート					

授業コード		授業題目	フランス語学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	岡本 克人			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	十分なフランス語力が必要					
教員研究テーマ	対照言語学					
授業の概要	フランス語にかかわる諸問題を対照言語学的にとらえる。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対照言語学とは何か(再考) 2. 対照言語学とは何か(再考) 3. 学生の発表 4. 学生の発表 5. 仏英語の俳句 6. 日本語の俳句 7. 俳句的表現とは何か 8. 「もの」と「こと」 9. 「もの」と「こと」 10. 学生の発表 11. 学生の発表 12. ことばの遊び(掛詞等) 13. ことばの遊び 14. 学生の発表 15. まとめのディスカッション 					
各科目の目標(達成水準)	対照言語学的な具体的問題を考察し、論文が書けるようにする。					
参考文献等	随時、指示する。					
教科書	特になし。					
成績評価の基準と方法	発表とレポート類。					

授業コード		授業題目	英語音声学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	藤崎 好子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	音声学概論既習者対象					
教員研究テーマ	英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究					
授業の概要	英語音声学・英語音韻論の理論的考察を通して、英語教育への応用を前提とした音声研究の検討を行う。					
授業計画	<p>第1回:オリエンテーション、既習事項&授業計画の確認</p> <p>第2回:Linguistic Universals & Phonetic Representation</p> <p>第3回:Principles of the Transformational Cycle & Segmental Phonology of English</p> <p>第4回:English Phonology & Rules of the Phonological Component</p> <p>第5回:Stress Placement & Stress as a Lexical Category</p> <p>第6回:Word-Level Phonology & Vowel Alternations</p> <p>第7回:Consonant System of English</p> <p>第8回:Linguistic Change of the Modern English Vowel System (1) Ladefoged</p> <p>第9回:Linguistic Change of the Modern English Vowel System (2) Ladefoged</p> <p>第10回:Phonological Theory & Phonetic Framework (1) Chomsky</p> <p>第11回:Phonological Theory & Phonetic Framework (2) Schane</p> <p>第12回:Principles of Phonology (1) Chomsky</p> <p>第13回:Principles of Phonology (2) Stampe</p> <p>第14回:Theory of 'Markedness' : Kaye</p> <p>第15回:総括</p>					
各科目の目標(達成水準)	音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。					
参考文献等	初回授業で文献リストを配布する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。					

授業コード		授業題目	英語音声学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	藤崎 好子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	音声学概論既習者対象					
教員研究テーマ	英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究					
授業の概要	1950年代から現在までの各種音韻理論の先行研究を通して、音韻論と音声学の関係について考察する。					
授業計画	<p>第1回:オリエンテーション、既習事項&授業計画の確認</p> <p>第2回:先行研究論文購読(1) SPE: General Survey</p> <p>第3回:先行研究論文購読(1) SPE: English Phonology</p> <p>第4回:先行研究論文購読(1) SPE: History</p> <p>第5回:先行研究論文購読(1) SPE: Phonological Theory</p> <p>第6回:先行研究論文購読(2) Generative Phonology: 分節音韻論</p> <p>第7回:先行研究論文購読(2) Generative Phonology: 弁別的素性と余剰性</p> <p>第8回:先行研究論文購読(2) Generative Phonology: 動的音韻論</p> <p>第9回:先行研究論文購読(2) Generative Phonology: 音韻規則と派生表示</p> <p>第10回:先行研究論文購読(3) Minimalist Program</p> <p>第11回:先行研究論文購読(3) Minimalist Syntax</p> <p>第12回:先行研究論文購読(3) Minimalism and Language Change</p> <p>第13回:先行研究論文購読(3) Minimality and Economy</p> <p>第14回:総括[1]</p> <p>第15回:総括(2)</p>					
各科目の目標(達成水準)	音声学から英語音韻論への橋渡しと、英語音声・音韻現象の理論的且つ分析的研究をする。					
参考文献等	初回授業で文献リストを配布する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。					

授業コード		授業題目	言語学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	藤崎 好子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	言語学概論既習者対象					
教員研究テーマ	英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究					
授業の概要	「言語学とは何か」を基本テーマに、言語の特性及びコミュニケーションの仕組みと機能について考察する。					
授業計画	<p>1回:オリエンテーション、既習事項&授業計画の確認</p> <p>第2回: Animal Communication</p> <p>第3回: Structure of Human Language</p> <p>第4回: Structure of Words: Morphology</p> <p>第5回: Structure and Patterning of the Sounds of Language: Phonology</p> <p>第6回: Study of Sentence Structure: Syntax</p> <p>第7回: Study of Meaning and Reference: Semantics</p> <p>第8回: Language Variation</p> <p>第9回: Language Change</p> <p>第10回: Study of Language Use and Communication: Pragmatics</p> <p>第11回: Psychology of Language: Speech Production and Comprehension</p> <p>第12回: Language Acquisition</p> <p>第13回: Language and Brain</p> <p>第14回:総括〔1〕</p> <p>第15回:総括〔2〕</p>					
各科目の目標(達成水準)	言語学の視点から言語とコミュニケーションを考察し、言語理論と言語分析法を概観する。					
参考文献等	初回授業で文献リストを配布する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。					

授業コード		授業題目	言語学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	藤崎 好子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	音声学概論既習者対象					
教員研究テーマ	英語の音体系・音韻現象・音声変化に関する研究					
授業の概要	「英語音声学Ⅰ」を踏まえ、Generative Phonology, Natural Phonology, Lexical Phonology, Autosegmental Phonology,等の各音韻理論について考察する。					
授業計画	<p>第1回:オリエンテーション、既習事項&授業計画の確認</p> <p>第2回: SPE理論とそれ以前の音韻論</p> <p>第3回: 自然音韻論</p> <p>第4回: 依存音韻論</p> <p>第5回: 自律分節音韻論</p> <p>第6回: 韻律音韻論</p> <p>第7回: 音調音韻論</p> <p>第8回: 音律音韻論</p> <p>第9回: 弁別素性理論</p> <p>第10回: 調音音韻論</p> <p>第11回: 語彙音韻論</p> <p>第12回: 音韻論と統語論・意味論・語用論</p> <p>第13回: 実験音韻論</p> <p>第14回: 統率音韻論</p> <p>第15回: 最適性理論</p>					
各科目の目標(達成水準)	言語学における音韻論を踏まえ、1950年代から現在までの様々な音韻理論の知見を得る。					
参考文献等	初回授業で文献リストを配布する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	発表(30%)・課題レポート(30%)・学期末試験(40%)により評価を行う。					

授業コード		授業題目	言語文化研究特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	古閑 恭子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	毎回事前準備してくること。					
教員研究テーマ	言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究					
授業の概要	構造言語学諸分野の研究を概観する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. テキストの講読: 音声学(1)母音 3. テキストの講読: 音声学(2)子音 4. テキストの講読: 音声学(3)超分節素 5. テキストの講読: 音韻論(1)音素 6. テキストの講読: 音韻論(2)音節・モーラ 7. テキストの講読: 音韻論(3)声調規則 8. テキストの講読: 形態論(1)形態素 9. テキストの講読: 形態論(2)異形態 10. テキストの講読: 形態論(3)接辞 11. テキストの講読: 統語論(1)文の組み立て 12. テキストの講読: 統語論(2)動詞句の構造 13. テキストの講読: 統語論(3)名詞句の構造 14. テキストの講読: 意味論(1)語の意味 15. テキストの講読: 意味論(2)文の意味 16. 定期試験 					
各科目の目標(達成水準)	構造言語学諸分野における研究動向を知り、方法論を身につける。					
参考文献等	初回授業で提示する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	出席、授業態度、定期試験により総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	言語文化研究演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	古閑 恭子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	毎回事前準備してくること。					
教員研究テーマ	言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究					
授業の概要	言語文化研究特論の内容を踏まえ、各受講生の関心に基づき、研究発表を輪番で行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 研究発表とディスカッション: 音声学(1)母音 3. 研究発表とディスカッション: 音声学(2)子音 4. 研究発表とディスカッション: 音声学(3)超分節素 5. 研究発表とディスカッション: 音韻論(1)音素 6. 研究発表とディスカッション: 音韻論(2)音節・モーラ 7. 研究発表とディスカッション: 音韻論(3)声調規則 8. 研究発表とディスカッション: 形態論(1)形態素 9. 研究発表とディスカッション: 形態論(2)異形態 10. 研究発表とディスカッション: 形態論(3)接辞 11. 研究発表とディスカッション: 統語論(1)文の組み立て 12. 研究発表とディスカッション: 統語論(2)動詞句の構造 13. 研究発表とディスカッション: 統語論(3)名詞句の構造 14. 研究発表とディスカッション: 意味論(1)語の意味 15. 研究発表とディスカッション: 意味論(2)文の意味 					
各科目の目標(達成水準)	構造言語学諸分野における研究動向、方法論について、理解を深める。					
参考文献等	受講生と相談の上決定する。					
教科書	受講生と相談の上決定する。					
成績評価の基準と方法	出席、授業態度、発表内容を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	古閑 恭子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	毎回事前準備してくること。					
教員研究テーマ	言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究					
授業の概要	社会言語学諸分野の研究を概観する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. テキストの講読: 言語と社会 3. テキストの講読: 言語の多様性 4. テキストの講読: 地域方言 5. テキストの講読: 社会方言 6. テキストの講読: 言語の性差 7. テキストの講読: 言語の年齢差 8. テキストの講読: 言語の状況差 9. テキストの講読: 言語政策 10. テキストの講読: 言語教育 11. テキストの講読: 言語接触 12. テキストの講読: 言語変化 13. テキストの講読: 言語生活 14. テキストの講読: 言語行動 15. テキストの講読: 言語計画 16. 定期試験 					
各科目の目標(達成水準)	社会言語学諸分野における研究動向を知り、方法論を身につける。					
参考文献等	初回授業で提示する。					
教科書	初回授業で提示する。					
成績評価の基準と方法	出席、授業態度、定期試験により、総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	言語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	古閑 恭子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	毎回事前準備してくること。					
教員研究テーマ	言語構造、特に音声・音韻に関する研究、社会における言語の役割に関する研究					
授業の概要	言語文化論特論の内容を踏まえ、各受講生の関心に基づき、研究発表を輪番で行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 研究発表とディスカッション: 言語と社会 3. 研究発表とディスカッション: 言語の多様性 4. 研究発表とディスカッション: 地域方言 5. 研究発表とディスカッション: 社会方言 6. 研究発表とディスカッション: 言語の性差 7. 研究発表とディスカッション: 言語の年齢差 8. 研究発表とディスカッション: 言語の状況差 9. 研究発表とディスカッション: 言語政策 10. 研究発表とディスカッション: 言語教育 11. 研究発表とディスカッション: 言語接触 12. 研究発表とディスカッション: 言語変化 13. 研究発表とディスカッション: 言語生活 14. 研究発表とディスカッション: 言語行動 15. 研究発表とディスカッション: 言語計画 					
各科目の目標(達成水準)	社会言語学諸分野における研究動向、方法論について、理解を深める。					
参考文献等	受講生と相談の上決定する。					
教科書	受講生と相談の上決定する。					
成績評価の基準と方法	出席、授業態度、発表内容を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	アメリカ言語文化論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上岡 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	アメリカの自然と文学					
授業の概要	レイチェル・カーソンを取り上げる。詳細は授業計画を参照					
授業計画	<p>アメリカの自然・環境と文学・文化とのかかわりについて考察する。今学期は、環境の時代を画し、世界の流れを変えたレイチェル・カーソンを取り上げ、以下の観点から概説する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) レイチェル・カーソンの生涯、 (2) レイチェル・カーソンの思想と現代 (3) レイチェル・カーソンと緑の文学、 (4) レイチェル・カーソンと海の文学 (5) 海の三部作 (6) 世界を変えた本『沈黙の春』 (7) 女性と自然 (8) 汚染の言説 (9) 環境文学 (10) 子供と自然 『センス・オブ・ワンダー』 (11) 環境教育の視点 (12) 『失われた森』 (13) カーソンと環境保護運動 (14) カーソンと自然の権利 (15) カーソンのメッセージ 					
各科目の目標(達成水準)	アメリカの環境思想の概略を理解する。					
参考文献等	『アメリカの環境保護運動』『自然の権利』					
教科書	『レイチェル・カーソン』(ミネルヴァ書房)					
成績評価の基準と方法	出席と平常成績、レポートの総合評価					

授業コード		授業題目	アメリカ言語文化論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上岡 克己		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	アメリカの自然と文学					
授業の概要	アメリカの自然と文学を再検証する。詳細は授業計画を参照。					
授業計画	<p>アメリカの自然と文学の関係を考察する。特に重要だと思われる作家・作品に焦点をあてて、探究する。今学期はアメリカのネイチャーライティングの代表作であるヘンリー・デイヴィッド・ソロー『ウォールデン—森の生活』を取り上げ、以下の観点から考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 現代文明を問い直す(a)「経済」 (2) 現代文明を問い直す(b)「経済」 (3) 現代文明を問い直す(c)「経済」 (4) 生の証を刻む「住んだ場所とすんだ目的」 (5) 古典の重要性「読書」 (6) 新しい自然観「音」、「孤独」 (7) 簡素な生活「マメ畑」 (8) 高き想い「湖」 (9) 「より高い法則」 (10)「動物の隣人たち」 (11)冬の4章 (12)再生としての「春」 (13)自己覚醒の書「むすび」 (14)ネイチャーライティングとしての『ウォールデン』 (15)『ウォールデン』の可能性 					
各科目の目標(達成水準)	アメリカの環境思想の概略が理解できることを目標とする。					
参考文献等	『アメリカの環境保護運動』『自然の権利』					
教科書	Henry Davit Thoreau, Walden. ソロー『森の生活』(岩波文庫)					
成績評価の基準と方法	出席、平常成績、レポートの総合評価					

授業コード		授業題目	アメリカ文化論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上岡 克己			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	アメリカの自然と文学					
授業の概要	アメリカの自然と文学の関係を考察する。特に重要だと思われる作家・作品に焦点をあてて、探究する。今学期はアメリカのネイチャーライティングの代表作であるアルド・レオポルド『野生のうたが聞こえる』を取り上げ、以下の観点から考察する。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> (1) ネイチャーライティングと自然史(a)「砂土地方の四季」 (2) ネイチャーライティングと自然史(b)「砂土地方の四季」 (3) ネイチャーライティングと自然史(c)「砂土地方の四季」 (4) 環境倫理学の書「リョコウバトの記念碑について」 (5) 環境倫理学の書「山の身になって考える」 (6) 自然保護を考える「自然保護の美学」 (7) 自然保護を考える「アメリカ文化における野生生物」 (8) 原生自然「残された宝」 (9) 「レクリエーションのための原生自然」 (10) 「科学のための原生自然」 (11) 「野生生物のための原生自然」 (12) 土地倫理「倫理拡張の筋道」 (13) 共同体の概念」 (14) 「生態学的な良心」 (15) ネイチャーライティングとしての『野生のうたが聞こえる』 					
各科目の目標(達成水準)	アメリカの環境思想の概略					
参考文献等	『アメリカの環境保護運動』					
教科書	『野生のうたが聞こえる』					
成績評価の基準と方法	出席、平常成績、レポートの総合評価					

授業コード		授業題目	アメリカ文化論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上岡 克己			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	アメリカの自然と文学					
授業の概要	アメリカ文学に表れた女性像について考察する					
授業計画	(1) "Death in the Woods" (2) "Death in the Woods" (3) "Death in the Woods" (4) "Her Idea of a Mother" (5) "Her Idea of a Mother" (6) "Her Aweet Jerome" (7) "Her Aweet Jerome" (8) "Her Aweet Jerome" (9) "The Last of the Belles" (10) "The Last of the Belles" (11) "The Last of the Belles" (12) "The Girls in their Summer Dresses" (13) "The Girls in their Summer Dresses" (14) "The Girls in their Summer Dresses" (15) "The Story of a Hour"					
各科目の目標(達成水準)	アメリカ文学と女性についての知識					
参考文献等	『ウジミンズ・アメリカ』					
教科書	Images of Women in Literature					
成績評価の基準と方法	出席、平常成績、レポートの総合評価					

授業コード		授業題目	イギリス言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	吉門 牧雄			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究					
授業の概要	この授業ではイギリス言語文化の特徴を、チョーサー時代からクロムウェル時代までの歴史的な文脈の中で探求する。イギリスの文化は様々な民族の影響を受けつつ、独特な歴史の変遷を経て現在に至っているが、その発展過程を解説しつつ、この時代の代表的な作品の読解を行い、イギリス文化の特殊性を明らかにする。					
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 チョーサー時代のイングランド考察(1)村落 第3回 チョーサー時代のイングランド考察(2)都市 第4回 チョーサー時代のイングランド考察(3)教会 第5回 カックストン時代のイングランド考察 第6回 チューダーのイングランド考察 第7回 反教権革命時代のイングランド考察 第8回 シェークスピア時代のイングランド考察(1)宗教および大学 第9回 シェークスピア時代のイングランド考察(2)国家の社会政策 第10回 シェークスピア時代のイングランド考察(3)産業および航海 第11回 シェークスピア時代のイングランド考察(4)シェークスピアその人 第12回 チャールズおよびクロムウェル時代のイングランド考察(1)植民地的発展の開始 第13回 チャールズおよびクロムウェル時代のイングランド考察(2)東インド会社 第14回 チャールズおよびクロムウェル時代のイングランド考察(3)大反乱の社会的条件 第15回 授業の総括 第16回 期末試験					
各科目の目標(達成水準)	イギリスの言語文化の特色についての理解を深める。					
参考文献等	The Norton Anthology of English Literature (Norton)					
教科書	G.M.Trevelyan, English Social History (Pelican Books)					
成績評価の基準と方法	出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。					

授業コード		授業題目	イギリス言語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	吉門 牧雄		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究					
授業の概要	この授業では、イギリス・ヴィクトリア朝の歴史的背景を理解し、また、その時代の主要な言語作品を読解することを通して、イギリス・ヴィクトリア朝文化の特徴を探求する。					
授業計画	第1回 インタロダクション 第2回 ヴィクトリア朝の歴史的背景の考察(1)1830年から1850年 第3回 ヴィクトリア朝の歴史的背景の考察(2)1850年から1880年 第4回 ヴィクトリア朝の文学的背景の考察(1)1830年から1850年 第5回 ヴィクトリア朝の文学的背景の考察(2)1850年から1880年 第6回 アルフレッド・テニスの英詩研究(1)In Memoriam A.H.H. 第7回 アルフレッド・テニスの英詩研究(2)Maud 第8回 ロバート・ブラウニング英詩研究(1)My Last Duchess 第9回 ロバート・ブラウニング英詩研究(2)Rabbi Ben Ezra 第10回 ロバート・ブラウニング英詩研究(3)The Ring and the Book 第11回 マシュー・アーノルドの英詩研究(1)Dover Beach 第12回 マシュー・アーノルドの英詩研究(2)Empedocles on Etna 第13回 ウォルター・ペイターの散文研究(1)The Renaissance 第14回 ウォルター・ペイターの散文研究(2)Appreciations 第15回 授業の総括 第16回 期末試験					
各科目の目標(達成水準)	イギリス・ヴィクトリア朝の言語文化の特異性を深く理解する。					
参考文献等	A. ブリッグス 『ヴィクトリア朝の人々』(ミネルヴァ書房); Herbert Tucker, A Companion to Victorian Literature & Culture (Blackwell Publisher)					
教科書	Walter Houghton ed., Victorian Poetry and Poetics (Houghton Mifflin Company)					
成績評価の基準と方法	出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。					

授業コード		授業題目	イギリス文化論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	吉門 牧雄		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究					
授業の概要	この授業ではイギリス言語文化の特徴を、王政復古時代からヴィクトリア朝にかけての歴史的な文脈の中で探求する。イギリスの文化は様々な民族の影響を受けつつ、独特な歴史の変遷を経て現在に至っているが、その発展過程を解説しつつ、この時代の代表的な文学作品の読解を行い、イギリス文化の特殊性を明らかにする。					
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 王政復古時代のイングランド考察(1)チャールズ二世 第3回 王政復古時代のイングランド考察(2)ジェームズ二世 第4回 王政復古時代のイングランド考察(3)名誉革命、ウィリアム三世 第5回 デフォー時代のイングランド考察(1)アン女王 第6回 デフォー時代のイングランド考察(2)ジョージ世 第7回 デフォー時代のイングランド考察(3)マールバラ戦争 第8回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(1)人口、医療と博愛運動 第9回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(2)農業革命と産業革命の開始 第10回 ジョンソン博士時代のイングランド考察(3)芸術と文化を育てた社会環境 第11回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(1)二つの選挙法改正の中間時代:1832年から1850年 第12回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(2)二つの選挙法改正の中間時代:1851年から1867年 第13回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(3)ヴィクトリア時代の後半期:1868年から1901年 第14回 ヴィクトリア朝のイングランド考察(4)ヴィクトリア時代の後半期:1884年から1901年 第15回 授業の総括 第16回 期末試験					
各科目の目標(達成水準)	イギリスの言語文化の特色についての理解を深める。					
参考文献等	The Norton Anthology of English Literature (Norton)					
教科書	G.M.Trevelyan, English Social History (Pelican Books)					
成績評価の基準と方法	出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。					

授業コード		授業題目	イギリス文化論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	吉門 牧雄			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	イギリス言語文化の特異性とその代表的作品についての研究					
授業の概要	この授業では、イギリス・ヴィクトリア朝を代表する詩人たちの作品を精読することを通して、この時代の文化をより深く理解することを目標とする。					
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 ウィリアム・モリスの英詩精読(1) Riding Together 第3回 ウィリアム・モリスの英詩精読(2) The Defence of Guenevere 第4回 ウィリアム・モリスの英詩精読(3) Old Love 第5回 A. C. スウィンバーン英詩精読(1) Faustine 第6回 A. C. スウィンバーン英詩精読(2) Atalanta in Calydon 第7回 A. C. スウィンバーン英詩精読(3) Rondel 第8回 ジョージ・メレディスの英詩精読(1) Modern Love 第9回 ジョージ・メレディスの英詩精読(2) The Woods of Westermain 第10回 G. M. ホプキンスの英詩精読(1) The Wreck of the Deutschland 第11回 G. M. ホプキンスの英詩精読(2) God's Grandeur 第12回 D. G. ロセッティの英詩精読(1) The Blessed Damozel 第13回 D. G. ロセッティの英詩精読(2) My Sister's Sleep 第14回 D. G. ロセッティの英詩精読(3) Jenny 第15回 授業の総括 第16回 期末試験					
各科目の目標(達成水準)	イギリス・ヴィクトリア朝の文化の諸問題をさらに深く理解する。					
参考文献等	A. ブリッグス 『ヴィクトリア朝の人々』 (ミネルヴァ書房); Herbert Tucker, A Companion to Victorian Literature & Culture (Blackwell Publisher)					
教科書	Walter Houghton ed., Victorian Poetry and Poetics (Houghton Mifflin Company)					
成績評価の基準と方法	出席、授業中の発表や討論、レポート、筆記試験などの結果を総合的に判断して評価する。					

授業コード		授業題目	ドイツ言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	斎藤 昌人			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	ドイツ文化、ドイツ文学、家族、身体					
授業の概要	19世紀から20世紀前半を中心に、ドイツにおける民族概念の形成を様々な観点から見ていく					
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 歴史(1) 第3回 歴史(2) 第4回 近代化・工業化 第5回 都市 第6回 家族・ジェンダー(1) 第7回 家族・ジェンダー(2) 第8回 反ユダヤ主義(1) 第9回 反ユダヤ主義(2) 第10回 反ユダヤ主義(3) 第11回 「人種」 第12回 優生思想 第13回 ナチズム 第14回 まとめ(1) 第15回 まとめ(2)					
各科目の目標(達成水準)	民族に関する問題を様々な観点から検証する知識と能力を身につける。					
参考文献等	適宜指示					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	ドイツ言語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	斎藤 昌人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	ドイツ文化、ドイツ文学、家族、身体					
授業の概要	ドイツを中心にヨーロッパの社会文化に関するテキストを読み進める。					
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 報告(1) 第3回 報告(2) 第4回 報告(3) 第5回 報告(4) 第6回 報告(5) 第7回 報告(6) 第8回 報告(7) 第9回 報告(8) 第10回 報告(9) 第11回 報告(10) 第12回 報告(11) 第13回 報告(12) 第14回 報告(13) 第15回 まとめ					
各科目の目標(達成水準)	研究テーマに関する知識、ならびにテキストの読みを深める。					
参考文献等	適宜指示					
教科書	受講生と協議の上選定する					
成績評価の基準と方法	毎回の報告を評価する					

授業コード		授業題目	ドイツ文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	斎藤 昌人			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	ドイツ文化、ドイツ文学、家族、身体					
授業の概要	19世紀から20世紀にかけての生活改革運動を社会的な文脈のもとで検証する					
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 生活改革運動とは？ 第3回 社会背景(1) 第4回 社会背景(2) 第5回 社会背景(3) 第6回 「健康」 第7回 生活改革運動(1) 第8回 生活改革運動(2) 第9回 生活改革運動(3) 第10回 生活改革運動(4) 第11回 生活改革運動(5) 第12回 その後の生活改革運動 第13回 日本の場合 第14回 問題点の整理 第15回 まとめ					
各科目の目標(達成水準)	「近代化」の問題点を理解する					
参考文献等	適宜指示					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	レポート					

授業コード		授業題目	ドイツ文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	斎藤 昌人			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	ドイツ文化、ドイツ文学、家族、身体					
授業の概要	19世紀から20世紀にかけての生活改革運動に関するテキストを読み進める。					
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 報告(1) 第3回 報告(2) 第4回 報告(3) 第5回 報告(4) 第6回 報告(5) 第7回 報告(6) 第8回 報告(7) 第9回 報告(8) 第10回 報告(9) 第11回 報告(10) 第12回 報告(11) 第13回 報告(12) 第14回 報告(13) 第15回 まとめ					
各科目の目標(達成水準)	研究テーマに関する知識、ならびにテキストの読みを深める。					
参考文献等	適宜指示					
教科書	受講生と協議の上選定する					
成績評価の基準と方法	毎回の報告を評価する					

授業コード		授業題目	中国言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	周 雲喬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	杜甫の詩の研究					
授業の概要	中国の漢詩への理解を深めるのがこの講義の目標である。この講義では、杜甫の作品を読解し、作品の研究についての諸問題を考察する。					
授業計画	<p>本年度、杜甫の作品について講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、オリエンテーション 2、杜甫という人物について 3、杜甫の交遊とその詩について(杜甫の友人) 4、杜甫の交遊とその詩について(交遊の詩とは?) 5、杜甫の交遊とその詩について(交遊の詩の性質) 6、杜甫の交遊とその詩について(作品の概説) 7、杜甫の交遊とその詩について(まとめ) 8、杜甫の遊歴の詩について(遊歴の詩の概説) 9、杜甫の遊歴の詩について(遊歴の詩の詩の性質) 10、杜甫の遊歴の詩について(送別の詩の概説) 11、杜甫の遊歴の詩について(作品の解説) 12、杜甫の遊歴の詩について(作品の解説) 13、遊歴の遊歴の詩について(作品の解説) 14、杜甫の詩に関する研究の現状について 15、まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	唐詩を読解する能力を養うこと					
参考文献等	授業中指示する。					
教科書	最初の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	レポートによって行う。					

授業コード		授業題目	中国言語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	周 雲喬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	唐代詩人の研究					
授業の概要	この授業では一学期の授業の成果を踏まえ、引き続き杜甫の作品を学ぶ。最初の授業で学ぶ予定の作品を定めた上で、授業の進め方を含め、具体的な習得方法を説明する。それに基づいて毎回、杜甫の詩を精読し、発表すること。					
授業計画	<p>1、オリエンテーション</p> <p>2、杜甫の「春夜雨を喜ぶ」の読解演習一</p> <p>3、杜甫の「春夜雨を喜ぶ」の読解演習二</p> <p>4、杜甫の「野人朱桜を送る」の読解演習一</p> <p>5、杜甫の「野人朱桜を送る」の読解演習二</p> <p>(次は「絶句漫興九首」という九つの作品を九回に分けて読解演習を行う)</p> <p>6、杜甫の「絶句漫興九首の一」(精読と発表)</p> <p>7、杜甫の「絶句漫興九首の二」(精読と発表)</p> <p>8、杜甫の「絶句漫興九首の三」(精読と発表)</p> <p>9、杜甫の「絶句漫興九首の四」(精読と発表)</p> <p>10、杜甫の「絶句漫興九首の五」(精読と発表)</p> <p>11、杜甫の「絶句漫興九首の六」(精読と発表)</p> <p>12、杜甫の「絶句漫興九首の七」(精読と発表)</p> <p>13、杜甫の「絶句漫興九首の八」(精読と発表)</p> <p>14、杜甫の「絶句漫興九首の九」(精読と発表)</p> <p>15、演習の問題点をまとめる</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国の漢詩に対して、翻訳の技能を身につけると共に作品を正しく理解すること。					
参考文献等	授業の中で指示する					
教科書	最初の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	レポートによって行う。					

授業コード		授業題目	中国文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	周 雲喬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	中国古典文学					
授業の概要	この授業では、中国文学の歴史に関して講義する。中国文明の歴史の中で多くの作家が現れ、豊富な文学作品が残されている。また、ある作家の物語はそれ自体が文学史の一部となっている。このような中国文学の歴史を知ることが中国の古典文学の源流、発展とその成果への理解を深める為には欠かせないことである。この授業では中国の古典文学に対して、歴史の視点から解説する。					
授業計画	1、オリエンテーション 2、六朝の文学について(概説) 3、六朝の文学について(作家の紹介) 4、六朝の文学について(作品の詳解) 5、六朝の文学について(研究の方向への展望) 6、六朝の文学について(研究の諸問題の検討) 7、唐の時代の文学について(概説) 8、唐の時代の文学について(李白の時代) 9、唐の時代の文学について(作品の解説①) 10、唐の時代の文学について(作品の解説②) 11、唐の時代の文学について(白居易の時代) 12、唐の時代の文学について(作品の解説①) 13、唐の時代の文学について(作品の解説②) 14、唐の時代の文学についての総括 15、問題点の検討					
各科目の目標(達成水準)	中国文学史を学び、それ相応の知識を習得する。					
参考文献等	授業中に指示する					
教科書	授業中に指示する					
成績評価の基準と方法	レポートによって行う					

授業コード		授業題目	中国文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	周 雲喬		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	中国古典文学					
授業の概要	一学期の授業の成果を踏まえ、白居易の作品を精読し、翻訳することで中国古典文学に対して相応の知識を得る。					
授業計画	<p>1、オリエンテーション(「効陶潜体詩」の十六篇の作品から十三篇を選んでその精読方法について説明して次の授業から順次に作品を精読して発表してもらう)</p> <p>2、白居易の「効陶潜体詩十六首」その一(発表)</p> <p>3、白居易の「効陶潜体詩十六首」その二(発表)</p> <p>4、白居易の「効陶潜体詩十六首」その三(発表)</p> <p>5、白居易の「効陶潜体詩十六首」その四(発表)</p> <p>6、白居易の「効陶潜体詩十六首」その五(発表)</p> <p>7、白居易の「効陶潜体詩十六首」その六(発表)</p> <p>8、白居易の「効陶潜体詩十六首」その七(発表)</p> <p>9、白居易の「効陶潜体詩十六首」その八(発表)</p> <p>10、白居易の「効陶潜体詩十六首」その九(発表)</p> <p>11、白居易の「効陶潜体詩十六首」その十(発表)</p> <p>12、白居易の「効陶潜体詩十六首」その十一(発表)</p> <p>13、白居易の「効陶潜体詩十六首」その十二(発表)</p> <p>14、白居易の「効陶潜体詩十六首」その十三(発表)</p> <p>15、演習の問題点を検討する</p>					
各科目の目標(達成水準)	中国文学史を学び、それ相応の知識を習得する。					
参考文献等	授業中に指示する					
教科書	最初の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	レポートによって行う。					

授業コード	12420	授業題目	東アジア言語文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中森 健二		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	中国の文学批評について					
授業の概要	中国の古代・中世における文学批評について考える。 孔子や諸子百家などの思想にみえる批評、六朝時代の批評書『詩品』『文心雕龍』、それに空海『文鏡秘府論』中に残された唐代の批評などの他に、詩人それぞれの詩作品のなかにその文学観を吐露したものがあつた。こうした文学批評の流れを概観し、その批評の特性について考察したい。					
授業計画	第1回 儒家の文学論 第2回 諸子百家の文学論 第3回 曹植と曹丕の文学論 第4回 陸機「文賦」 第5回 鍾嶸『詩品』(1)三つのランク 第6回 鍾嶸『詩品』(2)批評の特色 第7回 劉勰『文心雕龍』(1)総合性 第8回 劉勰『文心雕龍』(2)批評の特色 第9回 唐代の文学論(1)王昌齡 第10回 唐代の文学論(2)李白 第11回 唐代の文学論(3)杜甫 第12回 唐代の文学論(4)韓愈 第13回 唐代の文学論(5)白居易 第14回 唐代の文学論(6)柳宗元 第15回 全体のまとめ					
各科目の目標(達成水準)	中国の文学批評の特質を理解すること。					
参考文献等	授業の進度に応じて提示する。					
教科書	プリントして配布。					
成績評価の基準と方法	小論文による。					

授業コード	12489	授業題目	東アジア言語文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中森 健二		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	中国の文学批評について					
授業の概要	中国の古代・中世から近世にいたる文学批評について、その代表的な作品を選んで詳細に講読する。宋代以降、文学批評は主として「詩話」という形式が用いられることになる。このような流れを概観したうえで、「詩話」についても考えたい。詩人の言行や片言隻句を対象とした主たる対象とする批評が、宋代以降もなぜ連続と続くことになったのか、その意義は何か、等々を考察したい。					
授業計画	第1回 後漢以前の文学論 第2回 三国時代の文学論 曹植 第3回 三国時代の文学論 曹丕 第4回 陸機「文賦」(1)文学史論 第5回 陸機「文賦」(2)文体論 第6回 鍾嶸『詩品』と劉勰『文心雕龍』 第7回 唐代の批評(1)初唐の史家 第8回 唐代の批評(2)古文運動 第9回 唐代の批評(3)晩唐の詩人たち 第10回 唐代の批評(4)空海『文鏡秘府論』 第11回 宋代の批評(1)歐陽脩 第12回 宋代の批評(2)嚴羽 第13回 宋代の批評(3)王若虚 第14回 宋代の批評(4)蘇軾 第15回 全体のまとめ					
各科目の目標(達成水準)	中国の文学批評の特質を理解すること。					
参考文献等	授業の進度に応じて指示する。					
教科書	プリントして配布。					
成績評価の基準と方法	小論文による。					

授業コード		授業題目	東アジア文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中森 健二		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	日本における中国文学の受容をめぐって					
授業の概要	日本において、中国文学、主に古典文学がどのように受容されてきたのかを考える。日本人の手になる漢詩・漢文はもとより、この範囲にとどまることなく、ひろく日本文学全体の問題として、中国文学との関連を考察したい。					
授業計画	第1回 「文字を必要としなかった社会」 第2回 漢字の流入、東アジア漢字文化圏の成立 第3回 『古事記』『日本書紀』『万葉集』の成立 第4回 『万葉集』の漢字表記をめぐって 第5回 『懷風藻』について 第6回 遣唐使をめぐって(1)漢詩を用いての交流 第7回 遣唐使をめぐって(2)空海『文鏡秘府論』について 第8回 平安時代における『文選』の受容 第9回 平安時代における『白氏文集』の受容 第10回 平安時代の漢文学(1)『凌雲新集』『文華秀麗集』 第11回 平安時代の漢文学(2)『経国集』 第12回 鎌倉時代の漢文学(1)絶海中津 第13回 鎌倉時代の漢文学(2)義堂周信 第14回 江戸時代の漢文学概観 第15回 全体のまとめ					
各科目の目標(達成水準)	日本における中国文学受容の実態を理解すること。					
参考文献等	授業の進度に応じて指示する。					
教科書	プリントして配布。					
成績評価の基準と方法	小論文による。					

授業コード	12490	授業題目	東アジア文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中森 健二		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	日本における中国文学の受容をめぐって					
授業の概要	日本において、中国文学、主に古典文学がどのように受容されてきたのかを考える。江戸から明治にかけての日本人の漢詩を中心に詳細に講読する。そして、日・中の漢詩作品の相違点などに留意し、両国における文学のあり方・意義などについて比較考察したい。					
授業計画	第1回 江戸期以前の漢詩概観 第2回 江戸時代の漢詩(1)『譚園録稿』 第3回 江戸時代の漢詩(2)菅茶山 第4回 江戸時代の漢詩(3)柏木如亭 第5回 江戸時代の漢詩(4)広瀬淡窓と広瀬旭莊 第6回 江戸時代の漢詩(5)頼山陽と江馬細香 第7回 明治時代の漢詩(1)大沼枕山 第8回 明治時代の漢詩(2)中野逍遙 第9回 明治時代の漢詩(3)森春濤と森槐南 第10回 明治時代の漢詩(4)國分青厓 第11回 明治時代の漢詩(5)鷗外と漱石 第12回 大正時代以降の漢詩 第13回 東アジア漢字文化圏の盛衰(1)明治中期以前 第14回 東アジア漢字文化圏の盛衰(2)明治中期以降 第15回 全体のまとめ					
各科目の目標(達成水準)	日本における中国文学受容の実態を理解するとともに、日・中の文学に関する比較文学的な視野を身につけること。					
参考文献等	授業の進度に応じて提示する。					
教科書	プリントして配布。					
成績評価の基準と方法	小論文による。					

授業コード		授業題目	現代大衆文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	山下 興作		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	大衆文化 演劇論 アートマネジメント					
授業の概要	主としてアメリカの映画、演劇、音楽、マンガ等に代表される現代大衆文化をできるだけ幅広く概観し、その特徴を明らかにしていく。また、それと並行して、日本の大衆文化との比較を試み、異文化理解に資するとともに、そこから国の枠を超えた現代という時代の特色を浮き彫りにしていくことを目指す。					
授業計画	<p>本年は特にハリウッドの歴史に焦点をあて、次の項目について順次講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ハリウッド前史 2. ハリウッドの始まり 3. サイレントの全盛 4. トーキーの登場 5. 物語の複層化と技巧の前景化 6. 第2次世界大戦とハリウッド 7. 「赤狩り」の影響 8. 50年代のハリウッド 9. アメリカン・ニュー・シネマの登場 10. ベトナム戦争とハリウッド 11. 「スター作家」たちの活躍 12. イベント化する映画 13. 新たな作家主義 14. メガコングロマリット化 15. 物語への回帰 					
各科目の目標(達成水準)	日米他の現代大衆文化に関する基礎知識を習得し、基本的な概念を理解すること					
参考文献等	授業中に、おって指示する					
教科書	必要に応じて、プリントを配布する					
成績評価の基準と方法	出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する					

授業コード		授業題目	現代大衆文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山下 興作		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	大衆文化 演劇論 アートマネジメント					
授業の概要	主としてアメリカの映画、演劇、音楽、マンガ等に代表される現代大衆文化の具体的事例について、討論を行う。それにより、異文化に対する理解力を深化すると同時に、日本の身近な事例との比較を通じ、国あるいは文化圏を超えた大衆文化の特質について考える。					
授業計画	<p>本年は特に映画作品への様々なアプローチ方法を学んだ後、学生によるその実践を試みたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人物伝的アプローチとは 2. 人物伝的アプローチの実践 3. 作品成立史的アプローチとは 4. 作品成立史的アプローチの実践 5. 作家主義的アプローチとは 6. 作家主義的アプローチの実践 7. 物語論的アプローチとは 8. 物語論的アプローチの実践 9. スター論的アプローチとは 10. スター論的アプローチの実践 11. 演技論的アプローチとは 12. 演技論的アプローチの実践 13. 社会文化論的アプローチとは 14. 社会文化論的アプローチの実践 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日米他の現代大衆文化の基礎的な知見を踏まえ、具体的な事例について論理的に議論できる力を養う					
参考文献等	授業中に、おって指示する					
教科書	必要に応じて、プリントを配布する					
成績評価の基準と方法	出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する					

授業コード		授業題目	アメリカ文化論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	山下 興作			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	大衆文化 演劇論 アートマネジメント					
授業の概要	アメリカに特徴的な社会・文化現象に関する基礎知識を習得する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 移民社会であること 2. メイフラワー号神話 その1 3. メイフラワー号神話 その2 4. 「聖」と「俗」 その1 5. 「聖」と「俗」 その2 6. 「神話」的思考と「予型論」の伝統 その1 7. 「神話」的思考と「予型論」の伝統 その2 8. フランクリンと「近代的自我」 9. セルフコントロール主義 10. 近代的自我とは「男性」でる 11. 「アメリカン・ドリーム」の系譜 その1 12. 「アメリカン・ドリーム」の系譜 その2 13. アメリカ型個人主義 14. 啓蒙思想の墮落？ 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	アメリカの文化、いわゆる国民性の成り立ちについて理解できる					
参考文献等	追って指示する					
教科書	追って指示する					
成績評価の基準と方法	出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する					

授業コード		授業題目	アメリカ文化論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山下 興作			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	大衆文化 演劇論 アートマネジメント					
授業の概要	アメリカ文化論特論Ⅱによる成果を踏まえながら、具体的事例についての学生の調査報告に基づき、討論を行う。それにより、異文化に対する理解力をさらに深めるとともに、現代大衆文化の特質をより深く考察し、自らが生きる時代の特徴を明らかにする力を養う。					
授業計画	<p>本年は特にいくつかのハリウッド映画を中心にいくつかの作品ををカルチュラル・スタディーズの観点から読み解いていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 家族 『ハリー・ポッターと賢者の石』 2. アイデンティティ 『市民ケーン』 3. 子供 『オリバー・ツイスト』 4. 女性 『ピアノ・レッスン』 5. セクシュアリティ 『M.バタフライ』 6. 演劇 『恋に落ちシェイクスピア』 7. メディア 『トゥルーマン・ショウ』 8. スポーツ 『ミリオンダラー・ベイビー』 9. 音楽 『戦場のピアニスト』 10. ホロコースト 『シンドラーのリスト』 11. 人種 『遠い夜明け』 12. ディアスポラ 『パリ・テキサス』 13. 暴力 『羊たちの沈黙』 14. クワイ 『エイリアン3』 15. サイバーパンク 『ブレードランナー』 					
各科目の目標(達成水準)	アメリカ文化の具体的な事例について論理的かつ洞察力に富む議論ができる力を養う					
参考文献等	授業中に、おって指示する					
教科書	必要に応じて、プリントを配布する					
成績評価の基準と方法	出席状況、及び学期末に告示する課題の提出により評価する					

授業コード		授業題目	イギリス詩学論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	関 良子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究 英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究					
授業の概要	14世紀チョーサーから20世紀モダニズム詩人、21世紀現代詩人に至るまでの、英語で書かれた詩をいくつか鑑賞し、イギリス詩学が時代を経てどのように変化していったかを辿る。また、英語の文体の変遷をも視野に入れる。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 中世詩人: ジェフリー・チョーサー 3. ルネサンス詩人: ウィリアム・シェイクスピア 4. ルネサンス詩人: フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサー 5. 形而上詩人: ジョン・ダン、ジョージ・ハーバート 6. 形而上詩人／新古典主義詩人: アンドリュー・マーヴェル、ジョン・ミルトン 7. 新古典主義詩人: アレクサンダー・ポープ 8. 新古典主義詩人: ジョン・ドライデン 9. ロマン主義詩人: W・ブレイク、W・ワーズワース 10. ロマン主義詩人: J・キーツ、P・B・シェリー 11. ヴィクトリア朝詩人: アルフレッド・テニスン、ロバート・ブラウニング、マシュー・アーノルド 12. 唯美主義詩人: A・C・スウィンバーン、オスカー・ワイルド、W・B・イエイツ 13. モダニズム詩人: T・S・エリオット、デイルン・トマス、エズラ・パウンド、E・E・カミングス 14. 現代詩人: シェイマス・ヒーニー、シルヴィア・プラス、ポール・マルドゥーン 15. 総括 					
各科目の目標(達成水準)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 14世紀～21世紀に英語で書かれた詩を鑑賞することで、イギリス詩学の変遷を理解する ・ 英語で詩を味読するための感性と英語読解能力を身につける 					
参考文献等	松浦 暢 編訳『英詩の歎び—青春、そして夢と追憶』(平凡社ライブラリー, 2000年) 松浦 暢 編訳『英詩を愉しむ—光と風と夢』(平凡社ライブラリー, 1997年) その他、随時紹介する。					
教科書	平井正穂 編『イギリス名詩選』(岩波文庫, 1990年) 亀井俊介, 川本皓嗣 編『アメリカ名詩選』(岩波文庫, 1993年) 加えて、ハンドアウトを配布する。					
成績評価の基準と方法	授業時のディスカッションへの積極的な貢献(30%) 期末試験またはレポート(70%)					

授業コード		授業題目	イギリス詩学論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	関 良子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究 英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究					
授業の概要	ルネサンス、王政復古期、新古典主義、ロマン主義、および19世紀から20世紀にかけての詩学論議のうち、いくつかを精読し、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を考察する。研究発表とディスカッションを中心に授業を進める。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. Philip Sidney, "Defence of Poesie" (1595) 3. John Dryden, "An Essay of Dramatick Poesie" (1688) 4. Alexander Pope, "Essay on Criticism" (1711) 5. William Wordsworth & Samuel Taylor Coleridge, Preface to the "Lyrical Ballads" (1800) 6. Thomas Love Peacock, "The Four Ages of Poetry" (1820) 7. Percy Bysshe Shelley, "A Defence of Poetry" (1840) 8. Matthew Arnold, Preface to the 1853 Poems 9. Robert Buchanan, "The Fleshly School of Poetry" (1871) 10. A. C. Swinburne, "Under the Microscope" (1872) 11. Walter Pater, Conclusion to "The Renaissance" (1873) 12. Oscar Wilde, "The Decay of Lying" (1889) 13. T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent" (1920) 14. F. R. Leavis, "New Bearings in English Poetry" (1932) 15. 総括 <p>以上の文献を扱う予定だが、受講生との相談により、若干変更する場合もある。</p>					
各科目の目標(達成水準)	<ul style="list-style-type: none"> ・ イギリス詩論を歴史的に考察することで、時代ごとに変遷する詩の社会的役割を理解する ・ それをもとに、現代における文学・文化の社会的役割について、自分自身の意見を形成する 					
参考文献等	随時紹介する。					
教科書	ハンドアウトを配布する。(<i>The Norton Anthology of English Literature</i> / 2vols.を使用)					
成績評価の基準と方法	授業時の研究発表(30%) 授業時のディスカッションへの積極的な貢献(20%) 期末レポート(50%)					

授業コード		授業題目	イギリス文化論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	関 良子		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究 英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究					
授業の概要	テキストをもとに、いくつかのイギリス文学作品を鑑賞する。また、抜粋を原典で講読・翻訳する作業を通し、英語読解能力を身につけるとともに、文学・文化に対する批判力を養う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション／(古英語・中英語の文学)チョーサー 2. (ルネサンスの散文と詩)スペンサー／シェイクスピア 3. (ルネサンスの散文と詩)シェイクスピア／欽定英訳聖書 4. (ピューリタン文学／王政回復期の文学)ミルトン／バニヤン 5. (ピューリタン文学／王政回復期の文学)ダン／ポーブ 6. (18世紀小説)リチャードソン／オースティン 7. (ロマン主義詩)ワーズワース／シェリー／キーツ 8. (19世紀詩)テニスン／ブラウニング／アーノルド 9. (19世紀小説)ディケンズ／サッカレー 10. (19世紀小説)シャーロット・ブロンテ／エミリー・ブロンテ 11. (19世紀小説)ジョージ・エリオット／ハーディ 12. (20世紀文学)イエイツ／T・S・エリオット／ジェイムズ 13. (20世紀小説)D・H・ロレンス／ジョイス 14. (20世紀文学)ウルフ／ラーキン／ヒューズ 15. (20世紀文学)ファウルズ／ドラブル 					
各科目の目標(達成水準)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英文学史に残る文学作品をいくつか鑑賞することで、英文学の変遷を理解する ・ 原典からの抜粋を読むことで、文学鑑賞のための感性と英語読解能力を身につける 					
参考文献等	中村邦生・木下卓・大神田文二編著『たのしく読めるイギリス文学』(ミネルヴァ書房, 1994年) 高田賢一・野田研一・笹田直人編著『たのしく読めるアメリカ文学』(ミネルヴァ書房, 1994年) その他、随時紹介する。					
教科書	清宮倫子・清宮協子編著『よくわかるイギリスの文学』(南雲堂, 2011年)					
成績評価の基準と方法	授業時のディスカッションへの積極的な貢献(30%) 期末試験またはレポート(70%)					

授業コード		授業題目	イギリス文化論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	関 良子			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	19世紀イギリス文化・文学に見られる中世主義の研究 英国の文学・芸術・文化に表出された時代表象に関する研究					
授業の概要	受講生が選んだイギリス文学作品について、作品を精読した後、それに関する論文を収集し、研究動向を整理する。さらに、それらの研究動向を踏まえた上で、自身のテーマを見つけ、レポートを作成する。					
授業計画	<p>本授業は、受講生が主体的に授業計画を立て、その計画をもとに最終レポートを作成する。一連の作業を通して、リサーチ・マネジメント力をつけることを狙いとしている。</p> <p>以下の授業計画は、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』を選んだ場合の計画例である。</p> <ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 『高慢と偏見』精読(第1～10章) 同時に、関連論文を整理し、リーディングリストを作成 『高慢と偏見』精読(第11～20章) 同時に、関連論文を整理し、リーディングリストを作成 『高慢と偏見』精読(第21～30章) 同時に、関連論文を整理し、リーディングリストを作成 『高慢と偏見』精読(第31～40章) 同時に、関連論文を整理し、リーディングリストを作成 『高慢と偏見』精読(第41～50章) 同時に、関連論文を整理し、リーディングリストを作成 『高慢と偏見』精読(第51～61章) リーディングリストの提出 先行研究の概要を紹介・論評 先行研究の概要を紹介・論評 先行研究の概要を紹介・論評 先行研究の概要を紹介・論評 レポートのテーマを決定 中間発表 レポート草稿の提出・フィードバック 最終レポートの提出・フィードバック 					
各科目の目標(達成水準)	<ul style="list-style-type: none"> 文学作品を精読する読解力を身につける(close reading) 関連する論文を収集して、研究動向を整理する力を身につける(literature review) 先行研究を踏まえた上で、独自のテーマを見つけ、論文を作成する(essay writing) 					
参考文献等	随時紹介する。					
教科書	受講生と相談の上、決定する					
成績評価の基準と方法	授業時の研究発表(30%) 授業時のディスカッションへの積極的な貢献(20%) 期末レポート(50%)					

授業コード		授業題目	移行経済論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	塩原 俊彦		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	なし					
教員研究テーマ	ロシア地域論、権力論、資源論、軍事研究					
授業の概要						
授業計画	<p>移行経済諸国の体制移行問題を考察する。英語の論文を読んで、内容を吟味する。世界最高水準の学問レベルを検証し、その問題点を探る。毎回、テキストを指定し、その内容のまとめ、問題点の発表を課す。移行経済諸国のうち、とくにロシアを考察対象とするが、カザフスタン、ウクライナとの比較など、比較経済研究に重点を置く。なお、19-20年度科学研究費補助金による研究に合わせて、「ロシアと中国の資源・軍事関係をめぐる総合的研究」にとくに力を入れたい。</p>					
各科目の目標(達成水準)	世界最高水準の研究					
参考文献等	<p>いずれも拙著。『パイプラインの政治経済学』(法政大学出版局、2007年)、『ロシア資源産業の「内部」』(アジア経済研究所、2006年)、『ロシア経済の真実』(東洋経済新報社、2005年)、『現代ロシアの経済構造』(慶應義塾大学出版会、2004年)、『ロシアの軍需産業』(岩波書店、2003年)</p>					
教科書	なし。必要に応じて指定。					
成績評価の基準と方法	レポート内容と討論姿勢。					

授業コード		授業題目	移行経済論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	塩原 俊彦		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語に精通していることが望ましい					
教員研究テーマ	ロシア地域研究					
授業の概要						
授業計画	ガイダンス後、研究成果の報告を3回程度、行ってもらう。英語文献を必ず読破すること。					
各科目の目標(達成水準)	英語文献を読みこなす力を養う。					
参考文献等	拙稿(Oversights in Russia's Corporate Governance: The Case of the Oil and Gas Industry, Dependent on Oil and Gas: Russia's Integration into the World Economy, <i>Slavic Research Center</i> , Hokkaido University, pp. 85-114)など。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	報告と授業態度で判定。					

授業コード		授業題目	スラブ社会論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	塩原 俊彦		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	ロシア地域研究				
授業の概要					
授業計画	<p>第1回目のガイダンスにおいて、購読図書を選択してもらおう。数冊のなかから、当面、1冊を選んで、その内容について報告してもらおう。候補となる図書は未定だが、いずれも英語の本である。</p>				
各科目の目標(達成水準)					
参考文献等					
教科書					
成績評価の基準と方法					

授業コード		授業題目	スラブ社会論演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	塩原 俊彦		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	英語に精通していることが望ましい				
教員研究テーマ	ロシア地域研究				
授業の概要					
授業計画	ガイダンス後、研究成果の報告を3回程度、行ってもら。英語文献を必ず読破すること。				
各科目の目標(達成水準)	英語文献を読みこなす力を養う。				
参考文献等	拙稿(Oversights in Russia's Corporate Governance: The Case of the Oil and Gas Industry, Dependent on Oil and Gas: Russia's Integration into the World Economy, <i>Slavic Research Center, Hokkaido University</i> , pp. 85-114)など。				
教科書	なし				
成績評価の基準と方法	報告と授業態度で判定。				

授業コード		授業科目	西洋社会経済思想史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	森 直人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	市民社会論特論および市民社会論演習を履修していること。					
教員研究テーマ	「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に、十八世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの思想におけるこの概念の意味と含意の研究。					
授業の概要	この授業では、市民社会論特論および演習の履修を前提としつつ、スペイン帝国に関わる「文明と野蛮」の言説の歴史を、さらにブリテンおよびフランスの帝國的支配と比較して理解することを目指す。本授業の大枠の狙いは、引き続き英語圏の思想史研究の目的と方法の理解、その蓄積を活用するスキルの発展、その基本的な知見についての理解の拡張であり、これは授業参加者が自分自身で思想史的研究を行うための基盤的なスキル・知見を身につけることを目的としている。					
授業計画	<p>本授業では、市民社会論特論および演習の履修を前提として、帝国と文明／野蛮の図式について、さらに幅広い思想的構図の下で理解することを試みる。</p> <p>市民社会論特論では、スペイン帝国の先住民支配をめぐる諸言説に即して、「西洋と非西洋」の接触および文明と野蛮の図式に関わる問題を検討している。また市民社会論演習では、市民の概念、帝国の支配、そして文明／野蛮の図式を、ヨーロッパの政治思想のより広い構図の中で検討している。この授業では、さらに近世のスペイン、ブリテン（イギリス）、フランスが形成した三つの帝国のありかたについて、それを捉え正当化するために用いられた諸言説を分析したバグデンの著作を検討し、その中で帝国をめぐる言説および文明と野蛮の図式をより深く理解することを目指す。</p> <p>Pagden, Anthony (1995), <i>The Lords of All the World: Ideologies of Empire in Spain, Britain and France, c.1500-c.1800</i> (Yale University Press)</p> <p>具体的な授業の進め方は、市民社会論特論および演習と同様である。各回の授業計画は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> ガイダンス：授業のテーマ、目的、進め方の説明。文献の読み方、参考資料の探し方に関する解説 対象とする文献の概要、位置づけ、意義、特質の把握—書評などから。 イントロダクションの検討 第一章「ローマの遺産」の検討 第二章「世界君主政」の検討（前半） 第二章「世界君主政」の検討（後半） 第三章「征服と植民」の検討（前半） 第三章「征服と植民」の検討（後半） 第四章「拡大と維持」の検討（前半） 第四章「拡大と維持」の検討（後半） 第五章「首都と植民地」の検討（前半） 第五章「首都と植民地」の検討（後半） 第六章「利益の計算」の検討 第七章「帝国から連邦へ」の検討 全体の議論のまとめ、期末レポートの説明と構想 期末レポートのプレゼンテーションと検討 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 英語圏の政治／社会思想史研究の蓄積を適切に理解し活用するスキルを得る（資料の検索、入手、読解、論理構造の把握、自身の視点からの再構成など） The Lords of All the Worldの研究事例に基づき、英語圏の政治／社会思想史研究の目的と方法について一定の理解を得る 上の文献の内容に基づき、「文明と野蛮」の図式が、ヨーロッパの三つの帝國的支配（スペイン、ブリテン、フランス）において、それぞれどのような意義を持ったか、という点について一定の理解を得る。 以上のスキルと理解に基づき、この授業で得た知見を参加者自身の研究関心に基づいて再構成し、期末レポートとして論理的に表現する 					
参考文献等	<p>アーミテージ、デイヴィッド『帝国の誕生：ブリテン帝国のイデオロギーの起源』（日本経済評論社）</p> <p>石原保徳（1980）、『インディアスの発見—ラス・カサスを読む』（田畑書店）</p> <p>エリオット、J.H.（2009）、『スペイン帝国の興亡』（岩波書店）</p> <p>エリオット、J.H.（2005）、『新世界と旧世界』（岩波書店）</p> <p>国本伊代（2001）、『概説ラテン・アメリカ史』（新評論）</p> <p>コリー、リンダ（2000）、『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会）</p> <p>近藤和彦（1998）『文明の表象 英国』（山川出版社）</p> <p>竹田英尚（2000a）、『文明と野蛮のディスコース：異文化支配の思想史（2）』（ミネルヴァ書房）</p> <p>竹田英尚（2000b）、『キリスト教のディスコース：異文化支配の思想史（2）』（ミネルヴァ書房）</p> <p>中谷猛・足立幸男（編）（1994）、『概説西洋政治思想史』ミネルヴァ書房</p> <p>バグデン、アンソニー（2006）『民族と帝国』（ランダムハウス講談社）</p> <p>ポーター、ロイ（2004）、『啓蒙主義』（岩波書店）</p> <p>松森奈津子（2009）、『野蛮から秩序へ：インディアス問題とサマランカ学派』（名古屋大学出版会）</p>					
教科書	Pagden, Anthony (1995), <i>The Lords of All the World: Ideologies of Empire in Spain, Britain and France, c.1500-c.1800</i> (Yale University Press)					
成績評価の基準と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・上の達成水準①については、毎回の授業時の議論の中で、スキルの向上を評価する（30%） ・達成水準②・③については、毎回の授業時の議論、および授業後に提出してもらった議論のまとめ（レジュメ）に基づき、理解度を評価する（30%） ・達成水準④については、期末に作成されるレポートにより、以上のスキル・知見を活用して論理的な文章に構成できているかを総合的に評価する（40%） 					

授業コード		授業科目	西洋社会経済思想史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	森 直人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	市民社会論特論・市民社会論演習・西洋社会経済思想史特論を履修していること。文献の調査に対して関心と意欲を持ち続けること。					
教員研究テーマ	「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。					
授業の概要	この授業では、市民社会論特論・同演習・西洋社会経済思想史特論の履修を前提としつつ、スペイン帝国に関わる「文明と野蛮」の言説の歴史について、さらに関連する幾つかの研究を、それぞれごく選択的・限定的に読解する。これは、ここまで得られた基本的な知見やスキルに基づいて、参加者が自らの理解をさらに拡張して行くことを狙いとしており、自分自身で思想的な研究を行うための基盤的なスキル・知見をさらに高めることを目的としている。					
授業計画	<p>この演習では、市民社会論特論および演習、西洋社会経済思想史の履修を前提として、引き続き帝国、西洋／非西洋、人間／市民／政治共同体、そして文明と野蛮の図式について、主に英語圏の思想史研究の蓄積の理解を試みる。本授業では、先行する三つの授業で得た知見とスキルに基づいて、より幅広い文献の中でこれらの図式に関する理解や論点を収集して行く。具体的に扱う文献については、参加者自身の研究関心と資料の検索によって最終的に決定して行くが、現在想定している資料に基づく暫定的な授業計画を以下に示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス：授業のテーマ、目的、進め方の説明。文献の読み方、参考資料の探し方に関する解説 2. 参考資料の検索。それぞれの資料の概要、位置づけ、意義、特質の把握―書評などから 3. 参考資料の概要と論点の把握：Pagden, Anthony (1990), <i>Spanish Imperialism and the Political Imagination</i> (Yale University Press), イントロダクション 4. 参考資料の概要と論点の把握：同上、第二章「帝国の道具（カンパネラと世界君主政スペイン）」 5. 参考資料の概要と論点の把握：同上、第四章「高貴なる野蛮人から野蛮なる貴人へ」 6. 参考資料の概要と論点の把握：同上、「帝国の終焉」 7. 参考資料の概要と論点の把握：Pagden, Anthony (1993), <i>European Encounters with the New World: From Renaissance to Romanticism</i> (Yale University Press), イントロダクション 8. 参考資料の概要と論点の把握：同上、参加者の選択した章の読解 9. 参考資料の概要と論点の把握：Pagden, Anthony (1994), <i>The Uncertainties of Empire: Essays in Iberian and Spanish-American Intellectual History</i> (Variorum)所収の論文から、序文 10. 同上「スペイン統治下アメリカ植民地におけるアイデンティティの創出」 11. 参考資料の概要と論点の把握：J.H.エリオット(2009), 『スペイン帝国の興亡』(岩波書店)、(前半) 12. 参考資料の概要と論点の把握：『スペイン帝国の興亡』(後半) 13. 参考資料の概要と論点の把握：J.H.エリオット(2005), 『新世界と旧世界』(岩波書店)、(前半) 14. 参考資料の概要と論点の把握：『新世界と旧世界』(後半) 15. 全体のまとめと期末レポートの説明 16. 期末レポートのプレゼンテーションと検討 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> ①英語圏の政治／社会思想史研究の蓄積を適切に理解し活用するスキルを得る(資料の検索、入手、読解、論理構造の把握、自身の視点からの再構成など) ②パグデンのその他の著作(<i>Spanish Imperialism</i>, <i>European Encounters</i>, <i>The Uncertainties</i>)、およびエリオットの著作(『スペイン帝国の興亡』・『新世界と旧世界』)の研究事例に基づき、英語圏の政治／社会思想史研究の目的と方法について一定の理解を得る ③上の文献の内容に基づき、「文明と野蛮」の図式に関わる思想史研究、とくにパグデンとは異なる著者の視点について、一定の理解を得る。 ④以上のスキルと理解に基づき、この授業で得た知見を参加者自身の研究関心に基づいて再構成し、期末レポートとして論理的に表現する。 					
参考文献等	<p>アーミテージ、デイヴィッド『帝国の誕生：ブリテン帝国のイデオロギー的起源』(日本経済評論社) 石原保徳(1980), 『インディアスの発見―ラス・カサスを読む』(田畑書店) エリオット、J.H.(2009), 『スペイン帝国の興亡』(岩波書店) エリオット、J.H.(2005), 『新世界と旧世界』(岩波書店) 国本伊代(2001), 『概説ラテン・アメリカ』(新評論) コリー、リンダ(2000), 『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版会) 近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』(山川出版社) 竹田英尚(2000a), 『文明と野蛮のディスクール：異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房) 竹田英尚(2000b), 『キリスト教のディスクール：異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房) 中谷猛・足立幸男(編)(1994), 『概説西洋政治思想史』(ミネルヴァ書房) パグデン、アンソニー(2006)『民族と帝国』(ランダムハウス講談社) ポーター、ロイ(2004), 『啓蒙主義』(岩波書店) 松森奈津子(2009), 『野蛮から秩序へ：インディアス問題とサマランカ学派』(名古屋大学出版会)</p>					
教科書	<p>Pagden, Anthony (1990), <i>Spanish Imperialism and the Political Imagination</i> (Yale University Press) Pagden, Anthony (1993), <i>European Encounters with the New World: From Renaissance to Romanticism</i>, (Yale University Press) Pagden, Anthony (1994), <i>The Uncertainties of Empire: Essays in Iberian and Spanish-American Intellectual History</i> (Variorum) J.H.エリオット(2009), 『スペイン帝国の興亡』(岩波書店) J.H.エリオット(2005), 『新世界と旧世界』(岩波書店)</p>					
成績評価の基準と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・上の達成水準①については、毎回の授業時の議論の中で、スキルの向上を評価する(30%) ・達成水準②・③については、毎回の授業時の議論、および授業後に提出してもらう議論のまとめ(レジュメ)に基づき、理解度を評価する(30%) ・達成水準④については、期末に作成されるレポートにより、以上のスキル・知見を活用して論理的な文章に構成できているかを総合的に評価する(40%) 					

授業コード		授業題目	市民社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	森 直人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	履修に当たって必要な知識等は要求しないが、学部卒業程度の社会思想史または市民社会論の知識があることが望ましい。					
教員研究テーマ	「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。					
授業の概要	この授業では、教員テーマとも関連しつつ、「文明と野蛮」の図式に関わる思想史研究、具体的にはアンソニー・パグデンのThe Fall of Natural Manを読解し、その内容を検討する。その狙いは、英語圏の研究蓄積を理解・活用するスキルを習得しつつ、同時に英語圏の政治／社会思想史研究の目的・方法・基本的な知見を得ることにある。この授業構成は、授業参加者が自分自身で思想史的研究を行うための基盤的なスキル・知見を身につけることを目的としている。					
授業計画	<p>本授業では、具体的な研究事例に基づき、思想史研究の目的と方法を学び、英語圏の研究蓄積を理解し活用するスキルを習得し、また一定程度共有されている基本的な知見を理解することを目指す。</p> <p>研究事例として選択するのは、アメリカ先住民支配の正当性をめぐって近世のスペインで展開された諸言説の歴史を追った以下の文献である。</p> <p>Pagden, Anthony (1982), <i>The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology</i>, (Cambridge University Press)</p> <p>パグデンは、60年代以降の英語圏の思想史研究に多大な影響を及ぼしたJ.G.A. Pocockの手法を引き継ぎ、人間と市民、帝国と植民地、文明と野蛮、西洋と非西洋の関係をテーマとして多数の研究を発表する歴史研究者であり、本書は本授業の目的から見て非常に有益な題材と言える。</p> <p>なお、この授業では、比較的難易度の高い英文の研究書の読解と内容把握を試みることとなる。そこでこの授業では、どのように研究書を読解し、論理構成を把握し、論点を定式化し、それらの内容をレジュメの形式にまとめる(記録する・発表する)か、そのプロセスについて、授業中に詳細な解説と指導を行う。</p> <p>したがって、授業開始時点でこれらのスキルを備えている必要はなく、むしろ授業の進行に従って少しずつこれらのスキルを習得して行くことが本授業(および市民社会論演習、西洋社会経済思想史特論、西洋社会経済思想史演習の三つの関連授業)の趣旨となる。具体的な授業計画は、以下の通り(ただし参加者の関心や授業の進度に応じて一部変更する可能性がある)。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス: 授業のテーマ、目的、進め方の説明。文献の読み方、参考資料の探し方に関する解説 2. 対象となる文献の概要、位置づけ、意義、特質の把握―書評などから。 3. イントロダクションの読解①: 本書の主題の把握 4. イントロダクションの読解②: 参加者の問題関心との関連性の明確化 5. 第一章「認識に関する問題」: 他者認識の困難さ 6. 第二章「蛮人のイメージ」: 文明と野蛮の図式の変遷 7. 第三章「自然奴隷の理論」: アリストテレスの自然奴隷説の検討(前半) 8. 第三章「自然奴隷の理論」: アリストテレスの自然奴隷説の検討(後半) 9. 第四章「自然奴隷から自然児へ」①: ビトリアを中心とするサラマンカ学派の概要と理論的基盤 10. 第四章「自然奴隷から自然児へ」②: ビトリアの議論の個別論点の検討(前半) 11. 第四章「自然奴隷から自然児へ」③: ビトリアの議論の個別論点の検討(後半) 12. 第五章「修辞学者と神学者」: セルベダの議論の検討 13. 第六章「比較民族学への試み」: ラス・カサスの議論の検討(前半) 14. 第六章「比較民族学への試み」: ラス・カサスの議論の検討(後半) 15. 全体の議論のまとめ、期末レポートの説明 16. 期末レポートに関するプレゼンテーションと検討 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> ①英語圏の政治／社会思想史研究の蓄積を適切に理解し活用するスキルを得る(資料の検索、入手、読解、論理構造の把握、自身の視点からの再構成など) ②PagdenのFall of Natural Manの研究事例に基づき、英語圏の政治／社会思想史研究の目的と方法について一定の理解を得る ③上の文献の内容に基づき、「文明と野蛮」の図式や、「アリストテレス主義」の言説など(およびそれらの歴史的変化)、英語圏の思想史研究である程度共有された知見について一定の理解を得る。 ④以上のスキルと理解に基づき、この授業で得た知見を参加者自身の研究関心に基づいて再構成し、期末レポートとして論理的に表現する 					
参考文献等	<p>アーミテージ、デイヴィッド『帝国の誕生: ブリテン帝国のイデオロギー的起源』(日本経済評論社)</p> <p>石原保徳(1980)、『インディアスの発見―ラス・カサスを読む』(田畑書店)</p> <p>エリオット、J.H.(2009)、『スペイン帝国の興亡』(岩波書店)</p> <p>エリオット、J.H.(2005)、『新世界と旧世界』(岩波書店)</p> <p>国本伊代(2001)、『概説ラテン・アメリカ史』(新評論)</p> <p>コリー、リンダ(2000)、『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版会)</p> <p>近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』(山川出版社)</p> <p>竹田英尚(2000a)、『文明と野蛮のディスコース: 異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房)</p> <p>竹田英尚(2000b)、『キリスト教のディスコース: 異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房)</p> <p>中谷猛・足立幸男(編)(1994)、『概説西洋政治思想史』(ミネルヴァ書房)</p> <p>パグデン、アンソニー(2006)『民族と帝国』(ランダムハウス講談社)</p> <p>ポーター、ロイ(2004)、『啓蒙主義』(岩波書店)</p> <p>松森奈津子(2009)、『野蛮から秩序へ: インディアス問題とサラマンカ学派』(名古屋大学出版会)</p>					
教科書	Pagden, Anthony (1982), <i>The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology</i> (Cambridge University Press)					
成績評価の基準と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・上の達成水準①については、毎回の授業時の議論の中で、スキルの向上を評価する(30%) ・達成水準②・③については、毎回の授業時の議論、および授業後に提出してもらう議論のまとめ(レジュメ)に基づき、理解度を評価する(30%) ・達成水準④については、期末に作成されるレポートにより、以上のスキル・知見を活用して論理的な文章に構成できているかを総合的に評価する(40%) 					

授業コード		授業題目	市民社会論演習		単位数	2
授業種別	特論	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	森 直人		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	市民社会論特論を履修していること。文献の調査に対して関心と意欲を持ち続けること。					
教員研究テーマ	「文明」の概念の意味内容と作用についての研究。特に18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの「文明」に関わる思想の研究。					
授業の概要	この授業は、市民社会論特論の履修を前提として、英語圏の思想史研究の裾の広がりの中で、「文明と野蛮」の図式がどのような位置にあり、どんな諸言説を前提としているかについて検討する。英語圏の研究蓄積を理解し活用するためのスキルの習得、その思想史研究の目的と方法の理解という大枠の狙いは特論と同様であるが、本授業では英語圏の思想史研究の蓄積をより広く視野に入れることに力点を置いている。この授業構成は、授業参加者が自分自身で思想的な研究を行うための基盤的なスキル・知見を身につけることを目的としている。					
授業計画	<p>市民社会論特論では、スペインによる先住民支配を正当化しない批判する言説の歴史を辿っている。市民社会論演習では、これらの言説がヨーロッパの政治思想の中でどのような位置づけを持つのか、という問いを中心に、関連する資料・文献を検討する。具体的には、以下の三点の研究書を対象とし、引き続きバグデンの研究を軸としつつ、彼が編集した論文集の幾つかの論文も併せて検討する。</p> <p>①Pagden, Anthony (ed.) (1987), <i>The Languages of Political Theory in Early-Modern Europe</i> (Cambridge University Press)</p> <p>②Pagden, Anthony (ed.) (2002), <i>The Idea of Europe from Antiquity to the European Union</i> (Cambridge University Press)</p> <p>③Pagden, Anthony (2013), <i>The Enlightenment – and why it still matters</i> (Oxford University Press)</p> <p>なお、これらの文献全てを消化するのは当然困難であるので、各文献のイントロダクションでその概要を把握した上で、以下に示すトピックとの関連で最も重要と思われる部分を選択的に読解・検討することを予定している。</p> <p>具体的なトピックは、第一に、バグデンが示したアリストテレス主義的な人間／市民／政治共同体の理解と、それに基づいたスペイン帝国の異民族支配に関する議論が、ヨーロッパの政治思想の歴史の中でどのような文脈、どのような位置づけにあるのか、という点であり、この点を①の文献に基づいて検討する。</p> <p>第二に、「ヨーロッパの政治思想」と言いながら、不問にされがちな問いとして、「ヨーロッパ」とはそもそもどこなのか、何であるのか、という問いを、②の文献に基づいて検討する。この点は、「西洋」から見た「文明と野蛮」の図式を検討する上でも、特に重要である。そこでは、特に17世紀末から19世紀初頭にかけての啓蒙思想が、現在の「ヨーロッパ」のイメージが形作られる大きな要因となったことが議論される。</p> <p>第三に、ではその啓蒙とは何であるのかという(ほとんど回答不可能な)問いについて、西洋と非西洋の接触を研究し続けるバグデンの最新の著作③に基づいて、一定の理解を得ることを試みる。</p> <p>なお、具体的な授業の進め方は、市民社会論と同様である。各回の授業計画は以下の通り(ただし、参加者の関心や授業の進度に従って一部変更の可能性あり)。</p> <ol style="list-style-type: none"> ガイダンス: 授業のテーマ、目的、進め方の説明。文献の読み方、参考資料の探し方に関する解説 本授業で扱う三点の著作の概要、位置づけ、意義、特質の把握—書評などから。 文献①のイントロダクション: ヨーロッパにおける政治言説の類型と意義について 文献①「言説の概念」について 文献①「アメリカ先住民の所有権をめぐる議論」について 文献②のイントロダクション: ヨーロッパとは? そのアイデンティティは? 文献②「一つの大陸を概念化すること」について 文献②「複数のヨーロッパとその歴史」について 文献②「ヨーロッパ人の自己意識」について 文献③のイントロダクション: 「啓蒙」とは? その問題性とは? 文献③「人間の学」について 文献③「自然人の発見」について 文献③「文明の擁護」について 文献③のコンクルージョンについて 全体の議論のまとめ、期末レポートについての説明、構想 期末レポートに関するプレゼンテーションと検討 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 英語圏の政治／社会思想史研究の蓄積を適切に理解し活用するスキルを得る(資料の検索、入手、読解、論理構造の把握、自身の視点からの再構成など) Pagdenの三つの著作(<i>The Languages of Modern Political Theory</i>, <i>The Idea of Europe</i>, <i>The Enlightenment</i>)の研究事例に基づき、英語圏の政治／社会思想史研究の目的と方法について一定の理解を得る 上の文献の内容に基づき、「文明と野蛮」の図式の背景や前提となる思想史的な知見(「言説language」とは何か、ヨーロッパとは、啓蒙とは)について一定の理解を得る。 以上のスキルと理解に基づき、この授業で得た知見を参加者自身の研究関心に基づいて再構成し、期末レポートとして論理的に表現する 					
参考文献等	<p>アーミテージ、デイヴィッド『帝国の誕生: ブリテン帝国のイデオロギーの起源』(日本経済評論社)</p> <p>石原保徳(1980)、『インディアスの発見—ラス・カサスを読む』(田畑書店)</p> <p>エリオット、J.H.(2009)、『スペイン帝国の興亡』(岩波書店)</p> <p>エリオット、J.H.(2005)、『新世界と旧世界』(岩波書店)</p> <p>国本伊代(2001)、『概説ラテン・アメリカ史』(新評論)</p> <p>コリー、リンダ(2000)、『イギリス国民の誕生』(名古屋大学出版会)</p> <p>近藤和彦(1998)『文明の表象 英国』(山川出版社)</p> <p>竹田英尚(2000a)、『文明と野蛮のディスカール: 異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房)</p> <p>竹田英尚(2000b)、『キリスト教のディスカール: 異文化支配の思想史(2)』(ミネルヴァ書房)</p> <p>中谷猛・足立幸男(編)(1994)、『概説西洋政治思想史』(ミネルヴァ書房)</p> <p>バグデン、アンソニー(2006)『民族と帝国』(ランダムハウス講談社)</p> <p>ポーター、ロイ(2004)、『啓蒙主義』(岩波書店)</p> <p>松森奈津子(2009)、『野蛮から秩序へ: インディアス問題とサマランカ学派』(名古屋大学出版会)</p>					
教科書	<ol style="list-style-type: none"> Pagden, Anthony (ed.) (1987), <i>The Languages of Political Theory in Early-Modern Europe</i> (Cambridge University Press) Pagden, Anthony (ed.) (2002), <i>The Idea of Europe from Antiquity to the European Union</i> (Cambridge University Press) Pagden, Anthony (2013), <i>The Enlightenment – and why it still matters</i> (Oxford University Press) 					
成績評価の基準と方法	<ul style="list-style-type: none"> 上の達成水準①については、毎回の授業時の議論の中で、スキルの向上を評価する(30%) 達成水準②・③については、毎回の授業時の議論、および授業後に提出してもらった議論のまとめ(レジュメ)に基づき、理解度を評価する(30%) 達成水準④については、期末に作成されるレポートにより、以上のスキル・知見を活用して論理的な文章に構成できているかを総合的に評価する(40%) 					

授業コード		授業題目	中国経済発展論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	佐野 健太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	現代中国経済の実証的分析、景気対策の経済効果。					
授業の概要	中国景気対策の経済効果について検討する予定。					
	1 国内総生産 2 消費・生産・所得 3 乗数メカニズム 4 投入産出分析 5 市場メカニズムの理解 6 中国の景気後退 7 景気対策・総論 8 景気対策・住宅建設 9 景気対策・家電製品 10 景気対策・自動車購入 11 物価の高騰 12 住宅価格の高騰 13 中国人民銀行の金融政策 14 景気対策の経済効果 15 まとめ					
各科目の目標(達成水準)	修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にする。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	開講時に受講者と相談して決める。					
成績評価の基準と方法	出席と報告などで評価する。					

授業コード		授業題目	中国経済発展論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	佐野 健太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	現代中国経済の実証的研究、株価決定理論					
授業の概要	本演習では、中国の経済発展過程を分析するのに必要と思われる、マクロ経済学の考え方を、以下の順序で検討する					
授業計画	<p>1マクロ経済学とは 2マクロ経済学における需要と供給 3有効需要と乗数メカニズム 4貨幣の機能 5マクロ経済政策 6インフレと失業 7財政政策のマクロ経済分析 8経済成長と経済発展 9IS-LM分析 10物価の決定、 11国際金融と国際マクロ経済学 12ミクロ経済学とは 13需要と供給 14市場取引と資源配分 15まとめ。</p>					
各科目の目標(達成水準)	修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にする。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	開講時に、受講生と相談しながら決める。					
成績評価の基準と方法	出席と報告などで評価する。					

授業コード		授業題目	中国経済社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	佐野 健太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	現代中国経済の実証的研究、株価決定理論					
授業の概要	本講義では、2008年のリーマン・ショック以降の中国経済を、景気対策の経済効果という側面から説明してゆく予定					
	1はじめに 2国内総生産 3消費と生産・所得 4乗数 5投入産出分析 6市場メカニズムの理解—ケインジアンと新古典派— 7リーマンショック後の中国の景気後退 8景気対策の経済効果(1) 9景気対策の経済効果(2) 10景気対策の経済効果(3) 11景気対策の経済効果(4) 12物価の高騰 13住宅価格の高騰 14中国人民銀行の金融政策 15まとめ					
各科目の目標(達成水準)	中国の景気対策の経済効果を理解すること。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	玉置・山澤 中国の金融はこれからどうなるのか 東洋経済新報社、2005年。					
成績評価の基準と方法	出席・発表・レポートによる総合的評価。					

授業コード		授業題目	中国経済社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	佐野 健太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	現代中国経済の実証的研究、株価決定理論					
授業の概要	本演習では、中国の経済発展過程を分析するのに必要と思われる、マクロ経済学の考え方を、以下の順序で検討する予定。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 中国経済のマクロ・コントロール <ol style="list-style-type: none"> (1) 中国人民銀行による金融政策 <ol style="list-style-type: none"> 1) 預金・貸出基準金利 2) 預金準備率操作 3) 公開市場操作 4) 外国為替市場への介入 (2) 株価・地価と金融政策 2. マクロ・コントロールと実物経済 <ol style="list-style-type: none"> (1) 企業改革 <ol style="list-style-type: none"> 1) 取締役会の強化 2) 流通株主の発言力強化 3) 利益拡大を目標にした企業経営 4) 過剰流動性と過剰投資 3. (2) 金融引き締めとその限界 4. マクロ・コントロールと対外経済 <ol style="list-style-type: none"> (1) 過剰投資の功罪 <ol style="list-style-type: none"> 1) 合併工場建設による国を挙げての技術吸収 2) 余剰人員吸収の受け皿 3) 輸出依存 4) 人民元高とドル買い介入 (2) 過剰投資と金融引き締め 					
各科目の目標(達成水準)	修士論文を作成するうえで必要な基礎学力を身につけることを目標にする。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	開講時に受講生と相談しながら決定する。					
成績評価の基準と方法	出席と報告などにより評価する。					

授業コード		授業題目	アジア経済社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	岩佐 和幸		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	アジア経済社会論					
授業の概要	<p>アジア経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。今回は、アジアの都市論に焦点を当てる。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p>					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 反乱する都市：金融危機の震源地としての都市 3 反乱する都市：都市 commons の創出 4 反乱する都市：レントの技法 5 反乱する都市：二〇一一年ロンドン 6 反乱する都市：ウォールストリート占拠(OWS) 7 反乱する都市：来たる都市革命 8 反乱する都市：「都市への権利」から都市革命へ 9 都市の公共と非公共：序章 10 都市の公共と非公共：1章 11 都市の公共と非公共：2章 12 都市の公共と非公共：3章 13 都市の公共と非公共：4章 14 都市の公共と非公共：5章 15 都市の公共と非公共：6章 					
各科目の目標(達成水準)	アジア経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	<p>昨年度は、E.フィッティング『壊国の契約：NAFTA下メキシコの苦悩と抵抗』農文協、2012年を取り上げた。今回は、D. ハーヴェイ『反乱する都市』作品社、2013年、高嶋修一・名武なつ紀編『都市の公共と非公共－20世紀の日本と東アジア－』日本経済評論社、2013年を候補に取り上げる</p>					
成績評価の基準と方法	出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。					

授業コード		授業題目	アジア経済社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	岩佐 和幸		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	アジア経済社会論					
授業の概要	<p>アジア経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。今回は、アジアの農業・農村に焦点を当てる。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入りたい。</p>					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 家族農業の今日的価値 序章 3 家族農業の今日的価値 1章1～2節 4 家族農業の今日的価値 1章3節 5 家族農業の今日的価値 2章1節 6 家族農業の今日的価値 2章2節 7 家族農業の今日的価値 3章1節 8 各自研究中間発表 9 家族農業の今日的価値 3章2節 10 家族農業の今日的価値 3章3節 11 家族農業の今日的価値 3章4節 12 家族農業の今日的価値 4章1節 13 家族農業の今日的価値 4章2節 14 家族農業の今日的価値 勧告 15 各自研究最終発表 					
各科目の目標(達成水準)	アジア経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	FAO食料保障・栄養供給専門家ハイレベルパネル(農林中金総合研究所・家族農業研究会訳)『家族農業の今日的価値－食料保障のための小規模農業への投資－(仮)』農文協、2014年予定。					
成績評価の基準と方法	出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。					

授業コード		授業題目	グローバル経済論特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	岩佐 和幸			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	アジア経済社会論					
授業の概要	<p>グローバル経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。とりわけ、国境を越える資本をめぐる構造・動態とオルタナティブに注目しながら授業を進めていきたい。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p>					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 Capitalist Globalization: Introduction 3 Capitalist Globalization: Ch.1 pp.13-26. 4 Capitalist Globalization: Ch.1 pp.26-42. 5 Capitalist Globalization: Ch.1 pp.42-55. 6 Capitalist Globalization: Ch.1 pp.55-69. 7 Capitalist Globalization: Ch.2 pp.71-82. 8 Capitalist Globalization: Ch.2 pp.82-89.各自研究発表 9 Capitalist Globalization: Ch.3 pp.90-106. 10 Capitalist Globalization: Ch.3 pp.106-130. 11 Capitalist Globalization: Ch.4 pp.131-146. 12 Capitalist Globalization: Ch.4 pp.146-156. 13 Capitalist Globalization: Ch.5 pp.157-176. 14 Capitalist Globalization: Ch.6 pp.177-198. 15 テキストを基に、各自調査研究発表 					
各科目の目標(達成水準)	グローバル経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	M.Hart-Landsberg, Capitalist Globalization, Monthly Review Press, 2013を取り上げる。邦訳を予定しており、刊行次第、並行して扱う。					
成績評価の基準と方法	出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。					

授業コード		授業題目	グローバル経済論演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	岩佐 和幸			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	アジア経済社会論					
授業の概要	<p>グローバル経済論特論に続き、グローバル経済をめぐる最新のトピックならびに理論的動向について、代表的な文献を素材に検討する。とりわけ、国境を越える資本をめぐる構造・動態とオルタナティブに注目しながら授業を進めていきたい。あわせて、輪読と並行して、参加者個々の研究発表を随時盛り込むことを予定している。なお、毎年参加者が多様であることから、関心・進捗度に応じて、それにふさわしいテキストを選択することも考慮に入れたい。</p>					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 領土・権威・諸権利 1章 3 領土・権威・諸権利 2章 4 領土・権威・諸権利 3章1～3 5 領土・権威・諸権利 3章4～7 6 領土・権威・諸権利 4章1～2 7 領土・権威・諸権利 4章3～4 8 領土・権威・諸権利 5章1～3 9 領土・権威・諸権利 5章4～6 10 領土・権威・諸権利 6章1～4 11 領土・権威・諸権利 6章5～8 12 領土・権威・諸権利 7章 13 領土・権威・諸権利 8章 14 領土・権威・諸権利 9章 15 テキストを踏まえ、各自研究発表 					
各科目の目標(達成水準)	グローバル経済をめぐる理論・現状について、構造的に理解し、自らの研究の指針とすることができるようになること。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	サスキア・サッセン『領土・権威・諸権利』明石書店、2011等を取り上げる予定。					
成績評価の基準と方法	出席・発表ならびに講義への参加状況をもとに総合評価。					

授業コード		授業題目	ラテンアメリカ経済社会論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中西 三紀		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	ラテンアメリカの経済・社会に関する講義を受講したことがある者が望ましい。					
教員研究テーマ	ラテンアメリカの経済・経済史、農業 チリの経済・経済史、農業・農村史、社会					
授業の概要	前半部分で第二次世界大戦以前のラテンアメリカの経済構造を概観し、そこで得られた知識を出発点として、1980年代以降、グローバル化時代のラテンアメリカの経済構造について検討する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーリング 2. 19世紀後半の世界経済構造とラテンアメリカ経済(1)国際分業とラテンアメリカ 3. 19世紀後半の世界経済構造とラテンアメリカ経済(2)一次産品輸出経済 4. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(1)世界大恐慌の打撃 5. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(2)輸入代替工業化 6. 世界大恐慌とラテンアメリカ経済(3)中間層の台頭 7. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(1)南北問題 8. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(2)天然資源の恒久的主権 9. 第二次世界大戦後のラテンアメリカ経済(3)冷戦構造 10. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(1)累積債務危機発生の要因 11. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(2)新自由主義と構造改革 12. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(3)民営化 13. 累積債務危機とラテンアメリカ経済の構造変化(4)新一次産品輸出 14. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(1)マクロ経済の動向 15. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(2)社会問題 16. グローバリゼーション下のラテンアメリカ経済(3)新しい経済政策の模索 					
各科目の目標(達成水準)	ラテンアメリカの社会経済構造の変遷および世界経済構造においてラテンアメリカが占める位置に留意しつつ、19世紀から今日に至るまでのラテンアメリカの資本主義的発展について理解すること。					
参考文献等	ビクター・バルマス＝トーマス著/田中高他訳『ラテンアメリカ経済史』名古屋大学出版会、2001年。 エドゥアルド・ガレーノ著/大久保光夫訳『収奪された大地』新評論、1986年。 今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。					
教科書	特に指定しない。 上記参考文献を各自にて有効に活用すること。					
成績評価の基準と方法	期末に提出するレポートにて判断する。					

授業コード		授業題目	ラテンアメリカ経済社会論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中西 三紀			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	英語で書かれた社会科学系の文献を読解できる英語力を必要とする。 スペイン語の読解能力を有していればなお望ましい。 第1回の講義にて担当および報告日を決定するので、受講を希望する者は必ず出席すること。					
教員研究テーマ	ラテンアメリカの経済・経済史、農業 チリの経済・経済史、農業・農村史、社会					
授業の概要	ラテンアメリカ経済社会論特論での知識を土台として、ラテンアメリカの経済発展に関する文献を参加者全員で精読し、報告担当者のレジメを基にディスカッションを行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーリング：下記の参考文献欄にあげた文献を中心としつつ、受講生の問題意識に基づき文献および参加者の担当箇所・報告日を決定する。 2. 報告担当者による発表とディスカッションーシモン・ポリール 3. 報告担当者による発表とディスカッションーファン・パウティスタ・アルベルディ 4. 報告担当者による発表とディスカッションードミンゴ・サルミエント 5. 報告担当者による発表とディスカッションーホセ・マルティ 6. 報告担当者による発表とディスカッションーリカルド・フロレンス＝マゴン 7. 報告担当者による発表とディスカッションーホセ・マリアテギ 8. 報告担当者による発表とディスカッションーフレイレ(1) 9. 報告担当者による発表とディスカッションーフレイレ(2) 10. 報告担当者による発表とディスカッションーファン・ドミンゴ・ペロン 11. 報告担当者による発表とディスカッションーラウル・プレビッシュ(1) 12. 報告担当者による発表とディスカッションーラウル・プレビッシュ(2) 13. 報告担当者による発表とディスカッションーフィデル・カストロ 14. 報告担当者による発表とディスカッションーグスタボ・グティエレス 15. 報告担当者による発表とディスカッションーフェルナンド・エンリケ・カルドーゾ 					
各科目の目標(達成水準)	ラテンアメリカの現状に対する理解を深めるとともに、そうした現実から構築された理論を検討し理解すること。					
参考文献等	今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。 クリストバル・カイ著/吾郷健二監訳『ラテンアメリカ従属論の系譜』大村書店、2002年。 アンドレ・G・フランク著/西川潤訳『世界資本主義とラテンアメリカ』岩波書店、1978年。					
成績評価の基準と方法	研究発表の内容、ディスカッションへの参加度合い、期末に提出するレポートから総合的に判断する。					
成績評価の基準と方法						

授業コード		授業題目	グローバル経済論特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中西 三紀		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語で書かれた社会科学系の文献を読解できる英語力を必要とする。					
教員研究テーマ	ラテンアメリカの経済・経済史、農業 チリの経済・経済史、農業・農村史、社会					
授業の概要	前半部分で新自由主義に基づく経済・社会政策が世界的規模で採用されていく背景を概観し、そこで得られた知識を土台として新自由主義理論について考察し、そのもとで生じている世界経済の構造変化を検討する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーリング 2. 第二次世界大戦後の世界経済構造(1)IMF・GATT体制 3. 第二次世界大戦後の世界経済構造(2)途上国 4. 1980年代以降の世界経済構造の変化(1)パクスアメリカーナの動揺から衰退 5. 1980年代以降の世界経済構造の変化(2)レーガノミクス 6. 新自由主義理論の検討(1)市場原理主義 7. 新自由主義理論の検討(2)規制緩和と小さな政府 8. 新自由主義理論の検討(3)米国における新自由主義 9. 新自由主義理論の検討(4)日本における新自由主義 10. 新自由主義理論の検討(5)ラテンアメリカにおける新自由主義 11. グローバリゼーション下の構造変化(1)世界貿易システム 12. グローバリゼーション下の構造変化(2)多国籍企業 13. グローバリゼーション下の構造変化(3)新興国の台頭 14. グローバリゼーション下の構造変化(4)南南問題 15. グローバリゼーション下の構造変化(5)格差問題 					
各科目の目標(達成水準)	「グローバリゼーション」と称される社会・経済構造の一大変容をもたらした要因とそれを推進した理論を検討し、現実が生じている構造変化に目を配りつつその功罪について理解を深めること。					
参考文献等	デヴィッド・ハーヴェイ『ネオリベラリズムとは何か』青土社、2007年。 デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義—その歴史的展開と現在』作品社、2007年。 石黒一憲『世界貿易体制の法と経済』慈学社、2007年。					
教科書	特に指定しない。 上記参考文献を各自にて有効に活用すること。					
成績評価の基準と方法	期末に提出するレポートにて判断する。					

授業コード		授業題目	グローバル経済論演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中西 三紀		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語で書かれた社会科学系の文献を読解できる英語力を必要とする。 第1回の講義にて担当および報告日を決定するので、受講を希望する者は必ず出席すること。					
教員研究テーマ	ラテンアメリカの経済・経済史、農業 チリの経済・経済史、農業・農村史、社会					
授業の概要	グローバル経済論特論Ⅱでの知識を土台として、現代世界経済の構造変化に関する文献を参加者全員で精読し、報告担当者のレジメを基にディスカッションを行う。					
授業計画	<p>1. オリエンテーリング：下記の参考文献欄にあげた文献を中心としつつ、受講生の問題意識に基づき文献および参加者の担当箇所・報告日を決定する。</p> <p>2. 報告担当者による発表とディスカッションー新自由主義理論台頭の背景・本文読解(1)</p> <p>3. 報告担当者による発表とディスカッションー新自由主義理論台頭の背景・本文読解(2)</p> <p>4. 報告担当者による発表とディスカッションー新自由主義理論台頭の背景・問題検討(1)</p> <p>5. 報告担当者による発表とディスカッションー新自由主義理論台頭の背景・問題検討(2)</p> <p>6. 報告担当者による発表とディスカッションー日本の新自由主義・本文読解(1)</p> <p>7. 報告担当者による発表とディスカッションー日本の新自由主義・本文読解(2)</p> <p>8. 報告担当者による発表とディスカッションー日本の新自由主義・本文読解(3)</p> <p>9. 報告担当者による発表とディスカッションー日本の新自由主義・問題検討(1)</p> <p>10. 報告担当者による発表とディスカッションー日本の新自由主義・問題検討(2)</p> <p>11. 報告担当者による発表とディスカッションーラテンアメリカにおける構造調整政策・本文読解(1)</p> <p>12. 報告担当者による発表とディスカッションーラテンアメリカにおける構造調整政策・本文読解(2)</p> <p>13. 報告担当者による発表とディスカッションーラテンアメリカにおける構造調整政策・本文読解(3)</p> <p>14. 報告担当者による発表とディスカッションーラテンアメリカにおける構造調整政策・問題検討(1)</p> <p>15. 報告担当者による発表とディスカッションーラテンアメリカにおける構造調整政策・問題検討(2)</p>					
各科目の目標(達成水準)	「グローバリゼーション」と称される現代社会経済構造の一大変容をもたらした要因とそれを推進した理論を検討し、現実が生じている構造変化に目を配りつつその功罪について理解を深めること。					
参考文献等	デヴィッド・ハーヴェイ『ネオリベリズムとは何か』青土社、2007年。 デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義ーその歴史的展開と現在』作品社、2007年。 石黒一憲『世界貿易体制の法と経済』慈学社、2007年。					
成績評価の基準と方法	研究発表の内容、ディスカッションへの参加度合い、期末に提出するレポートから総合的に判断する。					
成績評価の基準と方法						

授業コード		授業題目	比較文学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	小澤 萬記			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	比較文学・比較文化					
授業の概要	明治期以降の翻訳を日本の近代化との関係で考える。翻訳された文献によって近代日本の諸学問がどのように形成されたのかを見ていく。具体的には参加者の専門分野にかかわる近代の翻訳文献をそれぞれ取り上げて報告を行い。それを踏まえて討論を行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 イントロダクション 2 翻訳語の成立 3 万国公法 4 西洋事情 5 文明論の概略 6 中間まとめ 7 学生報告—万国公法 8 学生報告—西洋事情 9 学生報告—文明論の概略 10 KJ法 説明 11 KJ法 カード作り 12 KJ法 並べ替え 13 KJ法 模式図作り 14 KJ法 プレゼン 15 テスト 					
各科目の目標(達成水準)	日本の近代化を「翻訳」の観点から見ることで、参加者の専門分野の問題を比較文化的観点からみられるようにする。					
参考文献等	『翻訳の思想』岩波書店					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	授業での報告、最終レポート					

授業コード		授業題目	比較文学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	小澤 萬記		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	比較文学・比較文化					
授業の概要	比較文学特論の内容を踏まえながら、柳父章『翻訳語成立事情』をテキストに、いくつかの用語（翻訳語）の成立と意味の変遷について検討する。取り上げる言葉は、社会、個人、権利、自由の四つである。一つの語の検討に2コマ程度つかい、特に現代におけるこれらのことばの用法に、歴史的な意味の変遷がどのように影響しているのかを探る。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 イントロダクション 2 翻訳語の成立 3 社会 4 個人 5 権利 6 自由 7 中間まとめ 8 学生報告—社会 9 学生報告—個人 10 学生報告—権利 11 学生報告—自由 12 総括討論 13 報告まとめ 14 全体まとめ 15 テスト 					
各科目の目標(達成水準)	翻訳語の問題を参加者の専門分野と結び付けて検討することによって、専門用語の意味をより広い人文科学的観点からみられるようにする。					
参考文献等						
教科書	柳父章『貧訳語成立事情』					
成績評価の基準と方法	授業での報告、最終レポート					

授業コード		授業題目	比較文化論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	小澤萬記			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	比較文学・比較文化					
授業の概要	ナショナリズムの問題をグローバリゼーションとの関係で考える。ナショナリズムに関する基本的文献を押さえながら現代の、グローバリゼーションの問題を検討する。具体的には梅森直之『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』を輪読する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 イントロダクション 2 問題の所在 3 『想像の共同体』を振り返る -はじめり 4 『想像の共同体』を振り返る -ナショナリズム 5 『想像の共同体』を振り返る -評価 6 『想像の共同体』を振り返る -自己批判 7 中間まとめ 8 アジアの初期ナショナリズム 9 アナーキズムとナショナリズム 10 アンダーソンについて 11 『想像の共同体』について 12 グローバリズムの思想史 13 報告まとめ 14 全体まとめ 15 テスト 					
各科目の目標(達成水準)	グローバリゼーションの問題をナショナリズムとの関係で理解し、現代の問題を考える歴史的パースペクティブを身につける。					
参考文献等	梅森直之『ベネディクト。アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	授業での報告、最終レポート					

授業コード		授業題目	比較文化論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	小澤萬記		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	比較文学・比較文化					
授業の概要	比較文化論特論の内容を踏まえ、ナショナリズムの問題を考える基礎として、ナショナリズム論の「古典」である、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を読む。同書の輪読(学生発表)と討論によってナショナリズムの理解を深める。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 イン트로ダクション 2 序 3 文化的根源 4 国民意識の起源 5 クレオール先の先駆者たち 6 古い言語、新しいモデルb 7 公定ナショナリズムと帝国主義 8 最後の波 9 愛国心と人種主義 10 歴史の天使 11 人口調査、地図、博物館 12 旅と交通 13 報告まとめ 14 全体まとめ 15 テスト 					
各科目の目標(達成水準)	ナショナリズム論の古典を読むことによって、ナショナリズムに対する接近方法を学び、それを通じて事象の歴史的接近方法を身につける。					
参考文献等	ベネディクト・アンダーソン 『定本 想像の共同体』 書籍工房早山					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	授業での報告、最終レポート					

授業コード		授業題目	文化人類学特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	岩佐 光広		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	<ul style="list-style-type: none"> ・レジュメの作り方、口頭発表のやり方、レポートの書き方等の基礎は受講前に再確認しておくこと。 ・授業時間外に人類学をはじめ、哲学・社会学・歴史学の文献を積極的に読んでおくこと。 				
教員研究テーマ	生(生活・人生・生存・生命)とケアの文化人類学的研究。特にラオス農村部および在日ラオス系定住難民のケア実践に関する民族誌的研究に取り組んできた。				
授業の概要	文化人類学の諸理論を学ぶ。				
授業計画	<p>文化人類学は、様々な地域や時代における人々の営みについてフィールドワークを行い、その知見を踏まえた具体的な記述(民族誌)を蓄積し、その比較(通文化比較)を通じて人間の「生」(生活・人生・生存・生命)の多様性と普遍性について考える学問である。その取り組みのなかで、人間の「生」を分析するための様々な理論が構築されてきた。</p> <p>この授業では、日本語で書かれた文化人類学の諸理論についての概説書『文化人類学20の理論』(綾部恒雄編、弘文堂、2006年)を読むことで、文化人類学の理論の多様性と歴史的な変化について学び、考える。授業では、受講者がテキスト各章のレジュメを作成し、口頭での報告を行い、それを踏まえてディスカッションを行うことが基本となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定) 2. 文化(社会)進化論 3. 文化伝播主義 4. 機能主義 5. 文化相対主義 6. 構造主義 7. マルクス主義と文化人類学 8. 認識人類学 9. 象徴人類学 10. 解釈人類学 11. 現象学と人類学 12. エスニシティ論、ジェンダー論、多文化主義論のいずれか 13. 環境人類学、医療・身体論、開発論、観光人類学のいずれか 14. ポストコロナル論、民族誌論、実践論のいずれか 15. まとめ:文化人類学の諸理論の多様性と歴史性 <p>なお受講希望者は、参考文献に挙げたテキストを事前に読んでおくことを強く勧める。</p>				
各科目の目標(達成水準)	<ul style="list-style-type: none"> ・文化人類学という学問領域の基礎を理解する。 ・文化人類学において構築されてきた諸理論の多様性と歴史性を理解する。 				
参考文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父江孝男 1990 『文化人類学入門』(増補改訂版)、中央公論社。 ・綾部恒雄編 1984 『文化人類学15の理論』、中央公論社。 ・山下晋司・船曳建夫編 『文化人類学キーワード』(改訂版)、有斐閣。 				
教科書	・綾部恒雄編 2006 『文化人類学20の理論』、弘文堂。				
成績評価の基準と方法	各報告、ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する。				

授業コード		授業題目	文化人類学演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	岩佐 光広		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	<p>・レジュメの作り方、口頭発表のやり方、レポートの書き方等の基礎は受講前に再確認しておくこと。</p> <p>・授業時間外に人類学をはじめ、哲学・社会学・歴史学の文献を積極的に読んでおくこと。</p>				
教員研究テーマ	生(生活・人生・生存・生命)とケアの文化人類学的研究。特にラオス農村部および在日ラオス系定住難民のケア実践に関する民族誌的研究に取り組んできた。				
授業の概要	民族誌の講読を通じて、文化人類学の認識論、理論、方法論の理解を深める。				
授業計画	<p>文化人類学は、様々な地域や時代における人々の営みについてフィールドワークを行い、その知見を踏まえた具体的な記述(民族誌)を蓄積し、その比較(通文化比較)を通じて人間の「生」(生活・人生・生存・生命)の多様性と普遍性について考える学問である。</p> <p>この授業では、民族誌の講読を通じて、文化人類学の認識論・理論、方法論についての理解を深めるとともに、人間の「生」の多様性について考える。授業では、受講者がテキスト各章のレジュメを作成し、口頭での報告を行い、それを踏まえてディスカッションを行うことが基本となる。講読するテキストは現時点では『社会的包摂／排除の人類学：開発・難民・福祉』(内藤直樹・山北輝裕編、昭和堂、2014年)を予定しているが、受講者の希望があれば変更も可能である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定) 2. 「社会的排除／包摂」現象への人類学的アプローチ 3. ケニア牧畜民の伝統社会は開発から逃れられるか 4. エチオピア牧畜民に大規模開発は何をもたらすのか 5. ボツワナの狩猟採集民は「先住民」になることで何を得たのか 6. オーストラリア先住民の市民権は包摂を保障しているか 7. アフリカの難民収容施設に出口はあるのか 8. アンゴラ定住難民の生存戦略は持続可能か 9. 在日インドシナ定住難民の「彼らなりの暮らし」はどう保たれているか 10. 第三国定住難民と私たちとの接点はどこにあるのか 11. ホームレス状態から地域社会への移行において何が問われているのか 12. 野宿者の日常的包摂は可能か 13. 精神障害者の世界は受け入れられるか 14. 脱施設化は新の解放を意味するのか 15. 開発・難民・福祉の横断を終えて <p>なお受講希望者は、「文化人類学特論」を受講していることが望ましい。また、事前に参考文献を読んでおくことを強く勧める。</p>				
各科目の目標(達成水準)	<p>・文化人類学におけるフィールドワークという方法論とその意義について理解する。</p> <p>・人間の「生」の多様性について批判的に考えることができる。</p>				
参考文献等	<p>・小田博志 2010 『エスノグラフィー入門：〈現場〉を質的研究する』、春秋社。</p> <p>・波平恵美子・小田博志 2010 『質的研究の方法：いのちの“現場”を読みとく』</p>				
教科書	<p>・内藤直樹・山北輝裕編、2014、『社会的包摂/排除の人類学：開発・難民・福祉』、昭和堂。</p>				
成績評価の基準と方法	各報告、ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する。				

授業コード		授業題目	応用倫理学特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	岩佐 光広		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	<p>・レジュメの作り方、口頭発表のやり方、レポートの書き方等の基礎は受講前に再確認しておくこと。</p> <p>・授業時間外に倫理学をはじめ、人類学・社会学・歴史学の文献を積極的に読んでおくこと。</p>				
教員研究テーマ	生(生活・人生・生存・生命)とケアの文化人類学的研究。特にラオス農村部および在日ラオス系定住難民のケア実践に関する民族誌的研究に取り組んできた。				
授業の概要	応用倫理学的問題としての「人間の安全保障」について考える。				
授業計画	<p>応用倫理学とは、倫理学の知見を「応用」し、社会問題の問題性の理論的な整理や、問題解決に向けた行為規範を提示することを試みる学問・実践領域である。</p> <p>この授業では、テキスト『人間の安全保障』(高橋哲哉・山影進編、東京大学出版会、2008年)の講読を通じて、応用倫理学的問題のひとつとしての「人間の安全保障」について学び、その問題を倫理学の視点から考える。授業では、受講者がテキスト各章のレジュメを作成し、口頭での報告を行い、それを踏まえてディスカッションを行うことが基本となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定) 2. 序「地球社会の課題と人間の安全保障」 3. 第Ⅰ部「歴史の教訓」① 4. 第Ⅰ部「歴史の教訓」② 5. 第Ⅱ部「文化の潜在化」① 6. 第Ⅱ部「文化の潜在化」② 7. 第Ⅲ部「経済発展の未来」① 8. 第Ⅲ部「経済発展の未来」② 9. 第Ⅳ部「社会の再生」① 10. 第Ⅳ部「社会の再生」② 11. 第Ⅴ部「平和の実現」① 12. 第Ⅴ部「平和の実現」② 13. 第Ⅴ部「平和の実現」③ 14. 結「人間存在の地平から」 15. まとめ:人間の安全保障と倫理 <p>なお受講希望者は、参考文献に挙げたテキストを事前に読んでおくことを強く勧める。</p>				
各科目の目標(達成水準)	<p>・人間の安全保障という問題領域とその課題を批判的に考えることができる。</p> <p>・人間の安全保障をめぐる諸問題を倫理学的に考えることを試みることができる。</p>				
参考文献等	<p>・アマルティア・セン 2006 『人間の安全保障』、集英社。</p> <p>・戸田山和久/出口康夫編 2011 『応用哲学を学ぶ人のために』、世界思想社。</p>				
教科書	<p>・高橋哲哉・山影進編 2008 『人間の安全保障』、東京大学出版会。</p>				
成績評価の基準と方法	ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する				

授業コード		授業題目	応用倫理学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	岩佐 光広			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	<p>・レジュメの作り方、口頭発表のやり方、レポートの書き方等の基礎は受講前に再確認しておくこと。</p> <p>・授業時間外に倫理学をはじめ、人類学・社会学・歴史学の文献を積極的に読んでおくこと。</p>					
教員研究テーマ	生(生活・人生・生存・生命)とケアの文化人類学的研究。特にラオス農村部および在日ラオス系定住難民のケア実践に関する民族誌的研究に取り組んできた。					
授業の概要	グローバル化が進行する現代社会における倫理を考える。					
授業計画	<p>応用倫理学とは、倫理学の知見を「応用」し、社会問題の問題性の理論的な整理や、問題解決に向けた行為規範を提示することを試みる学問・実践領域である。</p> <p>この授業では、グローバル化が進行する現代社会における倫理学のあり方を探る。そのためのテキストとして『国際倫理学』(リチャード・シャプコット、岩波書店、2012年)を取り上げる。その講読を通じて、グローバルな倫理を構想するうえでの「コスモポリタニズム」の意義と課題について考える。授業では、受講者がテキスト各章のレジュメを作成し、口頭での報告を行い、それを踏まえてディスカッションを行うことが基本となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション(授業の概要の説明と報告分担の決定) 2. コスモポリタニズムとアンチ・コスモポリタニズム 3. コスモポリタニズム① 4. コスモポリタニズム② 5. アンチ・コスモポリタニズム① 6. アンチ・コスモポリタニズム② 7. 歓待: 入国と成員資格① 8. 歓待: 入国と成員資格② 9. 人道主義と相互扶助① 10. 人道主義と相互扶助② 11. 危害の倫理: 正義と正戦① 12. 危害の倫理: 正義と正戦② 13. 許しがたい危害: グローバルな貧困とグローバルな正義① 14. 許しがたい危害: グローバルな貧困とグローバルな正義② 15. グローバルな倫理をいかに構想するか <p>なお受講希望者は、「応用倫理学特論」を受講していることが望ましい。また、事前に参考文献を読んでおくことを強く勧める。</p>					
各科目の目標(達成水準)	<p>・グローバル化する現代社会の倫理的問題の領域を理解することができる。</p> <p>・グローバルな倫理を構想する際の「コスモポリタニズム」の意義と課題について批判的に検討できる。</p>					
参考文献等	<p>・有福孝岳編 1999 『エチカとは何か: 現代倫理学入門』、ナカニシヤ出版。</p> <p>・伊豫谷登士翁 2002 『グローバル化とは何か: 液状化する世界を読み解く』、平凡社。</p>					
教科書	・リチャード・シャプコット 2012 『国際倫理学』、岩波書店。					
成績評価の基準と方法	各報告、ディスカッション、期末レポートをもとに総合的に理解度を評価する。					

授業コード		授業題目	社会情報論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	遠山 茂樹		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	社会情報学、メディア論、Community Informatics 地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究					
授業の概要	「情報」「メディア」「コミュニケーション」等の基礎概念を整理しつつ社会情報の生成・加工・流通といった社会情報学の基本を理解した上で、メディアの発展に伴う社会変容について、具体的な社会事象の考察を通じた講義を行う。					
授業計画	<p>社会とメディアの関係性を考察して、ローカルレベルのコミュニティにおける情報化の局面を理論的に考察する。その後、具体的事例を通じて、理論と実践とを理解すると同時に、今後のコミュニティレベルの情報化の在り方について考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 社会情報学の基礎:情報とは 3. 社会情報学の基礎:ネットワークとは 4. 社会情報学の基礎:メディアとは 5. メディアと社会(1) マスメディア・テクノロジー(活字メディア) 6. メディアと社会(2) マスメディア・テクノロジー(放送メディア) 7. メディアと社会(3) マスメディア・テクノロジー(複合メディア環境) 8. メディアと社会(4) インターネット・テクノロジー(WEB1.0) 9. メディアと社会(4) インターネット・テクノロジー(WEB2.0) 10. メディアと社会(4) インターネット・テクノロジー(WEB3.0) 11. 地域コミュニティと情報化(1)(ニューメディアと地域情報化政策) 12. 地域コミュニティと情報化(2)(コンピュータネットワーク) 13. 地域コミュニティと情報化(3)(インターネット) 14. 地域コミュニティと情報化(4)(ソーシャルメディア) 15. 総括 16. 期末レポート 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会における情報の生成・加工・流通の基礎について理解できる 1. 社会におけるICTの役割と影響について理解できる 2. 最新テクノロジーが構築する社会像や日常生活への浸透について構想できる 					
参考文献等	<p>東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学<1>システム』東京大学出版会 東京大学社会情報研究所編(1999)『社会情報学<2>メディア』東京大学出版会 Gurstein, Michael eds.(2000) Community Informatics: Enabling Communities With Information and Communications Technologies, Idea Group Pub .</p>					
教科書	授業中に適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	授業貢献度(授業での報告や課題提出など)(50%)、期末レポート(50%)を総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	社会情報論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	遠山 茂樹		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	社会情報学、メディア論、Community Informatics 地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究					
授業の概要	社会情報論特論を踏まえ、メディア発展と社会情報の在り方と社会変容との関係性について考える。そのために社会情報学における研究アプローチ等について考察し、社会調査法にも触れながら、分析概念や理論の生成について理解を深める。また、自らのテーマの下で研究発表と					
授業計画	<p>社会情報論特論を踏まえ、社会情報論に関わるテーマのもとで受講生各自がリサーチアクションを明確にし、課題を探求していく。最終的には、主張を明確にして、論拠を示しながら論じられるようにしていく。授業では、学生報告とディスカッションを中心に行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 研究の進め方 3. テーマ設定(本演習におけるテーマ設定) 4. 文献レビュー(1)(社会学理論) 5. 文献レビュー(2)(応用社会学) 6. 文献レビュー(3)(社会情報論) 7. 研究方法選択(1)(定量的調査法) 8. 研究方法選択(2)(定性的調査法) 9. リサーチアクション設定 10. 証拠収集(1)(調査計画) 11. 証拠収集(2)(調査実施) 12. 証拠の分析 13. 分析結果の解釈 14. 研究報告の作成 15. 研究発表 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会情報の基礎概念を理解できる 2. 基礎概念を用いて具体的な社会現象を分析できる 3. メディアと社会に関係する主題に対して、自らの主張をプレゼンテーションや論文として適切 					
参考文献等	井上俊・伊藤公雄編(2009)『メディア・情報・消費社会(社会学ベーシックス6)』世界思想社 大谷信介ほか(2013)『新・社会調査へのアプローチ: 論理と方法』ミネルヴァ書房					
教科書	演習中に適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	演習への貢献度(50%)と期末レポート(50%)とを総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	現代メディア論特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	遠山 茂樹		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	社会情報学、メディア論、Community Informatics 地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究				
授業の概要	近代メディアの発展と現代メディアと社会との関係性について探求する。				
授業計画	<p>前半は、マクラーハンの「メディア」概念を参照しながら、近代メディアテクノロジー史を振り返りつつ、社会とメディアの関係性について考察する。 後半は、デジタル化・ネットワーク化するメディアの特性を考察しつつ、ソーシャルメディアとして社会に浸透していくメディアの特性や影響について考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. メディアとは(1)(身体拡張としてのメディア) 3. メディアとは(2)(メディア・トライアド) 4. メディアとは(3)(多様なメディア論) 5. メディア・テクノロジー(1)(印刷) 6. メディア・テクノロジー(2)(放送) 7. メディア・テクノロジー(3)(通信) 8. デジタルメディア(1)(コンピュータ) 9. デジタルメディア(2)(インターネット) 10. デジタルメディア(3)(ウェブ) 11. ソーシャル化するメディア(1)(ブログ) 12. ソーシャル化するメディア(2)(SNS) 13. ソーシャル化するメディア(3)(ソーシャルメディア) 14. ソーシャル化するメディア(4)(ソーシャルメディア進化系) 15. 総括 16. 期末レポート 				
各科目の目標(達成水準)	<p>近代以降のメディア「概念」を理解する。 近代テクノロジーと近代メディア体制の関連性を理解する。 デジタルメディアの普及による社会変容について探求できる。</p>				
参考文献等	<p>McLuhan, Marshall (1964) <i>Understanding Media: The Extensions of Man</i>, McGraw-Hill Book Company, New York.= 栗原裕・河本仲聖訳(1987)『メディア論：人間の拡張の諸相』みすず書房。 Flichy, Patrice (1991) <i>Une histoire de la communication moderne, espace public et vie privée</i>, Éditions La Découverte & Syros, Paris.=江下雅之・山本淑子訳(2005)『メディアの近代史：公共空間と私生活のつらぎのなかで』水声社</p>				
教科書	演習中に適宜指示する。				
成績評価の基準と方法	授業貢献度(授業での報告や課題提出など)(50%)、期末レポート(50%)を総合的に判断する。				

授業コード		授業題目	現代メディア論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	遠山 茂樹		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	社会情報学、メディア論、Community Informatics 地域コミュニティの”活性化”に向けた、ICTの利活用の影響に関する社会学的研究					
授業の概要	現代メディア論特論を踏まえ、現代メディアの発展と現代メディアと社会との関係性について考える。そのためにメディア研究における研究アプローチ等について考察し、社会調査法にも触れながら、分析概念や理論の生成について理解を深める。また、自らのテーマの下で研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>現代メディア論特論を踏まえ、現代メディア論に関わるテーマのもとで受講生各自がリサーチクエッションを明確にし、課題を探求していく。最終的には、主張を明確にして、論拠を示しながら論じられるようにしていく。授業では、学生報告とディスカッションを中心に行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 研究の進め方 3. テーマ設定(本演習におけるテーマ設定) 4. 文献レビュー(1)(社会学理論) 5. 文献レビュー(2)(応用社会学) 6. 文献レビュー(3)(メディア論) 7. 研究方法選択(1)(定量的調査法) 8. 研究方法選択(2)(定性的調査法) 9. リサーチクエッション設定 10. 証拠収集(1)(調査計画) 11. 証拠収集(2)(調査実施) 12. 証拠の分析 13. 分析結果の解釈 14. 研究報告の作成 15. 研究発表 					
各科目の目標(達成水準)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会学的基礎概念を駆使して、現代メディアに関わる現象を分析できる。 2. メディアと社会に関係する主題に対して、自らの関心のもとで問いを設定し、その答えとなる主張を論拠を示しながら記述することができ、修士論文作成につなげてゆけるようになる。 					
参考文献等	井上俊・伊藤公雄編(2009)『メディア・情報・消費社会(社会学ベーシックス6)』世界思想社 大谷信介ほか(2013)『新・社会調査へのアプローチ: 論理と方法』ミネルヴァ書房					
教科書	演習中に適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	演習への貢献度(50%)と期末レポート(50%)とを総合的に判断する。					

授業コード		授業題目	民法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	緒方 賢一			担当教員所属		
履修における注意点	講義ですが、参加人数によりゼミナール形式での授業になることもあります。					
教員研究テーマ	民法物権法、農地法制、漁業法制と関連する法社会学的研究					
授業の概要	土地所有権等、物権の法構造の検討					
授業計画	<p>民法物権法について、土地所有権を中心に、現代社会において所有権等の物権がどのように理解され、現実機能しているか、具体的課題に即して考えます。 講義は以下の予定に従って進めますが、受講者の希望により、一部は別のテーマに差し替えることもあります(その場合には各回のテーマを圧縮します)。</p> <p>第1回 民法物権法の概要 第2回 所有と占有 第3回 所有権の絶対性と限界 第4回 近代的土地所有権の展開過程(明治以前から明治民法制定まで) 第5回 近代的土地所有権の展開過程(明治民法以後、第2次世界大戦期まで) 第6回 近代的土地所有権の展開過程(戦後改革から現代まで) 第7回 農地所有における現代的課題 第8回 都市における土地所有の現代的課題 第9回 不動産登記の概要 第10回 不動産登記制度の現代的課題 第11回 入会権とコモンズ 第12回 漁業法と漁業権 第13回 海洋レジャーと漁業権 第14回 権利の外形と内実の乖離 第15回 地域的公序に基づく利用関係の調整</p>					
各科目の目標(達成水準)	民法物権法の基礎構造を理解する。 現代社会における物権の現実的機能を理解する。					
参考文献等	川島武宜『所有権法の理論』(1949岩波書店)・関谷俊作『日本の農地制度(新版)』(2002農政調査会)・原田純孝編著『地域農業の再生と農地制度』(2011農山漁村文化協会)等。					
教科書	新保輝幸・松本充郎編『変容するコモンズ』(2012ナカニシヤ出版)					
成績評価の基準と方法	授業への参画と期末試験(レポート試験)により評価します。					

授業コード		授業題目	民法演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	緒方 賢一		担当教員所属		
履修における注意点	演習形式ですので、参加者には何らかの報告してもらいます。				
教員研究テーマ	民法物権法、農地法制、漁業法制と関連する法社会学的研究				
授業の概要	農地法制、漁業法制の検討				
授業計画	<p>民法特論に引き続き、土地所有権、とりわけ農地所有権に関する現代的な諸課題と漁業権に関する現代的な諸課題について考えます。 演習参加者の個別の課題や興味・関心にもよりますが、基本的には農地制度および漁業権制度全般について幅広く考えていきます。</p> <p>第1回 2009年農地法改正の位置づけ 第2回 農地流動化策の現段階 第3回 遊休農地対策 第4回 農地転用制度 第5回 一筆統制とゾーニング規制 第6回 農用地利用改善団体 第7回 土地改良法 第8回 人・農地プラン 第9回 共同漁業権 第10回 区画漁業権・定置漁業権 第11回 漁業協同組合 第12回 漁業調整委員会 第13回 水産業復興特区 第14回 海業 第15回 農業法制と漁業法制の今後</p>				
各科目の目標(達成水準)	農地制度全般について理解する。 漁業権および漁業法法制の概要について理解する。				
参考文献等	拙稿「2009年農地法改正における遊休農地対策規定とその適用の現段階」(2013『高知論叢』106号)・拙稿「漁業権による沿岸海域の管理可能性」(2010『高知論叢』98号)・加瀬和俊『漁業「特区」の何が問題か』(2012漁協ブックレット1)等				
教科書	原田純孝編著『地域農業の再生と農地制度』(2011農山漁村文化協会)				
成績評価の基準と方法	演習への参画(報告等)と期末レポートにより評価します。				

授業コード		授業題目	民法法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	緒方 賢一			担当教員所属		
履修における注意点	講義ですが、参加人数によりゼミナール形式での授業になることもあります。					
教員研究テーマ	民法物権法、農地法制、漁業法制と関連する法社会学的研究					
授業の概要	民法親族法・相続法全般と現代の家族について					
授業計画	<p>現代の家族と家族に関する法的諸課題について検討します。民法親族法、相続法は戸籍法、家事事件手続法、あるいは種々の社会保障法等と連携して今日の夫婦・親子関係その他の親族関係を規律し、私たちの家庭生活を支えています。</p> <p>本講義では、民法親族法・相続法を概観しつつ、現代の夫婦、親子等家族関係に起こっている様々な現象、課題について考えていきます。</p> <p>講義は以下のスケジュールを原則に、適宜参加者からのリクエストも受けつつ展開します。</p> <p>第1回 民法親族法・相続法の概要 第2回 近代における家族と家族の法の展開過程(明治民法期) 第3回 現代における家族と家族の法の展開過程(現行民法期) 第4回 婚姻に関する法的諸問題 第5回 夫婦財産制度に関する諸問題 第6回 内縁に関する諸問題 第7回 離婚に関する諸問題 第8回 嫡出推定に関する諸問題 第9回 親子関係の揺らぎと法 第10回 児童虐待に関する諸問題 第11回 高齢者福祉と扶養に関する諸問題 第12回 祖先祭祀・祭祀財産等に関する諸問題 第13回 相続分に関する諸問題 第14回 遺言相続に関する諸問題 第15回 生前贈与に関する諸問題</p>					
各科目の目標(達成水準)	民法親族法・相続法の概要を理解する。 現代における家族問題を法的観点から捉え、考える。					
参考文献等	講義中に適宜指示します(下記教科書は一通り読んでおいてください)。					
教科書	利谷信義『家族の法[第3版]』(2010有斐閣)					
成績評価の基準と方法	授業への参画と期末試験(レポート試験)により評価します。					

授業コード		授業題目	民法法演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	緒方 賢一		担当教員所属			
履修における注意点	演習形式ですので、参加者には何らかの報告してもらいます。					
教員研究テーマ	民法物権法、農地法制、漁業法制と関連する法社会学的研究					
授業の概要	民法親族法・相続法全般と現代の家族について					
授業計画	<p>民法法(講義)に引き続き、現代の家族と家族の法の問題について考えます。演習形式ですので基本的には参加者の問題関心に従って報告と討論を行います。さしあたり以下のようなテーマを考えています。</p> <p>第1回 家制度の意義と今日への影響 第2回 明治民法下の相続制度と家の社会保障機能 第3回 現行民法親族法・相続法の特徴と社会への影響 第4回 選択的夫婦別氏制度の導入可能性 第5回 夫婦財産契約の可能性 第6回 離婚制度の課題 第7回 財産分与に関する諸問題 第8回 児童虐待と親権停止制度 第9回 生殖補助医療技術と親子関係の決定方法 第10回 養親子・里親制度 第11回 公的扶養と私的扶養の現代的諸課題 第12回 相続税制の課題 第13回 農家の経営継承・相続問題 第14回 家族経営協定の意義 第15回 民法親族法・相続法の改正に向けて</p>					
各科目の目標(達成水準)	家族問題に対して法が果たしている役割を理解する。 家族に関して、法と社会的現実の相互関係を理解する。					
参考文献等	演習開始後に適宜指示します。					
教科書	利谷信義『家族の法[第3版]』(2010有斐閣)					
成績評価の基準と方法	演習への参画(報告等)と期末レポートにより評価します。					

授業コード		授業題目	経済法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	横川 和博		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制					
授業の概要	経済法制とりわけ独占禁止法制の制度的趣旨を踏まえたうえで、知的財産権法、消費者法との関係を考察する。さらに、知的財産権法及び消費者法の運用実態を検討する。					
授業計画	<p>次の項目につき、順次、研究を行う。</p> <p>1. 経済法制の概略、2. 独占禁止法制の地域経済における意義、3. 違法な共同行為と不公正な取引方法、4. 知的財産権の概略、5. 特許法制と地域経済、6. 著作権と中小企業。以上の検討をふまえて、地域社会の実態の検証を行い、諸問題の解決法を究明する。あわせて、諸外国の制度について検証する。講義順序の詳細は以下のとおり。</p> <p>①経済法とはなにか ②独占禁止法の意義と目的 ③独占禁止法と地域経済 ④共同行為と不公正な取引方法 ⑤知的財産権と独占禁止法 ⑥特許権 ⑦著作権 ⑧不正競争防止法 ⑨消費者法の概略 ⑩特定商取引法 ⑪消費者契約法 ⑫消費者法と地域経済 ⑬消費者法と中小企業 ⑭事例研究 ⑮まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	制度の概略を学ぶとともに、実証分析および政策提言を行う能力を身に付ける。					
参考文献等	別途指示。					
教科書	なし。					
成績評価の基準と方法	授業時間における研究に対する積極的関わりの度合いと、時間外における資料収集や実態調査などの取り組みについて総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	経済法演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	横川 和博		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修上の注意点						
教員研究テーマ	独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制					
授業の概要	独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制の構造を理解する。そのうえで、各法制の運用実態を判例研究によって検討していく。					
授業計画	<p>まず、独占禁止法制と知的財産権法の制度的概略を検討した上で、実態分析を行い、問題の所在を明らかにする。さらに、英国及び米国について同様の作業を行い、比較法的検証をくわえる。次に、これらの分野において、学生の研究テーマとの接合を試みる。最終的には、地域社会を前提としたフィールド設定を行い、そこにおける制度設計の試案作成を試みることを目標とする。詳細な進行予定は以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①独占禁止法の概略、 ②中小企業法制の概略1(独占禁止法と中小企業法) ③中小企業法制の概略2(製造業と中小企業法) ④中小企業法制の概略3(流通産業と中小企業法) ⑤消費者保護法制概略1 ⑥消費者保護法制概略2 ⑦ケーススタディ1 ⑧ケーススタディ2 ⑨ケーススタディ3 ⑩ケーススタディ4 ⑪ケーススタディ5 ⑫ケーススタディ6 ⑬ケーススタディ7 ⑭ケーススタディ8 ⑮まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	制度の実証的検証能力および制度設計の能力をあわせて獲得する。					
参考文献等	別途指示。					
教科書	なし。					
成績評価の基準と方法	授業時における学習のみならず、それ以外の時間における資料収集・実態調査など活動の評価もあわせて行う。					

授業コード		授業題目	消費者法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	横川 和博		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制					
授業の概要	消費者法の概要を理解した上で、消費者法の制度的検討を行う。諸外国との比較法的検討も行う。とりわけ、先進事例である英国の消費者行政及び消費者法の研究も行う。					
授業計画	<p>次のテーマについて順次、研究を行う。</p> <p>1. 消費者法の概要、2. 民法と消費者、3. 特定商取引法、4. 消費者契約法、5. その他の消費者法、6. 諸外国の消費者法</p> <p>講義順序は以下の通り。</p> <p>①消費者問題とはなにか ②消費者法の概要 ③民法と消費者 ④クーリングオフの法的性格 ⑤特定商取引法 ⑥消費者契約法 ⑦表示規制法概説 ⑧表示規制法各論 ⑨消費者の安全と法 ⑩消費者条例 ⑪諸外国の消費者法概説 ⑫諸外国の消費者法各論 ⑬判例研究 ⑭判例研究 ⑮まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	制度の概略を学ぶとともに、実証分析および政策提言を行う能力を身に付ける。					
参考文献等	講義時に指示する。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	授業時間における研究に対する積極的関わりの度合いと、時間外における資料収集や実態調査などの取り組みについて総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	消費者法演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	横川 和博		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	独占禁止法制、中小企業法制、消費者保護法制					
授業の概要	消費者法の概要を理解した上で、消費者法のそれぞれについてケーススタディを行う。英国の法制については、政府の公表資料及び判例について英文の資料をもとに研究を行う。					
授業計画	<p>研究項目は消費者法特論とほぼ同じであるが、事例研究、判例研究を中心とする。あわせて授業時間外に若干の実態調査・ヒヤリング等を行う。</p> <p>講義順序は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①消費者法判例の読み方 ②消費者法判例のリーディングケースの概要 ③民法の判例と消費者 ④クーリングオフの法的性格 ⑤特定商取引法の判例 ⑥消費者契約法判例 ⑦表示規制法概説 ⑧表示規制法の判例、事例研究 ⑨消費者の安全に関わる判例 ⑩消費者条例 ⑪諸外国の消費者法概説 ⑫英国の消費者行政 ⑬英国の消費者法の判例 ⑭英国の消費者法の判例 ⑮まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	制度の趣旨を客観的に理解する能力、実証的に検証する能力及び制度設計能力の獲得をめざす。					
参考文献等	別途指示。					
教科書	なし。					
成績評価の基準と方法	授業時における学習のみならず、時間外における資料収集や実態調査などへの関わりもあわせて評価する。					

授業コード		授業題目	刑法特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	稲田 朗子		担当教員所属		
履修における注意点	授業は演習形式で行う。報告準備等が必須となる。				
教員研究テーマ	刑法理論の研究及び刑法の訴訟等における運用実態に関する研究				
授業の概要	刑法学領域の学術論文から、受講生の問題関心を考慮した上で、検討対象とする論文を7本程度ピックアップし、講読・検討を行う。				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1、オリエンテーション: 講読する論文の決定 2、近代刑法原則: 論文の講読 3、近代刑法原則: 論文の検討 4、行為・構成要件: 論文の講読 5、行為・構成要件: 論文の検討 6、違法論(1) 法令・正当行為: 論文の講読 7、違法論(1) 法令・正当行為: 論文の検討 8、違法論(2) 正当防衛・緊急避難: 論文の講読 9、違法論(2) 正当防衛・緊急避難: 論文の検討 10、責任論(1) 責任能力: 論文の講読 11、責任論(1) 責任能力: 論文の検討 12、責任論(2) 故意・過失: 論文の講読 13、責任論(2) 故意・過失: 論文の検討 14、責任論(3) 期待可能性: 論文の講読 15、責任論(3) 期待可能性: 論文の検討 				
各科目の目標(達成水準)	学術論文を読解した上で、刑事法の理論状況における当該論文の位置付けができるようになる。				
参考文献等	必要に応じて指示する。				
教科書	開講時に決定する。				
成績評価の基準と方法	出席、報告、議論への参加、成果物により評価する。				

授業コード		授業題目	刑法演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	稲田 朗子		担当教員所属		
履修における注意点	報告準備等が必須となる。				
教員研究テーマ	刑法理論の研究及び刑法の訴訟等における運用実態に関する研究				
授業の概要	刑法学領域の学術論文から、受講生の問題関心を考慮した上で、検討対象とする論文を7本程度ピックアップし、講読・検討を行う。				
授業計画	<p>1、オリエンテーション:講読する論文の決定</p> <p>2、生命に対する罪:論文の講読</p> <p>3、生命に対する罪:論文の検討</p> <p>4、身体に対する罪:論文の講読</p> <p>5、身体に対する罪:論文の検討</p> <p>6、自由に対する罪:論文の講読</p> <p>7、自由に対する罪:論文の検討</p> <p>8、名誉に対する罪:論文の講読</p> <p>9、名誉に対する罪:論文の検討</p> <p>10、財産に対する罪:論文の講読</p> <p>11、財産に対する罪:論文の検討</p> <p>12、社会的法益に対する罪:論文の講読</p> <p>13、社会的法益に対する罪:論文の検討</p> <p>14、国家的法益に対する罪:論文の講読</p> <p>15、国家的法益に対する罪:論文の検討</p>				
各科目の目標(達成水準)	学術論文を読解した上で、刑事法の理論状況における当該論文の位置付けができるようになる。				
参考文献等	必要に応じて指示する。				
教科書	開講時に決定する。				
成績評価の基準と方法	出席、報告、議論への参加、成果物により評価する。				

授業コード		授業題目	刑事司法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	稲田 朗子			担当教員所属		
履修における注意点	授業は演習形式で行う。報告準備等が必須となる。					
教員研究テーマ	刑法理論の研究及び刑法の訴訟等における運用実態に関する研究					
授業の概要	受講生の問題関心を考慮した上で、刑事司法に関する文献を選定し、講読・検討する。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1、オリエンテーション: 講読する文献の決定 2、刑事裁判の歴史: 文献の講読 3、刑事裁判の歴史: 文献の検討 4、刑事訴訟法の基本原則: 文献の講読 5、刑事訴訟法の基本原則: 文献の検討 6、犯罪被害者: 文献の講読 7、犯罪被害者: 文献の検討 8、弁護士依頼権・接見交通権: 文献の講読 9、弁護士依頼権・接見交通権: 文献の検討 10、公訴権: 文献の講読 11、公訴権: 文献の検討 12、自白法則: 文献の講読 13、自白法則: 文献の検討 14、国民の司法参加: 文献の講読 15、国民の司法参加: 文献の検討 					
各科目の目標(達成水準)	学術論文を読解した上で、刑事法の理論状況における当該論文の位置付けができるようになる。					
参考文献等	必要に応じて指示する。					
教科書	開講時に決定する。					
成績評価の基準と方法	出席、報告、議論への参加、成果物により評価する。					

授業コード		授業題目	刑事司法演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	稲田 朗子			担当教員所属		
履修における注意点	報告準備等が必須となる。					
教員研究テーマ	刑法理論の研究及び刑法の訴訟等における運用実態に関する研究					
授業の概要	受講生の問題関心を考慮した上で、刑事司法に関する文献を選定し、講読・検討する。					
授業計画	<p>1、オリエンテーション:講読する文献の決定</p> <p>2、日本型刑事手続:文献の講読</p> <p>3、日本型刑事手続:文献の検討</p> <p>4、誤判救済:文献の講読</p> <p>5、誤判救済:文献の検討</p> <p>6、犯罪者の社会復帰:文献の講読</p> <p>7、犯罪者の社会復帰:文献の検討</p> <p>8、保安処分:文献の講読</p> <p>9、保安処分:文献の検討</p> <p>10、死刑:文献の講読</p> <p>11、死刑:文献の検討</p> <p>12、少年法:文献の講読</p> <p>13、少年法:文献の検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	学術論文を読解した上で、刑事法の理論状況における当該論文の位置付けができるようになる。					
参考文献等	必要に応じて指示する。					
教科書	開講時に決定する。					
成績評価の基準と方法	出席、報告、議論への参加、成果物により評価する。					

授業コード		授業題目	政治学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上神 貴佳		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	学部教育における専門科目としての政治学を履修済みであることを前提とする。少人数であることが予想されるので、文献を予習し、議論に参加することも求められる。					
教員研究テーマ	現代日本の政党や選挙に関する研究					
授業の概要	下記で指定した教科書を読破することを目指す。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 第1章 政策の対立軸 3. 第2章 政治と経済 4. 第4章 福祉国家 5. 第10章 議会 6. 第11章 執政部 7. 第12章 官僚制 8. 第13章 中央地方関係 9. 第15章 政策過程 10. 第19章 投票行動 11. 第20章 政治の心理 12. 第21章 世論とメディア 13. 第22章 選挙と政治参加 14. 第23章 利益団体と政治 15. 第24章 政党 					
各科目の目標(達成水準)	政治学に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深めることを目標とする。					
参考文献等	適宜、指示する。					
教科書	久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝『政治学 補訂版 (New Liberal Arts Selection)』有斐閣					
成績評価の基準と方法	期末試験によって成績を評価する。					

授業コード		授業題目	政治学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上神 貴佳		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	参加者は教員が指定する文献を読み、順次、それらについて報告を担当する。その上で適宜、自らの研究テーマについても、報告を行ってもらう。					
教員研究テーマ	現代日本の政党や選挙に関する研究					
授業の概要	政治学一般について、参加者の興味にもよりつつ、文献を選択し講読する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 政治過程の制度(文献の講読) 3. 政治過程の制度(研究課題の検討) 4. 有権者の政治意識と投票行動(文献の講読) 5. 有権者の政治意識と投票行動(研究課題の検討) 6. 政党と政党システム(文献の講読) 7. 政党と政党システム(研究課題の検討) 8. 官僚と利益団体(文献の講読) 9. 官僚と利益団体(研究課題の検討) 10. 議会(文献の講読) 11. 議会(研究課題の検討) 12. 政策過程(文献の講読) 13. 政策過程(研究課題の検討) 14. 政治経済(文献の講読) 15. 政治経済(研究課題の検討) 					
各科目の目標(達成水準)	政治学に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深め、論文執筆に役立てることを目標とする。					
参考文献等	適宜、指示する。					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	演習における発表と質疑応答、討論を通じて、受講者の目標達成度を評価する。					

授業コード		授業題目	日本政治特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上神 貴佳			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	学部教育における専門科目としての政治学を履修済みであることを前提とする。 少人数であることが予想されるので、文献を予習し、議論に参加することも求められる。					
教員研究テーマ	現代日本の政党や選挙に関する研究					
授業の概要	現代日本政治に関する最新の研究を中心に講読する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 現代日本の選挙制度 3. 現代日本の執政制度 4. 現代日本における有権者の政治意識 5. 現代日本における有権者の投票行動 6. 現代日本における政党組織 7. 現代日本における政党システム 8. 現代日本における官僚 9. 現代日本における利益団体 10. 国会 11. 現代日本における政策過程 12. 現代日本の政治経済 13. 戦後の総選挙と政権1 14. 戦後の総選挙と政権2 15. 戦後の総選挙と政権3 					
各科目の目標(達成水準)	現代日本政治に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深めることを目標とする。					
参考文献等	適宜、指示する。					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	演習における発表と質疑応答、討論を通じて、受講者の目標達成度を評価する。					

授業コード		授業題目	日本政治演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上神 貴佳			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	参加者は教員が指定する文献を読み、順次、それらについて報告を担当する。その上で適宜、自らの研究テーマについても、中間報告を行ってもらう。					
教員研究テーマ	現代日本の政党や選挙に関する研究					
授業の概要	現代日本政治に関する最新の研究を中心に講読する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. 現代日本における政治過程の制度(文献の講読) 3. 現代日本における政治過程の制度(研究課題の検討) 4. 現代日本における有権者の政治意識と投票行動(文献の講読) 5. 現代日本における有権者の政治意識と投票行動(研究課題の検討) 6. 現代日本における政党と政党システム(文献の講読) 7. 現代日本における政党と政党システム(研究課題の検討) 8. 現代日本における官僚と利益団体(文献の講読) 9. 現代日本における官僚と利益団体(研究課題の検討) 10. 国会(文献の講読) 11. 国会(研究課題の検討) 12. 現代日本における政策過程(文献の講読) 13. 現代日本における政策過程(研究課題の検討) 14. 現代日本の政治経済(文献の講読) 15. 現代日本の政治経済(研究課題の検討) 					
各科目の目標(達成水準)	現代日本政治に関する高度な文献を読破し、専門的な知識を深め、論文執筆に役立てることを目標とする。					
参考文献等	適宜、指示する。					
教科書	特になし					
成績評価の基準と方法	演習における発表と質疑応答、討論を通じて、受講者の目標達成度を評価する。					

授業コード		授業題目	自治体法務演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	赤間 聡		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	行政法Ⅰの行政法法源論と法律による行政をしっかりと理解していること、行政法Ⅱの抗告訴訟の全体像が分かっていることが必要になる。					
教員研究テーマ	環境法と法源論					
授業の概要	条例が絡んだ判例を扱う。また、自治体の条例を収集しその施行実体を議論する。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと					
授業計画	<p>1回/ 法律による行政</p> <p>2回/ 法律と政令・省令</p> <p>3回/ 法律と条例</p> <p>4回/ 行政契約と法律の留保</p> <p>5回/ 各種行政契約</p> <p>6回/ 憲法学からみた適正手続</p> <p>7回/ 行政手続法の概要</p> <p>8回/ 行政手続法の判例</p> <p>9回/ 自治体における行政手続</p> <p>10回/情報公開法</p> <p>11回/自治体における情報公開</p> <p>12回/公法上の義務とその履行確保手段</p> <p>13回/自治体における強制手段</p> <p>14回/抗告訴訟概論</p> <p>15回/抗告訴訟各論</p>					
各科目の目標(達成水準)	行政法総論と地方自治法との関係が理解できるようにする。					
参考文献等	テーマごとに随時指示する。					
教科書	基本的には使わない					
成績評価の基準と方法	報告およびレポート					

授業コード		授業題目	自治体法務特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	赤間 聡		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	行政法Ⅰの行政法法源論と法律による行政をしっかりと理解していること、行政法Ⅱの抗告訴訟の全体像が分かっていることが必要になる。					
教員研究テーマ	環境法と法源論					
授業の概要	地方自治法の内、住民訴訟を中心に解説、検討。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと					
授業計画	<p>1回/ 行政組織法一般理論 2回/ 行政機関と行政主体 3回/ 地方自治の理念 4回/ 地方自治法の組織論 5回/ 地方議会と執行機関 6回/ 公務員法総論 7回/ 公務員の権利と労働法 8回/ 公務員の義務 9回/地方公務員法概説 10回/地方自治法の変遷 11回/自治事務について 12回/条例の制定範囲 13回/条例と行政訴訟 14回/監査請求 15回/住民訴訟</p>					
各科目の目標(達成水準)	法的な視点から自治体業務をみれるようにする					
参考文献等	随時指示する					
教科書	地方自治法各種解説書。詳細は初回に指示					
成績評価の基準と方法	報告とレポート					

授業コード		授業題目	自治体行政法演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	赤間 聡		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	行政法Ⅰの行政法法源論と法律による行政をしっかりと理解していること、行政法Ⅱの抗告訴訟の全体像が分かっていることが必要になる。					
教員研究テーマ	環境法と法源論					
授業の概要	環境保護法制と自治体の枠割論の前提となる行政法総論部分を扱う。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1回/ 法律による行政 2回/ 行政計画法総論 3回/ 計画策定手続 4回/ 自治体の計画策定の現状 5回/ いわゆる計画裁量について 6回/ 行政手続法の概要 7回/ 自治体における行政手続 8回/ 計画と手続を巡る紛争 9回/ 公法上の義務とその履行確保手段 10回/ 自治体における強制手段 11回/ 自治体における情報公開 12回/ 民事訴訟と行政訴訟 13回/ 行政訴訟総論 14回/ 取消訴訟論 15回/ 自治体の訴訟実務 					
各科目の目標(達成水準)	行政法総則と自治体業務との関係がわかるようにする					
参考文献等	テーマごとに随時指示する。					
教科書	基本的には使わない					
成績評価の基準と方法	報告およびレポート					

授業コード		授業題目	自治体行政法特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	赤間 聡		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	行政法Ⅰの行政法源論と法律による行政をしっかりと理解していること、行政法Ⅱの抗告訴訟の全体像が分かっていることが必要になる。					
教員研究テーマ	環境法と法源論					
授業の概要	環境保護法制と自治体の枠割論についてグローバルや視点から検討する。ただし、テーマの選択などは、顔ぶれを見て相談のうえ決定する。基本、学生の発表をベースに講義を進めるので、プレゼンの覚悟をしておくこと					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1回/ 地方自治の理念 2回/ 地方自治法の組織論 3回/ 自治事務について 4回/ 条例の制定範囲 5回/ 住民訴訟 6回/ 公物管理法制 7回/ 公物法と環境配慮 8回/ 環境法の骨格 9回/ 予防原則について 10回/ 国際環境法 11回/ 環境評価 12回/ 大気汚染 13回/ 水質汚濁 14回/ 環境保護の費用負担 15回/ 民事差止訴訟と行政訴訟 					
各科目の目標(達成水準)	環境保全における自治体の役割を理解できるようにする					
参考文献等	テーマごとに随時指示する。					
教科書	基本的には使わない					
成績評価の基準と方法	報告およびレポート					

授業コード		授業題目	公益事業特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上田健作		担当教員所属			
履修における注意点						
教員研究テーマ	非営利組織と地域協働					
授業の概要	非営利組織は「新しい公共」の担い手として期待されている。本授業では、「新しい公共」と非営利組織に関する主要な論点を取り上げることで非営利組織研究の基礎を構築してもらう。主な論点としては、(1)経済に果たす役割、(2)民主主義の発展に果たす役割、(3)協働社会の構築に果たす役割である。					
授業計画	<p>第 1回 「新しい公共」の背景と非営利組織</p> <p>第 2回 非営利組織の概念とその論点(1)－「非営利性」について</p> <p>第 3回 非営利組織の概念とその論点(2)－組織特性について</p> <p>第 4回 非営利組織の概念とその論点(3)－経済システムと非営利組織の機能</p> <p>第 5回 非営利組織の概念とその論点(4)－政治システムと非営利組織の機能</p> <p>第 6回 非営利組織の概念とその論点(5)－「共生システム」と非営利組織の機能</p> <p>第 7回 非営利組織の概念とその論点(6)－文化システムと非営利組織の機能</p> <p>第 8回 非営利組織と行政</p> <p>第 9回 非営組織と企業</p> <p>第11回 非営利組織と地縁組織</p> <p>第12回 非営利組織と公益法人</p> <p>第13回 非営利組織と国の支援政策</p> <p>第14回 非営利組織と自治体の支援政策</p> <p>第15回 非営利組織の展望</p>					
各科目の目標(達成水準)	15回の授業で考察する非営利組織と「新しい公共」をめぐる基本的論点を全て理解すること。					
参考文献等	授業内で適宜紹介する。					
教科書	配布プリント					
成績評価の基準と方法	期末試験による。					

授業コード		授業題目	公益事業演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上田 健作		担当教員所属			
履修における注意点						
教員研究テーマ	非営利組織と地域協働					
授業の概要	非営利組織に関して包括的な研究を行っている文献を購読して非営利組織と地域協働に関する諸論点を深めるとともに研究課題を発見する。					
授業計画	<p>第1回 On the Contested Nature of the Public Good 第2回 The Public Good as a Social and Cultural Project 第3回 What is Altruism ? 第4回 The Religious Ethic and the Spirit of Nonprofit Entrepreneurship 第5回 Institutional Form and Organizational Behavior 第6回 Mismeasuring the Consequences of Ownership: External Influences and the Comparative Performance of Public, and Private Nonprofit Organizations 第7回 Does it Matter? The Case of Day care for Children in Canada 第8回 The Importance of Organizational Form: Parent Perceptions versus Reality in the Day Care Industry 第9回 Markets, Politics, and Charity: Nonprofits in the Political Economy 第10回 The Third Route: Government-Nonprofit Collaboration in the Germany and the United States 第11回 Partners in Reform: Nonprofit Organizations and the Welfare States in France 第12回 The Nonprofit Sector and the Transformation of Societies: Comparative Analysis of East Germany, Poland, and Hungary 第13回 Kindness or Justice? Women's Associations and the Politics of Race and History 第14回 Channeling Social Protest: Foundation Patronage of Contemporary Social Movements 第15回 Creating Social Capital: Nongovernmental Development Organizations and Intersectoral Problem Solving</p>					
各科目の目標(達成水準)	演習を通じて非営利組織に関する自分なりの研究視点を構築する。					
参考文献等	授業内で適宜紹介する。					
教科書	W. Pwll ed., <i>Private Action and the Public Good</i> , Yale University Press, 1998. 佐藤茂、早田幸編著『地域協働の科学』、成文堂、2005年 他					
成績評価の基準と方法	期末レポート(テーマ「非営利組織研究の視点」)を提出。60点を持って合格とする。評価の視点は、先行研究が提起する視点を踏まえて研究課題を設定できているか否か。					

授業コード		授業題目	公共経済特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	上田 健作			担当教員所属		
履修における注意点						
教員研究テーマ	非営利組織と地域協働					
授業の概要	公共性に関するこれまでの議論をレクチャーしながら「新しい公共」と言う政策提起の意味や意義を考える。					
授業計画	<p>第1回 社会科学における公と私(1)社会学の観点から</p> <p>第2回 社会科学における公と私(2)政治学の観点から</p> <p>第3回 社会科学における公と私(3)経済学の観点から</p> <p>第4回 日本における公と私(1)教科書②の発題Ⅰ及びⅡを中心に</p> <p>第5回 日本における公と私(2)教科書②の発題Ⅲ及びⅣを中心に</p> <p>第6回 日本における公と私(3)教科書②の発題Ⅴ及びⅥを中心に</p> <p>第7回 欧米における公と私(1)教科書③の発題Ⅰ及びⅡを中心に</p> <p>第8回 欧米における公と私(2)教科書③の発題Ⅲ及びⅣを中心に</p> <p>第9回 欧米における公と私(3)教科書③の発題後を中心に</p> <p>第10回 経済からみた公私問題(1)教科書④の発題Ⅰを中心に</p> <p>第11回 経済からみた公私問題(2)教科書④の発題Ⅱを中心に</p> <p>第12回 経済からみた公私問題(3)教科書④の発題Ⅲ及びⅣを中心に</p> <p>第13回 中間集団が開く公共性(1)教科書⑤の発題Ⅰ及びⅦを中心に</p> <p>第14回 中間集団が開く公共性(2)教科書⑤の発題Ⅲ及びⅣを中心に</p> <p>第15回 中間集団が開く公共性(3)教科書⑤の発題Ⅴ及びⅥを中心に</p>					
各科目の目標(達成水準)	公共性に関するこれまでの議論を理解すること。					
参考文献等	授業内で適宜紹介する。					
教科書	①佐々木毅・金泰昌編『公共哲学2 公と私の社会科学』(東京大学出版会)②同『公共哲学3 日本における公と私』、③同『公共哲学4 欧米における公と私』、④同『公共哲学6 経済から見た公私問題』、⑤同『公共哲学7 中間集団が開く公共性』					
成績評価の基準と方法	期末試験を行い60点を合格とする。					

授業コード		授業題目	公共経済演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	上田 健作			担当教員所属		
履修における注意点						
教員研究テーマ	非営利組織と地域協働					
授業の概要	今日、「新しい公共」の創出が社会的課題となっている。しかしながら「新たな公共」という概念については未だ明確なものがない。明確なことは行政だけでは担えなくなった公共領域を市民参画、場合によっては企業等の参画を前提とする協働によって構築しようという方向性だけである。本授業では、今日学際的に議論され始めた公共概念の見直しに関して文献講読を中心に学習して「新しい公共」の概念化を目指す。					
授業計画	<p>第1回 公と私の社会科学(1)科書①に基づき論点を明らかにする。</p> <p>第2回 公と私の社会科学(2)論点ごとに先行研究をサーベイする。</p> <p>第3回 公と私の社会科学(3)先行研究サーベイを踏まえて論点を深める。</p> <p>第4回 日本における公と私(1)教科書②に基づき論点を明らかにする。</p> <p>第5回 日本における公と私(2)論点ごとに先行研究をサーベイする。</p> <p>第6回 日本における公と私(3)先行研究サーベイを踏まえて論点を深める。</p> <p>第7回 欧米における公と私(1)教科書③に基づき論点を明らかにする。</p> <p>第8回 欧米における公と私(2)論点ごとに先行研究をサーベイする。</p> <p>第9回 欧米における公と私(3)先行研究サーベイを踏まえて論点を深める。</p> <p>第10回 経済からみた公私問題(1)教科書④に基づき論点を明らかにする。</p> <p>第11回 経済からみた公私問題(2)論点ごとに先行研究をサーベイする</p> <p>第12回 経済からみた公私問題(3)先行研究サーベイを踏まえて論点を深める。</p> <p>第13回 中間集団が開く公共性(1)教科書⑤に基づき論点を明らかにする。</p> <p>第14回 中間集団が開く公共性(2)論点ごとに先行研究をサーベイする</p> <p>第15回 中間集団が開く公共性(3)先行研究サーベイを踏まえて論点を深める。</p>					
各科目の目標(達成水準)	公共概念についての学際的な議論を検討して「新たな公共」研究に関する視点を構築する。					
参考文献等	適宜授業にて紹介する。					
教科書	<p>①佐々木毅・金泰昌編『公と私の社会科学』(公共哲学2)、東京大学出版会、2001年。</p> <p>②同上『日本における公と私』(公共哲学3)、東京大学出版会、2002年。</p> <p>③同上『欧米における公と私』(公共哲学4)、東京大学出版会、2002年。</p> <p>④同上『経済からみた公私問題』(公共哲学6)、東京大学出版会、2002年。</p> <p>⑤同上『中間集団が開く公共性』(公共哲学7)、東京大学出版会、2002年。</p>					
成績評価の基準と方法	レポートで60点以上を合格とする。評価指標は、文献講読等を通じて得られた先行研究を踏まえて公共領域研究に関して新たな視点が獲得されているか否か。					

授業コード		授業題目	計量経済学特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	池田 啓実		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし				
教員研究テーマ	21世紀の日本の経済・社会の特性の把握				
授業の概要	日本の経済・社会に関わる定量分析				
授業計画	<p>21世紀の日本の経済・社会の特性を定量的に把握する。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 課題設定のための討議① 第3回 課題設定のための討議② 第4回 名目値と実質値 第5回 季節調整の方法 第6回 変動係数 第7回 寄与度・寄与率・成長率 第8回 課題の分析成果の中間報告 第9回 分散・標準偏差① 第10回 分散・標準偏差② 第11回 相関分析① 第12回 相関分析② 第13回 回帰分析① 第14回 回帰分析② 第15回 課題検証成果の発表</p>				
各科目の目標(達成水準)	日本の経済・社会の構造的特性を定量的に把握する				
参考文献等					
教科書	とくになし				
成績評価の基準と方法	課題レポートの作成及びレポートのプレゼンによる評価				

授業コード		授業題目	計量経済学演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	池田 啓実		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	計量経済学特論を受講していることが望ましい				
教員研究テーマ	「幸せ」を軸とした地方(高知)に相応しい経済・社会の基本軸の解明				
授業の概要	地方における「幸せ」を軸とした新しい経済・社会のあり方の探求				
授業計画	<p>地方においてより多くの人々が「幸せ」を感じる経済・社会のあり方を探求する。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 トフラーの第3の波 第3回 信頼の構造 第4回 スモールワールド・ネットワーク① 第5回 スモールワールド・ネットワーク② 第6回 共通善 第7回 課題設定のための討議① 第8回 課題設定のための討議② 第9回 寄与度・寄与率・成長率 第10回 課題の分析成果の中間報告 第11回 分散・標準偏差 第12回 相関分析① 第13回 相関分析② 第14回 回帰分析 第15回 課題検証成果の発表</p>				
各科目の目標(達成水準)	地方における「幸せ」を軸とした新しい経済・社会のあり方の基本的視点を把握する				
参考文献等					
教科書	とくになし				
成績評価の基準と方法	課題レポートの作成及びレポートのプレゼンによる評価				

授業コード		授業題目	理論経済学特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1 曜日・時限
担当教員名	池田 啓実		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	とくになし				
教員研究テーマ	人の新たな結びつきを起点とした付加価値創発メカニズムの解明				
授業の概要	21世紀における社会経済システムに関する研究				
授業計画	<p>21世紀は、人々の新たな結びつきによって付加価値を創発する時代(結合の時代)と言われる。では、その結びつきをもたらす因子は何か。新たな結びつきは、どのようなプロセスで新たな付加価値を創発するのか。ただ、これまでのマクロ・ミクロの経済学からのアプローチからだけではこの課題の解明は難しい。そこで、この授業では、人と組織に関わる種々の理論を活用することでこの課題に取り組むこととする。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 課題設定のための討議① 第3回 課題設定のための討議② 第4回 人に関わる分析①－信頼の構造 第5回 人に関わる分析②－U理論① 第6回 人に関わる分析③－U理論② 第7回 人に関わる分析④－SECIモデル 第8回 課題検証成果の中間発表 第9回 組織に関わる分析①－場の理論① 第10回 組織に関わる分析②－場の理論② 第11回 組織に関わる分析③－自己組織化理論① 第12回 組織に関わる分析④－自己組織化理論② 第13回 組織に関わる分析⑤－スモールワールド・ネットワーク① 第14回 組織に関わる分析⑥－スモールワールド・ネットワーク② 第15回 課題検証成果の発表</p>				
各科目の目標(達成水準)	人の新たな結びつきの因子とそれがもたらす付加価値創発のメカニズムを理解する				
参考文献等					
教科書	とくになし				
成績評価の基準と方法	課題レポートの作成及びレポートのプレゼンによる評価				

授業コード		授業題目	理論経済学演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	池田 啓実		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	理論経済学特論を受講していることが望ましい				
教員研究テーマ	地方(高知)に相応しい経済・社会再生のあり方の解明				
授業の概要	「結合の時代」における地方の経済・社会再生のあり方探求				
授業計画	<p>人々の新たな結びつきによって付加価値を創発されると言われる21社会において、地方の経済・社会再生のあり方を多様な視点から検討する。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 課題設定のための討議① 第3回 課題設定のための討議② 第4回 トフラーの第3の波 第5回 スモールワールド・ネットワークの視点からの分析① 第6回 スモールワールド・ネットワークの視点からの分析② 第7回 ソーシャル・キャピタルの視点からの分析① 第8回 ソーシャル・キャピタルの視点からの分析② 第9回 課題検証成果の中間発表 第10回 産業連関分析の視点からの分析 第11回 産業集積の視点からの分析① 第12回 産業集積の視点からの分析② 第13回 産業クラスター論の視点からの分析① 第14回 産業クラスター論の視点からの分析② 第15回 課題検証成果の発表</p>				
各科目の目標(達成水準)	「結合の時代」に相応しい地方の経済・社会再生の基本的な視点を把握する				
参考文献等					
教科書	とくになし				
成績評価の基準と方法	課題レポートの作成及びレポートのプレゼンによる評価				

授業コード		授業題目	国際経済特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	大石 達良		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本企業の国際展開					
授業の概要	この授業では国際経済に関する現状と基礎的理論を学ぶ。授業は、基本的なテキストを用い、テキスト学習、質疑応答、討論を行う。なお、テキストは、受講者の学修の経験とレベルを考慮して変更する場合もある。					
授業計画	<p>(1) イントロダクション①国際経済の現状、 (2) イントロダクション②国際化する日本経済の現状、 (3) 国際貿易①世界貿易と日本貿易の現状、 (4) 国際貿易②国際貿易理論、 (5) 通商システム①自由貿易体制と通商問題の現状、 (6) 通商システム②国際経済政策理論、 (7) 企業のグローバル化①企業の海外展開の現状、 (8) 企業のグローバル化②直接投資理論・多国籍企業理論、 (9) 外国為替①外国為替市場と為替レートの現状、 (10) 外国為替②外国為替理論、 (11) 国際収支①国際収支の現状、 (12) 国際収支②国際収支理論・国際マクロ経済理論、 (13) 国際金融①国際金融市場と国際資金移動の現状、 (14) 国際金融②国際資金移動理論、 (15) 総まとめ、評価。</p>					
各科目の目標(達成水準)	国際経済の現実および国際経済理論に関する基礎的な理解を得ること。					
参考文献等						
教科書	伊藤元重『ゼミナール国際経済入門(改訂第3版)』日本経済新聞社、2005年					
成績評価の基準と方法	予習状況、授業中の議論への参加状況、期末のレポートによって評価。評価のウェイトは、それぞれ1/3。					

授業コード		授業題目	国際経済演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	大石 達良		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本企業の国際展開					
授業の概要	この授業では国際経済の中でとくに貿易に関する理論について議論を行う。授業は、演習参加者と相談して、(1)テキストを用いて行う、(2)演習参加者による報告により行う、(3)テキストと演習参加者の報告を並行して行う、の方法のいずれかでを行う。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> (1) イントロダクション (2) リカードモデル (3) 特殊要素モデル (4) ヘクシャー・オリーエンモデル (5) 基本貿易モデル (6) 規模の経済・不完全競争 (7) 国際要素移動 (8) 地域経済問題 (9) 貿易理論のまとめ (10) 貿易政策の手段 (11) 貿易政策の政治経済学 (12) 発展途上国における貿易政策 (13) 先進国における貿易政策 (14) 貿易政策のまとめ (15) 総まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	貿易の理論と政策について理解し、論評できる能力を得ること。					
参考文献等						
教科書	未定					
成績評価の基準と方法	予習状況、授業中の議論への参加状況、期末のレポートによって評価。評価のウェイトは、それぞれ1/3。					

授業コード		授業題目	対外直接投資特論	単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次		開講時期	曜日・時限
担当教員名	大石 達良		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点					
教員研究テーマ	日本企業の国際展開				
授業の概要	この授業では東京大学ものづくり国際経営センター長である藤本隆宏氏を中心とする研究グループの議論に基づく国際経営戦略に関して学び議論を行う。授業は、テキストを用い、テキスト学習、質疑応答、討論を行う。				
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> (1) イントロダクション (2) ものづくりの国際経営 (3) 東アジアにおける製造業ネットワーク (4) 東アジアへの直接投資と企業成長のマネジメント (5) 液晶・パネル産業 (6) 携帯電話産業 (7) ハードディスクドライブ産業 (8) 自動車産業 (9) オートバイ産業 (10) 台湾産業: 米国企業とのモジュラー戦略 (11) 韓国企業: アーキテクチャの位置取り戦略 (12) 中国企業: モジュラー型製品による成長戦略 (13) インテグラル型企業のグローバル組織統合 (14) アーキテクチャ論から見た日本企業のポジショニング戦略 (15) まとめ、評価。 				
各科目の目標(達成水準)	日本多国籍企業の国際経営戦略に関する基礎的な理解を得ること。				
参考文献等					
教科書	新宅純二郎・天野倫文『ものづくりの国際経営戦略』(有斐閣、2009年)				
成績評価の基準と方法	予習状況、授業中の議論への参加状況、期末のレポートによって評価。評価のウェイトは、それぞれ1/3。				

授業コード		授業題目	対外直接投資演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	大石 達良		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本企業の国際展開					
授業の概要	この授業では東京大学ものづくり国際経営センター長である藤本隆宏氏を中心とする研究グループの議論に基づく国際経営戦略に関する議論を行う。授業は、テキストを用いつつ、演習参加者による報告を盛り込みながら行う。					
授業計画	<p>(1)イントロダクション</p> <p>(2)生産マネジメント(1)生産システム①生産システムの基礎</p> <p>(3)生産マネジメント(2)生産システム②競争力ファクターの管理</p> <p>(4)生産マネジメント(3)資源・技術管理①経営資源の管理</p> <p>(5)生産マネジメント(4)資源・技術管理②製品開発の管理と能力構築</p> <p>(6)能力構築競争(1)能力構築競争とは</p> <p>(7)能力構築競争(2)自動車産業における能力構築競争</p> <p>(8)ものづくり経営(1)ものづくり経営とは</p> <p>(9)ものづくり経営(2)アジアでのものづくり経営</p> <p>(10)ものづくり競争戦略(1)ものづくりの復活</p> <p>(11)ものづくり競争戦略(2)地域におけるものづくり</p> <p>(12)日本のインテグラル型企業のグローバル組織</p> <p>(13)東アジアの企業(1)台湾・中国</p> <p>(14)東アジアの企業(2)韓国・東南アジア</p> <p>(15)まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	日本多国籍企業の国際経営戦略について理解し、論評できる能力を得ること。					
参考文献等						
教科書	藤本隆宏氏の著作。具体的には授業中に指示。					
成績評価の基準と方法	予習状況、授業中の議論への参加状況、期末のレポートによって評価。評価のウェイトは、それぞれ1/3。					

授業コード		授業題目	産業構造論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中澤 純治		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	地域経済における産業構造及び経済循環構造に関する研究					
授業の概要	経済の発展・成長に伴う経済構造の変化を、種々のデータや資料、分析結果を用いて考察を行う。特に、産業構造分析の有力な手段である産業連関分析の手法を用いて、生産技術構造の変化や相互依存関係、経済のサービス化、国際化などの検討を行う。					
授業計画	<p>第01講 イン트로ダクション</p> <p>第02講 地域政策と産業連関分析</p> <p>第03講 産業連関表の仕組み(1)取引基本表の概念</p> <p>第04講 産業連関表の仕組み(2)産業分類の原則</p> <p>第05講 産業連関表の仕組み(3)特殊な取り扱いをする部門</p> <p>第06講 産業連関表の仕組み(4)様々な産業連関表</p> <p>第07講 地域産業連関表の見方(1)経済規模の把握</p> <p>第08講 地域産業連関表の見方(2)産業構造の特徴</p> <p>第09講 地域産業連関表の見方(3)県際収支と経済成長</p> <p>第10講 地域産業連関表の見方(4)経済波及効果の考え方</p> <p>第11講 地域産業連関表の推計方法(1)コントロール・トータル</p> <p>第12講 地域産業連関表の推計方法(2)県内最終需要</p> <p>第13講 地域産業連関表の推計方法(3)移出、移入、バランス調整</p> <p>第14講 地域産業連関表の推計方法(4)地域産業連関表の推計の問題点</p> <p>第15講 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	産業連関分析の基礎的な考え方を身につける。					
参考文献等	尾崎巖『日本の産業構造』(慶應義塾大学出版会)					
教科書	宮沢健一『産業連関分析入門』(日本経済新聞社) 土居英二・浅利一郎・中野親徳『はじめよう地域産業連関分析』(日本評論社)					
成績評価の基準と方法	出席(60%)およびレポート(40%)					

授業コード		授業題目	産業構造論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中澤 純治		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	地域経済における産業構造及び経済循環構造に関する研究					
授業の概要	産業構造分析の有力な手段である産業連関分析に関する基礎的な文献を購読する。また、産業連関表を用いて、特定地域の産業構造の変化や生産技術構造の変化などを検討し、研究発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第01講 イントロダクション</p> <p>第02講 地域産業連関分析の基礎理論(1)プロダクト・ミックス、非代替定理、線型モデル</p> <p>第03講 地域産業連関分析の基礎理論(2)均衡産出高モデル</p> <p>第04講 地域産業連関分析の基礎理論(3)レオンチェフ逆行列</p> <p>第05講 地域産業連関分析の基礎理論(4)競争輸入型モデル</p> <p>第06講 地域産業連関分析の基礎理論(5)非競争輸入型モデル</p> <p>第07講 地域産業連関分析の基礎理論(6)均衡価格モデル</p> <p>第08講 地域産業連関分析の基礎理論(7)競争移入型地域内産業連関モデル</p> <p>第09講 地域産業連関分析の基礎理論(8)非競争移入型地域間産業連関モデル</p> <p>第10講 地域産業連関分析の基礎理論(9)競争移入型地域間産業連関モデル</p> <p>第11講 産業連関分析と行列</p> <p>第12講 産業連関モデルの作成(1)高知県競争輸入型モデル</p> <p>第13講 産業連関モデルの作成(2)高知県非競争輸入型モデル</p> <p>第14講 産業連関モデルの作成(3)政策効果の違いと問題点</p> <p>第15講 まとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	産業連関分析の基礎的な分析手法を身につける。					
参考文献等	尾崎巖『日本の産業構造』(慶應義塾大学出版会)					
教科書	藤川清史『産業連関分析入門』(日本評論社) 朝倉啓一郎『産業連関計算の新しい展開』(九州大学出版会)					
成績評価の基準と方法	出席(60%)およびレポート(40%)					

授業コード		授業題目	マクロ経済学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中澤 純治			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	地域経済における産業構造及び経済循環構造に関する研究					
授業の概要	マクロ経済学の理論的基礎を理解するために、テキスト購読を行う。またトピックに関連した論文に関して、マクロ経済学視点から検討を行い、発表とディスカッションを行う。					
授業計画	<p>第01講 日本経済の循環と変動</p> <p>第02講 GDPの概念と物価指数</p> <p>第03講 マクロ経済学における「短期」と「長期」</p> <p>第04講 所得はどのように決まるか</p> <p>第05講 貨幣の需給と利子率</p> <p>第06講 IS-LM分析と財政金融政策</p> <p>第07講 国際マクロ経済学</p> <p>第08講 短期モデルと長期モデルの比較</p> <p>第09講 物価水準はどのように決まるか</p> <p>第10講 インフレとデフレ</p> <p>第11講 経済成長の理論</p> <p>第12講 消費と投資</p> <p>第13講 投資決定の理論</p> <p>第14講 マクロ経済理論の新展開</p> <p>第15講 マクロ経済政策の有効性について</p> <p>第16講 バブル崩壊以後の日本経済とマクロ経済学</p>					
各科目の目標(達成水準)	マクロ経済学の基礎が理解でき、それに基づいて社会の出来事を考えることができるようになる。					
参考文献等	適宜、トピックに関連する論文を指示します。					
教科書	中谷巖『入門マクロ経済学 第5版』日本評論社					
成績評価の基準と方法	出席(60%)およびレポート(40%)					

授業コード		授業題目	マクロ経済学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中澤 純治			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	マクロ経済学特論を受講していること					
教員研究テーマ	地域経済における産業構造及び経済循環構造に関する研究					
授業の概要	齊藤誠・岩本康志・太田聡一・柴田講久『マクロ経済学』をテキストとして、特にマクロ経済学のミクロ的基礎づけの部分为重点的に行う。なお、前半は復習を兼ねて、毎週2章ごとに読み進めていく。					
授業計画	<p>第01講 われわれはどのようにマクロ経済を理解するのであろうか？ 国民経済計算の考え方・使い方</p> <p>第02講 資金循環表と国際収支統計の作り方・見方 労働統計</p> <p>第03講 マクロ経済モデルの基本的な考え方 閉鎖経済の短期モデルの展開</p> <p>第04講 閉鎖経済の中期モデルの展開 開放経済のモデルの展開</p> <p>第05講 労働市場の長期モデル 閉鎖経済の長期モデル：資本蓄積と技術進歩</p> <p>第06講 安定化政策</p> <p>第07講 財政の長期的課題</p> <p>第08講 なぜマクロ経済モデルにミクロ的基礎が必要なのか？(1)</p> <p>第09講 なぜマクロ経済モデルにミクロ的基礎が必要なのか？(2)</p> <p>第10講 金融市場と貨幣市場：将来の経済が繁栄される“場”(1)</p> <p>第11講 金融市場と貨幣市場：将来の経済が繁栄される“場”(1)</p> <p>第12講 消費と投資</p> <p>第13講 マクロ経済と労働市場(1)</p> <p>第14講 マクロ経済と労働市場(2)</p> <p>第15講 新しいケインジアンのマクロ経済モデル</p> <p>第16講 経済成長</p>					
各科目の目標(達成水準)	マクロ経済学におけるミクロ的基礎付けをしっかりと身につける。					
参考文献等	適宜、トピックに関連する論文を指示します。					
教科書	齊藤誠・岩本康志・太田聡一・柴田講久『マクロ経済学』有斐閣					
成績評価の基準と方法	出席(60%)およびレポート(40%)					

授業コード		授業題目	日本経済史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	田村 安興		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	研究室で授業を行う					
教員研究テーマ	日本経済史 社会思想史					
授業の概要	日本の資本主義発達の歴史的展開を、理論的・実証的に研究する。特に、金融危機、産業研究、流通経済に焦点をあて、日本とアジア地域の経済史を研究する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.日本の経済史 3.日本の経済史近世史 4.日本の近代史 5.市場制度の成立 6.市場経済史 7.西洋市場経済史 8.アジアの市場経済 9.近代化と日本の特質 10.日本の商業市場 11.マクロ経済と日本経済 12.財政と日本経済 13.グローバル化と大競争時代 14.日本企業の国際化 15.まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	論文の読み方と作成を指導する					
参考文献等	『高知論叢』各巻の論文 CINI論文 WEB配信する					
教科書	論文等は印刷する WEBで配信する					
成績評価の基準と方法	レポートと発表により評価					

授業コード		授業題目	日本経済史演習		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	田村 安興		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本経済史 社会思想史					
授業の概要	テーマに関して先行研究をサーベイし、修士論文作成にむけて指導する。日本の資本主義発達の歴史的展開、金融危機、産業研究、流通経済、日本とアジア地域の経済史を研究する。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.経済史 3.近世史 4.近代史 5.市場経済の成立 6.市場経済史 7.西洋市場経済史 8.アジアの市場経済 9.近代化と日本の特質 10.日本の商業市場 11.マクロ経済と世界経済 12.財政と国家 13.グローバル化と大競争時代 14.企業の国際化 15.まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	論文の読み方と作成を指導する					
参考文献等	『高知論叢』各巻の論文 CINI論文 WEB配信する					
教科書	論文等は印刷する WEBで配信する					
成績評価の基準と方法	レポートと発表により評価					

授業コード		授業題目	経済史特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	田村 安興			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	研究室で授業を行う					
教員研究テーマ	地域経済 日本経済史					
授業の概要	近代経済の中で市場の発展過程に関する演習を実施する。演習方法は先行研究の論文購読により行う。また論文・著書や、社会経済史学会の到達点を確認し、フィールドワークを指導する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.日本の市場史 3.日本の市場史近世史 4.日本の近代市場史 5.市場制度の成立 6.生鮮食品市場史 7.西洋市場流通史 8.アジアの市場流通 9.流通近代化と日本の特質 10.量販店と小売り市場 11.卸売りの特質 12.市場外流通の増大 13.グローバル化と大競争時代 14.日本の流通の国際化 15.まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	論文の読み方と作成を指導する					
参考文献等	『高知論叢』各巻の論文 CINI論文 WEB配信する					
教科書	論文等は印刷する WEBで配信する					
成績評価の基準と方法	レポートと発表により評価					

授業コード		授業題目	経済史演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	田村 安興		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	研究室で授業を行う					
教員研究テーマ	地域経済 日本経済史					
授業の概要	修士論文の指導を演習によって行う。演習方法は先行研究の論文購読や現地調査により行う。また田村の論文・著書や、社会経済史学会の到達点を確認し、国内外へのフィールドワークを行う。					
授業計画	1.はじめに 2.修士論文のテーマの検討 3.修士論文報告① 4.修士論文報告② 5.修士論文報告③ 6.修士論文報告④ 7.地域市場調査① 8.地域市場調査② 9.地域市場調査③ 10.地域市場調査④ 11.地域市場調査⑤ 12.地域市場調査⑥ 13.調査検討 14.修士論文報告 15.まとめ					
各科目の目標(達成水準)	論文の読み方と作成を指導する					
参考文献等	『高知論叢』各巻の論文 CINI論文 WEB配信する					
教科書	論文等は印刷する WEBで配信する					
成績評価の基準と方法	レポートと発表により評価					

授業コード		授業題目	ミクロ経済学特論 I		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	新井 泰弘		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。					
教員研究テーマ	知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論					
授業の概要	産業組織論の基本概念を学ぶ					
授業計画	<p>第一回: イントロダクション、ゲーム理論の基礎①ナッシュ均衡と部分ゲーム完全均衡</p> <p>第二回: ゲーム理論の基礎②部分ゲーム完全均衡</p> <p>第三回: 独占とカルテル①社会厚生損失</p> <p>第四回: 独占とカルテル②カルテルの維持と耐久財独占</p> <p>第五回: 同質財市場①クールノー競争</p> <p>第六回: 同質財市場②ベルトラン競争</p> <p>第七回: 同質財市場③同質財の国際取引</p> <p>第八回: 小テスト&解説</p> <p>第九回: 製品差別化①独占的競争</p> <p>第十回: 製品差別化②ホテリングモデル</p> <p>第十一回: 産業集積①垂直合併と水平合併</p> <p>第十二回: 産業集積②参入障壁</p> <p>第十三回: 価格戦略 Two part tariff</p> <p>第十四回: 市場戦略 Bundling</p> <p>第十五回: 知的財産制度</p>					
各科目の目標(達成水準)	産業組織論の基本概念を学ぶ					
参考文献等	<p>1) Luis Cabral "Introduction to Industrial Organization" The MIT Press, 2000.</p> <p>2) Massimo Motta "Competition Policy: Theory and Practice" Cambridge University Press, 2004.</p>					
教科書	Oz Shy "Industrial Organization: Theory and Applications" The MIT Press, 1996.					
成績評価の基準と方法	<p>期末試験、及び小テストによって評価します。</p> <p>点数の配分は期末試験が6割、小テストを4割とします。</p>					

授業コード		授業題目	ミクロ経済学演習 I		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	新井 泰弘		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。					
教員研究テーマ	知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論					
授業の概要	産業組織論、ゲーム理論の基礎文献講読					
授業計画	<p>産業組織論や知的財産権制度の理論研究に関する研究報告とディスカッションを行う。修士論文を執筆するために必要な基礎知識と技術を習得し、修士論文の緻密な研究計画書の作成を目的とする。</p> <p>第一回: 研究テーマの策定と計画の立案 第二回: 文献輪読①Kamien and Tauman (1986) "Fees Versus Royalties and the Private Value of a Patent" <i>The Quarterly Journal of Economics</i> その① 第三回: 文献輪読②Kamien and Tauman (1986) "Fees Versus Royalties and the Private Value of a Patent" <i>The Quarterly Journal of Economics</i> その② 第四回: 文献輪読③Kamien and Tauman (1986) "Fees Versus Royalties and the Private Value of a Patent" <i>The Quarterly Journal of Economics</i> その③ 第五回: 文献輪読④D'Aspremont and Jacquemin (1988) "Cooperative and Noncooperative R & D in Duopoly with Spillovers" <i>The American Economic Review</i> その① 第六回: 文献輪読⑤D'Aspremont and Jacquemin (1988) "Cooperative and Noncooperative R & D in Duopoly with Spillovers" <i>The American Economic Review</i> その② 第七回: 中間報告①修士論文のテーマ策定 第八回: 中間報告②修士論文の問題設定に関する議論、及び参考文献リストの精査 第九回: 文献輪読⑥Gallini and Wright (1990) "Technology Transfer under Asymmetric Information Nancy" <i>RAND journal of economics</i> その① 第十回: 文献輪読⑦Gallini and Wright (1990) "Technology Transfer under Asymmetric Information Nancy" <i>RAND journal of economics</i> その② 第十一回: 文献輪読⑧Meurer (1989) "The Settlement of Patent Litigation" <i>RAND journal of economics</i> その① 第十二回: 文献輪読⑨Meurer (1989) "The Settlement of Patent Litigation" <i>RAND journal of economics</i> その② 第十三回: 文献輪読⑩Meurer (1989) "The Settlement of Patent Litigation" <i>RAND journal of economics</i> その③ 第十四回: 最終報告① 第十五回: 最終報告②</p>					
各科目の目標(達成水準)	産業組織論に関する基礎知識を習得し、修士論文の研究計画書を作成すること					
参考文献等	受講者のテーマに併せて適宜指示する。					
教科書	特になし。文献輪読を中心に授業を行う。					
成績評価の基準と方法	文献の輪読と、最後に提出する研究計画書で評価する。					

授業コード		授業題目	ミクロ経済学特論Ⅱ		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	新井 泰弘			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。					
教員研究テーマ	知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論					
授業の概要	産業組織論の基本概念、応用トピックを学ぶ					
授業計画	<p>第一回: Introduction</p> <p>第二回: Static asymmetric information games and Bayesian Nash equilibrium</p> <p>第三回: Dynamic asymmetric information games and perfect Bayesian Nash equilibrium</p> <p>第四回: Imperfect competition: Stackelberg equilibrium</p> <p>第五回: Imperfect competition: Cournot versus Bertrand</p> <p>第六回: Sources of market power: Advertising</p> <p>第七回: Sources of market power: Consumer inertia</p> <p>第八回: Midterm exam</p> <p>第九回: Pricing strategies :Group pricing</p> <p>第十回: Pricing strategies :Menu pricing</p> <p>第十一回: R&D :Innovation and R&D</p> <p>第十二回: R&D :Intellectual property right</p> <p>第十三回: Networks, standards and systems: Markets with network goods</p> <p>第十四回: Networks, standards and systems: Strategies for network goods</p> <p>第十五回: Asymmetric information</p>					
各科目の目標(達成水準)	産業組織論の基本概念を学ぶ					
参考文献等	<p>1) Luis Cabral "Introduction to Industrial Organization" The MIT Press, 2000.</p> <p>2) Massimo Motta "Competition Policy: Theory and Practice" Cambridge University Press, 2004.</p>					
教科書	Belleflamme and Peitz "Industrial Organization: Markets and Strategies" Cambridge University Press, 2003.					
成績評価の基準と方法	<p>期末試験、及び小テストによって評価します。</p> <p>点数の配分は期末試験が6割、小テストを4割とします。</p>					

授業コード		授業題目	ミクロ経済学演習Ⅱ		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	新井 泰弘			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	英語文献の講読を厭わないこと。また、ミクロ経済学の知識と若干の数学的素養(最適化の一階条件、二階条件、ラグランジュ乗数法の理解)が必要となります。					
教員研究テーマ	知的財産権制度の経済分析、産業組織論、法と経済学、ゲーム理論					
授業の概要	産業組織論、ゲーム理論の文献講読					
授業計画	<p>演習Ⅰと同じく、文献輪読とディスカッションを中心に授業を行う。本講義では、既存の研究結果を踏まえた上で、理論モデルを自身で構築し、オリジナルの研究結果を導き出すことを最終的な目標とする。</p> <p>第一回: 修士論文のテーマの策定と計画の立案 第二回: 文献輪読①Gilbert and Shapiro (1990) "Optimal Patent Length and Breadth" RAND journal of economics その① 第三回: 文献輪読②Gilbert and Shapiro (1990) "Optimal Patent Length and Breadth" RAND journal of economics その② 第四回: 文献輪読③Klemperer (1990) "How Broad Should the Scope of Patent Protection Be?" RAND journal of economics その① 第五回: 文献輪読④Klemperer (1990) "How Broad Should the Scope of Patent Protection Be?" RAND journal of economics その② 第六回: 文献輪読⑤Klemperer (1990) "How Broad Should the Scope of Patent Protection Be?" RAND journal of economics その③ 第七回: 中間報告: 既存研究の整理 第八回: 中間報告: 理論モデルの報告 第九回: 文献輪読⑥Rockett (1990) "Choosing the Competition and Patent Licensing" RAND journal of economics その① 第十回: 文献輪読⑦Rockett (1990) "Choosing the Competition and Patent Licensing" RAND journal of economics その② 第十一回: 文献輪読⑧Gallini (1992) "Patent Policy and Costly Imitation Nancy" RAND journal of economics その① 第十二回: 文献輪読⑨Gallini (1992) "Patent Policy and Costly Imitation Nancy" RAND journal of economics その② 第十三回: 文献輪読⑩Gallini (1992) "Patent Policy and Costly Imitation Nancy" RAND journal of economics その③ 第十四回: 最終報告① 第十五回: 最終報告②</p>					
各科目の目標(達成水準)	独自に分析に値する問題を発見し、それを経済理論モデルを用いて描写、分析をすることを目標とする。					
参考文献等	受講者のテーマに併せて適宜指示する。					
教科書	特になし。文献輪読を中心に授業を行う。					
成績評価の基準と方法	文献の輪読と、最後に提出する研究計画書で評価する。					

授業コード		授業題目	金融論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	海野 晋悟		担当教員所属			
履修における注意点	<p>*マクロ特論・ミクロ特論を事前に履修済みであることが望ましい *金融・国際金融で修論を執筆予定の院生 *英語の文法等に不安を持つ院生の受講をお勧めしない</p>					
教員研究テーマ	動学的経済モデルの構築とそれのベイズ実証分析					
授業の概要	金融論に関する理論の基礎知識を学ぶ					
授業計画	<p>第01回 Course introduction 第02回 Empirical evidence on money, prices, and output: keyword: money, prices, and output 第03回 Empirical evidence on money, prices, and output: keyword: correlations 第04回 Empirical evidence on money, prices, and output: keyword: the effect of money on output 第05回 Money-in-the-utility function: keyword: miu 第06回 Money-in-the-utility function: keyword: miu model 第07回 Money-in-the-utility function: keyword: the welfare cost of inflation 第08回 Money-in-the-utility function: keyword: dynamics 第09回 Money and transaction: keyword: transaction 第10回 Money and transaction: keyword: resource costs of transacting 第11回 Money and transaction: keyword: cia models 第12回 Interest rates and monetary policy: keyword: interest rate 第13回 Interest rates and monetary policy: keyword: the term structure of interest rates 第14回 Interest rates and monetary policy: keyword: policy analysis 第15回 Final exam.</p>					
各科目の目標(達成水準)	金融論の最新の研究動向を学ぶ					
参考文献等	各講義で紹介する参考文献を必ず読破する					
教科書	Carl E. Walsh, <i>Monetary Theory and Policy</i> , MIT Press, 2010.					
成績評価の基準と方法	期末試験と講義の発言・報告態度により評価する					

授業コード		授業題目	金融論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	海野 晋悟		担当教員所属			
履修における注意点	<p>*マクロ特論・ミクロ特論を事前に履修済みであることが望ましい *金融・国際金融で修論を執筆予定の院生 *英語の文法等に不安を持つ院生の受講をお勧めしない</p>					
教員研究テーマ	動学的経済モデルの構築とそのベイズ実証分析					
授業の概要	金融論に関する理論・実証の海外ジャーナルを輪読し、研究発表とディスカッションを行う					
授業計画	第01回 Course introduction 第02回 Paper presentation (Keyword: prices) 第03回 Paper presentation (Keyword: inflation) 第04回 Paper presentation (Keyword: output) 第05回 Paper presentation (Keyword: correlation) 第06回 Paper presentation (Keyword: short-run relation) 第07回 Paper presentation (Keyword: long-run relation) 第08回 Paper presentation (Keyword: business cycle) 第09回 Paper presentation (Keyword: money) 第10回 Paper presentation (Keyword: interest rate) 第11回 Paper presentation (Keyword: money and interest rate) 第12回 Paper presentation (Keyword: monetary policy) 第13回 Paper presentation (Keyword: monetary policy and business cycle) 第14回 Paper presentation (Keyword: sticky price) 第15回 Paper presentation (Keyword: sticky price and monetary policy)					
各科目の目標(達成水準)	金融論に関する研究動向を学ぶ					
参考文献等	特になし					
教科書	教員が提示する研究論文を読破してくること					
成績評価の基準と方法	1人当たり少なくとも2回は研究報告を行ってもらう 報告態度・演習への態度					

授業コード		授業題目	国際金融論特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2		曜日・時限	1
担当教員名	海野 晋悟		担当教員所属			
履修における注意点	<p>*マクロ特論・ミクロ特論を事前に履修済みであることが望ましい *金融・国際金融で修論を執筆予定の院生 *英語の文法等に不安を持つ院生の受講をお勧めしない</p>					
教員研究テーマ	動学的経済モデルの構築とそのベイズ実証分析					
授業の概要	国際金融論に関する実証方法と理論の基礎知識を学ぶ					
授業計画	<p>第01回 Course introduction 第02回 Some institutional background (1) international financial markets 第03回 Some institutional background (2) national accounting relations 第04回 Some institutional background (3) the central bank's balance sheet 第05回 Some useful time-series methods (1) unrestricted Vector Autoregressions 第06回 Some useful time-series methods (2) the Generalized Method of Moments 第07回 Some useful time-series methods (3) the Simulated Method of Moments 第08回 Some useful time-series methods (4) unit roots & cointegration 第09回 The monetary model (1) purchasing-power parity 第10回 The monetary model (2) the monetary model of the balance of payments 第11回 The monetary model (3) the monetary model under flexible exchange rates 第12回 The Lucas model (1) the barter economy 第13回 The Lucas model (2) the one-money monetary economy 第14回 The Lucas model (3) the two-money monetary economy 第15回 Final exam.</p>					
各科目の目標(達成水準)	国際金融論の研究方法を学ぶ					
参考文献等	各講義で紹介する参考文献を必ず読破する					
教科書	Nelson Mark, <i>International Macroeconomics and Finance: Theory and Econometric Methods</i> , John Wiley & Sons, 2001					
成績評価の基準と方法	期末試験と講義の発言・報告態度により評価する					

授業コード		授業題目	国際金融論演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	海野 晋悟		担当教員所属			
履修における注意点	<p>*マクロ特論・ミクロ特論を事前に履修済みであることが望ましい</p> <p>*金融・国際金融で修論を執筆予定の院生</p> <p>*英語の文法等に不安を持つ院生の受講をお勧めしない</p>					
教員研究テーマ	動学的経済モデルの構築とそのベイズ実証分析					
授業の概要	国際金融論に関する理論・実証の海外ジャーナルを輪読し、研究発表とディスカッションを行う					
授業計画	<p>第01回 Course introduction</p> <p>第02回 Paper presentation (Keyword: international finance)</p> <p>第03回 Paper presentation (Keyword: national accounting)</p> <p>第04回 Paper presentation (Keyword: balance sheet)</p> <p>第05回 Paper presentation (Keyword: VAR)</p> <p>第06回 Paper presentation (Keyword: GMM)</p> <p>第07回 Paper presentation (Keyword: SMM)</p> <p>第08回 Paper presentation (Keyword: unit root)</p> <p>第09回 Paper presentation (Keyword: PPP)</p> <p>第10回 Paper presentation (Keyword: monetary model)</p> <p>第11回 Paper presentation (Keyword: exchange rate)</p> <p>第12回 Paper presentation (Keyword: barter economy)</p> <p>第13回 Paper presentation (Keyword: closed economy)</p> <p>第14回 Paper presentation (Keyword: open economy)</p> <p>第15回 Paper presentation (Keyword: final exam)</p>					
各科目の目標(達成水準)	国際金融論に関する研究動向を学ぶ					
参考文献等	特になし					
教科書	教員が提示する研究論文を読破してくること					
成績評価の基準と方法	1人当たり少なくとも2回は研究報告を行ってもらう 報告態度・演習への態度					

授業コード		授業題目	都市政策特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	石筒 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	都市政策、地域政策に関する経済分析					
授業の概要	現代の都市が抱える諸問題の原因を探り、その現状や弊害を経済的側面から分析する。その上で、今後の都市政策のあり方や都市問題の対策を事例研究を通じて考察する。					
授業計画	<p>日本、アジア、欧州における現代の都市が抱える諸問題の原因を探り、その現状や弊害を経済学的側面から分析する。その上で、今後の都市政策のあり方や都市問題の対策について、事例研究を通じて考察し、それらについての研究発表を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 都市問題の意味 2 アジアにおける都市問題と都市政策 アジアの現状 3 アジアにおける都市問題と都市政策 東南アジア 4 アジアにおける都市問題と都市政策 中国 5 アジアにおける都市問題と都市政策 韓国 6 欧州における都市問題と都市政策 欧米の現状 7 欧州における都市問題と都市政策 フランス・ドイツ 8 欧州における都市問題と都市政策 英国 9 欧州における都市問題と都市政策 米国 10 日本における都市問題と都市政策 歴史的経緯 11 日本における都市問題と都市政策 戦後の推移 12 日本における都市問題と都市政策 東京一極集中 13 日本における都市問題と都市政策 地方都市 14 これからの都市政策のあり方 問題の所在 15 これからの都市政策のあり方 課題分析 					
各科目の目標(達成水準)	以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)都市問題の構造を経済理論をベースに理解することができる。2)今後の都市政策のあり方や都市問題の対策を理解することができる。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	授業参加度および最終レポート。					

授業コード		授業題目	都市政策演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	石筒 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	都市政策、地域政策に関する経済分析					
授業の概要	日本、アジア、欧州における都市問題の実状と対策事例に対して、経済理論をベースにした分析を行う。また、現地調査を含めた綿密な研究活動を通じて、実証的な側面からも政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。					
授業計画	<p>日本、アジア、欧米における都市問題の実情と対策事例に対して、経済理論をベースにした分析を行う。また、現地調査を含めた綿密な研究活動を通じて、実証的な側面からも政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 都市に関する諸問題の分析手法の検討 2 都市問題と都市政策に関する事例研究 日本の事例(大都市) 3 都市問題と都市政策に関する事例研究 日本の事例(地方都市) 4 都市問題と都市政策に関する事例研究 タイの事例 5 都市問題と都市政策に関する事例研究 マレーシアの事例 6 都市問題と都市政策に関する事例研究 シンガポールの事例 7 都市問題と都市政策に関する事例研究 中国の事例 8 都市問題と都市政策に関する事例研究 韓国の事例 9 都市問題と都市政策に関する事例研究 英国の事例 10 都市問題と都市政策に関する事例研究 米国の事例 11 都市問題と都市政策に関する現地調査 調査地の検討 12 都市問題と都市政策に関する現地調査 調査内容の確認 13 現地調査結果の分析: データ整理 14 現地調査結果の分析: データ分析 15 現地調査結果に関する報告 					
各科目の目標(達成水準)	以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)都市問題の構造を経済理論をベースに理解することができる。2)実証的な側面から政策分析を行うことができる。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	授業参加度および最終レポート。					

授業コード		授業題目	地域政策特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	石筒 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	都市政策、地域政策に関する経済分析					
授業の概要	地域政策が行われる歴史的背景をふまえて、地域政策の現状と課題について、事例研究を通じて考察する。					
授業計画	<p>日本、アジア、欧米における地域政策の現状や課題を分析する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 地域政策の歴史的背景 2 日本における地域政策 全国総合開発計画 3 日本における地域政策 工業団地政策 4 日本における地域政策 事例研究:首都圏 5 日本における地域政策 事例研究:四国 6 欧州における地域政策 欧米の地域開発の歴史 7 欧州における地域政策 一極集中と多極分散 8 欧州における地域政策 英国の事例 9 欧州における地域政策 米国の事例 10 アジアにおける地域政策 アジアの地域開発の歴史 11 アジアにおける地域政策 マレーシア 12 アジアにおける地域政策 タイ・インドネシア 13 アジアにおける地域政策 中国 14 これからの地域政策のあり方:問題の所在 15 これからの地域政策のあり方:課題分析 					
各科目の目標(達成水準)	以下の2点に関して、授業が終了した時点でできるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)地域政策の現状と課題を理解することができる。2)今後の地域政策のあり方についての現状と課題をふまえて提案することができる。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	授業参加度および最終レポート。					

授業コード		授業題目	地域政策演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	石筒 寛		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	都市政策、地域政策に関する経済分析					
授業の概要	日本、アジア、欧州における地域政策の事例を考察する。また、特定の地域に焦点を当て、現地調査を含めた綿密な研究活動を通じて、実証的な側面からも政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。					
授業計画	<p>日本、アジア、欧州における地域政策の事例に対して、現地調査など通じて政策分析を行い、それらについての研究発表とディスカッションを実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 地域政策の分析手法の検討 2 地域政策に関する事例研究 事例研究：首都圏 3 地域政策に関する事例研究 事例研究：近畿 4 地域政策に関する事例研究 事例研究：九州 5 地域政策に関する事例研究 事例研究：四国 6 地域政策に関する事例研究 事例研究：沖縄 7 地域政策に関する事例研究 フランス・イタリア・ドイツの事例 8 地域政策に関する事例研究 英国の事例 9 地域政策に関する事例研究 米国の事例 10 地域政策に関する現地調査 調査地の検討 11 地域政策に関する現地調査 調査内容の確認 12 現地調査結果の分析：データ整理 13 現地調査結果の分析：データ分析 14 現地調査結果の分析：結果の検証 15 現地調査結果に関する報告 					
各科目の目標(達成水準)	以下の2点に関して、授業が終了した時点ですることができるようになっていれば、この授業の目標は達成されたこととなります。1)各種の地域政策を比較し分析することができる。2)実証的な側面から政策分析を行うことができる。					
参考文献等	適宜指示する。					
教科書	適宜指示する。					
成績評価の基準と方法	授業参加度および最終レポート。					

授業コード		授業題目	財政学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	鈴木啓之		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	1. 財政政策の日独比較研究、2. 公信用と財政政策、3. 地域政策と財政					
授業の概要	地域政策と財政に関わって、地域づくりに関する全国的な動向と、その中での公共部門の役割について研究する。特に近年の地域政策の展開においては、民間の各種組織(企業、NPOその他の各種団体、住民組織)および公共部門の協働で計画・実施される事業が増加しており、それらを推進することと、財政制度とがどのように変化しつつあるかを考えていく。					
授業計画	<p>1. オリエンテーション</p> <p>2. 世古一穂編著『参加と協働のデザイン』を参考とした住民参加と協働の発展プロセスに関する検討</p> <p>3. 世古一穂編著『参加と協働のデザイン』を参考とした住民参加と協働の最近の事例に関する検討1</p> <p>4. 世古一穂編著『参加と協働のデザイン』を参考とした住民参加と協働の最近の事例に関する検討2</p> <p>5. ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』を参考とした「エンパワーメント」の考え方に関する検討1 第5～9回は、いずれも日本の地域(特に過疎地域)の対応する状況を逐次提示しながら討論する</p> <p>6. ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』を参考とした「エンパワーメント」の考え方に関する検討2</p> <p>7. ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』を参考とした「エンパワーメント」の考え方に関する検討3</p> <p>8. ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』を参考とした「エンパワーメント」の考え方に関する検討4</p> <p>9. ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』を参考とした「エンパワーメント」の考え方に関する検討5</p> <p>10. 上山 信一著『「政策連携」の時代—地域・自治体・NPOのパートナーシップ』の検討1</p> <p>11. 上山 信一著『「政策連携」の時代—地域・自治体・NPOのパートナーシップ』の検討2</p> <p>12. 各種の財政制度と協働事業に対する支援のあり方に関する検討1(租税制度)</p> <p>13. 各種の財政制度と協働事業に対する支援のあり方に関する検討2(助成金)</p> <p>14. 各種の財政制度と協働事業に対する支援のあり方に関する検討2(地域自治区制度)</p> <p>15. 政策過程と住民の参画に関するまとめ</p>					
各科目の目標(達成水準)	参加と協働および財政制度に関する基本的な知識の上に、今後の地域づくり等の政策過程で財政制度の活用方法等を考えられる素養を磨く					
参考文献等	随時提示する					
教科書	世古一穂編著『参加と協働のデザイン』(学芸出版社) ジョン・フリードマン『市民・政府・NGO』(新評論) 上山 信一著『「政策連携」の時代—地域・自治体・NPOのパートナーシップ』(東京財団政策研究シリーズ)					
成績評価の基準と方法	演習における受講生の参加状況および成果により評価する					

授業コード		授業題目	財政学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	鈴木啓之		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	1. 財政政策の日独比較研究、2. 公信用と財政政策、3. 地域政策と財政					
授業の概要	財政制度および財政政策の基礎について講義する					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 「市場の失敗」と「政府の失敗」 3. 財政政策の基本的思想——効率と公平 4. 経済成長と財政1(ケインジアンポリシーと財政) 5. 経済成長と財政2(財政赤字と経済学説) 6. 所得再分配と市場経済1(所得再分配に関わる基本的な制度) 7. 所得再分配と市場経済2(市場メカニズムと所得分配の欠陥) 8. 経費論各論1(移転的経費) 9. 経費論各論2(投資的経費) 10. 租税論各論1(個人所得課税) 11. 租税論各論2(法人所得課税) 12. 租税論各論3(消費課税、資産課税) 13. 社会保険論 14. 地方制度および地方財政論 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	基本的な財政学の用語、制度等について理解した上で、現代の財政運営に影響を与えている学説について、入門的な知識を授ける。					
参考文献等	神野直彦著『財政学』(有斐閣)					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	各回に行う質問等での理解状況の把握を中心として評価する					

授業コード		授業題目	財政政策特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	鈴木啓之		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	1. 財政政策の日独比較研究、2. 公信用と財政政策、3. 地域政策と財政					
授業の概要	財政政策の効果について、成長政策、所得再分配政策等の視点から講義する					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 経済成長は必要か 3. 経済成長政策と財政1(財政支出と経済成長政策) 4. 経済成長と財政2(税制と経済成長政策) 5. 経済成長政策と財政3(工業化のプロセスと財政) 6. 経済成長と財政4(脱工業化と経済成長政策) 7. 経済成長と財政5(財政赤字と経済成長政策) 8. 所得再分配と市場経済1(所得再分配に関わる基本的な制度) 9. 所得再分配と市場経済2(市場メカニズムと所得分配の欠陥) 10. 所得再分配と市場経済3(所得再分配は必要か) 11. 所得再分配と市場経済4(所得再分配政策の国際比較) 12. 所得再分配と市場経済5(目指すべき社会像と所得再分配政策) 13. 政治過程と財政政策1(55年体制と財政政策) 14. 政治過程と財政政策2(新自由主義と財政政策) 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	財政政策の基本問題である経済成長政策や所得再分配政策との関係で、どのような論点や問題点があるかを理解する。					
参考文献等	神野直彦著『財政学』(有斐閣)					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	各回に行う質問等での理解状況の把握を中心として評価する					

授業コード		授業題目	財政政策演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	鈴木啓之		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし					
教員研究テーマ	1. 財政政策の日独比較研究、2. 公信用と財政政策、3. 地域政策と財政					
授業の概要	国であれ地方であれ、財政支出は義務的経費と裁量的経費に分けることができる。しかし実は、市民生活(職業生活も含めて)を支える上で不可欠の基本的条件は、義務的経費のみによって提供されているわけではない。この演習では、市民生活を支える条件が財政的にどのように担保されているかをケーススタディ的に学んでいく。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ライフラインの構造1(電気、水道、ガス、通信の事業と財政) 3. ライフラインの構造2(直轄事業としての水道事業と海外の民営化の事例) 4. 福祉・社会保障と財政1(福祉・社会保障の財政制度——公的医療保険) 5. 福祉・社会保障と財政2(福祉・社会保障の財政制度——公的年金保険) 6. 福祉・社会保障と財政3(福祉・社会保障の財政制度——公的介護保険) 7. 福祉・社会保障と財政4(福祉・社会保障の財政制度——保育所、保育園) 8. 福祉・社会保障と財政5(福祉・社会保障の財政制度——障害者福祉) 9. 福祉・社会保障と財政6(福祉・社会保障の財政制度——生活保護) 10. 雇用保険と失業 11. 教育と財政 12. 「業」と財政1(農業と財政) 13. 「業」と財政2(企業活動と財政) 14. 国庫支出金(補助金等)の転換 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	個別の経済主体の側から各種の政策分野を検討することで、国、都道府県、市町村の施策が職業も含めた生活全般にどのように関わっているかを学習・調査して報告してもらおう。したがって、各回のテーマに関して、個別の経済主体と財政制度との関わりがどのような構造になっているかを理解できることが目標になる。					
参考文献等	多岐に渡るので、随時提示していく。					
教科書	なし					
成績評価の基準と方法	各回の報告内容、質疑などの状況を踏まえて、総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	地方財政特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	霜田 博史		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし。					
教員研究テーマ	地方行財政の維持可能性に関する研究					
授業の概要	地方行財政に関する先行研究をとりあげ、現代の地方行財政を研究する上での基本的な課題について整理・考察する。					
授業計画	<p>重森暁・植田和弘編『Basic地方財政論』をテキストにとりあげ、地方行財政をめぐる様々な課題について考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 現代地方自治と地方財政 3. 日本における地方自治と地方財政の歩み 4. 地域経済と地方財政 5. 創造的まちづくりと地方財政 6. 環境・エネルギーと地方財政 7. 災害と地方財政 8. 少子高齢社会と地方財政 9. 地方自治の財政基盤 10. 地方税と課税自主権 11. 地方交付税と国庫支出金 12. 地方債と地域金融 13. 地方公営企業と第三セクター 14. 予算制度と地方自治 15. テキスト全体を通じた議論 					
各科目の目標(達成水準)	地方行財政をめぐる基本的課題を理解し、研究上の論点について確認すること。					
参考文献等	必要があれば適宜指示する。					
教科書	重森暁・植田和弘編『Basic地方財政論』有斐閣、2013年					
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、報告の内容によって評価する。					

授業コード		授業題目	地方財政演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	霜田 博史		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	特になし。					
教員研究テーマ	地方行財政の維持可能性に関する研究					
授業の概要	地方行財政を支える地域経済の観点から、地域社会のあり方について検討・考察する。					
授業計画	<p>保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』、藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義』をテキストとして取り上げ、地方財政を支える地域経済のあり方について検討する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 農山村の現代的状況 3. 戦後における農林業・農山村政策 4. 内発的発展論の見地で日本の農山村をどうとらえるか 5. 農山村の新しい発展プログラムの現段階 6. 農山村と都市との新しい連携を構築するために 7. 日本の農山村再生への展望 8. 中間まとめ:全体を通じた議論と課題の整理 9. 中国山地とオーストリア 10. 「里山資本主義」の極意 11. 費用と人手をかけた田舎の商売の成功 12. 「無縁社会」の克服 13. 課題先進国を救う里山モデル 14. 「里山資本主義」で不安・不満・不信に決別を 15. 全体を通じたまとめ:地域経済活性化のための課題の整理 					
各科目の目標(達成水準)	現代日本の地域経済が抱える課題について理解し、地方行財政の維持可能性を考えるための条件について整理すること。					
参考文献等	必要があれば適宜指示する。					
教科書	保母武彦『日本の農山村をどう再生するか』岩波現代文庫、2013年 藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義』角川oneテーマ21、2013年					
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、報告の内容によって評価する。					

授業コード		授業題目	比較財政特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	霜田 博史			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし。					
教員研究テーマ	地方行財政の維持可能性に関する研究					
授業の概要	他国の財政制度との比較を通じて、日本の財政制度、特に地方財政制度の特徴について検討する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 地方財政の国際比較 3. スウェーデンの地方財政 4. イギリスの地方財政 5. ドイツの州・地方財政 6. フランスの地方財政 7. アメリカの州・地方財政 8. 中国の地方財政 9. 韓国の地方財政 10. インドネシアの地方分権化と地方財政 11. ブラジルの地方財政 12. 世界の地方財政と日本 13. 比較財政の方法 14. 日本の地方財政制度の特徴 15. まとめ：全体を通じた議論と課題の整理 					
各科目の目標(達成水準)	他国との比較を通じて、現代日本の地方財政制度の特徴について理解すること。					
参考文献等	必要があれば適宜指示する。					
教科書	宮本憲一・鶴田廣巳『セミナー現代地方財政Ⅱ』勁草書房、2008年					
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、報告の内容によって評価する。					

授業コード		授業題目	比較財政演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	霜田 博史			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	特になし。					
教員研究テーマ	地方行財政の維持可能性に関する研究					
授業の概要	現代の租税に関する課題を概観し、租税政策が持つ現代的意義について検討する。					
授業計画	<p>諸富徹『私たちはなぜ税金を納めるのか: 租税の経済思想史』および神野直彦・池上岳彦編著『租税の財政社会学』の2冊を取り上げ、現代の税制に関する課題について検討する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 近代は租税から始まった—市民革命期のイギリス 3. 国家にとって租税とは何か—十九世紀ドイツの財政学 4. 公平課税を求めて—十九・二十世紀アメリカの所得税 5. 大恐慌の後で—ニューディール税制の挑戦 6. 世界税制史の一里塚—二十一世紀のEU金融取引税 7. 近未来の税制—グローバルタックスの可能性 8. 国境を超えて 9. テキスト全体を通じた議論 10. 租税政策の国際比較 11. 日本とカナダの比較分析 12. アメリカとカナダの租税政策 13. エネルギーと環境における租税政策 14. 現代国家の変容と租税政策 15. まとめ: 全体を通じた議論と課題の整理 					
各科目の目標(達成水準)	現代の租税に関する課題を理解し、租税政策の現状に対して批判的に検討できるようになること。					
参考文献等	必要があれば適宜指示する。					
教科書	<p>諸富徹『私たちはなぜ税金を納めるのか: 租税の経済思想史』新潮社、2013年 神野直彦・池上岳彦編著『租税の財政社会学』税務経理協会、2009年</p>					
成績評価の基準と方法	授業への参加態度と、報告の内容によって評価する。					

授業コード		授業題目	社会福祉特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	西島 文香			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	履修学生には毎回の予習(文献の精読や資料収集等)と議論への積極的参加を求めます。					
教員研究テーマ	社会保障・社会福祉の提供体制とその政策課題					
授業の概要	社会福祉の理論と法制度の概要を理解し、歴史的発展過程、行財政改革、サービス提供体制などについて考察し、福祉政策に関する批判的検討を行う。					
授業計画	<p>主として以下の内容について、履修学生の問題関心をふまえ、文献講読や資料分析等を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①福祉概念の定義と変容 ②社会福祉の目的と機能 ③社会福祉の対象とニーズ把握 ④援助技術に関する理論 ⑤選別主義と劣等処遇 ⑥ナショナルミニマムと普遍主義 ⑦福祉計画と福祉改革 ⑧「福祉国家」のモデルと再編 ⑨社会福祉関係法制 ⑩「措置」方式と「選択」・「契約」方式 ⑪行政機関と委任・委託 ⑫権利擁護とサービスの質の保障 ⑬サービス供給の規制緩和と福祉多元化 ⑭サービスの整備・利用状況 ⑮利用者負担制度、福祉マンパワーと専門職 					
各科目の目標(達成水準)	福祉政策に関して批判的に思考し、政策課題を展望できること。					
参考文献等	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
教科書	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
成績評価の基準と方法	報告の内容や議論への参加・貢献状況(50%)、期末レポート(50%)で評価します。					

授業コード		授業題目	社会福祉演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	西島 文香		担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	履修学生には毎回の予習(文献の精読や資料収集等)と議論への積極的参加を求めます。				
教員研究テーマ	社会保障・社会福祉の提供体制とその政策課題				
授業の概要	社会福祉の理論と法制度の概要を理解し、歴史的発展過程、行財政改革、サービス提供体制などについて、学生の問題関心をふまえ、より緻密な文献レビューを行う。				
授業計画	<p>履修学生の問題関心をふまえ、社会福祉特論における以下の内容からテーマを設定し、より緻密な文献レビューを行うことで、先行研究の到達点と研究課題を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ①福祉概念の定義と変容 ②社会福祉の目的と機能 ③社会福祉の対象とニーズ把握 ④援助技術に関する理論 ⑤選別主義と劣等処遇 ⑥ナショナルミニマムと普遍主義 ⑦福祉計画と福祉改革 ⑧「福祉国家」のモデルと再編 ⑨社会福祉関係法制 ⑩「措置」方式と「選択」・「契約」方式 ⑪行政機関と委任・委託 ⑫権利擁護とサービスの質の保障 ⑬サービス供給の規制緩和と福祉多元化 ⑭サービスの整備・利用状況 ⑮利用者負担制度、④福祉マンパワーと専門職 				
各科目の目標(達成水準)	福祉政策に関する先行研究の到達点を評価・検討し、自分なりの研究課題を設定すること。				
参考文献等	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。				
教科書	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。				
成績評価の基準と方法	報告の内容や議論への参加・貢献状況(50%)、期末レポート(50%)で評価します。				

授業コード		授業題目	社会保障特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	西島 文香			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	履修学生には毎回の予習(文献の精読や資料収集等)と議論への積極的参加を求めます。					
教員研究テーマ	社会保障・社会福祉の提供体制とその政策課題					
授業の概要	社会保障制度の理念・目的や機能、社会保障の発展過程とその特徴を理解し、社会保障制度の現状や提供体制などについて考察し、社会保障政策に関する批判的検討を行う。					
授業計画	<p>主として以下の内容について、履修学生の問題関心をふまえ、文献講読や資料分析等を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 社会保障の理念・目的 ② 社会保障の機能と制度体系、社会保障の運営財政方式 ③ 日本における社会保障の歴史的発展過程 ④ 北欧諸国(デンマーク、スウェーデン等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑤ 大陸欧州諸国(ドイツ、フランス等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑥ 北米、アジア(アメリカ、カナダ、オーストラリア、韓国等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑦ 公的年金制度。公的扶助制度、労働保険制度 ⑧ 世代間公平と世代間扶養のあり方 ⑨ 医療保険制度、公費医療制度 ⑩ 国民医療費と診療報酬、医療の診療構造と提供体制のあり方 ⑪ 介護保険制度、介護費の算定と介護報酬 ⑫ 介護給付と提供体制のあり方 ⑬ 社会保障支出と社会保障給付費、租税・社会保障負担 ⑭ 企業負担と家計負担のあり方 ⑮ 少子高齢化・低成長社会における社会保障のあり方 					
各科目の目標(達成水準)	社会保障政策に関して批判的に思考し、政策課題を展望できること。					
参考文献等	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
教科書	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
成績評価の基準と方法	報告の内容や議論への参加・貢献状況(50%)、期末レポート(50%)で評価します。					

授業コード		授業題目	社会保障演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	西島 文香			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点	履修学生には毎回の予習(文献の精読や資料収集等)と議論への積極的参加を求めます。					
教員研究テーマ	社会保障・社会福祉の提供体制とその政策課題					
授業の概要	社会保障制度の理念・目的や機能、社会保障の発展過程とその特徴を理解し、社会保障制度の現状や提供体制などについて、履修学生の問題関心をふまえ、より緻密な文献レビューを行う。					
授業計画	<p>履修学生の問題関心をふまえ、社会保障特論における以下の内容からテーマを設定し、より緻密な文献レビューを行うことで、先行研究の到達点と研究課題を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 社会保障の理念・目的 ② 社会保障の機能と制度体系、社会保障の運営財政方式 ③ 日本における社会保障の歴史的発展過程 ④ 北欧諸国(デンマーク、スウェーデン等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑤ 大陸欧州諸国(ドイツ、フランス等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑥ 北米、アジア(アメリカ、カナダ、オーストラリア、韓国等)の社会保障制度の発展と特徴 ⑦ 公的年金制度、公的扶助制度、労働保険制度 ⑧ 世代間公平と世代間扶養のあり方 ⑨ 医療保険制度、公費医療制度 ⑩ 国民医療費と診療報酬、医療の診療構造と提供体制のあり方 ⑪ 介護保険制度、介護費の算定と介護報酬 ⑫ 介護給付と提供体制のあり方 ⑬ 社会保障支出と社会保障給付費、租税・社会保障負担 ⑭ 企業負担と家計負担のあり方 ⑮ 少子高齢化・低成長社会における社会保障のあり方 					
各科目の目標(達成水準)	社会保障政策に関する先行研究の到達点を評価・検討し、自分なりの研究課題を設定すること。					
参考文献等	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
教科書	講読文献は履修学生と相談し決定します。また、参考文献や資料等はその都度指示します。					
成績評価の基準と方法	報告の内容や議論への参加・貢献状況(50%)、期末レポート(50%)で評価します。					

授業コード		授業題目	地域農業特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	飯國 芳明		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	ミクロ経済学の入門レベルの知識を前提とします。					
教員研究テーマ	農業政策の国際比較、条件不利地域における地域政策					
授業の概要	中山間地域の農業問題に焦点を絞り、限界集落問題を切り口に今後を展望します。					
授業計画	<p>高知県の中山間地域を念頭に置きながら、関連の文献を読み、さまざまな視点からの問題把握と展望を比較検討します。</p> <p>第1回 限界集落論の原点Ⅰ 第2回 限界集落論の原点Ⅱ 第3回 限界集落論の現段階Ⅰ 第4回 限界集落論の現段階Ⅱ 第5回 限界集落の支援に関わる論点整理Ⅰ 第6回 限界集落の支援に関わる論点整理Ⅱ 第7回 農村撤退に関する議論Ⅰ 第8回 農村撤退に関する議論Ⅱ 第9回 国土問題としての中山間地域問題Ⅰ 第10回 国土問題としての中山間地域問題Ⅱ 第11回 幸福論からみた中山間地域問題Ⅰ 第12回 幸福論からみた中山間地域問題Ⅱ 第13回 中山間地域支援の政策Ⅰ 第14回 中山間地域支援の政策Ⅱ 第15回 期末レポートの評価と検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	地域問題を多角的な視点から捉える能力を習得する。					
参考文献等	大野晃(2005)『山村環境社会学序説: 現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山村文化協会					
教科書	受講生と相談して決定します。					
成績評価の基準と方法	授業における質疑および期末レポートで評価します。比率は3:7です。					

授業コード		授業題目	地域農業演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	飯國 芳明		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	地域農業構造論特論を受講の上、受講すること。					
教員研究テーマ	農業政策の国際比較、条件不利地域における地域政策					
授業の概要	地域農業特論で学んだ知識を前提に、フィールドを定めて統計による分析を試みます。					
授業計画	<p>高知県内の地域を特定して、政府関係のデータを利用しながら、GISや統計の解析を行う力を養います。</p> <p>第1回 GISの操作 I 第2回 GISの操作 II 第3回 e-statの利用方法 I 第4回 e-statの利用方法 II 第5回 課題とフィールドの特定 第6回 地域農業のデータ解析 I 第7回 地域農業のデータ解析 II 第8回 地域農業のデータ解析 III 第9回 R言語の利用方法 I 第10回 R言語の利用方法 II 第11回 R言語の利用方法 III 第12回 統計データを利用した地域農業のデータ解析 I 第13回 統計データを利用した地域農業のデータ解析 II 第14回 統計データを利用した地域農業のデータ解析 III 第15回 期末レポートの評価と検討</p>					
各科目の目標(達成水準)	地域のデータベースへのアクセスおよびその解析を行う力を習得する。					
参考文献等						
教科書	谷謙二『フリーGISソフトMANDARA/パーフェクトマスター』古今書院 岡田昌史「The R Book -データ解析環境Rの活用事例集-」九天社					
成績評価の基準と方法	最終的には、実証分析をレポートとして提出してもらい、これを評価する。					

授業コード		授業題目	農業経済特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	飯國 芳明		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	ミクロ経済学の入門レベルは取得済みであること。					
教員研究テーマ	農業政策の国際比較, 条件不利地域における地域政策					
授業の概要	世界的な視点で、農業問題と農業政策の展開をミクロ経済学的な視点から分析する。					
授業計画	<p>この講義では、第1回から第11回までをミクロ経済学をベースとした農業・農政の分析に当てます。最初に、農業問題がいかにたち現れて、国家はこれにどのように対応してきた概観します(第1回～第4回)。続いて、さまざまな規制が課されてきた農業関連市場への規制を撤廃することによる利益を確認し、その制度変化を整理します(第5回～第6回)。しかし、競争市場の拡大は他方で市場の失敗を生み出す可能性がすくなくありません。こうした弊害の可能性をミクロ経済に基づいて確認し、実態と照合します(第7回～第11回)。最後に日本の農業・農政の展開とこれからの考察するとともに、ミクロ経済学だけでは捉えられない世界経済の農業の担い手である家族経営にも焦点をあててみたいと思います。</p> <p>第1回 農業問題の転換過程 第2回 食料問題の発現と対策(途上国を中心に) 第3回 構造調整問題の発現と対策(先進国を中心に) 第4回 世界農産物市場の展開と現状 第5回 国際市場における自由化の展開(WTO) 第6回 国際市場における自由化の展開(FTA, TPP) 第7回 市場の機能と失敗(ミクロ経済学再論) 第8回 食糧の不安定性と対策(現状と財の特質から) 第9回 食糧の安全性問題 第10回 農業の外部経済と外部不経済(農業環境問題を整理する) 第11回 世界農産物市場の不完全競争(独占、寡占問題、GMO問題) 第12回 日本農業と農政の展開(コメの価格支持から直接支払へ) 第13回 日本農業と農政の現状(これからの農業・農政を考える) 第14回 世界農業における家族経営の位置と役割 第15回 今後の世界農業・農政の展望</p>					
各科目の目標(達成水準)	ミクロ経済学の視点で、国内外の農業・農政問題を整理できる力を取得する。					
参考文献等	生源寺眞一『日本農業の真実(ちくま新書)』ちくま書房 速水祐次郎他(2002)『農業経済論』岩波書店 速水祐次郎他(2000)『開発経済学』創文社					
教科書	受講生と相談して決定します。					
成績評価の基準と方法	授業における質疑および期末レポートで評価します。比率は3:7です。					

授業コード		授業題目	農業経済演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	飯國 芳明		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	ミクロ経済学の入門レベルは取得済みであり、農業経済学特論を履修済みであること					
教員研究テーマ	農業政策の国際比較, 条件不利地域における地域政策					
授業の概要	世界各国の農業の実態や政策を現実のデータに基づき議論する.					
授業計画	<p>授業に際しては、農業経済特論で得た知識や考え方を基礎にして統計やインターネットを通じて国内外の資料を収集して毎回テーマごとのレポートをしてもらう予定です.</p> <p>第1回 経済発展と農業・農業政策(食料問題) 第2回 経済発展と農業・農業政策(構造調整問題) 第3回 グローバル化と自由貿易圏の拡大 第4回 世界市場の国際規律とWTO 第5回 日本農業と政策の展開(価格支持) 第6回 日本農業と政策の展開(直接支払への転換) 第7回 EUにおける共通農業政策の展開 第8回 スイス農業と農政の展開 第9回 韓国農業と農業政策の展開, 第10回 韓国における直接支払制度の現状と課題, 第11回 台湾における農業問題と農政の課題, 第12回 貿易の自由化と市場の失敗, 第13回 モンスーン・アジアにおける農業問題 第14回 北東アジアにおける農業と環境問題, 第15回 今後の日本農政のあり方</p>					
各科目の目標(達成水準)	ミクロ経済学をベースにして、国際的な農業政策の制度比較を実証的に検証・分析できる能力を養う					
参考文献等	生源寺眞一『日本農業の真実(ちくま新書)』ちくま書房 速水祐次郎他(2002)『農業経済論』岩波書店 速水祐次郎他(2000)『開発経済学』創文社					
教科書	受講生と相談の上決定します.					
成績評価の基準と方法	実証分析をレポートとして提出してもらい、これを評価します.					

授業コード		授業題目	環境経済学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	新保輝幸		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	受講院生のレベルは様々であるので、受講生と相談の上、適宜内容を振り替える。					
教員研究テーマ	黒潮圏の自然・環境資源の保全と持続的利用に関する研究					
授業の概要	さまざまな環境問題とそれに対する政策的対応について、ミクロ経済学や公共経済学の枠組みに基づくモデルを使い、理論的かつ実証的に研究するための基礎を身につけることを目標にする。そのために、ミクロ経済学、公共経済学、環境経済学等の基礎的なテキストから必要部分をピックアップし輪読する。					
授業計画	<p>標準的な計画は、下記の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 顔合わせとオリエンテーション 準備(1):資源配分メカニズムとしての市場(市場の失敗と政府の役割) 準備(2):需要と供給の理論 経済厚生論の基礎(1):消費者余剰と生産者余剰 経済厚生論の基礎(2):余剰分析 パレート効率性(Pareto Efficiency)と厚生経済学の基本定理 外部性(Externality)の理論(1):基礎的概念 外部性(Externality)の理論(2):ピグー税・ピグー補助金 公共財(Public Goods)の理論(1):基礎的概念 公共財(Public Goods)の理論(2):公共財の最適供給 環境政策(1):経済インセンティブ・アプローチ 環境政策(2):所有権アプローチ 環境政策(3):指令・統制アプローチ、自発的アプローチ 環境の経済評価(1):仮想状況評価法(Contingent Valuation Method; CVM) 環境の経済評価(2):その他の環境評価手法 <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的に統計学および計量経済学の手法を用いて行われる。受講生の希望がある場合、上記の項目を随時振り替えて、統計学および計量経済学の基礎を基本テキストにより勉強する。</p>					
各科目の目標(達成水準)	環境問題に対する経済学的分析手法の理解					
参考文献等	その都度紹介する。					
教科書	履修院生と相談のうえ決定する。					
成績評価の基準と方法	出席および報告内容、ディスカッションへの貢献度、課題等を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	環境経済学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	新保輝幸		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	受講院生のレベルは様々であるので、受講生と相談の上、適宜内容を振り替える。					
教員研究テーマ	黒潮圏の自然・環境資源の保全と持続的利用に関する研究					
授業の概要	環境問題や環境政策の理論的・実証的研究に関わる研究発表とディスカッションを中心に進める。まずはじめに個々の問題関心について報告してもらい、それを通じて明らかになったそれぞれの関心領域の基礎となる文献を選定する。それらを順次講読するとともに、随時個々の研究の発展について報告してもらい、ディスカッションを行う。					
授業計画	<p>たとえば、受講生が2名の場合、大まかな流れは下記のようなであろう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 0. 顔合わせとオリエンテーション 1. 個々の問題関心の報告と文献購読計画の策定 2. 文献の輪読(1) 3. 文献の輪読(2) 4. 文献の輪読(3) 5. 文献の輪読(4) 6. 文献の輪読(5) 7. 文献の輪読(6) 8. 研究の中間報告(1) 9. 研究の中間報告(2) 10. 文献の輪読(7) 11. 文献の輪読(8) 12. 文献の輪読(9) 13. 研究報告(1) 14. 研究報告(2) <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的にコンピュータおよびそのアプリケーションを用いて行われる。受講生の希望がある場合、それを利用するための基本的な知識・技能を実習を交えて勉強するが、これは上記の内、文献の輪読部分や研究の中間報告部分等を随時振り替える。</p>					
各科目の目標(達成水準)	環境問題に対する経済的分析手法の適用方法の習得					
参考文献等	その都度紹介する。					
教科書	履修院生と相談のうえ決定する。					
成績評価の基準と方法	出席および報告内容、ディスカッションへの貢献度、課題等を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	地域環境経済学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	新保輝幸		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	受講院生のレベルは様々であるので、受講生と相談の上、適宜内容を振り替える。					
教員研究テーマ	黒潮圏の自然・環境資源の保全と持続的利用に関する研究					
授業の概要	地域におけるさまざまな環境問題について、その実態、発生のメカニズム、その問題に対する政策的対応等について、関連文献を輪読し、経済学的に検討する。以上を通して、地域の環境問題に関する理論的研究・実証研究の基礎を身につける。					
授業計画	<p>テーマや文献は受講者と相談して決めるが、下記は、自然資源の劣化問題を取り上げる場合の進行案である。</p> <p>0. 顔合わせとオリエンテーション</p> <p>1. 自然資源の持続的利用に関わる経済理論(1)コモンズの悲劇</p> <p>2. 自然資源の持続的利用に関わる経済理論(2)再生可能資源</p> <p>3. 自然資源の持続的利用に関わる経済理論(3)所有権アプローチ</p> <p>4. 自然資源とその所有形態:世界の森林問題を事例に(1)概観</p> <p>5. 自然資源とその所有形態:世界の森林問題を事例に(2)無所有・オープンアクセス</p> <p>6. 自然資源とその所有形態:世界の森林問題を事例に(3)国有</p> <p>7. 自然資源とその所有形態:世界の森林問題を事例に(4)私有</p> <p>8. 自然資源とその所有形態:世界の森林問題を事例に(5)共有</p> <p>9. 日本の森林問題:歴史的観点から</p> <p>10. 日本の森林問題:現状の分析</p> <p>11. サンゴ礁の劣化問題と持続的利用(1):概観</p> <p>12. サンゴ礁の劣化問題と持続的利用(2):高知県柏島の事例</p> <p>13. サンゴ礁の劣化問題と持続的利用(3):鹿児島県与論島の事例</p> <p>14. サンゴ礁の劣化問題と持続的利用(4):フィリピン・ビコール地方の海洋保護区</p> <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的に統計学および計量経済学の手法を用いて行われる。受講生の希望がある場合、上記の項目を随時振り替えて、統計学および計量経済学の基礎を基本テキストにより勉強する。</p>					
各科目の目標(達成水準)	地域の環境問題に対する経済学的な理論・実証研究の基礎を身につける。					
参考文献等	その都度紹介する。					
教科書	履修院生と相談のうえ決定する。					
成績評価の基準と方法	出席および報告内容、ディスカッションへの貢献度、課題等を総合的に評価する。					

授業コード		授業題目	地域環境経済学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	新保輝幸		担当教員所属	黒潮圏総合科学専攻		
履修における注意点	受講院生のレベルは様々であるので、受講生と相談の上、適宜内容を振り替える。					
教員研究テーマ	地域資源・地域環境の最適利用に関わる経済学的研究					
授業の概要	地域の環境問題の実証研究に関わる研究発表とディスカッションを中心に進める。まずはじめに個々の問題関心について報告してもらい、それを通じて明らかになったそれぞれの関心領域の基礎となる文献を選定する。それらを順次講読するとともに、随時個々の研究の発展について報告してもらい、ディスカッションを行う。					
授業計画	<p>たとえば、受講生が2名の場合、大まかな流れは下記のようなであろう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 0. 顔合わせとオリエンテーション 1. 個々の問題関心の報告と文献購読計画の策定 2. 文献の輪読(1) 3. 文献の輪読(2) 4. 文献の輪読(3) 5. 文献の輪読(4) 6. 文献の輪読(5) 7. 文献の輪読(6) 8. 研究の中間報告(1) 9. 研究の中間報告(2) 10. 文献の輪読(7) 11. 文献の輪読(8) 12. 文献の輪読(9) 13. 研究報告(1) 14. 研究報告(2) <p>また、実証研究の要となる計量分析は、基本的にコンピュータおよびそのアプリケーションを用いて行われる。受講生の希望がある場合、それを利用するための基本的な知識・技能を実習を交えて勉強するが、これは上記の内、文献の輪読部分や研究の中間報告部分等を随時振り替える。</p>					
各科目の目標(達成水準)	地域の環境問題に対する経済学的な理論・実証研究の手法を身につける。					
参考文献等	その都度紹介する。					
教科書	出席および報告、議論への貢献度等によって評価する。					
成績評価の基準と方法	出席および報告、議論への貢献度等によって評価する。					

授業コード		授業題目	漁村社会特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	堀 美菜		担当教員所属	黒潮圏科学部門		
履修における注意点						
教員研究テーマ	東南アジアの漁村社会と資源管理、水産物流通					
授業の概要	漁村社会がどのような自然、社会背景によって成立してきたのか、その構造について理解し、漁業制度や政策との関わりを学ぶ					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 漁村の成り立ち(～明治期) 3. 漁村の成り立ち(明治期～) 4. 漁村の社会構造 5. 漁村の機能 6. 漁業協同組合のしくみ 7. 漁業協同組合の役割 8. 漁業制度① 9. 漁業制度② 10. 水産政策① 11. 水産政策② 12. 漁村調査の方法 13. 漁村調査の事例 14. 世界の漁業制度 15. 世界の漁業政策 					
各科目の目標(達成水準)	漁村社会の成立過程と構造について理解し、漁業制度や政策との関わりを知る					
参考文献等	講義中に随時紹介					
教科書	履修学生と相談のうえ決定する					
成績評価の基準と方法	出席及び議論への貢献(3割)とレポート(7割)により評価					

授業コード		授業題目	漁村社会演習	単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2 曜日・時限
担当教員名	堀 美菜		担当教員所属	黒潮圏科学部門	
履修における注意点	漁村社会特論を履修していること				
教員研究テーマ	東南アジアの漁村社会と資源管理、水産物流通				
授業の概要	1. 漁村社会の特徴に着目し論文購読を行い、専門知識の理解を深める 2. 個別の課題設定を行い、文献収集と発表、議論を通じてディスカッション能力を養う				
授業計画	<p>漁村社会特論を履修した学生が、より実践的に研究に取り組むための演習です。前半で、論文購読により専門知識の理解を深め、後半では個別の課題設定を行い、情報収集、整理、議論を通じてレポートをまとめます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、文献の収集方法 2. 収集文献の紹介 3. 発表方法と資料の作り方 4. 文献1の発表、解説と議論 5. 文献2の発表、解説と議論 6. 文献3の発表、解説と議論 7. 文献4の発表、解説と議論 8. 文献5の発表、解説と議論 9. 個別課題の設定 10. 個別課題の背景発表 11. 個別課題の関連文献の発表と議論① 12. 個別課題の関連文献の発表と議論② 13. 個別課題の関連文献の発表と議論③ 14. 個別課題発表と議論 15. 総合討論 				
各科目の目標(達成水準)	科学論文を正確に理解し発表する、またディスカッションを行う能力を身に着ける				
参考文献等	講義中に随時紹介				
教科書	履修学生と相談のうえ決定する				
成績評価の基準と方法	発表内容、議論への参加とその内容について総合的に評価				

授業コード		授業題目	地域水産社会特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2		1	曜日・時限
担当教員名	堀 美菜		担当教員所属	黒潮圏科学部門		
履修における注意点	漁村社会特論の履修が望ましい					
教員研究テーマ	東南アジアの漁村社会と資源管理、水産物流通					
授業の概要	高知県及び黒潮圏における水産社会経済の基礎を学び、事例を通じて地域の漁業が抱える問題点と解決策を考察する					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 高知県の魚食文化 3. 高知県における水産業の概況①漁業生産 4. 高知県における水産業の概況②就労状況 5. 高知県における水産業の概況③遊漁、海業 6. 高知県の水産資源の利用と管理 7. 高知県の水産物流通 8. 事例紹介(資源管理、ブランド化) 9. 黒潮圏の魚食文化と漁業社会 10. 黒潮圏における水産業の概況①漁業生産(海面) 11. 黒潮圏における水産業の概況②漁業生産(内水面) 12. 黒潮圏における水産業の概況③漁業生産(養殖業) 13. 黒潮圏における水産資源の利用と管理 14. 黒潮圏における水産開発の可能性 15. 総合討論 					
各科目の目標(達成水準)	地域における水産社会経済の基礎を理解する					
参考文献等	講義中に随時紹介					
教科書	履修学生と相談のうえ決定する					
成績評価の基準と方法	出席及び議論への貢献(3割)とレポート(7割)により評価					

授業コード		授業題目	地域水産社会演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	堀 美菜			担当教員所属	黒潮圏科学部門	
履修における注意点	地域水産社会特論を履修していること 通常の授業時間外に現地調査を実施する予定です					
教員研究テーマ	東南アジアの漁村社会と資源管理、水産物流通					
授業の概要	1. 地域における水産社会経済の専門知識への理解を深める 2. 個別の課題設定により現地調査を行い、情報収集と整理、発表、議論を通じて問題解決能力を養う					
授業計画	<p>地域水産社会特論を履修した学生が、より実践的に研究に取り組むための演習です。関連の論文、資料購読により専門知識の理解を深めます。また、個別の設定課題に応じて現地調査による情報収集を行い、整理、議論を通じてレポートをまとめます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス、文献の収集方法 2. 収集文献の紹介 3. 発表方法と資料の作り方 4. 文献1の発表、解説と議論 5. 文献2の発表、解説と議論 6. 文献3の発表、解説と議論 7. 個別課題の設定 8. 個別課題の背景発表 9. 現地調査準備① 10. 現地調査準備② 11. 現地調査実施① 12. 現地調査実施② 13. 現地調査結果報告と議論① 14. 現地調査結果報告と議論② 15. 個別課題報告及び総合討論 					
各科目の目標(達成水準)	地域における問題に対する情報収集能力及び解決能力を養う					
参考文献等	講義中に随時紹介					
教科書	履修学生と相談のうえ決定する					
成績評価の基準と方法	発表内容、議論への参加とその内容について総合的に評価					

授業コード		授業題目	社会学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	肖 紅燕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本の家族, 日本農山漁村の生業変遷。近代日本の世相と社会思想史, 中国の漢族研究と西藏(チベット)研究。薬草兼食用植物の利用, 灸法と伝統医学研究					
授業の概要	主として社会学、民俗学、文化人類学的考え方、オーソドックスな教科書を読み直し、現実問題と関連づけて考える。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ①調査地の概要 ②集落の成立と土地利用 ③旧藩時代の林政 ④国有林の成立 ⑤公有林の成立 ⑥民有林の成立 ⑦人口の変遷 ⑧生産構造とその発展 ⑨単位生産力 ⑩交通の発達と林業 ⑪農家の林野利用 ⑫林政の確立 ⑬国有林経営、民有林経営 ⑭山村を安定せしむるもの ⑮国有林と地元民の生活 					
各科目の目標(達成水準)	近代化に伴い、山村の生業の変遷を知ること					
参考文献等	特になし					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	毎週の参加、報告及び積極的な意見					

授業コード		授業題目	社会学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	肖 紅燕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本の家族, 日本農山漁村の生業変遷。近代日本の世相と社会思想史, 中国の漢族研究と西藏(チベット)研究。薬草兼食用植物の利用, 灸法と伝統医学研究					
授業の概要	農村をめぐる諸問題の解決策を探る。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ①ガイダンス ②文献輪読(農業大国日本の真実) ③文献輪読(国民を不幸にする自給率向上政策) ④文献輪読(すべては農水省の利益のために) ⑤現地調査(土佐山村) ⑥現地調査(土佐山村) ⑦現地調査(土佐山村) ⑧研究発表・ディスカッション ⑨研究発表・ディスカッション ⑩文献購読(こんなに強い日本農業) ⑪文献購読(こうすればもっと強くなる日本農業) ⑫文献購読(本当の食料安全保障とは何か) ⑬現地調査(十和村) ⑭現地調査(十和村) ⑮総括 					
各科目の目標(達成水準)	近代化との関連で農村の大きな変化を追うこと					
参考文献等	特になし					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	毎週の参加、報告及び積極的な意見					

授業コード		授業題目	地域社会学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	肖 紅燕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本の家族, 日本農山漁村の生業変遷。近代日本の世相と社会思想史, 中国の漢族研究と西藏(チベット)研究。薬草兼食用植物の利用, 灸法と伝統医学研究					
授業の概要	そもそもの問題関心は家族にあったものの、人々の生活を大きく左右するのは生業の変遷であることに気づき、近代化を目指す日本の村落社会における生業の変化に注目し、新規就農と移住の困難を土地の所有権と利用権と関連づけて考えたい。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ①土佐酒造史(明治～現在) ②土佐茶業史(明治～現在) ③日本的ムラ ④日本の社会構造 ⑤新規就農と土地制度、 ⑥日本農村の家族 ⑦文化伝統の変容 ⑦長江上流域農村の家族 ⑧長江上流域農村婚姻 ⑨中国西藏(チベット)の歴史 ⑩中国西藏(チベット)の文化 ⑪西藏に暮らすイスラム ⑫道教的養生術と世界観 ⑬古代日本人の精神的世界 ⑭日中間文化交流 ⑮医食同源と温和灸による自力救済 					
各科目の目標(達成水準)	近代化との関連で生業の大きな変化を追うこと					
参考文献等	特になし					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	毎週の参加、報告及び積極的な意見					

授業コード		授業題目	地域社会学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	肖 紅燕		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	日本の家族, 日本農山漁村の生業変遷。近代日本の世相と社会思想史, 中国の漢族研究と西藏(チベット)研究。薬草兼食用植物の利用, 灸法と伝統医学研究					
授業の概要	近代化を目指す日本の村落社会における生業の変化に注目し、農業はじめ日本社会を見つめなおす。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ①ガイダンス ②文献輪読(大野晃「限界集落」を読む) ③文献輪読(藤田佳久「山間地域の集落と過疎問題」を読む) ④文献輪読(藤田佳久『日本の山村』を読む) ⑤フィールドワーク・資料収集(土佐山村) ⑥フィールドワーク・資料収集(土佐山村) ⑦フィールドワーク・資料収集(土佐山村) ⑧研究発表・ディスカッション ⑨研究発表・ディスカッション ⑩文献購読(藤田佳久「山間地域の集落と過疎問題」を読む) ⑪文献購読(藤田佳久「山間地域の集落と過疎問題」を読む) ⑫文献購読(藤田佳久「山間地域の集落と過疎問題」を読む) ⑬現地調査(十和村) ⑭現地調査(十和村) ⑮総括 					
各科目の目標(達成水準)	近代化との関連で村落の大きな変化を追うこと					
参考文献等	特になし					
教科書	授業内で必要に応じて紹介予定					
成績評価の基準と方法	毎週の参加、報告及び積極的な意見					

授業コード		授業題目	経営管理特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中川 香代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	文献を予習して授業に臨むこと					
教員研究テーマ	多様な人材を活用する企業の経営管理のあり方					
授業の概要	経営管理論と経営管理について講義し考察する					
授業計画	<p>下記のテーマについて講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 経営管理論の史的変遷 2 創生期の経営管理論 3 マーケティング戦略 4 経営戦略論 5 組織学習 6 知識経営 7 イノベーションに関する理論 8 組織能力 9 起業家論 10 リーダーシップ論 11 グローバル経営論 12 ソーシャルビジネス 13 ネットワークと経営管理 14 アダプティブ・リーダーシップ 15 総括 					
各科目の目標(達成水準)	企業の新しい経営管理課題を理解し考察するのに必要な理論と思考力を身につける。					
参考文献等	随時案内する					
教科書	初回の講義で案内する					
成績評価の基準と方法	授業貢献度 50% レポートおよび試験 50%					

授業コード		授業題目	経営管理演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中川 香代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	文献を予習して授業に臨むこと					
教員研究テーマ	多様な人材を活用する企業の経営管理のあり方					
授業の概要	経営管理の文献読解をもとに現代的課題について議論する					
授業計画	<p>下記のテーマについて演習を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 破壊的イノベーションについて 2 組織の方向性について 3 破壊的技術への対処について 4 イノベーションの阻害要因について 5 製品ライフサイクルとバリューチェーンについて 6 経営研究について 7 ブランド構築について 8 組織の変革について 9 イノベーションと社会について 10 イノベーションと財務分析について 11 ビジネスモデルのイノベーションについて 12 イノベーターについて 13 プロフェッショナルの理論について 14 M&Aとビジネスモデルについて 15 コア・コンピタンスとイノベーションについて 					
各科目の目標(達成水準)	現代企業の経営管理の課題を分析するのに必要なフレームワークと思考力を身につける。					
参考文献等	随時案内する					
教科書	初回の講義で案内する					
成績評価の基準と方法	授業貢献度 50% レポートおよび試験 50%					

授業コード		授業題目	人事管理特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中川 香代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	文献を予習して授業に臨むこと					
教員研究テーマ	多様な人材を活用する企業の経営管理のあり方					
授業の概要	現代の日本企業における人事管理上の課題を各国の事例比較も交えて講義する					
授業計画	<p>下記のテーマについて講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 人事管理に関する研究の方法について 2 人事管理の課題について 3 人事管理の変化について 4 働き方の変化について 5 既存の人事管理の問題について 6 ワークライフバランスの考え方について 7 ダイバーシティ・マネジメントの考え方について 8 ワークシェアリングの考え方について 9 多様な働き方のルールについて 11 各国の人事管理との比較について 12 複線型人事制度について 13 仕事と人材の配置について 14 報酬制度の考え方について 15 これまでの議論の整理と今後の展望について 					
各科目の目標(達成水準)	企業の新しい経営管理課題を考察するのに必要な理論と思考力を身につける					
参考文献等	随時案内する					
教科書	初回の講義で案内する					
成績評価の基準と方法	授業貢献度 50% レポートおよび試験 50%					

授業コード		授業題目	人事管理演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中川 香代		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	文献を予習して授業に臨むこと					
教員研究テーマ	多様な人材を活用する企業の経営管理のあり方					
授業の概要	現代企業における人事管理の多様な課題について議論する					
授業計画	<p>下記、テーマについて、文献および企業の事例調査等を行い議論する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 職場で起きている人事労務管理上の問題について 2 雇用ミスマッチの問題について 3 日本人の休暇取得について 4 働き方の多様化について 5 グローバル経営と人材育成について 6 能力開発の課題について 7 職場のメンタルヘルス問題について 8 家族形成と労働について 9 人材育成・キャリア開発について 10 ILOと労働基準について 11 EUにおける労働政策について 12 OECDにおける労働政策について 13 産業構造の変化と人材について 14 労働移動と雇用について 15 これまでの議論の整理と今後の展望について 					
各科目の目標(達成水準)	現代企業の人事管理上の課題の理解と思考力を身につける。					
参考文献等	随時案内する					
教科書	初回の講義で案内する					
成績評価の基準と方法	授業貢献度 50% レポートおよび試験 50%					

授業コード		授業題目	事業システム特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中道 一心		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究					
授業の概要	企業の競争優位の源泉として、個々の企業が作り上げてきた事業の仕組み(事業システム)に着目する。企業が事業システムを設計する際、どのようなことに注意を払ってきたのかを具体的に考察するとともに、その注意が持つ経済学、経営学の理論に絡めて学習する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 事業システムの設計パラメータ 3. 事業システムの設計思想 4. 事業システムの設計原理 5. 事業システムの理論的枠組み 6. 事業システムの経済分析 7. 事業システムの社会学的分析 8. 事業システムの工学的分析 9. 事業システムの心理学的分析 10. 事業システムの動態 11. トヨタ自動車の事業システム 12. セブン-イレブンの事業システム 13. ワールドの事業システム 14. ヤマト運輸の事業システム 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	事業システムの優位性に関する議論を日本の代表的な企業の事例をもとに理解することができること。					
参考文献等	必要時に逐次提示する。					
教科書	加護野忠男・井上達彦[2004]『事業システム戦略』有斐閣。 大野耐一[1978]『トヨタ生産方式—脱規模の経営をめざして』ダイヤモンド社。 門田安弘[2006]『トヨタ プロダクションシステム—その理論と体系』ダイヤモンド社。					
成績評価の基準と方法	講義への参加度(100%)					

授業コード		授業題目	事業システム演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	中道 一心		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究					
授業の概要	企業が事業システムを設計する際、直面するトレードオフの存在を検討する。そして、各企業がトレードオフ関係をどのように両立しているのかについて具体的に考察するとともに、その解決方法を把握する。加えて、受講生が関心を持つ企業や組織について、事業システムの観点から分					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 生産システム研究 3. 生産システムの市場適応力 4. 市場適応力の操作化 5. 市場適応と安定生産の融合(トヨタ自動車) 6. 中国市場でのケース(トヨタ自動車) 7. 受注生産を目指す(日産自動車) 8. 市場適応力向上を目指す(三菱自動車) 9. 電機メーカーの事例(シャープ) 10. 電機メーカーの事例(パナソニック) 11. 市場適応力の企業間・産業間比較 12. 市場適応力の実態 13. 受講生の研究報告 14. 受講生の研究報告 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日本の産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、事業システムの優位性と産業特性との関連性を理解できるようになること。					
教科書	必要時に逐次提示する。					
参考文献等	岡本博公[1995]『現代企業の生・販統合』新評論。 富野貴弘[2012]『生産システムの市場適応力—時間をめぐる競争』同文館出版。					
成績評価の基準と方法	講義への参加度(100%)					

授業コード		授業題目	産業分析特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次		開講時期	曜日・時限	
担当教員名	中道 一心			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修における注意点						
教員研究テーマ	事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究					
授業の概要	日本の産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、多様な産業構造の存在を確認する。その際、産業特性とそこで優位性を獲得する道筋を経営学、経済学の理論に絡めて学習する。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 日本の競争力を再考する 3. 日本の二大主力産業のこれまで(自動車、エレクトロニクス) 4. 日本企業低迷の本質 5. 意味的価値という視点 6. 模倣されない組織能力とは 7. デジタルカメラ産業 8. 携帯電話産業 9. 半導体産業 10. 自動車産業 11. 家庭用ゲーム産業 12. 日本企業のこれから 13. 受講生の研究報告 14. 受講生の研究報告 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日本の産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、事業システムの優位性と産業特性との関連性を理解できるようになること。					
参考文献等	必要時に逐次提示する。					
教科書	青島矢一／武石彰／マイケル・A・クスマノ[2010]『メイド・イン・ジャパンは終わるのか』東洋経済新報社。 延岡健太郎[2011]『価値づくり経営の論理』日本経済新聞出版社。					
成績評価の基準と方法	講義への参加度(100%)					

授業コード		授業題目	産業分析演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	中道 一心		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点						
教員研究テーマ	事業システムの優位性、産業競争力、イノベーションモデルに関する研究					
授業の概要	アジアの産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、多様な産業構造の存在を確認する。加えて、受講生が関心を持つ産業・業界について、分析、研究発表してもらい、ディスカッションを行う。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. アジアの鉄鋼業(1) 3. アジアの鉄鋼業(2) 4. アジアの鉄鋼業(3) 5. アジアの鉄鋼業(4) 6. アジアの二輪車産業(1) 7. アジアの二輪車産業(2) 8. アジアの二輪車産業(3) 9. アジアの二輪車産業(4) 10. アジアのIT機器産業(1) 11. アジアのIT機器産業(2) 12. アジアのIT機器産業(3) 13. 受講生の研究報告 14. 受講生の研究報告 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	アジアの産業競争力や競争優位性に関する議論をもとに、事業システムの優位性と産業特性との関連性を理解できるようになること。					
教科書	必要時に逐次提示する。					
参考文献等	佐藤創編著[2008]『アジア諸国の鉄鋼業—発展と変容—』アジア経済研究所。 佐藤百合/大原盛樹[2006]『アジアの二輪車産業—地場企業の勃興と産業発展ダイナミズム—』アジア経済研究所。					
成績評価の基準と方法	講義への参加度(100%)					

授業コード		授業題目	会計学特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	伊丹 清		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	中級程度の簿記の知識を有していること					
教員研究テーマ	金融商品会計 公正価値会計					
授業の概要	本講義では、日本の会計基準・会計処理について学習する。テキストに沿って予習をしておいてもらい、講義では要点の解説ならびに議論という形で行う。					
授業計画	<p>1)本講義の進め方についてのガイダンス</p> <p>2)日本の会計基準・会計処理(1)損益計算書の構造</p> <p>3)日本の会計基準・会計処理(2)収益の認識と測定</p> <p>4)日本の会計基準・会計処理(3)費用の認識と測定</p> <p>5)日本の会計基準・会計処理(4)貸借対照表の構造</p> <p>6)日本の会計基準・会計処理(5)資産の測定</p> <p>7)日本の会計基準・会計処理(6)負債の測定</p> <p>8)日本の会計基準・会計処理(7)有価証券の会計</p> <p>9)日本の会計基準・会計処理(8)固定資産の会計</p> <p>10)日本の会計基準・会計処理(9)リース会計</p> <p>11)日本の会計基準・会計処理(10)年金会計</p> <p>12)日本の会計基準・会計処理(11)連結会計と企業結合会計</p> <p>13)日本の会計基準・会計処理(12)暖簾の会計</p> <p>14)日本の会計基準・会計処理(13)包括利益</p> <p>15)総括とレポート提出</p>					
各科目の目標(達成水準)	日本の会計基準・会計処理の概略を理解する					
参考文献等						
教科書	<p>テキスト:伊藤邦雄著『ゼミナール 現代会計入門』(日本経済新聞社)</p> <p>企業会計基準委員会「企業会計基準」「企業会計基準適用指針」「実務対応報告」</p>					
成績評価の基準と方法	出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価					

授業コード		授業題目	会計学演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	伊丹 清		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修上の注意点	中級程度の簿記の知識を有していること					
教員研究テーマ	金融商品会計 公正価値会計					
授業の概要	本演習では、国際会計基準審議会 (IASB) と世界で最初に基準設定団体が公表したアメリカ財務会計基準審議会 (FASB) の会計概念フレームワークについて学習する。演習では、予習をしてもらい、その報告の後、要点の解説ならびに議論を行う。					
授業計画	<p>1)本演習の進め方についてのガイダンス</p> <p>2)国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(1)一般目的財務報告の目的</p> <p>3)国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(2)有用な財務情報の質的特性</p> <p>4)国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(3)「目的適合性」「忠実な表現」</p> <p>5)国際会計基準審議会「財務報告に関する概念フレームワーク」(4)「比較可能性」「検証可能性」「適時性」「理解可能性」</p> <p>6)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(1)財務報告の目的</p> <p>7)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(2)会計情報の質的特徴</p> <p>8)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(3)「目的適合性」「信頼性」</p> <p>9)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(4)「中立性」「比較可能性」「重要性」</p> <p>10)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(5)資産、負債の定義</p> <p>11)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(6)収益、費用、持分の定義</p> <p>12)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(7)発生主義会計</p> <p>13)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(8)財務諸表における認識と測定</p> <p>14)アメリカ財務会計基準審議会「財務会計諸概念に関するステートメント」(9)期待キャッシュ・フロー・アプローチ</p> <p>15)総括とレポート提出</p>					
各科目の目標(達成水準)	会計基準設定の基礎となっている会計概念フレームワークの概略を理解する					
参考文献等						
教科書	平松一夫・広瀬義州共訳『FASB財務会計の諸概念(増補版)』(中央経済社) IFRS財団編 企業会計基準委員会・公益財団法人財務基準機構監訳『国際財務報告基準(IFRS)』(中央経済社)					
成績評価の基準と方法	出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価					

授業コード		授業題目	財務会計特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	伊丹 清			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修上の注意点	中級程度の簿記の知識を有していること					
教員研究テーマ	金融商品会計 公正価値会計					
授業の概要	本講義では、財務諸表分析について学習する。テキストに沿って予習をしておいてもらい、講義では要点の解説ならびに議論という形で行う。					
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> 1)本講義の進め方についてのガイダンス 2)財務諸表の構成 3)損益計算書の構造 4)貸借対照表の構造 5)キャッシュ・フロー計算書の構造 6)財務諸表分析とは？ 7)収益性の分析 8)生産性の分析 9)安全性の分析 10)リスクの分析 11)成長性の分析 12)財務諸表分析と投資意思決定 13)株式価値評価モデル 14)実例による分析 15)総括とレポート提出 					
各科目の目標(達成水準)	財務諸表分析の概略を理解する					
参考文献等						
教科書	桜井久勝『財務諸表分析』中央経済社					
成績評価の基準と方法	出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価					

授業コード		授業題目	財務会計演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	伊丹 清			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修上の注意点	中級程度の簿記の知識を有していること					
教員研究テーマ	金融商品会計 公正価値会計					
授業の概要	本演習では、金融商品会計と減損会計を取り上げ、そこで使用される公正価値測定について学習する。また、両会計の基礎をなす会計理論との関係についても学習する。演習では、予習をしてもらい、それを報告してもらった後、要点の解説ならびに議論を行う。					
授業計画	<p>1)教材についての説明と、本演習の進め方についてのガイダンス</p> <p>2)公正価値測定(1)公正価値とは？</p> <p>3)公正価値測定(2)公正価値と取得原価</p> <p>4)公正価値測定(3)公正価値の果たす役割</p> <p>5)金融商品会計(1)金融商品とは？</p> <p>6)金融商品会計(2)有価証券の会計</p> <p>7)金融商品会計(3)デリバティブの会計</p> <p>8)金融商品会計(4)ヘッジ会計</p> <p>9)金融商品会計(5)金融商品の認識中止</p> <p>10)減損会計(1)減損会計とは？</p> <p>11)減損会計(2)有形固定資産の減損</p> <p>12)減損会計(3)減損会計と減価償却</p> <p>13)減損会計(4)暖簾の計上方法</p> <p>14)減損会計(5)暖簾の減損</p> <p>15)総括とレポート提出</p>					
各科目の目標(達成水準)	金融商品会計と減損会計における公正価値測定と両基準設定の基礎となる理論との関係について理解する。					
参考文献等						
教科書	授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	出席・報告(50%)とレポート(50%)の総合評価					

授業コード		授業題目	会計制度特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	1	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	山内 高太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。					
教員研究テーマ	会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－					
授業の概要	2000年以降、国際財務報告基準(IFRS)の世界的な影響力の増加にともない、我が国の会計制度も著しく変化してきている。IFRSの影響による我が国の会計制度の変化と会計制度の役割について理解し、説明できるようにする。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明) 2. 会計の制度的役割を考える1－財務会計－ 3. 会計の制度的役割を考える2－管理会計－ 4. 会計の制度的役割を考える3－税務会計－ 5. 会計ビッグバンとそれ以降の会計制度の変化1－金融商品会計－ 6. 会計ビッグバンとそれ以降の会計制度の変化2－収益認識－ 7. 会計ビッグバンとそれ以降の会計制度の変化3－リース会計－ 8. 会計ビッグバンとそれ以降の会計制度の変化4－年金会計－ 9. 会計ビッグバンとそれ以降の会計制度の変化5－包括利益－ 10. 企業価値評価と財務情報1－これまでの経営分析手法－ 11. 企業価値評価と財務情報2－DCF法－ 12. 企業価値評価と財務情報3－残余利益モデル－ 13. 会計情報の社会的な影響と役割1－会社法会計との関わり－ 14. 会計情報の社会的な影響と役割2－会計情報と利害調整－ 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	日本における会計制度の仕組みを理解し、その役割について説明することができる。					
参考文献等	第1回目の授業で指示する。					
教科書	第1回目の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	議論等参加度合20%、報告30%、レポート50%。					

授業コード		授業題目	会計制度演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	1	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山内 高太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修上の注意点	会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。会計制度特論を受講していること。					
教員研究テーマ	会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－					
授業の概要	資本市場における利害調整を例に会計情報及び会計制度の果たす役割と意味について理解をする。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明) 2. 簡単なビジネスゲームにおけるルール設計1－ビジネスゲームの基本と目的－ 3. 簡単なビジネスゲームにおけるルール設計2－モデルの構築－ 4. 簡単なビジネスゲームにおけるルール設計3－ビジネスゲームの作成－ 5. プレゼンテーション1－1～4回のまとめ－ 6. 資本市場における利害関係者の関係1－債権者－ 7. 資本市場における利害関係者の関係2－投資家－ 8. プレゼンテーション2－6～7のまとめ－ 9. 会計基準、会計制度がなかったら1－会計制度発展の歴史－ 10. 会計基準、会計制度がなかったら2－税と会計－ 11. プレゼンテーション3－9～10のまとめ－ 12. 経営者の会計基準の選択1－粉飾問題－ 13. 経営者の会計基準の選択2－注記の検討－ 14. プレゼンテーション4－12～13のまとめ－ 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	会計情報の利害調整機能とその目的に合致した会計制度設計について説明ができる。					
参考文献等	第1回目の授業で指示する。					
教科書	第1回目の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	議論等参加度合20%、レポート30%、プレゼンテーション50%。					

授業コード		授業題目	比較会計制度特論		単位数	2
授業種別	講義	履修開始年次	2	開講時期	1	曜日・時限
担当教員名	山内 高太郎		担当教員所属	人文社会科学専攻		
履修における注意点	会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。					
教員研究テーマ	会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－					
授業の概要	我が国の会計制度では、企業は日本、アメリカ、国際会計基準を用いることができる。これら異なる基準の問題点を明らかにするために、その背景にある会計制度や理論について理解をする。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明) 2. 会計の基礎となる概念のちがいは1－アメリカ会計基準の概念－ 3. 会計の基礎となる概念のちがいは2－国際会計基準の概念－ 4. 会計の基礎となる概念のちがいは3－日本会計基準の概念－ 5. 収益認識基準の比較と分析1－アメリカ会計基準における収益認識－ 6. 収益認識基準の比較と分析2－国際会計基準における収益認識－ 7. 収益認識基準の比較と分析3－日本会計基準における収益認識－ 8. リース会計基準の比較と分析1－アメリカのリース会計－ 9. リース会計基準の比較と分析2－国際会計基準のリース会計－ 10. リース会計基準の比較と分析3－日本のリース会計－ 11. 金融商品会計基準の比較と分析1－アメリカの金融商品会計－ 12. 金融商品会計基準の比較と分析2－国際会計基準の金融商品会計－ 13. 金融商品会計基準の比較と分析3－日本の金融商品会計－ 14. 会計基準が異なることの意味 15. まとめ 					
各科目の目標(達成水準)	会計基準の違いを理解し、その社会的な影響について説明ができる。					
参考文献等	https://www.asb.or.jp/asb/ (企業会計基準委員会) http://www.fasb.org/ (アメリカ財務会計基準審議会) http://www.iasb.org/ (国際会計基準審議会)					
教科書	第1回目の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	議論等参加度合20%、報告30%、レポート50%。					

授業コード		授業題目	比較会計制度演習		単位数	2
授業種別	演習	履修開始年次	2	開講時期	2	曜日・時限
担当教員名	山内 高太郎			担当教員所属	人文社会科学専攻	
履修上の注意点	会計学の基礎を理解し、中級簿記以上の知識を有していること。比較会計制度論を受講していること。					
教員研究テーマ	会計の国際化とその影響－アメリカ財務会計基準、国際会計基準を中心に－					
授業の概要	我が国の会計制度では、企業は日本、アメリカ、国際会計基準を用いることができる。これら異なる基準で作成された日本企業の財務諸表をもとに、そこで示される情報内容と意味について議論を行い、問題点を明らかにする。					
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の進め方等についての説明) 2. 財務諸表の読み方1－財務諸表の仕組み－ 3. 財務諸表の読み方2－日本の財務諸表－ 4. 財務諸表の読み方3－アメリカ、国際会計基準における財務諸表－ 5. 財務諸表を作成を規定する法、会計基準1－会社法－ 6. 財務諸表を作成を規定する法、会計基準2－金融商品取引法－ 7. 日本基準で作成された財務諸表分析1－分析手法－ 8. 日本基準で作成された財務諸表分析2－事例研究－ 9. 日本基準で作成された財務諸表分析3－事例研究報告－ 10. アメリカ基準で作成された財務諸表分析1－分析手法－ 11. アメリカ基準で作成された財務諸表分析2－事例研究－ 12. アメリカ基準で作成された財務諸表分析3－事例研究報告－ 13. 国際会計基準で作成された財務諸表分析1－事例研究－ 14. 国際会計基準で作成された財務諸表分析2－事例研究－ 15. 国際会計基準で作成された財務諸表分析3－事例研究報告－ 					
各科目の目標(達成水準)	企業が会計基準を選択する理由とその影響や問題点について説明ができる。					
参考文献等	第1回目の授業で指示する。					
教科書	第1回目の授業で指示する。					
成績評価の基準と方法	議論等参加度合50%、レポート20%、プレゼンテーション30%。					